

青べか物語

山本周五郎

青空文庫

はじめに

浦^{うら}粕^{かす}町は根戸川のもつとも下流にある漁師町で、貝と海苔^{のり}と釣場とで知られていた。町はさして大きくはないが、貝の罐詰^{かんづめ}工場と、貝殻を焼いて石灰を作る工場と、冬から春にかけて無数にできる海苔干し場と、そして、魚釣りに来る客のための釣舟屋と、ごったくやといわれる小料理屋の多いのが、他の町とは違った性格をみせていた。

町は孤立していた。北は田畑、東は海、西は根戸川、そして南

には「沖の百万坪」と呼ばれる広大な荒地がひろがり、その先もまた海になっていた。交通は乗合バスと蒸気船とあるが、多くは蒸気船を利用し、「通航」と呼ばれる二つの船会社が運航している。片方の船は船せんたい躰を白く塗り、片方は青く塗ってあった。これらの発着するところを「蒸気河岸がし」と呼び、隣りあっている両棧橋の前にそれぞれの切符売り場があった。

西の根戸川と東の海を通じる掘割が、この町を貫流していた。蒸気河岸とこの堀に沿って、釣舟屋が並び、洋食屋、ごったくや、地方銀行の出張所、三等郵便局、巡査駐在所、消防署——と云つても旧式な手押しポンプのはいつている車庫だけであつたが、——そして町役場などがあり、その裏には貧しい漁夫や、貝を採る

ための長い柄の付いた竹籠を作る者や、その日によつて雇われ先の変る、つまり舟を漕ぐことも知らず、力仕事のほかには能のない人たちの長屋、土地の言葉で云うと「ぶつくれ小屋」なるものが、ごちやごちやと詰めあつていた。

町の中心部は「堀南」と呼ばれ、「四丁目」といわれる洋食屋や、「浦粕亭」という寄席や、諸雑貨洋品店、理髪店、銭湯、「山口屋」という本当の意味の料理屋——これはもつぱら町の旦那方用であるが、そのほか他の田舎町によくみられる旅籠宿はたごやどや小商いの店などが軒を列つらねていた。その南側の裏に、やはり「ごつたくや」の一画があり、たった一軒の芝居小屋と、ときたま仮設劇場のかかる空地がある、というぐあいであつた。

これらのことをどんなに詳しく記したところで、浦粕町の全貌を尽すわけにはいかない。私も決してそんなつもりはないので、ただこの小さな物語の篇中に出てくる人たちや、出来事の背景になつてゐるものだけを、いちおう予備知識として紹介したにすぎないのである。

はじめに「沖の百万坪」と呼ばれる空地が、この町の南側にひろがつてゐると書いた。私は目測する能力がないので、正確にはなんともいえないが、そこは慥たしかにその名にふさわしい広さをもつてゐた。畑といくらかの田もあるが、大部分は芦あしや雑草の繁つた荒地と、沼や池や湿地などで占められ、そのあいだを根戸川から引いた用水堀が、「一ついりから「四つ」まで、荒地に縦横の

水路を通じていた。——この水路や沼や池には、鮎ふな、鯉こい、鮠はやなます、鯰なまずなどがよく繁殖するため、陸釣おかづりを好む人たちの取つて置きの場合のようにあつた。また、沼や池や芦の茂みの中には、獺かわうそとか鼬いたちなどが棲すんでいて、よく人をおどろかしたり、なにごとでもすぐに信ずるような、昔ふうの住民を「隙さえあれば化かそうと思つている」ということであつた。

この町ではときたま、太陽が二つ、東と西の地平線上にあらわれることがある。そういうときはすぐにそつぽを向かなければ危ない。おかしなことがあるものだ、などと云つて二つの太陽を見ると「うみどんぼ野郎」になってしまう。そうしてそのときにはすぐ脇のほうで、獺か鼬の笑っている声が聞えるということであ

る。特に鼬はたちの悪いいたずら好きで、人が道を歩いていると、ひよいと向うへとびだして来て、立ちあがって、交通整理でもするのように、右手をあげて右をさし示したり、左手で左のほうをさしたりする。そうしたら必ず反対のほうにゆかなければならない。うっかりしてそちらへゆけば、きまつて池か堀か、わるくすると根戸川へ落ちこんでしまう、といわれていた。

百万坪から眺めると、浦粕町がどんなに小さく心ぼそげであるか、ということがよくわかる。それは荒れた平野の一部にひらべったく密集した、一とかたまりの、廃滅しかかっている部落といった感じで、貝の罐詰工場の煙突からたち昇る煙と、石灰工場の建物ぜんたいを包んで、絶えず舞いあがっている雪白の煙のほか

には、動くものも見えず物音も聞えず、そこに人が生活しているとは信じがたいように思えるくらいであった。

私はその町の人たちから「蒸気河岸の先生」と呼ばれ、あしかけ三年あまり独りで住んでいた。

「青べか」を買った話

芳爺よしさんに初めて会ったのは「東」の海水小屋であった。冬のこと、海水小屋は取り払われ、半分朽ちた葭簾よしずの屋根と、板を

打ちつけた腰掛が一部だけ残っていた。町を西から東へ貫流する掘割が、東の海へ出る川口のところ、土地の人たちはそのあたり一帯を漠然と「東」と呼んでいた。

私は海を眺めていた。腰掛は釘がゆるんでいるので、足を突っ張ってうまく支えていないと、すぐさま潰れてしまふのであった。干潮で、遠浅の海は醜い底肌を曝し、堀の水は細く、土色に濁っていた。急に腰掛がぐらつと揺れたので、私は吃驚して、突っ張っている足に力を入れながら振り返った。すると一人の老人が、すぐうしろに腰を掛けて、私などは眼にもはいらないといったような顔つきで、古風な蓑たばこいれ入を腰から抜くところであった。私は支える足に気をくばりながら、また海のほうへ眼を戻し

た。

「ずっとめえに、ここへなにかぶつ建てようと思ったつけどが」と老人が大きな声で云った、百メートルも先にいる人に話しかけるような声であった、「なんかぶつ建つてくれべえと思つたつけどがねえよ」

私は黙っていた。私は老人しか見なかったが、それではもう一人つ伴れでもいるのか、と思つたのである。しかし答える声はなく、老人はやかましい音をさせて煙管きせるをはたき、次のタバコを吸いつけた。煙管はつまつていて、喘ぜんそく息患者の喉のどのように、ぐずぐずとやにの鳴る音が聞えた。

「ずっとめえのこつた、おつゆのおつかあがまだ綿屋へ嫁にいか

ねえころのこった」と老人は大きな声で云った、そしてやや暫くしばらく黙つていてから、また煙管をはたき、三服めを吸いつけて、喚きたてた、「なんにもおつ建たなかつただよ」

私はやはり黙つていた。

二度めには百万坪で会った。季節は春で、強い風が吹いていた。

私は「二つ」の堀に沿つた道を、沖べんてんやしろの弁天社のほうへ歩いて

いた。なんのふぜいもない、だだっ広いだけのその荒地のほ

中ほどに、無人の、小さな、毀こわれかかつたような古い社が、ひね

こびた六七本の松に囲まれて建っている。いつのころかたいへん

流行はやつた弁天で、特に各地の花柳界の女性たちが参詣さんけいに列を作

つたそうである。どういふ靈験があつたのか土地の者は知らない、

ただひところばかげて流行り、おびただ夥しい参詣者の絶えなかつたことと、当時その境内が別世界のようにぎに賑わつたということだけは、子供たちでさえよく知っていた。

潮の匂いのする強い風に吹かれながら、沖の弁天のほうへ歩いていたとき、うしろからいきなり大きな声で呼びかけられ、私とはとびあがりそうに驚いて振り返つた。あの老人がすぐうしろにいた。継ぎはぎだらけの、洗ざらい晒したためくら縞はんでんの半纏はんてんに、綿入ももひきの股引ももひきをはき、鼠色になつた手拭つねぎで頬かぶりつねぎをしている。それはこの土地の漁師たちに共通の常着つねぎであるが、もう綿入の股引ももひきをはく季節ではなかつた。

「おめえ舟買わねえか」と老人は私と並んで歩きながら喚いた、

「タバコを忘れて来ちまったが、おめえさん持つてねえだかい」
私はタバコを渡し、マツチを渡した。老人はタバコを一本抜いて口に咥え、風をよけながら巧みに火をつけると、タバコとマツチの箱をふところへしまった。

「いい舟があんだが」と老人は二百メートルも向うにあるひねこびた松ノ木にでも話しかけるような、大きな声でどなりたてた、
「いい舟で値段も安いもんだが、買わねえかね」

私が答えると、老人は初めからその答えを予期していたように、なんの反応もあらわさず、吸っていたタバコを地面でもみ消し、残りを耳に挟んでから、手湊をかんだ。

「おめえ」暫く歩いたのち、老人がひとなみな声で云った、「こ

の浦泊へなにようしに来ただい」

私は考えてから答えた。

「ふうん」と老人は首を振り、ついで例の高ごえで喚いた、「おんだらにやあよくわかんねえだが、職はあるだかい」

私が答えると、老人はちよつと考えた。

「つまり失業者だな」と老人は喚いた、「嫁を貰う気はねえだかい」

私は黙っていた。別れるときマッチだけ返してもらったが、急に耳の遠くなった老人は、二度も三度も私の云うことを訊き返し、そのため私は自分がひどい吝嗇漢りんしよくかんになったような、恥ずかしさを感じた。

三度めは根戸川亭で会った。それは蒸気河岸にある洋食屋で、土間が食堂、奥に座敷があつて、夜になると蒸気船（通船といわれていた）の船員や漁師たちが、しばしば盛大に酔つて騒いだ。或る日の午ひるごろ、私が食堂のがたがたする椅子に掛け、一本のビールでカツ・ライスを喰たべていると、老人が私の卓テーブル子へ来て差向いの椅子に掛けた。

いまでもそうであるが、外で食事をするときには、私はなにか読みながらでないとおちつけない癖がある。そのときも私は青巻という本を読んでいて、老人がそこへ腰掛けたものだから、いつそう熱心に読むふりをし、そうして本から少しも眼を放さないままで、トンカツを囓かんだりビールを啜すすつたりしていた。

女が座敷のところへ来て、「芳さんなんにするだえ」と呼びかけた。

「うう」と老人が答えた、「おつかあがいねえからめし食うべえと思つて来ただが、うう、なんにすべえか考げえてるだ」

「うちじゃあ考げえるほどごたいそうなものは出来ねえよ」

すると老人が私を見ながら、——そこへ腰掛けたときからずっと、老人が私をみつめ続けていることを私は知っていた、——で、老人は私の顔を見ながら、例のずばぬけた高ごえで喚きたてた。

「ビールをコップに一杯くんねえかね」

「ビールを一杯だつて」と女が云つた、「おらそんなこと聞いたこともねえ、^{ちゆう}酎のまちげえじゃねえのかえ」

東京へゆけばビールの一杯売りをやっている、と老人が云った。それはビヤホールというものだ、と女が云った。いや、トンカツやカレーライスが出来るから洋食屋と違いはない、と老人が云った。一杯売りをするのは生ビールといって、樽たるで来るから一杯ずつでも売れるが、びんづめ壺詰はあけてしまえばあとがかんのんさまだから一杯だけ売るわけにはいかないのだ、と女が云った。あとがかんのんさまになつてもしようばいは損して得取れということがある、と老人が喚きたてた。

私は縛りあげられ、罫わなにはまったことを知った。まだ三分の一ほど残っているビール壺を、老人のほうへ置き直しながら、私は云わなければならぬことを云った。

「そうかね」と云うより早く老人は女に向つて喚きたてた、「コツプ」

それから私を見て「タバコの持合せはねえかね」

私が答えると、老人は「なに、いま欲しかねえだよ」と云つた。

釣舟宿の「千本」の三男の長ちようから、私は老人のことを聞いた。

その土地の出来事について、籠屋のおたまと「千本」の長とが、つねにぬかりなく情報を呉れるのである。おたまも長も小学校の三年生であつた。——老人の名は芳よし、夫婦つきりで、三本松の裏に住み、「大蝶」の倉庫番をしている、ということであつた。

「大蝶」はその町でいちばん大きく貝の罐詰工場を経営してい、漁師たちの採る貝を沖で買い取るために、大蝶丸という船を持つ

ていた。

私の問いに答えて、長はつよく首を振った。

「ううん、そんなこたねえだよ」と長は云った、「工場はやかましかんべ、だからみんなえつけえ声になっちまうだ」

えつけえとはもちろん大きなという意味である。長はなお「芳爺さまはそら耳を使う」と云ったが、それはもう私の知っていることであつた。

それからのちもときどき道で会つたが、老人は挨拶もしないし、私を見ても棒^{ぼうぐい}杭か石ころでも見るような眼つきしかなかつた。頬かぶりをとつた老人の顔は、瘦^やせていて小さく、太陽と潮風にやけた頭は禿^はげていて、灰色の髪の毛がほんの少し後頭部にあり、

頬や顎あごにはまばらな無精髭ぶしようひげが、古くなつたブラシのようにな、一本ずつ数えられるほどまばらに、きらきらと銀色に光つていた。眼には非人間的な鈍い冷たい光があり、殆んど唇が無いようにみえる薄い唇には、いつも人を小ばかにしたような、狡猾こうかつな微笑が刻みつけられていた。

もつと尤もこれは芳爺さんに限らず、その土地の一部の人たちに共通した顔だちであつた。かれらは季節ごとに来る遊覧客、——魚釣り、汐干狩りしおひが、海水浴など、遊びに来る都会の客たちから「うまくせしめる」習慣がついてるので、その冷たく鈍い眼や、狡猾ぼくとつそうな口つきの裏には、いつでも朴ぼくとつ訥な表情をつくり、あいそ笑いをする用意ができていたのであつた。——四月の末か五月の

はじめころ、たぶん五月のはじめころであつたらう、私は三本松のところ^{つか}で老人に捉まつた。

三本松といつても、樹齡の古い松ノ木が一本しかない。ずっと昔は三本あつたそうであるが、私の聞いた限りでは、それを自分の眼で見たという者はなかつた。——堀の岸に横^{よこ}這いのかたちで枝を伸ばしている。その松ノ木の脇に、水から揚げて久しいべか舟が伏せてあつた。ずいぶんまえからそこにあり、私は通りかかるときにそれを見た。べか舟というのは一人乗りの平底舟で、多く貝や海苔採りに使われ、笹の葉のような軽快なかたちをしてい、小さいながら中央に帆^{ほげ}桁もあつて、小さな三角帆を張ることができた。しかし、そこに伏せてあつたのは胴がふくれていてかたち

が悪く、外側が青いペンキで塗ってあり、見るからに鈍重で不恰好だった。

「あのぶつくれ舟か」と長が或るとき鼻柱へ皺しわをよらせ、さも軽けいべつ蔑いべつに耐えないというように云った、「青べかつてえだよ」

この誇り高い小学三年生は、見る気にもなれないという顔つきでそつぽを向いた。

それは慥かにぶつくれ舟であつた。伏せてある平底の板は乾いてはしやぎ、一とところあいている穴から、去年の枯れ草がひろひよろと伸びていた。水から揚げられた古い舟ほど、衰れに頼りなげなものはない。それは老衰して役に立たなくなった馬が、飼主にも忘れられ、厩うまやの裏でひとりしよんぼり首を垂れているよ

うな感じにみえる。——その日も私は道みち傍ばたに佇たんで、人間も同じようなものだ、などというのは俗すぎるな、というようなことを思いながら、暫くタバコをふかしていた。

そこへ老人が来て話しかけた。私は気づかなかったが、老人は私ほのようすを見ていたらしい。おそらく、私がその舟にすっかり惚ほれこんだものと思ったのであろう、にこやかな、とりいるような笑顔をつくり、「この舟を買わねえかね」とあいそいい声で喚こゑいた。

私は答えることができなかった。

「先生はこの土地のことを詳しく見てえって云ってたんべが」と老人が喚こゑいた、「そんなら岡の上べえ歩きまわってもしよあんめ

えじや、根戸川のまわりだの百万坪の　だの、堀もそうだし、沖へも出てみるがいいだ、それにはこの舟さえあれば用が足りるだよ」

まあ見てくれと云つて、老人は伏せてある青べかをひき起こした。それは極めてすばやく、声をかける隙もない動作だった。

「ほれ見せえま」と老人は云つた、「まつさらとは云えねえが、造つてからまだ七年にしかなんねえ、大事にしろばまだ十五年や二十年はたつぷり使えるだ」

私は自分の考えを述べようとした。

「値段もまけるだよ」と、老人は喚きたてた、「蒸気河岸の先生のことだからよ、思いきつて五までまけるだ、たった五だ」

私が答えると、老人は片手を出した。

「タバコ」と老人は云った。

私はタバコとマツチを渡した。

「じゃあ、なんだ」と老人はタバコを一本抜いて火をつけ、タバコの箱はふところへ入れ、マツチだけを返しながら喚いた、「先生のことだから思いきって四にすべえ、四だ」

私が答えると、老人はタバコを地面でもみ消し、残りを耳にはさみながら喚きたてた。私は長の顔や、軽蔑しきった口ぶりを思いだしたが、同時に、自分が老人に縛りあげられ、ぬけ出すことのできない罫にかかったことを悟った。「見せえま」と老人は喚き続けた、「揚げっ放しにしといたからちつとばかはしやいでる

だが、まだこんなにしつかりしてるだ」

老人は舟べりや舳先へしきを、大事そうに撫なでたり叩いたりした。私はそれを眺めながら、老人が舟をひき起こすときのすばやい動作には二つの意図があつた、ということに気づいた。一つは私を捉えること、他の一つは去年の枯れ草が覗のぞいていた舟底の穴を私から隠そうとしたのだ、ということである。——もう一つ、これを書いては人が信じなくなるだろうと思つて、書かないことにするつもりであるが、老人が舳先を掴つかんでゆすぶつたとき、舳先とがの尖つたところが折れてしまった。すると老人は自分の手にある折れた舳先の、折れたところへ唾をつけて、元の部分と合わせ、そこを片手で押えたまま、いつそう高ごえになつて喚きたてるのであ

った。事實はこのとおりだったのだが、これを文字にすると、おそらく人は筆者が調子づいてふざけていると思うにちがいない。

「事實を書く」ということがいかに困難なしごとであるかは、こんな些細な点でも思い知らされるのである。

「よし、そんなら三と五十にすべえ」と老人は云った、「これ以上は鏢びた一文負からねえだ、三と五十、これで話はきまつただ」

私はちよつと質問した。

「そんなこたあ屁へでもねえさ」と老人は云った、「いかずちの船大工に頼めばすぐ繕つくろってくれるだ、いいとも、おらが持つてつて頼んでやるだよ」

「それから」と老人はいそいで付け加えた、「こういう売り買い

には、買い手のほうでなにか物を付けるのがしきたりになってるだ、豚肉の百匁でもいいし、夏なら西瓜すいかの三つくれえかな、うう、おめえよく舶来のタバコを吸ってるようだが」

私は豚肉を届けると答えた。

こうして私は「青べか」の持ち主になった。どんなに小さく、そしてぶつくれ舟であるにもせよ、一ぱいの舟の所有者になったのだが、私はうれしくもなかったし、誇りがましい気持にもなれなかった。長をはじめとする少年たちの軽侮の眼や、ちようしやう嘲笑の声を考えるだけで、むしろ急に肩身のせまくなったような鬱陶しい、沈んだ気分にとらわれたのであった。

「いいさ、あんな舟」と私は帰る道で自分に云った、「乗らなけ

ればいいんだ」

私は明くる日、老人のところへ舟の代金と、豚肉を百匁だけ届け、なお青べかについて、二三のことを頼んだ。老人はこころよく受け合い、そのとおりにすると約束した。

蜜柑みかんの木

助なあこ（あにいとというほどの意味）はお兼に恋をした。助なあこは大蝶丸の水夫であり、お兼は「大蝶」の罐詰工場へ貝を剥む

きにかよう雇い女で、亭主があつた。

この土地で恋といえ、沖の百万坪にある海苔瀝すき小屋へいつて寝ることであつた。そんなてまをかける暇がなければ、裏の空地の枯れ芦の中でもいいし、夏なら根戸川の堤でも、妙見堂の境内でも、消防のポンプ小屋でも用は足りた。實際のところ、海苔瀝き小屋まで寝にゆくのは、よほど二人がのぼせあがつているか、ゆきすぎた声を抑えることのできない女との場合、——土地の人たちのあいだで、そういう癖のある五人の女性の名が公然と話題になつていたが、——などで、かれらの意見によれば、「そんなにてま暇をかけるほど珍しいことでもあんめえじゃあ」というのが常識であつた。

助なあこはそうではなかった。彼は中学生が女学生を恋するよ
うに、純粹に、しよしん初心に恋していた。大蝶丸で沖へ貝を積みにい
つているあいだ、彼の胸はつねにお兼を想うことで痛み、その眼
にはお兼の姿、——工場の古びた建物の前で、大勢の女や老婆た
ちと並んで、巧みに貝を剥いている姿が、絶えずあらわれたり消
えたりするのであった。

大蝶丸の水夫は三人で、船長の荒木さんはべつに家庭を持って
いたが、エンジさんの正山さんと水夫たちは、工場の中にある小
屋に住んでいた。助なあこは自分の恋を秘し隠しにし、誰にも気け
どられないように、最高の抑制を保ち続けていたが、或る夜半、
ねごとにお兼の名を呼んだのを、隣りに寝ていた二人の水夫に聞

かれて、せつかくの努力がむだになってしまった。

「ゆんべが初めてじゃねえぞ」と水夫の一人が云った、「おんだらあ何遍も聞いているだ、なあ」

「おうよ」と他の水夫が云った、「名めえをはつきり云ったなあ、ゆんべが初めてだっけ。ずっとめえから何遍も好きだあ好きだつてねごとう云つてたっけだ」

「お、か、ね、さん」と先の水夫が両手で自分の肩を抱きしめ、身もだえしながら作り声で云った、「おら、おめえが、好きだ、死ぬほど好きだ、よう」

助なあこは硬こわばった顔でそつぽを向き、手の甲で眼を拭いた。

彼は死んでしまいたいと思った。もしできることなら、その場で

二人を半殺しのめにあわせてやりたかった。しかし彼は痩せているし、背丈も五尺とちよつとしかない。他の二人はどちらも彼より肉付きがよく、はるかに力も強かった。それは沖で貝を積むときや、工場へ戻つて積みおろしをするときなどでよくわかつていた。

彼は死んでしまいたいと思つた。

助なあこは固い決心をし、お兼のほうへは眼も向けず、貝を剥いている彼女の前を通るときには、まっすぐに向うを見たままいそぎ足で、殆んど走るように通りぬけた。彼はやがて機関士になるつもりで、仕事が終つたあとは、エンジンに関する本にしがみついて、熱心に独学を続けていた。それらの本の大部分は荒木船

長に借りたものであるが、中の幾冊かは、——ディーゼル・エンジンに関する本は、自分で東京の神田へ行って買ったものであった。

彼は夜の十二時まえに寝たことはなかった。他の水夫やエンジンさんは、毎晩のように飲みにてかけ、帰ってくると「一厘ばな」か賽ころ博奕ぼくちで夜更よふかしをした。ごったくやの女たちを伴れこんで、わるふざけをしたり、博奕や女のこととつ組みあいの喧嘩けんかをしたりした。そういう騒ぎの中で、助なあこは小屋の隅のほうに机を移し、両手で耳を塞ふさいで本を読んだり、ノートを取ったりするのであった。その十坪ほどの、細長い、箱のような小屋には、燭し
光よつこうの弱い裸の電球が、天てんじょう床しょうから一つぶらさがっているだ

けである。隅のほうへ届く光は極めて微弱だったが、それでも助なあこは本にしがみつぎ、帳面に眼を押しつけるようにしてノートを取った。

周囲の人たちにとって、この独学はばかげたことであつた。そのくらいのエンジニアになるには、五六年も船に乗つて、実地にエンジニアのすることを見ていれば、それだけで立派にエンジニアになれるし、現に二つの通船会社のエンジニアたちでさえ、多くはそのようにして機関士になつたのである。

お兼のことだからかわれてから、助なあこはすっかり人嫌ひになり、ますます独学に熱中した。ねごとの話はたちまちひろまつたが、そのまますぐに忘れられた。この土地では、どこのかみさ

んが誰と寝た、などという話は家常茶飯かじょうさはんのことで、たとえばおめえのおつかあが誰それと寝たぞと云われたような場合でも、その亭主はべつに驚きもしない、おつかあだつてたまにやあ味の変つたのが欲しかんべえじゃあ、とか、おらのお古でよかつたら使うがいいべさ、と云うくらいのものであつた。——もちろんこれら亭主たち自身も「変つた味」をせしめているのであるし、また、全部の人たちがそんなに脱俗しているというのでもない。「浦粕では娘も女房も野放しだ」と、はつきり土地の人たちは云つているが、それでも嫉妬しつとぶかい人間もたまにはいて、ときに凄すげいような騒ぎの起こることも幾たびかあつた。

助なあこの場合には、ねごとで恋の告白をしたというだけだつ

たから、ほんのお笑いぐさとして忘れられてしまったが、傷ついた助なあことお兼とは、それぞれの立場で忘れることができなかつたようだ。

初夏の或る午後、二人は根戸川の土堤^{どて}で初めて話をした。その日は工場が休みで、助なあこは午めしのあと、本を二冊持って土堤へゆき、若草の伸びた斜面に腰をおろして、本をひらいた。読んでゆき、頁を繰るが、なんにも頭にはいらない。活字の列はただ素通りするだけで、一行読むごとにきれいに消えてしまう。彼は音読もしてみた、一句ずつ指で押えながらやってみたが、やっぱり同じことで、いくら繰返し読んでみても、なに一つ頭に残らないのであった。

そこへお兼が来た。彼女は助なあこのあとを跟^つけて来たのだ、まえから彼のようすを見ていて、自分のほうからきっかけをつけなければならぬと悟り、その日ようやく機会をつかんだのである。

「あら、助さんじゃないの」とお兼はいかにも意外そうに呼びかけた、「こんなところでなにしてるの、あら、勉強ね」

助なあこは本を閉じ、振り向きもせず、じつと固くなっていた。彼は全身が火のように熱く、心臓が喉までとびだして来るように感じた。お兼は斜面へおりて来て、彼と並んで草の上に腰をおろした。すると、あま酸っぱいような女の躰臭と、おしろい白粉の匂いが入り混った、なまあたたかい空気が彼を包み、彼は頭がく

らくらするように思った。

「もう春もおしまいだねえ」お兼はその言葉の品のよさに自分であつたりとなりながら云つた、「水の流れと人の身はつて、はかないもんだわねえ」

陽の傾いた空にはうすい靄もやがあつて、根戸川の広い水面は波もなく、まるで眠っているように静かだった。あたためられた土の香や、若草の匂いがあたりに漂つてい、対岸の若い苧の茂みでは、ときどきけたたましく小鳥の騒ぐ声が聞えた。

「けけちかしら」とお兼が云つた、「まだけけちにしては早いかしら」

見ると助なあこはふるえていた。蒼あおく硬おばつた顔を俯うつむ向け、膝ひざ

を抱えた両手の指を揉みしだき、下唇を噛みしめながら、からだ軀せんとたいでふるえていた。お兼はふしぎなよろこびを感じた。これまでも感じたことのない、ぞつと総毛立つような、せんり快樂の戦慄が突きぬけるように思った。

「あたしあんたが好きよ」とお兼は彼の耳に囁いた、ささや「あんた、芳野の海苔漉き小屋、知ってるでしょ、知ってるわね」

助なあこは黙って頷いた。うなず

「あたしあんたに話したいことがあるの」とお兼は続けた、「今夜ね、七時ごろあそこへ来てちょうだい、来てくれる、ねえ」

お兼はそつと助なあこの手に触れた。彼はぴくつとなり、軀をいつそう固くし、そしてお兼の手に伝わるほど激しくふるえた。

お兼はまた、あのふしぎなよろこびの感覚におそわれ、助なあこの手首をぎゅつと握つてから、それを放した。

「もうみんなが沖から帰ってくるじぶんだわ」とお兼は云つて溜^ためいき息をついた、「みつかると口がうるさいからあたし帰るわ、世の中つてままならないもんね」

お兼はもういちど夜の約束をし、鼻唄をうたいながら去つていった。

助なあこは時間を計つていて、やがてそつと振り向いてみた。あまり長いこと同じ姿勢でいたため、首の骨がきくんと鳴り、頸^{くび}の筋がつつた。お兼はもうずっと遠く、白い煙に包まれている石灰工場の近くまでいっていた。

「あんたが好きよ」助なあこは頸の筋を揉みながら、お兼の云った言葉をまねてみた、「あたしあんたが好きよ」

彼の顔が歪み、眼から涙がこぼれ落ちた。

もう春も終りだ、世の中はままならない、あたしあんたが好きよ、水の流れと人の身は、はかないもんね。それらの言葉が彼の頭の中で、一つ一つはつきりと、この世のものとは思えないほど美しく聞えた。それは殆んど純金の価値を持ち、純金の光を放つように思えた。

「おら一生、忘れねえ」助なあこはそつと呟いた、つぶや「どんなに年をとっても、死ぬまでも、きつと忘れねえ、きつとだ」

美しいものは毀れやすい、毀れやすいからこそ美しい、などと

云うつもりはない。ここには美しいものはないのだ、逆に、美しい感情がもてあそばれ、汚されるのであるが、助なあこの受けた感動だけは美しく、清らかに純粹であつた。

彼はその夜、約束の時間に約束の場所へいつた。芳野は堀南の釣舟屋であるが、季節には海苔もやるので、弁天社のうしろに漣き小屋と干し場を持っていた。そこは沖の百万坪のとば口にあり、畑と荒地に囲まれ、隣りの漣き小屋とは二百メートルもはなれていた。——日の永くなる季節ではあつたが、もうすっかり昏くれてしまい、あたたかい宵闇のどこかから、みみずの鳴く声が聞えて来た。お兼はもうそこにいて、暗い小屋の前から彼を呼んだ。助なあこは膝ががくがくするので、転ばないように用心しながらそ

つちへいった。

「待たせるのね、あんた」お兼はじれつたそうに云つた、「女を待たせるなんて罪よ、にくらしい」

お兼は衝動的に助なあこの手を握つた。彼は狼^{ろうばい}狽^{ばい}して、ぶきようにしりごみをし、握られた手を放そうとしながら、云つた、

「なにか話すことがあるつて」

その声は喉でかすれ、言葉ははつきりしなかつた。お兼は含み笑いをしながら、握つた手をもつと引きよせた。土堤のときよりも強く、白粉と女の匂いが彼を包み、彼は眼がくらみそうになつた。

「そうよ、大事な話があるの」とお兼は囁いた、「中でゆつくり

聞いてもらうわ、ね、ここへはいりましょう」

「おら、——」と云つて彼は足を踏ん張った。

「世話をやかせないで」

「それでも、おら」と彼は口ごもった。

「いいから」とお兼は荒い息をしながら、おどろくほどの力で彼を引きよせた、「なにもおつかないことするわけじゃないじゃないの、たまには男らしくするもんよ」

助なあこの齒ががちがちと鳴った。

お兼は彼を小屋の中へ伴れこみ、入口の戸を閉めた。この種の漉き小屋は、入口の三尺の引戸になんきんじょう南京錠が掛けてある。しかしその多くはぐらぐらで、かぎ鍵の必要はなく、ちよつと引張れば錠

前ごと抜けてしまい、出てゆくときには元のように挿し込んでおけばいいのであった。

「あんた、まだふるえているの」小屋の中からお兼の声が聞えた、「さあ、そんなにしてちや窮屈じゃないの、この手をこうしなつてば」

ついで彼女の含み笑いが聞えた。

「助さん」とあまえた鼻声でお兼が云った、「あんた幾つ、——そう、十九なの、若いのね、うれしい」

お兼はそのとき三十五歳であつた。亭主のしつつかんは呑んだくれの怠け者で、ときたま思ひだしたように、なにかの雇われ仕事にでかけるが、「まる一日働いたことがねえ」といわれていた。

博奕を打つでもなく、女にちよつかいを出すわけでもない。ただ酒を飲んで寝ころがるか、ぶらぶら歩きまわつてむだ話をするだけである。云うまでもないだろうが、家計は稼かせぎ手のお兼がにぎつていて、しつつかんは与えられる小遣いでやっているのだが、そんなものが長くある筈はなく、彼はもっぱら奢おごつてくれそうな相手を求めてぶらつき、またしばしばお兼の男のところへいつてねだった。

お兼は子を産まないためか、肌の艶つやもよく、浮気性の女に共通なまの嬌めかしさ、誘惑的な声と身ぶり、言葉よりずっと明確に意志を伝える眼つき、などをもっていた。それは洗練されたものではなく、生れつき身についたものであるし、実際にはこの土地では

そんな武器を使う必要は少しもなかった。

——お兼あまにどれだけ男がいるか、本当に知っているのは亭主のしつつかんだけだ。

土地の人たちはそう云っていた。真偽のほどはわからないが、お兼と寝た男は、きまつてしつつかんの訪問を受ける。べつに文句をつけに来るのではない、相手の男を呼び出すと、ぐあい悪そうにもじもじして、「一杯飲ましてくれねえかね」と云う。相手が幾らか出せば貰うし、ないよと云えばおとな温和しく帰るだけであつた。

助なあこの恋は、一と月ばかり続いただけで、無慚むざんにうち砕かれた。或る夜、芳野の漉き小屋の中で、彼は怒りのためにふるえ

ながらお兼をなじった。彼はお兼がほかの男たちとも寝る、ということを聞いたのである。

「そんなこといいじゃないの」と云つてお兼は助なあこを抱きよせようとした、「あたしが本当に好きなのはあんた一人だもの、浮世はままならないもんなのよ」

助なあこはお兼の手をふり放した。

「そうじゃねえ、そうじゃねえ」彼はふるえながら云つた、「男と女の仲は蜜柑の木を育てるようなもんだ、二人でいつしん同躰になつて育てるから蜜柑が生なるんだ、お兼さんのようにあつちの男と寝たりこつちの男と寝たりすれば、せつかくの木になすびが生つたりかぼちやが生つたり、さつまいもが生つたりするように

なつちまう、おらそんなことあいやだ」

「ばかなこと云わないで」そう云ってからお兼は急に怒りだした、
「えらそうなこと云うんじゃないやねえよ、おめえだっておらのこと、
おらの亭主から横どりしてるんじゃないやねえか、なにがなすびだえ、
かぼちやがどうしたつてのさ、ふざけちやいけないよ」

そして***とひどい悪態をついた。

美しく純粹な、黄金の光を放つものが毀れた。助なあこは自分を反省し、また独学に熱中し始めた。いちどならず「死んでしまおう」と思い、どこか遠い土地へいってしまおうと決心した。北海道かどこかの広い広い、はだら雪の人けもない曠野を、頭を垂れ、うちひしがれた心をいだいた自分が、独りとぼとぼと歩いて

ゆく。こう想像するたびに、彼は一種の快感にさえ浸されるのであつたが、現実にそうする勇氣は起こらなかつた。

「むだなことを考げえるんじやねえ」彼は机にしがみついて頭を振る、「そんなことに氣をとられると出世のさまたげだぞ」そして他の水夫やエンジさんの騒ぎから身を護るように、両手で耳を塞ぎ、口の中で低く、本を音読するのであつた、「——その構造のAは、原則として、スチイターと、ロオターの二部分に分れ、スチイターの主軸は汽筒であつて、……」

お兼はもう助なあこには眼もくれなかつた。工場の建物の前に^{むしろ}蓆を敷き、他の女房や婆さまたちと並んで貝を剥きながら、陽気な声でお饒^{しゃべ}舌りをし、みんなを笑わせている。助なあこが通つて

も知らぬ顔だし、彼を見たにしても、その眼にはなんの表情もあらわれない、犬か猫でも見るような、まったく無縁な眼つきであった。

しっつあんも助なあこのところへは訪ねて来なかつた。けれどもそれから、お兼の相手の男にねだるときは、次のようなことをぶつぶつと云つた。

「夫婦てえものはおめえ、二人で蜜柑の木を育てるようなもんだ、その他人の育てた蜜柑をよ、只で取つて食うつて法はねえもんだ」
そこでしっつあんはぐあい悪げに眼をそらすのである、「——他人のおめえ、夫婦の育てた蜜柑の木に生つた蜜柑を食つたら、その駄賃くれえ払わなきやあしよあんめえじゃあ、蜜柑はなずびや

かぼちやたあちがうからな」

こうして、「しつつあんはすっかり役者（賢いというほどの意味）になった」という評が弘うわさひろまった。

水汲みずくみばか

私は根戸川の堤で釣りをしていて、初めてその男に会った。

その男が来るまえ、倉なあこが通りかかって、私のうしろに立
寄り、暫く黙ってようすを見ていた。倉なあこは船宿「千本」の

若い船頭で、背丈が高く、男ぶりがよく、いつも頬つぺたが赤く、また、この土地の青年にしては珍しく無口で、理屈も云わず、そしてみんなに好かれていた。

「なにを釣ってるだ」倉なあこが訊いた。

私は困った。なにを釣るなどという思いあがった考えは私にはない。なにかが釣れてくれればいいので、なにが釣れるかは先方しただいだからである。

「鯉かね」倉なあこがまた訊いた。

私はタバコを出して彼にすすめた。

「いいだよ」と倉なあこは云った、「おらめしのあとで一本吸うだけだ」

私はタバコに火をつけた。すると水面の浮子うきが動いて、強く水の中へ引きこまれ、私はタバコの煙にむせながら竿さおをあげた。釣れたのは大きな鯊はぜであった。

「二歳だな」と倉なあこが云った。

私は鯊を鉤はりから外してバケツに入れ、新しい餌を付けて、また糸を投げた。

「ふん」と倉なあこが云った、「二歳の鯊がこんなところまでのぼって来るんだな」

彼の声には皮肉やからかいの調子はなかつた。むしろ控えめな親しみの情さえ感じられたが、それは却かえって私を圧迫し、窮屈な気分させた。倉なあこは専門家である。釣りの穴場を知ってい

る点では、浦粕じゅうでも指折りの船頭といわれ、どんな場合にも、黒鯛くろだいを釣りたいという客を鯨の寄り場へ案内する、などということはしなかった。そのために、吝嗇な客ほど彼をひいきにする、といわれていた。この、客と船頭との微妙な因果関係については、こういう例がある。——釣舟宿では客を送り出すとき、飯と佃煮つくだにと香こうの物を持ってゆかせる。通常の客は沖で釣った魚を料理させ、それと香の物くらいでめしを喰べるから、船頭は佃煮で自分の食事ができる。ところが吝嗇な客になると、釣った魚は持って帰り、佃煮と香の物でめしを詰め込んでしまう。しかたがない、船頭は塩のきいた海水をぶっかけて、ざくざく流し込むということになる。しかも吝嗇な客ほど釣ちようか果にも執着が強いか

ら、腕のいい船頭をもつぱらねら覗う、という迷惑な関係が生れるのだそうであった。——そういう良心的な専門家の評を聞いて、圧迫を少しも感じない者があるだろうか。私は川口から約四キロも上流のそんなところで、大きな二歳の鯊を釣ったことが、なにか常識外れなあやまちを犯したように思えて、恥ずかしくなった。

「先生は青べかを買っただつて」暫くして倉なあこが訊いた。

私が答えると、倉なあこはかが跼んで、草の穂をむしり、その細い茎を嚙んだ。

「まずかつたな」倉なあこは云った、「あのぶつくれ舟を馴らすにやあ肝煎きもいるだよ」

私は答えなかつた。

ちよつとまえから、洗い場で一人の男が水を汲んでいた。土堤に踏段があつて、根戸川から水を汲んだり、洗い物をしたりする足場が設けてある。その男はきれいな手桶ておけを二つ、天秤棒てんびんぼうで担いでやつて来た。天秤棒は細手の、飴色あめいろに磨きこんだ、特別製とくべつせいのようであり、手桶は杉の柁目まさめで、銅あかの箍たががかかつていた。どうしてそんなこまかいことに気がついたかという、男のみなりや動作が變つていたからである。

その男の年は十六七ともみえ、三十過ぎともみえた。痩せて、小柄で、背丈は五尺そこそこだろうか。紬つむぎ縞じまらしいさつぱりした着物に、角帯をしめ、秩父物ちちぶの焦茶色に荒い縞のはいった、袖なしの半纏をひっかけていた。そして足袋せったに雪駄せったばきという、

およそ水汲みなどとは縁の遠い、どこかの若隠居が散歩にでも出た、といったような姿であつて、そのうえ、水の汲みかたが信じがたいほど用心ぶかいのである。

彼はじつと川の水面を睨にらんでいる。無関心に見ると考えごとでもしているようだが、全神経を集注して睨にらんでいるので、その証拠には、水面にごみがなくなつたとみた刹那せつな、さつと手桶で水を汲むのである。——そこまでの慎重さもたぐい稀まれなものだが、それで終つたわけではない。こんどは手桶の脇に跣はだしで、いま汲んだ水を睨にらむ。時間などはてんで頭あたまにないようで、ゆつくりと、おちつきはらつて睨にらんでおり、まつたくごみがなければよし、ほんの僅かなごみでもあれば、その水は惜しげもなく川へあけてしま

い、また流れの面を辛抱づよく睨むのであった。

初めて私とその男を観察したときは、そうとは知らなかったし、自分は釣りをしていたので、時間の経過には気づかなかつたが、二つの手桶に汲み終るまで、二時間ちかくはかかつたであろう。その男が満足して、天秤棒で二つの手桶を担ぎ、ゆうゆうと歩き去ったときには、もう倉なあこもそこにはいなかったのである。水を汲むのに二時間ちかくもかかつたというと、たぶん信用しない人のほうが多いだろう、私も初めてのときはそれほど感じなかった。けれども二度めに見、三度めに見、そののちしばしば観察するに及んで、二時間くらいはざらであり、ときには半日ちかくもかかるのを実際に見た。

或るとき私は写生帳を持って、町の中央部にある、中堀橋を渡つていた。すると、向うからその男が来るのを認めた。彼はやはり袖なしの半纏をひっかけ、雪駄ばきで、口に飴を^{くわ}え、飴に付いている杉^{すぎ}箸^{ばし}のような物を、両手で挟んでくるくる廻しながら、いかにも暢^{のんき}気^きそうな、この世に心配なことはなにもない、と云いたげな顔つきで、ふらふらと歩いて来た。そうして、私が片方へよけている狭い橋の上を通りすぎるとき、彼はなにかのオペラの中のアリアを、鼻で、かなり正確にうなっていた。

私の問いに対して、「千本」の長は軽蔑したように、鼻柱へ皺をよらせた。

「うちは堀で魚屋をやってるだ」と長が説明した、「水汲みばか

っていうだよ」

私はまた訊いた。

「そうじゃねえ、ずっとあとだ」とこの小学三年生は云った、
「蓄音器のよ、レコードを買い始めたべえ、いくらでも買うだ、
二階がみしみしいうほど買って買ってよ、朝つから晩までそれを
聞いているだよ、そのうちにな、レコードの数が殖えるのといっし
よに、だんだん頭がおかしくなってきたんべえ、それでよ、嫁を
貰ったら治るべえかって、葛かつしか飾のほうから嫁を貰ったつけだ、
そしたら頭あちつとも治らねえで、水汲み始めただ」

耳も眼も口もすばしっこく、学校の勉強のほかはなにごとによ
らず、なかまにひけを取ったことのない長は、唇の隅に唾たを溜め、

さかしげな眼をくりくりさせながら語った。

その男はなにもしない。父親が死んだあと、魚屋の店は母親と男の妻とで、三人の若者を使って立派にやっている。——男は朝起きるとすぐ、蒸気河岸まで水汲みにゆき、帰って来るとその水で洗面にかかる。第一の手桶の水で歯を磨き、第二の手桶の水で顔を洗うのだが、どちらの手桶の水もむだにせず、ゆつくりと、丁寧に、飽きることなく磨いたり洗ったりする。これだけで半日つぶれてしまい、それから朝めしを喰べるので、たいてい午後になるのが普通である。——それから二階へあがって蓄音器をかけるか、飴をしゃぶりながら町を歩く、というのが変らない日課である。

「おつかしいのよ」と長は嘲笑した、「晩になるとな、おつかあに風呂へ入れてもらつて、軀あすつかり洗つてもらつて、寝るときにも抱いてねかしてもらうだつてよ、それでよ、おつかあに抱かれて寝てもよ、ただ眠るだけでなんにも」

私はいそいで話題を変えた。この並みはずれてすばしこい少年は、私などのまだよく知らない、もの凄いやうなことを平気で云う癖があつた。尤も、これまた長だけには限らない、この土地では少年と少女の差別なしに、男女間の機微に触れた言葉をじつによく知っており、そういう表現におどろいて、私がへどもどしたりすると、「へ、へ、蒸気河岸の先生もそらつ使えだ」つげくらいは云われるのであつた。

或る日、私はその堀の魚屋の前を通った。間口は三間くらい、二階造りのがっしりした建物で、広い店の奥に大きな冷蔵庫があり、看板には「仕出し料理、魚辰うおたつ」と書いてあった。若者が一人、せつせと魚を作っている、店の前のほうに、若い女がいさましく盤台を洗っていた。頭はあねさまかぶり、端折はしよった裾から白く逞たくましい脛すねと、鮮やかに赤い腰巻が見え、襷たすきをきつく掛けているので、肉付きのいい、白く張り切った肌が二の腕まであらわになり、私を通りぬけようとしたとき、彼女は片方の手をあげて額のあたりを撫でたが、その白いゆたかな腕の付根に、ふさふさとした腋わ毛きげが見えたので、私は慌てて眼をそらした。

紺こん 緋がすりの着物、きつく絞った襷、端折った裾から覗いている

赤い腰巻、逞しく肉付いた足や、まるく張り切った腕や、ふさふさとした腋毛。——そうして男よりもいさましく、すつかり馴れた手つきで、しゃつしゃつと盤台を洗っている姿。そこには「水汲みばか」などと云われる亭主を持った、不運な女のかげとか、悲しみを胸に秘めているといったふうなものは微塵みじんも感じられなかった。夜半よわの眼ざめにどんなことを思うかは知らないが——。

青べか馴らし

いかずちの船大工から、青べかの修理が終つたという知らせが来た。そのとき修理賃を四つ取られたので、芳爺さんに払つた三つ半と豚肉代を加えると、それがかなり高価な買物であつたことがわかり、私はもういちど、自分がうまうまひつかつたという事実を確認して、不愉快な気分を味わつた。

修理賃は払つたが、なかなか舟を受取りにゆく気にはなれなかつた。まえにも断つたように、その「青べか」は浦粕じゆうで知らない者のない、まぬけなぶつくれ舟であり、なかんずく子供たちには軽侮と嘲笑の的であつた。そんなものに乗っているところを見られたら、私自身どうなるか想像がつかかなかつたのである。「いいさ」と私は自分に云つた、「そのうちに忘れてしまふだろ

う」

誰がどう忘れるのか。船大工が私を忘れるのか、私が舟を受取
ることを忘れるのか、貧窮の中でなけなしの金を九つ近くも取ら
れた青べかそのものを忘れるというのか。いずれともはつきりし
た根拠があつたのではない、漠然とした自己保護本能、その潜在
意識のはたらき、といったような感じの眩きだと思ふのであるが、
——しかしすぐに、私はそれを買つたとき、芳爺さんに頼んだこ
とがあるのを思いだした。つまり修理ができて、当分のあいだ、
船大工の岸へつないでおいてもらう、ということ、それは青べ
かへ乗るまえに長をはじめとする少年たちと、感情の融和期間を
持ちたいと考えたからであつて、ああそうだったと思ひだし、ほ

つとしたとたん、まるで私とその約束を思いだすのを待ちかねていたように、芳爺さんが青べかを届けに来た。

私が云うと、爺さんは戸口で喚いた。

「いかずちでも邪魔つけだつて云うだ」声いっばいに喚きながら、老人は私の手を仔細しさいありげに見、そしてまた喚きたてた、「預かり賃を出せばべつだつてえがね、日ぎめで駄賃をやつて預けておつか」

私は答えて、爺さんといっしょに土堤へいつてみた。

青べかは洗い場の杭につながれて、ゆらゆらとねむたそうに揺れていた。私の注文にもかかわらず、剥はげていた青いペンキが、もつと毒どくしく、なにかをあざ笑いでもするように塗り直して

あつた。それを買つたとき私は爺さんに、ペンキを剥がすようにと頼んだのだ。

「おらそう云つただよ」と老人は私の手を眺めながら喚き返した、
「そう云つただが塗つちまつただよ、まあしようなかんべや、剥がしても塗つても青べかは青べかだでな」

爺さんは私の手と袂たもとを、意味ありげな眼でちらちらと見た。

「棹さおや權かいはどうするだ」と老人は訊いた、「なんならおらが世話すべえか」

私が答えると、爺さんは耳に挟んでいたタバコの吸いさしを取り、いまいましそうな眼つきで「マッチ」と云つた。私は答えて礼を云い、振り返つて家へ戻つた。

私の借りた家は、蒸気河岸から百メートルほど北にある一軒家で、東は広い田圃^{たんぼ}、左右は草のまばらに生えた空地、西が根戸川の土堤になっていた。土堤の上はずっと上流の徳^{とくぎょう}行町まで続く道があり、人の往来はあまりないが、話しながら通る者があると、四帖半^{ししょう}で机に向つていても、その話し声はよく聞えた。――その日の午後おそく、私の予期していた騒ぎが起こつた。それは避けることのできない関門なのだ。東京から大阪まで汽車でゆくの、丹那トンネルは避けることができるが、大井川や天竜川の鉄橋を避けることはできない。トンネルと鉄橋とは対象が違うなごどというような、論理にこだわる人は浦粕へゆかれるがよい。この町の住民たちは独特の論理をもつてい、（それは多く権威を嘲^ち

ようろう

弄 するという観念が基本になっているのだが、トンネルと鉄橋どころか、小学校の或る先生の話をするのに、「二つ^{いり}」の毀れた水門を引合に出す、くらいはごくあたりまえなことであつた。何十年かまえ、——この話はちよつと眉唾ものだが、おそろしく学問のある、氣位の高い村長（当時は「村」だったのである）がいた。実際おそろしいほど学問があるために、村の住民たちのことなどおけらほども思つていなかった。すると或るとき、消防の組頭だつた徳さんが、なかまの者にこう囁いた。

——あの村長はちんばだぞ。

なかまは「へえ」と眼をみはつた。

——おらにやあそうは見えねえがね。

すると徳さんが云った。

——世の中にや見えるちんばもあれば見えねえちんばもあるさ。
浦粕の風習として、こういう評が弘まるのに日時はかからない。
たちまちこれが全村民に伝わった結果、その気位の高い村長は、
ついにちんばをひいて歩くようになった、ということであつた。

芳爺さんが青べかを届けて来た日の、午後おそく、机に向つて
いた私の耳に、子供たちの喚声が聞えて来た。それは根戸川堤の
ほうからであり、洗い場でわきあがっていることがよくわかつた。
かれらは罵り叫び、笑いあい、そのあいだに石を投げつけるよう
な音がし、囃はやしたて、どなりあつていた。——私はペンを持った
まま、じつとそれを聞いていた。関門なのだ、と私は思った。天

然痘にかからないためには種痘をしなければならぬ、あばた面になる代りとして、腕の一部分にメスを入れられるのだ。メスを入れられる痛さは瞬間的なものであり、瘡痕そうこんのかさぶたが取れるまでもさして時日はかからない。さしずめこれは種痘のようなものだ、と私は自分に云い含めた。

そのうちに堤のほうからこつちへ走つて来る者があり、窓の外へ来て「先生いつか」と長が呼びかけた。

「いってみせえま」と長が昂奮こうふんした声でどなった、「やつら青べかをぶつくらわしてるだ、あれが聞えねえだかい」

私は答えた。

「そんなこと云わねえで来せえま」と長はじれた、「おんだらが

止めてもやつらききやあしねえだ、ひつくら返すつて云つてるだよ」

私はまた答えた。

「じやあ知らねえぞ」と長は怒つてどなった、「おら知らねえから、いいか」

私が答えると、長は走り去つていった。

洗い場の騒ぎはなお続いてい、長の叫び声が、その騒ぎを縫うように聞えた。よせ、やめろ、と長は叫んでいた。先生が怒るぞ、——よさねえか、先生が来るぞ、——私は事の意外さにとまどつた。青べかをもつとも軽侮していたのは長であつた。それがまだ三本松の脇の道傍で、舟底を上干されていたとき、長は鼻柱に

皺をよらせて「あのぶつくれ舟」と云い、見るのもいやだというふうにとつぽを向いた。その日の騒ぎも、おそらく長が音頭取りだろうと思つていたのである。——しかしそうではなかった。長はかれらの暴力から青べかを護ろうとしているのだ。私はとまどい、そうして少しばかり感動した。

「まあおちつけ、用心しろ」と私は自分に云つた、「そうやすやすと感傷的になるな、長はしたたか者だぞ」

騒ぎがしずまり、悪童どもは去つた。そろそろ暗くなりはじめたころ、もういいだろうと思つて、私はようすを見るために土堤へ出ていった。ずいぶん石を投げつけたようだし、「ひつくら返す」と云つていたそうで、どんなことになっているか、その場へ

いつて見るまではちよつと不安な気持だった。

堤へ登つてみると、舟はなかつた。

洗い場の杭につないであつた青べかは、もうそこには見えないのである。私は踏段をおりながら、さてはひつくら返したかと思ひ、洗い場に跣んで水中をすかして見た。たそがれ黄昏の、片明りに光る、水面の下をすかして見ると、青黒く藻草もぐさがゆらめいてい、なにかの稚魚が群れをなして、さつと片方へはしり、すぐにまた片方へさつと走るのが見えた。けれども舟はみつからなかつた。単にひつくり返されたのなら、杭にともづなで縛りつけられている筈だが、そのともづなまでなくなつていた。

「ふん」と私は呟いた、「やりやあがつたな」

私はやつらが青べかを流したと思った。

そのとき私がさばさばしたというのは嘘だ。なにしろ当時の私としてはたいまいな代価を払っている。豚肉やタバコや精神的な損失をべつにしても、それは決してさばさばするような金額ではない。ちよūdい機会だからうちあけておくが、浦粕時代の私の収入は、中・商という商業新聞の家庭欄に、週一回ずつ載る童話をときたま書かせてもらい、また少・世という少女雑誌に、少女小説を買ってもらっていた。前者は高品さんという浦粕の名家の息子で、中・商紙に勤めていた人の世話であり、後者は少・世の編集長で、のちに高名な小説作者になった井内蝶二の好意によるものであった。稿料は前者が一回「五」であり、後者が一編

「四〇」または「五〇」くらいであつた。もちろんその差は原稿の枚数によるのであるが、——そして、それで足りないところは、京橋木挽町こびきちょうに店を持っていた恩人、山本洒落齋翁しやくざいのところへ借りによく、それも極めてしばしば借りにいったものであつた。

それなら青べかを失つたことが、非常に惜しかつたかといえ、それもはつきりとは答えられない。一種の厄介ばらいをしたような、肩の荷をおろしたような気持もしたからである。とにかく、明日になったら川筋や堀を捜してみよう、そう思つて私は家へ歸つた。

明くる日、朝めしのあとで私はでかけた。悪童どもは学校であるが、私は自尊心のために舟を捜すようなそぶりは示さず、眼の

隅で注意しながら歩いていった。蒸気河岸では三十六号船の留さんが声をかけ、景気はどうかと訊いた。船宿「千本」の店の前では、おきぬという女が繩舟の餌付けえづをしながら、たまには遊びに來い、と呼びかけた。堀へ曲ると海苔屋のおばあさまが挨拶をし、町役場の増山さんと会い、ごつたく屋の「栄家」の前では、泊り客を送り出した実永（むろん仇名あだなで***と読むのだが、本名は知らない）が、ちよつと寄つてゆく気はないか、とさそいかけた。こうして十幾人もの人と、言葉を交わしたり、目礼したりしたが、ついに青べかを発見することはできなかつた。

「まつすぐに川をくだつたんだ」と私は呟いた、「海へいつちまつたんだな」

その日の昏くれがたに、窓の外で倉なあこの声がした。窓をあけてみると、倉なあこは沖着おきぎのぼった姿で、頬つぺたの赤い、いい男ぶりの顔で笑っていた。

「青べかを曳ひいて来ただよ」と倉なあこはゆつくりと云った、
「沖の三番のみおでふらふらしてただ、どうしただね」

私が答えると、倉なあこはまた笑った。

「しようがねえがきどもだ」と彼は、あんまりしようのないような口ぶりでなしに、やさしく云った、「こんど来たらどなつてやるがいいだ、やつらもそれほどわる気はねえだからな、一つどなつてやればいいだよ」

私が答えると、倉なあこは頷いて、棹と櫂はすぐに持って来る、

と云つてたち去つた。そのあとで、私は堤へいつてみた。青べかは杭につながれて、私に見られたくないともいうように、ひっそりと洗い場により添つていた。もう川の水面も暗いので、近づてみても細部はわからないが、青いペンキはあばたのように剥げ、ふなばたがところどころ欠けていた。

「おい」と私は彼女に云つた、「ひどいめにあつたな、これで終つてくれればいいがね」

私の心にあたたかな愛情がわきあがつた。そんなにもぶざまな恰好の、愚かしげなべか舟はほかにはない。そのために嘲笑され、憎まれているのだが、それはそんなふうに造つた者が悪いので、彼女自身には責任のないことである。彼女はなんの罪もないのに

造った者の誤り、または臍へそ曲まがりの代償を払わされているのだ。しかも彼女はその冤むじつを訴えることさえできず、黙って住民たちに嘲笑され、悪童どもの投げつける石に耐えなければならぬのである。

「ひとつ考えてみよう」私は彼女の修理された舳先を撫でながら云った、「問題は（青べか）という概念だ」

青いペンキを剥がしても、「塗っても青べかは青べかだ」と芳爺さんは云った。それは要するに、その舟に関する住民たちの認識の根底をなす普遍的概念であろう。とすれば、それを青べかでない他のもの、つまり属性の転換をすればいいのではないか、と私は思った。

「待てよ」と私は呟いた、「まあ待て、考えてみよう」

私は夕めしを喰べに堀南の「天鉄」へゆき、そのあとちよつと買物をして帰った。

明くる日の午後おそく、土堤のほうで子供たちの騒ぎだす声を、私は聞いた。もとより予期していたことで、私は机に向つたまま、その騒ぎを聞きながら、いまになにか反応があるだろう、誰かがやつて来るだろう、とひそかにほくそ笑んでいた。子供たちの騒ぎは第一回るときよりも盛大であり、石を投げつける音も数多く、かつ活気に満ちたものであった。私は待つたが、誰もやつては来なかつた。長さえも来ないまま騒ぎが続き、やがて、ずいぶんときが経つてから、子供たちは去つていった。

「おかしいな」と私は呟いた、「気がつかなかかったのかな」
もはや悪童どもがいけないということ^{たし}を慥かめてから、私は用心ぶかく家を出ていった。

青べかは洗い場の杭につながれていた。私は踏段をおりてゆき、
跣んで、まず彼女のふなばたをしらべた。昨夜、私が書いた「ロ
ジナンテ」という字は、傷だらけではあるが残っていた。投石は
思ったより華やかだったらしく、ペンキはさらに剥げ、ふなべり
は幾力所も欠けていた。

「この字をなんとも思わないのかな」と私は白いペンキの文字を
見ながら呟いた、「かれらには好奇心も懐疑心もないんだな」

私の期待は外れた。私は彼女を「青べか」から「ロジナンテ」

に変えようとしたのだ。悪童どもが好奇心をおこして訊きに來たら、私はその名の由来を語ってやるつもりだった。そうすればこれらの頭には、愚かしく愛すべき老馬の姿が印象づけられるに相違ない、——おつかしな、可哀そうな老いぼれ馬。こういう觀念がかれらに起これば、もはやその「可哀そうな老いぼれ馬」を迫害するようなことはないだろう、およそ少年というものは自分を英雄化し、事をロマンティックに考えたがるものだからだ。

「まあ待つてみよう」と私は家へペンキを取りに戻りながら云つた、「ものごとは辛抱がかんじんだ」

だが私の期待は外れた。

この土地の悪童どもは、私のいだいている「少年」という概念

の外にあるらしい。青ペンキを塗ろうが塗るまいが、白いペンキで妙な名を書こうが書くまいが、かれらにとつて「青べか」はしよせん「青べか」にすぎないのであった。

「即物的なやつらだ」と私は云つた、「好きなようにしろ」

私はさらにこう云つたことを覚えている、「どうでもいいようにしろ、勝手にしやあがれ」

悪童どもは飽きもせず、毎日やつて来て青べかの虐待に興じた。雨の日にさえ、学校のゆき帰りに石を投げ、泥を投げ、悪罵あくばと嘲弄をあびせかけた。私はそのとき「画師弘高の悲劇」という、二部十幕の大作にかかつてい、それはまったく金になるあてのないものだったが、その原稿に没頭することによって、青べかのこと

を忘れることにつとめた。

お願いしたいのは、私がこれを人間的葛藤かつとうの比喻ひゆに使っていると
思っていただけたくないことである。これは事実そのままを
語っているのであり、現実に「あつた」ことなのである。聖書に
よれば、人間の原罪の片棒を担いだために蛇はいまでも憎まれ、
塵ちりの中を這はいまわらなければならぬのだという。私は青べかの
うえにも、その原罪の不当な迫害という共通点を感じて、嘆息し
た。

子供たちはやがて飽きた。熱烈に恋しあつたうえに結婚した男
が（或いは女が）やがてその相手に飽きるようにではなく、老醜
の彼、または彼女を憎みさげすむことに飽きるように、——その

期間がどのくらいであったか、ということは問題ではない。とにかく子供たちは飽き、青べかには眼もくれなくなつた。時がすべてを解決するという、怠けた金言も、ここではいちおう実現したわけである。

「しかしゆだんはならない」私はこう私自身を戒めた、「まだ関門が控えているぞ」

そして私は青べかを出航させた。

べか舟は小さい平底舟だから櫓ろはかけられない、水の浅いところは棹でやり、深いところでは櫓を櫓のように使うのである。私は少年時代に、江ノ島の片瀬川で棹と櫓の使いかたを覚えた。そんなちっぽけなべか舟などは手の内のものだと思つたのであるが、

——そして、多くのべか舟はそうであつたろうと思うのだが、彼女は他のべか舟ではなく「青べか」であつた。彼女には個性があり、強烈な自意識があつた。私がならい覚えた技術をフルに動員しても、彼女は頑として服従しない。こちらへやろうとすればあちらへゆき、あちらへ向けようとするところこちらへ向いてしまふ。ではあちらでもなくこちらでもなく、好きなほうへ進ませようとする、ただぐるぐると同じ水面を廻るだけで、どっちへも進まないのであつた。

「よしよし」私は權を置いて、片手で汗を拭き片手でふなべりを撫でながら云つた、「時間はたっぷりあるさ、いそぐ旅ではないからな、まあゆつくりやろう」

こうして私の苦闘が始まった。

私は忍耐づよいほうでは自信があつた。

私はむやみに怒つたり、ふくれつ面をするようなことはない。仮に感情の激昂を抑えることができないような場合には、どなる代りに丁寧な言葉を使い、喚く代りにあいそ笑いをするようにつとめる。むろん青べかに対してもそういう態度でのぞんだ。私は彼女がどんなに侮蔑ぶべつされ迫害されたかを思い、自分だけは憐れみあわと愛情とで、彼女を劬いたわなければならないと思つた。

或る日、私が根戸川の中流で、棹を振りまわし気ちがいのように權を使いながら、青べかの頑強な自意識とたたかつていて、ふと気がつくくと、蒸気河岸に大勢の人が集まつて、こつちを指さし

ながら、げらげら笑っているのに気づいた。学校のある時間だから、悪童どもはみえなかったが、十四五人の老若男女と、私を「蒸気河岸の先生」と知っているちびどもが、こつちを指さしたり、腹を押えたりしながら、有頂天になって笑っていた。

或る風の強い日に、——私は根戸川の中流で苦闘していた。干潮だったと思うが、青べかは私を乗せたまま、棹や櫂にはいつもう頓着せず、強い風と流れに身を託して、ぐんぐん下流へとくだっていた。このままでは海へ持ってゆかれてしまう、私はけんめいに櫂を使い、どうかして彼女を岸のほうへ向けようと、汗だくになって奮闘していた。そのうちに、堤のほうから叫び声が聞え、見ると、「千本」の長が走りながらどなっていた。

「岸へ着けるま」と走りながら長は私に呼びかけた、「岸に着けるだよ先生、そんなことしていると海いっちまうだぞ」

私もそうしたいのだ。そうするために汗みずくになっているのだが、青べかは頑としてきかないのである。

——この、このろくでなしの……。

そう云いかけて私は口をつぐんだ。

子供たちのほうが正しかったのだ、このぶつくれ舟は手ごちに負えないあばずれの、まぬけで能なしで、恥知らずな物駄だったのだ。まさに「青べか」だったのだ、と私は思ったが、それでもまだ、そういう気持を彼女にぶちまけるのは控えることにした。

「はあ——流されてるだ」と堤の上を走りながら長が叫んでいた、

「先生のばかやつら、いいきびだ、流されてるだ、ええばかやつら」

私は鼻の奥が熱くなるのを感じた。

「いいきびだ、わあい」堤の上を、こちらの舟といっしょに、走りながら、泣き声で長が叫んでいた、「先生のばかやつら、ええ流されてるだ、海まで流されるだ、ばかやつら、いいきびだ、わあい」

それは小学三年生の愛情の表現だった、などと私は云いたくはない。それは学校のある時間ではあるが、土曜日だった、などということも云う必要はないだろう。——私は海まで流されはしなかった。一ついりのところで房なあの舟に捉まり、無事に蒸気河

岸まで曳き戻されたのであった。

或る日、——いや、これ以上は退屈な繰返しになる。私が彼女に対する憐れみや、愛情や劬りをかなぐり捨て、悪童どもと同じように、それが正しく青べかにすぎないと認めたととき、初めて彼女は私に身を任せた。つまり私の棹と櫂の命ずるままになった、ということを書いておけばいいであろう。

砂と柘榴ざくろ

堀の洋品雜貨店「みその」の息子が嫁を貰った。息子の名は五郎、年は二十四、町の人たちはごろさんと呼んでいた。嫁はゆい子といい、年は二十一歳。この町から四キロほど川上にある篠^{しのざ}咲^きの者で、実家はかなりな地主だといわれていた。

五郎さんは温和^{おとな}しい性分であつた。背丈は五尺一寸くらい、瘦せていて顔は蒼白く、いつも手指の爪をかじる癖があつた。家族は父と彼と、十二になる妹の三人で、姉が一人いたが、何年もまえによそへ嫁し、その婚家の人たちといっしよに、北海道へ移住してしまつた。母親は長く腎^{じんぞう}臓を病んだのち、その年の夏に亡くなり、そこで急に五郎さんの結婚が繰りあげられたのであつた。

結婚式はかなり派手におこなわれた。披露^{ひろう}の宴会は「山口屋」

の大広間を使い、招待された客は町長はじめ二十余人、みな旦那衆と呼ばれる人ばかりで、お引き物の折詰には眼の下尺二寸の鯛が入っていたという。招待されなかった消防組長のわに久は、はらだちまぎれに酔っぱらったあげく、火のひ見櫓みぐらへつかまって暴れた。

「あの宴会をぶちこわしてくれるだ」とわに久はどなったそうである、「これからだんだんに登って行って、てっぺんまで登って行ってな、すりばんを鳴らしてくれるからな、見ていろ」

「誰も止めるな、おっぽつといてくれ」ともどなったそうである、「いまおれがすりばんを叩き鳴らして、宴会をぶっこわして、町じゆうをひつくらけえしてくれるだから」

誰も止める者はなかった。こういう興味深いものを途中で止めるような、お節介な人間は浦粕には絶対にいないのである。かれらはわに久を遠巻きにして、げらげら笑ったり、けしかけるようなことを云ったりした。わに久はけんめいに梯子をよじ登ろうとするが、二三段登るとずるずる落ち、また二三段登ると落ちてしまうので、倍增しはらをたてた。

「悪いいたずらだ」と彼はどなった、「いいかげんにふぎけろ」彼はなお飽きずに努力したが、どうしても二三段より上へは登れなかった。

「よせ」と彼は片手でなにかを払いのけるような動作をした、「よせつたらな、このやろう、ばちばらすぞ」

それから力尽きて、梯子の桁けたへ腕を掛け、全身で凭もたれかかつて眠つてしまい、知らせを聞いて駆けつけた妻女によつて、家へ伴つれ去られたのであつた。

こうして山口屋の披露宴は事なく終り、五郎さんと花嫁とは、客たちより先に家へ歸つた。——ここまでは、五郎さんの運命は類笑んでいた。彼自身は高等小学校しか出ていないのに、花嫁は東京の女学校を卒業していた。彼が貧相でみばえのしない男ぶりなのに反して、花嫁はかなり縹きりよう緻ようよしであり、東京の女学校を卒業したという、一種の誇らしげな匂いを身につけていた。おそらく、五郎さんは自分の幸運をよろこんだであろう。揚幕で初舞台の出を待つ役者のように、よろこばしい不安のために胸をおど

らせていたことだろうと思うが、——運命はそこで頬笑みを消し、まるで五郎さんに向つて舌を出すようなことをやつてのけた。

新婚の寢間へはいると、花嫁は自分の夜具のまわりへ、ぐるつと砂を撒まいた。砂は用意して来たものらしい、目のこまかい麻の袋にはいい、花嫁のゆい子はその袋の口をすぼめて、枕まくらも

許とから左廻りに、ぐるりつと、砂のバリケードを作つたのであ

つた。五郎さんは腑ふにおちない顔で見っていたが、すっかり砂の線が出来あがり、その線に囲まれた夜具の中へ、わが新婚の花嫁が寝てしまつてからも、やはり腑ふにおちないことに変りはなかつた。

「それはなんですか」と五郎さんは訊きいてみた、「なにかの呪まじなな禁いですか」

「呪禁なんかではありません」と花嫁は答えた、「お母さまの喪があけるまでは、こうして寝るようにと云われて来たんです」

五郎さんはちよつと考えてから、穏やかに訊いた、「いつ亡くなられたのですか」

「誰が」と花嫁のほうで訊き返した。

「お母さんですよ、あなたがいまお母さんの喪があけるまでつて」

「ううん」と花嫁は東京の女学校を卒業した匂いのする発音で五郎さんの言葉を遮り、さへぎきまじめに五郎さんを見つめながら云った、

「あたしの母はお式にもいたし披露宴にもいたし、あたしたちといつしよにここまで来たじやありませんか」

「ああそうか」と五郎さんは云った。

「あたしの母はあのとおり丈夫ですよ」

「失礼しました」と五郎さんは云った、「ではあなたの云うのはぼくの母のことですね」

「おやすみなさい」と花嫁が云った。

「おやすみ」と五郎さんが云った、「どうも有難う」

自分の亡き母のことを思ってくれたので、いちおう感謝の気持をあらわしたのだが、喪に服するなどということは、昔ばなしのほかには聞いたこともないし、夜具のまわりに砂のマジノ線を作るということ自体に、一種の鬼気といったふうなものが感じられて、五郎さんとしては多少ならず興ざめであつた。

——本当にそんなことがあるんだろうか。

五郎さんは不審に思った。けれども男女間の機微に触れることなので、父親にはもちろん、親しい友人たちにも訊いてみるわけにはいかない。それでゆい子が里帰りをした日、彼は寺の住職のところへ訪ねていった。大松寺は浦粕町から東北東へ、三キロばかりいった田圃の中にあり、住職は某宗教大学を出た「インテリ」だといわれていた。

「そういう話は聞いたことがないな」と住職は笑いをうかべながら答えた、「ぼく寡聞かぶんにして知らずといったところかな、しかしまあ、いいじゃないか」

「寢床のまわりへ砂を撒くことですが、そんな習慣もあるんでしょうか」

「知らないねえ、ぞつとするねえ」と住職は答えた、「そんなふうに寢床のまわりへ、ぐるつと砂の線を引くなんていうのは、聞いただけでぞつとするねえ、しかしまあ、いいじゃないか」

五郎さんはいくらかむつとして、なにがいいのかと反問した。すると住職は、指を折って日を数え、あと二十日ばかりできみのお母さんの喪はあける、二十日ばかり待つだけだから「まあいいじゃないか」と答えた。

「ああそうですか」五郎さんは納得した、「すると喪は七十五日なんですネ」

「いろいろあるがね、亡くなった人の魂は七十五日その家の軒先をはなれない、ということがあるから、まず一般の例では七十五

日だろうね」

五郎さんは礼を云つて家へ歸つた。

正確に数えてみると、喪のあけるまで十九日あつた。そのくらい待てないわけではない、五郎さんは氣をまぎらわせるために、精を出して働いた。ゆい子は家事に慣れないようすで、めしの炊きかたもうまくないし、拭き掃除や洗濯なども、時間ばかりかかつてとんと片づかなかつた。五郎さんの妹は十二歳になるので、もう男よりもそんなことに眼がつくらしく、父や兄に向つて、しきりにあによめの非難をした。

「うちのことができないんならお店へ出ればいいじゃないの」と妹は云つた、「どうしてお店へ出さないの、兄ちゃん」

「うるさいぞ、よけえなことを云うな」と五郎さんは叱った、

「嫁に来たばかりで、すぐにそうなにもかもうまくやれつか、おまえだつてよそへ嫁にゆけば当座はへまなことをするんだ、みんなそうやって慣れてゆくんだ、へっこんでろあま」

ゆい子は毎晩、夜具のまわりに砂の垣を作った。だんだん口数が少なくなり、顔色も冴^さえず、いつもひどく疲れはてたようになり、動作がぐったりと重たげにみえ、また、夜も熟睡ができないようであった。

——自分でも喪が重荷になってきたんだな。

五郎さんはそう推察し、心の中で、カレンダーがあと三枚になったことを慥かめた。そうして、その三枚めも剥がれて、つまり

七十六日めの夜になったとき、ゆい子がやはり夜具のまわりに砂垣を作るのを見て、五郎さんはまんちやく瞞ま着やくされたような気持におそわれた。

——もう昨日で喪はあけたよ。

そう云おうと思った。口まで出かかったのであるが、五郎さんはそれをのみこんでしまった。急に「男の意地」といったような、かたくなな気分がこみあげて来、勝手にしやがれ、と肚はらの中でどなった。そっちがそうするならこつちもこつちだ、知るもんか、と彼は肚の中で続けてどなった。

七十七日めの夜も同じ、次の夜も同じというぐあい、砂垣は夜ごとに作られ、五郎さんはビールを飲み始めた。「みその」か

ら四軒おいて「四丁目」という洋食屋がある、店先に掛ける暖簾のれんには、ただ御洋食としか書いてないが、土地の者は「四丁目」と呼んでい、蒸気河岸の「根戸川亭」とは格の違う、本式の洋食を食わせるといわれていた。主人はいかにもコツクラしく、白い上つ張りに前掛、頭にも白い茸きのこ形がたのコツク帽をかぶっているし、二人の若い女給もきちんとエプロンをはおっているというふうで、客が酔って騒いだりすると、主人のコツクが出て来てつまみだすといわれ、そのためかどうか、若い衆といわれる人たちは殆んどよりつかなかつた。五郎さんはその「四丁目」へ飲みにゆき、それから毎晩、店を閉めるとすぐ飲みに行った。

こういう状態が長く続くものではない。喪があけてから六十幾

日めかに、ゆい子は篠咲の実家へ帰った。ちよつといつて来ると云つてでかけたが、そのまま戻らず、三日ほどまを置いて仲人が来た。家風に合わないから離婚したいというので、五郎さんも五郎さんの父親もあつけにとられた。誰がそう云うのかと訊いたら、嫁のゆい子がそう云つてきかないのだ、と仲人が答えた。

「そんなあべこべな話は請合えねえだな」と五郎さんの父親は云つた、「家風に合わないとはこつちの云うことだが、嫁のほうから家風に合わないなんぞと云われては筋が立たねえべ、そんな話はまっぴらごめん蒙^{こうむ}るだよ」

仲人は尤^{もつと}もだと合点して帰り、それから数回、両家のあいだを往復したのち、五郎さんのほうで「家風に合わないから離縁した」

という名目を立て、正式に離婚がきまると、ゆい子の荷物もきれいに篠咲へ戻された。

町の人たち、ことに五郎さんの友人たちは、この離婚に不審を
持った。友人たちはこの結婚に嫉妬しつとと羨望せんぼうを感じ、五郎さんと
のつきあいも疎遠になっていた。云うまでもなく、花嫁が縹緞よ
しで、東京の女学校出身者であることが、かれらの庶民的な生活
感情を刺戟しげきしたのであって、それが半年と経たないうちに離婚し
たとなると、かつての羨望や嫉妬が、こんどは激しい疑惑と詮せんさ
索欲くよくとに変わった。

「いったいどうしたっていうだ」と友人たちは五郎さんに訊いた、
「女学校を出たし、あんなきれいな嫁さんだったによ、なにがあ

「ただかい」

五郎さんは答えに困った、「これってことはなかったただ、あの人もまたこれから嫁にゆくだろうしな、本当にこれっていうほどのことはなかっただよ」

友人たちは代る代る訊いたし、いろいろと近所の評をうわさをさぐってみたが、それほど骨を折る暇もなく、第一級の情報をつかむことができた。それは、篠咲へ貝を売りにゆく女が聞いて来たもので——ゆい子は五郎さんが男でなかったから帰った、ということであつた。百幾十日もいっしょにいて、夫婦らしいことが一度もなかった。男として役に立たないから離縁して帰つたと、ゆい子自身身が語つたというのである。

この種のゴシップはどこ土地でも広まりやすいものだが、こ
とに浦粕ではもつとも歓迎される特報で、たちまち少年少女のあ
いだにまで伝わってしまった。このこまっちやくれた少年少女た
ちは、五郎さんの店の前を通るとき、声をそろえて喚いた。

「みそのでは幟のぼりもおつ立たない」

この町筋の商店は、店の脇ひよにみな幟を立てているが、「みその」
は店名を染めたがたん（軒ひよへ陽除けひよのようにおろす幕で、夕方に
なると巻きあげ、朝になると紐ひもを解いておろすのだが、そのとき
がたんと音がするので、子供たちはそう呼んでいた）があるだけ
で幟は立てなかった。かれらはそれにひっかけて五郎さんをから
かい、わっと囃したてるのであった。

五郎さんはなかなか気がつかなかった。父親のほうが先にその噂うわさを聞き、怒って五郎さんを問い詰めた。五郎さんはあまりのことに口がきけなかった。こんなひどいペてんがあるだろうか、彼は怒りのために涙をこぼし、恥ずかしさのために吃どもりながら「砂のバリケード」のことを父に話した。

「おめえにも肝煎るだな」と温厚な父親は云った、「そんな砂ぐれえ、一丈も積んだわけじゃあるめえし、なぜ蹴けつぱらってへえつていかなかっただ」

「お父つあんは見ないからわからないが」と五郎さんは答えた、「寢床のまわりへぐるつと、砂を撒くところを見てみな、呪禁でもされてるみたいでそりやあ凄すこいもんだから」

父親は想像してみたが、少しも凄いような感じはしなかった。

「砂ぐれえがなんだ、砂が恐ろしくって海へいけつか」と父親は云った、「喪があけても砂を撒いたのは、おめえが蹴つぱらってへえって来るのを待っていたということだ、そのくれえの察しはつくべえじゃねえかええ」

五郎さんは黙った。

事情を聞いた父親は、すぐに嫁を捜し始めた。早くあとを貰つて、篠咲をみかえしてやらなければ、五郎さんばかりでなく「みその」の看板にもかかわる、と思つたからだ。

だが特報は第一級であり、根深く、広範囲に拡まっていた。

「幟もおつ立たない」ような息子に、嫁を遣やらうという親はなか

った。このあいだに、五郎さんは五郎さんで友人たちとやりあい、ごろさんの話が事実なら、男として役立つかどうかためしてみよう、ということになり、かれらは五郎さんを伴れだして、東京のさる華やかな一画へ押しあがった。もちろん勘定はごろさん持ちで、事の終ったあと、友人たちはその相手の華やかな女性に、首尾のいかんを問ただい糺した。

浦粕へ帰ってから、友人たちは却って否定的な気分になった。

「二時間でよ、おめえ」と一人が云った、「それも初めてだつていうだに、三度も幟がおつ立つたなんて考かげえられつか」

「買収しただな」と他の一人が云った、「女にかなぐつわ金をか嚙かましただ」

筆者である私が、この会話を現実に聞いたのである。場所は蒸気河岸の浦粕亭で、私は三十六号船の留さんとビールを飲んでい、その若者たち三人は隣りのテーブルで、しょうちゆう焼酎すずを啜りながら話していたのだ。

こんどはこの噂が弘まるな。私はそう思つて、五郎さんのために心が痛んだ。

浦粕第一の旦那衆である高品さんから、私はそれまでの事情を聞いていた。というのが、ゆい子のあとを早く貰うために、五郎さんの父親が高品さんの本家を訪ねて、詳しい仔細を語ったからである。——予想どおり、「買収した」という評判はすぐさま町じゆうに伝わり、父親はますます嫁捜しに熱中した。こういう重

複した誹謗ひぼうに取り巻かれて、五郎さんがどんな日々を送ったかということはわからない。けれどもこの世では、真偽の計量が正しく行われることもある、という稀な例をわれわれは見る事ができた。

救いの主は五郎さんの姉であつた。父親から手紙を受取つた姉が、一人の娘を伴れて北海道からはるばるやつて来たのである。娘は小柄な軀からだではあるが、健康そうで、縹緞もゆい子より一段とたちまさつていた。実科女学校中退、年もゆい子より二つ若かつた。

五郎さんは彼女と結婚した。式も披露宴もまえに劣らず盛大にやった。こんどは消防組長のわに久も招待され、彼は酒宴なかば

に酔っぱらって、先般の失態を詫^わびたという。五郎さんもこんどは用心ぶかく行動した。式の行われた二日後に、友人たちを自宅に招き、新妻の手料理でかれらをもてなしたが、それだけではなく、一週間ほどのちには、その中の三人を「四丁目」へさそつてビールを奢^{おご}り、テキとかチキン・サラダとか奢り、しきりにビールをすすめてから、声をひそめてかれらに囁^{ささや}いた。

「おら初めて見ただよ」と五郎さんは意味ありげな一種の眼くばせを三人にした、「——まるでいま笑^えんだ柘榴みてえだっただ」三人はちよつと考えてから、急に奇声をあげて笑いだし、安なあこという一人は、テーブルを力まかせに叩いて奇声をあげた。

五郎さんが結婚してまもなく、篠咲でもゆい子が東京へ嫁にい

った。一年経って、五郎さんの新しい妻が女の児を産んだとき、ゆい子は実家へ帰っていた。それが一時的なものか、またも離婚したのであるかは不明だったし、その後の噂も聞かなかった。

人はなんによつて生くるか

私は石灰工場の川かわしも下で釣りをしていた。

一つ のちよつとかみで、うしろには百万坪の荒地がひろがつて

おり、早春のやわらかな風が、その荒地をわたって吹いて来た。

陽はあたたかく、根戸川の水は薄濁りがして、ときどきこまかなさざ波をたたんでいた。

私はひね鯨はぜを一尾あげた。すると一人の男が土堤どての上をやつて来て、私のすぐ脇で釣り始めた。私は場所を変えようと思つた。私の釣りはおよそでたらめなもので、子供の使うような安い駄竿うきに、浮子うき下もよく計らず、もっぱら岸際くの杭いのあいだや、水草の蔭などを覗つて糸をおろす。それで結構その日のおかずぐらいは釣れるのだが、脇にその道のベテランらしい人が来るとたいそう困る。というのは、そういう人は高価な継ぎ竿を幾本も持つているし、魚籠びく、餌箱えぼこ、帽子から服から靴まで、すべてその道の装具をきちんと揃そろえている。にもかかわらず、駄竿で浮子下も計らな

いような私のほうが釣れて、そのベテランふうの人にさっぱり魚がかからないとなると、その人に対してというより、自分自身で一種の良心の咎めを感じるのである。

そういう例は稀ではなかったので、脇に人が来ると場所を変えるのが、私の習慣になっていた。ところがそのときはそうはいかなかった。私が竿をあげようとするまえに、脇で釣りだした人が私に呼びかけた。

「人はなんによつて生くるか」

私はそちらへ振り向いた。

「人は」とその男はまた云つた、「なんによつて生くるか」

その男は五十年配で、綿入の布子ぬのこに綿入の半纏はんでんを重ね、垢あかじ

みた毛糸の衿えりまき巻まきを頭から頸くびへぐるぐる巻きつけていた。顔はよくわからないが、固太りの頬に胡麻塩ごましおの髭ひげが伸び、厚い大きな唇や、ぎよろつとした眼つきに、どこことなく土建会社の現場監督といったような、威厳が感じられた。

「なんですか」と私は反問した。

私はなにか釣りに関することで話しかけられたのだと思った。

場合が場合だから、そんな深遠な人生問題、むしろ哲学的な命題について一撈いっさつをくらおうとは、夢にも思わなかったのである。

その男は現場監督が怠けている労働者を見るような眼で私のことを見、そうして、こんどは一と言ずつ句切つて、同じことをはつきりと云った。——このあとを書くとき人は信じなくなるだろう

が、事実を云うと、男は右手の拳こぶしを私のほうへぐいと突き出したのである。私は危険を感じて身を反らし、男は突き出した拳を上下に揺すった。これを見ろ、といったような手つきなので、その拳を注意して見ると、握った中指と人さし指とのあいだから、やゆび指の頭のぞが覗のぞいているのであった。——これが真相なのだが、よしそうでなくとも、私がどんなにへどもどし、かつぶきみに思つたかは想像がつくだろう。これは冗談なのか、それともこの男の頭がおかしいのか、私には見当もつかなかった。

どうしようがあるか、男は拳を突き出したまま、ぎよろつとした眼だまで私を睨にらんでいる。ふざけているのでないことは慥しぜからしい、どうしようがありませんか。私はしごくあまいに微笑して

から「やあ」というような不得要領な声をもらし、それから大きくうなず頷いてみせた。

それで納得したのか、または話にならないと思ったのか、男は無表情のまま拳をおろし、黙って自分の釣り作業に戻った。

或る夜、私は蒸気河岸の高品さんの炉端こあぎで、その男のことを話した。高品さんの本家は十台島という小字こあぎにある深い樹立に囲ま

れた、一町四方もあるような邸宅で、なんでも先祖は浦粕町の開拓者だそうであるが、——高品家の長男であり、私の知人である

榎まぎぞう三氏は、夫人のきんさんと二人で蒸気河岸に住み、東湾汽船の発着所を経営していた。これは船せんたい躰を白く塗ったほうの通船

で、高品家は主要な出資者であった。——榎三氏はW大学出身で、

東京日本橋の中・商という商業新聞社へ通勤してい、発着所の方はきん夫人と、女中のおりきさんでやっているのだが、夜になると通船の船員や、若い漁師たちがよく集まって来た。

その家は小さかったが、広い切炉にはいつも火があり、きん夫人は浅草生れの浅草育ちで、気性はさっぱりしているし、人に差別をつけず、世話好きで物惜しみをしない。桎三氏もおっとりとした大^{たいじん}人の風格があり、子供がないためだろうか、人の集まるのをよろこび、しばしば酒を出してもてなした。私が桎三氏の好意で、中・商紙に童話を書き、稿料を貰っていたことはまえに記したとおりである。

その夜、私の話を聞くと、炉端にいた船員たちの中で、秋屋工

ンジが顔をあげた。

「兵曹長だな」と秋屋エンジニアは云った、「病院からまた帰つただな」

私が訊くと榎三氏が答えた。

「氣違いではないらしいが、頭がおかしいんですよ、細君と四人の子供に死なれましてね、それから頭がおかしくなつたんですよ、町役場の兵事係へ日参して、恩給と年金をくれと云いだしたんですよ」

私はまた質問した。

「海軍なんかいきやあしねえだ」と大伍船長が云った、「陸軍で輸卒をしたつけだが、あとは土方をやったりかんづめ詰工場に雇われ

たり、海苔のりのひび運びをしたりしていただ、それが何年めえになるのかな」

「七年めえだ」と秋屋エンジンが云った、「幸山船長が船を貰つてやめた年だったべえ、暴風雨で高たかしお汐が来て、大蝶丸が大三角へ乗りあげたあとのことさ」

そのとき「兵曹長」は出稼でかせぎにいつていた。本当の名はささやん、左三郎とでも書くのだろうか、出稼ぎがどこへなにしにいったものか、いまではもう思いだすことができない。その留守ちゆうに、妻と四人の子が急死した。たしか赤痢だと聞いたように覚えてるが、ささやんには連絡がつかず、出稼ぎから帰るのを待つよりしかたがなかった。

「彼はたいへんな子煩悩こぼんのうでしてね」と高品さんが云った、「帰つて来てそれを聞くと、いっぺんに気がぬけたようになって、半月ばかりぼんやりしていました」

それから町役場へでかけていって、兵事係にこう云った。

——自分は海軍兵曹長で、年金と恩給が来ることになっているが、まだその通達は来ておらんか。

兵事係は冗談を云っているのだと思つて、まだ来ていないと答えた。するとささきさんは小首をかしげ、それではまた来よう、と云つて役場を出ていった。彼には根小屋という小字に叔母がいて、彼の面倒をみてやっているのだが、毎月五日になると、年金と恩給を貰つて来ると叔母に云つて、町役場へでかけるのであつた。

叔母という人が町役場を訪ねて、こういうわけだからと話し、兵事係も心得て、ささやんがあらわれると、まだ通達は来ないと答えることにした。ささやんはそのたびに、いかにも納得しかねるという顔つきで、仔細らしく小首をかしげたりするが、べつに文句をつけるとか乱暴するようなことはなく、ではまた来よう、と云つて帰るのが常であつた。ただ一度だけ、彼は海軍軍部の怠慢を非難し、妻子を五人も戦死させておいて、年金や恩給の支払いをきちんとしないのは褒めたことではない、こんなありさまでは「また三・一五事件が起こるぞ」と警告したそうであつた。

「人はなんによつて生くるか、つて云い始めたのはそれからあとのことですよ」と高品さんは云つた、「ぼくもいちどやられまし

た、道を歩いていたらいきなり立塞たちふさがつて、あの拳骨を突き出してみせながら云うんです、頭がおかしいとは知ってましたがね、驚きましたよ」

私は話を聞きながらも、またそのあと、自分の家へ帰ってから、ささやんの悲しみの深さに心が痛んだ。

「人はなんによつて生きるか」

私は眩つぶやいてみた。それはまなんで覚えた言葉ではない、文法もでたらめである。けれどもそれは、妻と四人の子を一度に失った男の言葉なのだ。

ささやんは三度病院へ入れられた。昂奮して人に乱暴したためであるが、病院にいと温和しいし、常人と少しも変らないため、

二三カ月いると退院させられるのだという。町にいても、からか
つたり悪口を云つたりしない限り、乱暴はしないということであ
った。

彼がどうして急に「兵曹長だ」などと思ひこんだか、誰にもわ
からない。ほかにもう一人、「赤馬」と呼ばれる頭のおかしい男
がいて、これは本当に退役した兵曹長であるが、その男はささや
んがおかしくなったあとでこの浦粕へ帰つて来たのであるし、そ
れ以前にも二人は知合いではなかつた。だが、そんな因果関係の
有無にかかわりなく、頭のおかしい兵曹長が二人もいるというこ
とは、町の人たちにとってひどく暗示的にみえたようだ。

私はささやんとは一度しか会わなかつた。彼の悲しみの深さを

思うと、いまでも私は心に痛みを感じるが、あの妙な握りかたの拳を出してみせた意味は、どうしても理解がつかないのである。

繁あね

私は青べかを二つ　　漕こぎ入れ、細い水路を二百メートルほど
いった、川柳の茂みのところに繋つないで、釣竿をおろした。三月は
じめの曇った日で、風はなく、浅い水路の水は淀よどんだように澄ん
でおり、実際には流れているのだが、殆んど静止したままのよう

に見えた。

私は竿をおろしてから、青べかの中にゆつくり坐り直し、タバコを出して火をつけた。

そこは百万坪のほぼ中央に当たっていた。北のほうに遠く、町の家並みが平らに密集してい、貝の罐詰工場や石灰工場から吐き出される煙が、雲に掩おおわれた空へと、ゆるやかに、まっすぐ立ち昇っていた、（私のノートには「煙は上へゆくほど薄くなる棒のよう」）というつまらない形容が使つてある）町の東北のはずれから東にかけて、荒地の中に一筋の道があり、ひねくれた枝ぶりの、小さな松並木が沖の弁べんてんやしろ天社まで続いている。この土地では松が育たないそうで、それは「堀の三本松が一本だけにされた報い」

だともいわれているが、慥かに、芳爺さんの家に近い、堀端にある老松のほかには松らしい松は一本もみあたらなかった。——そのひねこびた松並木を挟んで、枯れた芦の茂みがところどころに見える、それらはみな沼か湿地で、川獺や鼬が棲んでいるといわれ、私も川獺は幾たびか見かけたし、それを捕獲して毛皮屋へ売って儲けようと計ったこともあるが、それはここでは省略する。

——私はタバコをふかしながら、その芦の茂みから鶺鴒の飛び立つのを認めた。鶺鴒という鳥は、私の家でもよく見ることができた。机に向っていると、窓のすぐ向うを飛んでゆくのである、黒地に星点のある羽根や、赤い足などですぐ、それとわかる。野鳥の中でこれほど美味な肉はない、ということを知っていたので、川獺

の場合とは別個の欲望から、その鳥もなんとか捕獲しようところみだが、ついに一度も成功しなかつたので、一種の怨みうらみからだろうか、かなり遠くからでも、鷗だけはみわけがつくようになつた。

「蒸気がし河岸の先生よ」と云う声がした、「釣れつかえ」

私はおどろいて振り返つた。見わたす限り人影もなかつたのに、突然そう呼びかけられたので、振り返る拍子にタバコを落し、それがあぐらをかいている膝ひざのあいだに落ちたので、取つて捨てるまでに、腿ももと脛すねを慌あわてて叩いたりこすつたりしなければならなかつた。——そこにいるのは繁あねであつた。年は十二か三、たぶん十三歳だつたと思うが、私が振り返ると、岸の上からにつと笑

いかけて、もういちど同じ質問をした。

私はそれには答えないで、こつちから問いかけた。

「ええびだよ」と繁あねは答えた、「ただええびに来ただよ」

私はまた訊いた。

「おんだらいつも一人だつてこと知つてんべがね」

「妹はどうしたんだ」

「あまか」と少女は鼻に皺しわをよせた、「墓ん場に寝かしてあんだよ」

「鼬にかじられるぞ」

「つまんねえ」

お繁は肩をすくめ、それからそこへしやがんだ。すると垢じみた継ぎだらけの裾が割れて、白い内股うちまたが臀しりのほうまであらわに

見え、私はうろたえて眼をそらした。私は信じがたいほど美しいものを見たのだ。

繁あねは町じゆうでもっとも汚ない少女だといわれていた。乞食あま。親なしで家なし。墓場に供えられる飯や団子を食う餓鬼、それがお繁であった。軀はできものだらけで、胸のところは腫はれも物の膿うみのため、着物がはりついて取れなくなっている。いつもどこかの海苔漉すき小屋か、納屋か、ひび置き場に寝る。風呂へはいることはないし、顔も洗わない。蝨しらみだらけ蚤のみだらけである。もちろん親類もなく遊ぶ者もない、というのがお繁であった。それは決して誇張ではなかった。私もかなりまえからお繁を知っていたし、道で会えばたいい呼びかけたものである。彼女は

いつも垢だらけで、近くへ寄るとひどく臭かった。それにもかかわらず、彼女の軀の一部は信じられないほど美しかったのだ。両の内股は少女期をぬけようとするふくらみを見せていた。両股のなめらかな肌が合つて、臀部でんぶへと続く小さな谷間は、極めて新鮮に色づいていたし、膝がしらから踵くびすへとながれる脛の内側も、すんなりと白くまるみをもっていた。それは、成長しつつあるものだけがもつ神聖な美しさ、と云うべきもので、たとえどのような感じは与えなかつたであらう。ほんの一瞬間ではあつたが、私はその美しさに深く感動した。

そのまえの年、お繁は妹と二人で両親に捨てられた。妹は生れ

てから百日くらいしか経っていなかった。

お繁の父は源太といい、釣舟の船頭であつた。源太は鱸釣りの名人で、どんな漁師も鱸釣りでは彼にかなわなかつた。或る年のこと某県の知事が来て、源太の舟で鱸釣りをした。知事はもと某省の大臣であり、魚釣りと俳句がうまいので知られていたが、一度で源太が好きになり、機械船——発動機を備えた釣舟——を買つて与えた。源太がいかに鱸釣りの名人だつたかということ、適切にあらわす言葉があつた。

「さあて」と彼は釣りにでかけるときに云う、「鱸を拾いに行くべえか」

機械船を持てば自分でしようばいができる。それまで彼は「松

島」という船宿に属していたが、初めて独立し、客もかなり付いた。裏長屋に住んでいるので、まだ船宿の経営はできなかつたが、どうやら二年も経てばその望みが実現しそうに思われた。そのとき、災難が起こった。——或る朝、彼は五番の湊木みおぎの沖で釣っていた。霧の深い日で、十メートル先も見えないくらいだった。その中を一艘そうの大型機械船がやって来た。それは濃い霧の中を、まっすぐにこちらへ近づいて来る、エキゾスの音が明らかにそれを示していた。

「おい」と源太は叫んだ、「ここに舟があるぞ、たのむよう」エキゾスの音で大蝶丸だとわかった。大蝶丸なら安心であつた。この辺が釣りの穴場で、いつも釣舟がいるということを、大蝶丸

の者なら知っている筈だったから。源太はじつと船の交かわるのを待った。けれども先方はまっすぐに近よつて来、突然、霧を押しわけると、源太の眼の前にあらわれ、その大きな舳先へさきを源太の機械船の横腹へ突っかけた。

「おい」と源太が叫んだ、「待ってくれ」

だが彼の機械船は二つに割れ、彼は海の上へはねとばされた。そして、源太がようやく浮きあがってみると、割れた船の舳先とのほうだけ、ゆらゆらと波の上にゆれていた。発動機のある艦とのほうは沈んでしまったのだろう、大蝶丸も霧の中に隠れ、エキゾスの音もはるかに遠ざかっていた。

源太は船宿「千本」の忠なあこに見えられ、その舟に助けられ

て帰った。

「あの穴場は深えふけからな」と忠なあこは話を聞いて云った、「とても機械を揚げるこたあ無理だな」

そして大蝶丸のことには触れなかつた。大蝶丸は町でいちばん大きな罐詰工場の持ち船であり、「大蝶」の旦那は町で指折りの顔役であつた。

「よし」と源太は自分に誓つた、「うんとふんだくつてくれるぞ」彼はすぐ掛合ふはらいにいった。しかし「大蝶」では相手にしなかつた。大蝶の扶原支配人は穏やかに首を振つて、そんなことはないと云つた。

「大蝶丸は罐詰を東京まで積んでいって、三時間ばかりめえ帰けえつ

て来ただ」と扶原支配人はゆつくりと云った、「あの船長は腕っこきで、そんな事故を起こしたことは一度もねえし、起こしたとすればちゃんと報告するだよ、海事裁判法（？）でそう規定されてるだからな、いしの云うようなことはありっこねえよ」

いしとは汝なんじとかおまえとかいうほどの意味であるが、源太は怒って巡査駐在所へゆき、次に市の本署から、県の警察本部まで訴えにいった。しかしどこでも彼のために動いてはくれなかつた。

「証拠があるのか」とかれらは云った、「大蝶丸だというのはつきりした証拠があるなら取り調べてやるが、証拠のないものはだめだ」

源太は船を調べればわかると云った。大蝶丸の舳先には衝突し

たときの傷がある筈だからと彼は主張した。

「機械船の舳先なんてものは」とかれらは一様に云うのであつた、
「どこかへぶつつけてたいい傷のあるものだ、それでもおまえ
の船へぶつつけたという証拠の傷があるなら取り調べてやろう」

こういう経過を辿つて、本署から浦粕町へ連絡があり、駐在所
の巡査がいちおう大蝶丸を調べた。その船はもう古いので、舳先
の水切には無数の傷があつたけれども、これが源太の船と衝突し
た跡だ、などと立証できる箇所はなかつた。船長もいちおう訊
問されたが、あたまから否定した。

「おらあ五番の湊木なんぞに近よつたこたあねえ」と船長は答え
た、「あのときは東京へ罐詰を送り出した帰りで、まっすぐ根戸

川の川口へはいっただ、船の者に訊けばわかるだよ」

それからまたこうも云ったそうである、「源太が諄くどくそんなことを云うんなら、出るところへ出てしろくろをつけべえ」

源太は頭を垂れた。

彼は出るところへ出たのだ。県の警察本部までゆき、金も地位もない者がどんな扱いを受けるかということ、自分ではつきりと経験した。そうして「大蝶」という顔役を背景にした船長が、出るところへ出るとすれば、その結果もまたわかりきったものであった。

源太の酒浸りが始まった。彼は堀東の助二郎の漁船へ乗ることになったが、漁から戻るとその足で酒屋へはいった。堀の山城屋

という店で、塩か福神漬を摘つまみながら濁どぶろく酒とか焼しょうちゆう酎などを飲み、ぐでぐでに酔ってから家へ帰るのであった。——裏長屋の柱も傾きかかった家には、妻と娘が二人いた。上がお繁であり、下はまだ生れたばかりであった。帰って来た源太はむやみに喚きちらし、少しでもさからうと猛たけりたつて、妻と娘を死ぬようなめにあわせた。

「うぬらもかたきだ」と彼はどなる、「寄つてたかつておらを踏みつけにしやあがる、さあ、くやしかったらおんだらの機械船を返してみろ」

「なんでも持つてけ」と彼はまたどなる、「こんな貧乏人の物が欲しけりやあなんでも呉れてやる、さあ、手でも足でも頭でも持

つてけつかれ、なんでも呉れてやるぞ」

家へ帰れないときは、というのはあまり泥酔したということであるが、源太は消防ポンプ小屋へもぐり込んで寝た。一日じゆう、主人の帰りを待っていた家族は、夜が更けてからこつそり家を出てゆく、そうしてごつたくやと呼ばれる小料理屋や、「四丁目」または蒸気河岸の「根戸川亭」という洋食店の裏口をまわって残り物を貰い、僅かにその日を凌しのいでいた。

こうしているうちに、源太の妻が若い男と出奔した。相手は罐詰工場の若い雑役夫で、源太の妻より六つも年下だったというが、これは町の人たちのいい話題になった。源太の妻は年でいうと三十ちよつと出たくらいだから、二十五六の男とできたというだけ

なら、浦粕町としては決して稀有な出来事ではないが、源太の妻というのは枯木のように瘦せてい、女には珍しく頭が禿げて、口は消防組長のわに久のように大きく、眼のふちは赤く爛れて、歯も半分は欠けたり抜けたりしていた。

——あんなおつかあのだこがよかつたのか。

女にすたりはないと云うが、それにしてもよくあんな女と駆落をする気になったものだ、よつぽどの世間知らずだったんだな。こう云つて、町の人たちは飽きることなく笑いあつた。

源太は気がぬけたようになった。漁にも出ず、酒を飲むでもなかった。部屋の隅にころがされて、泣き叫ぶ赤児の声も耳にはいらないのか、一日じゅう寝そべったまま、天床か壁をぼんやりと

眺めていた。

或る日、源太は山城屋へ飲みに来た。彼は助二郎の帳面のつけで焼酎を呷り、いくらでも呷った。「逃げてみる」と酔った源太は蒼い顔で笑いながら云った、「逃げられるものなら逃げてみるへ、いまに二人とも捉めえて、二人とも火祭りにしてくれるぞ」

そして、源太も出奔した。

お繁と乳呑み児の妹とは、こうして親たちに捨てられたのであった。

町では姉妹を引取ろうと云う者はなかった。お繁はその生立ちのため、人に対して好戦的であり、親から受けた病気で腫物が絶えず、それが汗と垢の匂いと入り混って、側へも寄れないほど臭

かった。

町役場で二人の面倒をみることになったが、現実的にはなにもしなかった、あるいはできなかつた、と云うのが正しいようである。お繁は役場へ近よらず、ごつたくやとか洋食屋の裏をまわつたり、墓場の供え物をあさつたりして喰^たべ、夜になると、海苔漉き小屋であれ、消防のポンプ小屋であれ、どこかの納屋であれ、好きな場所で寝た。乳呑み児の妹をどうやしなつたかは誰も知らないが、赤児は丈夫そうに育っていた。——お繁はどこにいるかわからない。まだ暗いうち、ときには午前三時ころ、流れ海苔を拾いに南の浜へいそいでいる漁師が、百万坪の荒地のまん中で、妹を背負つたお繁に会う。

「ええつ」と漁師はとびあがる、「たまげたええ、繁あねじゃねえか、いまじぶんこんなところだなにしてるだ」

漁師の持っている提ちようちん灯の光の中で、お繁はじろつと白い眼を向ける。

「いけ、ま」と少女は云う、「おんだらのことより、早くいって海苔を拾うがいいだよ」

或る日、お繁は消防のポンプ小屋の脇で、垢だらけの妹に小用をさせている。また町の家並みの裏をひっそりと歩いているし、或る夜は若い漁師が、ひび置き場の蔭でお繁を見つけ、慌てて、伴れの娘とほかの場所を捜しにゆく。繁あねはどこにもいないし、同時に、どこにでもいるのであった。

「わあい」と子供たちが囃はやしたてる、「お繁がまた墓はな場の物を喰べてるだ、げーんが、げーんが」

げんがとは東京付近でいうえんが、またはえんがちよ、つまりけがれたというほどの意味であるが、するとお繁は妹を墓場に置いたまま、子供たちのほうへとびだして来る。

「ぬかすな、吉」とお繁はやり返す、「墓場の物を食うぐれえがなんだ、おめえのおつかあなんかもつとげんがだぞ、中堀の巳之なあことくつついて、夜中になると海苔漉き小屋へいつて寝るだ、おんだら見てちゃんど知ってるだ、嘘だと思つたら、田島の漉き小屋へ夜中にいつてみる、二人でいつしよに寝て、尻尾しっぽを踏んづけられた犬みてえな声だしてるだから、げんがたおめえらのこと

を云うだ」

そして、さも軽侮に耐えない、といったふうには唾を吐くのだ。もしそれ以上なにかからかえば、お繁は手と爪と歯とで向ってゆき、じつに思いきった行動で相手をやっつける。頬ぺたや腕などに、お繁の歯形や爪跡のある子供は、二人や三人ではないようであつた。

これが繁あねなのだ。しかもその軀はいま、内部から新しい彼女を創り出しつつある。私の眼に映った美しい部分には、成長するいのちというものが脈搏みやくうっているように感じられた。——そうだ、まだ子供っぽい腰つきにもどこやらまるみがあらわれ、平たい胸にもいくらかふくらみがうかがわれる。野性まるだしの好

戦的な眼はうるみを帯び、薄い唇は活き活きと赤く湿りをもってきた。——或るときは妹を背負っていさましく歩きまわっているが、或るときはぐったりと草地に坐り、脇で泣いている妹の声も聞えないように、手足を投げだしたままもの憂げにどこかを見つめている。いま、極めて深いところから、かすかに、いのちの囁きが彼女の眠りを呼びさまそうとしているのだ。

「ああつまんね」と繁あねが云った、「いくら見えてても釣れやしねえに、おらいくべ」

私はまたタバコに火をつけた。

「へたくそだな、先生は」とお繁は立ちあがりながら云った、

「こんなへたくそな釣り、おんだらまだ見たこともねえ」

私は黙って沼のほうを眺めた。お繁の歩き去るのが聞え、まもなく、彼女のうたうわらべ唄が聞えてきた。

「——向う山で鳴く鳥は、ちいちい鳥かみい鳥か、源三郎のみやげ、なにようかによう貰って、金ざしかんざし釵かんざしもらって……」

土堤どての春

初はつ午うまの宵の七時ころ、「蒸気河岸の先生」は窓際の机に向つて原稿を書いていた。田圃たんぼを隔てた町のほうから、太鼓や笛の音

が、高くなり低くなり、跡切れたかと思ふと急に拍子を早めたりして、聞えて来た。先生はにやにやしなから独り言を呟く、書いてある史劇の中のせりふが氣にいつたらしい。

安倍晴明（胸を反らせて）「私は博士安倍晴明だ」

弘高（片手をあげて）「神慮汝の上に安かれ」（大股に去る）

声に出して読んでみてから、火鉢にかけてある鍋なべのほうを見た。

鍋の中では鮎ふなの味噌煮がことこと音を立ててい、味噌と川魚との入り混つたうまそうな匂いが、蓋の隙間から漂いながれていた。

蒸気河岸のほうから、土堤の上をこちらへ近づいて来る、賑にぎやかな人声が聞えた。先生はまたペンを取った。人声はもつと近づいて来、それが子供たちだとわかったとき、かれらはうたいだし

た。

「おーかんけ（大勸化）おーかんけ おいなりさんのおーかんけ」
かれらは先生の家を見おろすところまで来て、土堤の上からう
たい続ける。

「おぞーに（雑煮）とおーあげ おあげのだからおっこつて
あーかい***ーすりむいた こーやくだい（膏藥代）にくれせ
ーま くれせーま」

先生は机の前で軀を固くしている。土堤の上では子供たちの相
談する声が聞える。

「いんだよいんだよ」と云う声がする、「見せえま、電気がつい
てんべえがね」

かれらはまたなにか相談をし、声をそろえて、まえよりも勇ましく誘惑的にうたいます。もちろん文句は同じもので、先生は殆んど息をころしている。するとかれらの中から、船宿「千本」の長の呼びかける声がある。

「先生、百でも二百でもいいだよ」

先生は可笑しくなつて、というのは、そのとき先生のふところは極めてさみしく、そういう喜捨に応ずることができなかつたからで、つまりそれが可笑しかったのであるが、先生は辛抱づよく沈黙を守っていた。すると「千本」の長が譲歩してどなつた、

「先生、錢でなくつてもいいだよ、蜜柑みかんでも餅でもいいだよ」

そしてしんとなつた。電燈の光で明るい窓をみつめながら、じ

つと反応を待っている子供たちの、一人ひとりの顔が、先生には眼に見えるように思えた。

「いくべいくべ」と他の少年が云った、「先生はきつとまた根戸川亭で飲んでるだ」

「押すな」と長の声がした、「押すなつてえにえーばちばらすぞ」
かれらはがやがや騒ぎながら、蒸気河岸のほうへ戻つていった。
先生は難をのがれてほつとし、机にりようひじ両肱もたで凭れ、手で額を支えながら眼をつむつた。

「おーかんけ おーかんけ」川下のほうへ遠のいていく唄声が聞えて来た、「おいなりさんのおーかんけ おぞーにとおーあげ
おあげのだからおっこつて……」

土堤の夏

私は大きな写生帳と鉛筆箱を抱え、きょうぎ 経木の海岸帽子をかぶつて、土堤の上を家のほうへと歩いていった。沖の百万坪ヘスケツチにいった帰りりつぱしよで、洗せんい晒ざらしの単衣ひとえは汗のため肌へねばりつき、尻し端折りつぱしよりをしなければやすらかなには歩けなかつた。あまり優雅なたと譬えではないが、女性の臀部と猫の鼻も土用の三日だけはあたたかい（失礼）、という通言があるそうで、その日はおそらくその

「三日」のうちの一日だったろうと思う。私はうだりきつて疲れ
て空腹で、そうして傾いた西陽に灼やかれながら歩いてた。

土堤の右側の下には、例の「ごったくや」といわれる小料理屋
が並んでいて、そこを出外れると空地になり、いぶせき独立家屋
であるわが家が見える。そこまで来たとき、私に呼びかける女の
声が聞えた。

「蒸気河岸の先生よう」とその声は云った、「なにようそんなに
すましてるだえ」

私は声のほうへ振り向いた。

声は土堤の左側の下、つまり根戸川のほうから聞えて来たもの
で、そちらを見ると、川の中に三人の女がいて私に笑いかけた。

それはごったくやの女たちで、三人とも全然まるはだかであつた。私の眼の焦点は自動的に拡大し、対象物とのあいだに一種の保護膜を張つたのであるが、それでもなお彼女たちの逞たくましい肉躰、特に第二次性徴と呼ばれる部分のよく発達した、魅惑的な、というよりもむしろ澆とくしん神的なまるみやふくらみが、私の視覚をとらえて放さなかつた。

——ここで眼はそらしてはいけない。

私はそのことをよく知っていた。眼をそらすことは、みつめること以上にすけべえなのだ。かつてよそから来た客が通りかかつて同じようなけしきを見、仰天して脇へ向いたとき、彼女たちが歓声をあげて嘲ちやうろう弄するのを、見たことがあつた。

彼女たちは不景気が続くと、「湯銭もなくなる」そうので、厳冬でない限りは川へはいつて軀を洗い、また髪までも洗う。土堤の上は人が往来し、川にも通船やべか舟がのぼり下りしている。しかし彼女たちは少しもたじろがないばかりか、逆に軀の屈伸や捻ね転ん動作を誇張し、まばゆいばかりに野性の誘いを放散してみせる。人たちも土地の者である限りは、決して驚いたり顔を赤くしたりするようなことはない。若い漁師や通船の水夫たちは、ごくあたりまえに立たちどま停とまつて、彼女たちと率直に会話をとり交わすのであった。

—— おうれ、てんで縹きりよう緞じょうあげたじゃねえか、お花。

—— いいくらかげんのことを云つて、むりすんなえ**なあこ。

——嘘じゃあねえまったくに縹緞あげただぞ。

——顔ばつか見るふりいして、ほんとはここが見てえだべ、ここがよ。

そして彼女たちは、腰部前面の或る部分をひたひたと手で叩く、という場面は極めて尋常に見ることができた。これについていつか、三十六号船の船長のブルさんは、殆んど失明しかかっている眼を仔細しさいありげにまたたきながら、次のように穿うがった注を加えたことがあつた。

——あれは湯銭がねえだけじゃあねえ、半分は客を呼ぶためもあるだよ。

そのときブルさんの殆んど見えない眼が、遠くにあるなにかを

さぐるように細められ、肥えて肉のたるんだ皺だらけの顔に、あるいはその顔の一と皮下に、あるかなきかの微笑がゆるぐようにみえた。

川の中から私に呼びかけたのは「若松」という小料理屋の女たちであった。いちばん若いおたつは満州帰りだといい、私が堀でスケッチをしているときに話しかけてから、顔を見れば挨拶をするようになっていた。

「また画え描きか」とおたつが云った、「そんなものどこがいいだえ、そんなことばっかししてえて頭が病めんべえがね」

「どこが痛めつかさ」と脇の女が腹部へ水を掛けながら云った、「そんなすました顔うして、ねえ、先生だってやっぱり男は男で

しよ、たまには遊ばねえとからだがうんじまうだよ」

私には意味がわからなかったが、もううんじまっていると答えた。すると三人はすさまじい嬌きょうせい声をあげ、おたつは側にいた女に抱きついたし、残った一人は私のほうへ水をはねとぼしながら、先生の***とどなった。

「晩にいつてやつからな」私が歩きだすと、うしろでおたつの叫ぶのが聞えた、「戸に鍵かぎをかけねえで待つてなえ」

もちろん誰も来はしなかったが、数日のあいだ私は、自身の軀がうんでいるように感じられて、ときどき快活な気分をさまたげられるのであった。

土堤の秋

十月下旬の昏れがた。土堤の斜面の下に、一人の若者が腰をおろして、泣いていた。

斜面は草が茂っているので、土堤の上を通る人には見えない。かなり強い西風が、その茂ったくさむらを絶えまなしにそよがせ、茶色にほおけた草の穂が、風の渡るたびに、若者の着物をせわしく撫なでた。空には、金色にふちどられた棚雲がひろがり、土堤の上へ片明りの強い光をなげているが、斜面のこちらはもう黄昏たそがれ。

の冷たそうな、青ずんだ灰色のなかに沈んでいた。

若者は立てた膝の上に両手を置き、手先をだらつと垂らしたり、片手で眼をぬぐつたりした。ふと大きく溜息ためいきをつくかと思うと、首の折れるほど頭を垂れ、その頭を左右に振り、そしてまた眼をぬぐつた。

棚雲のふちを染めていた眩まぶしいほどの金色は、華やかな紅炎から牡丹色ぼたんいろに変わり、やがて紫色になると、中天に一つはなれた雲が、残照を一点に集めるかのように、いつとき明るい橙だいだいいろ色に輝いたが、それも見るまに褪あせて、鼠色にかすみながらはがね色に澄みあがつた空へ溶けこんでいった。土堤の上も暗くなり、ときたま往き来する人たちも、影絵のようにぼんやりと黒く、ここ

ろもとなげに見えた。

斜面のこちらは東の空の反映で、却^{かえ}つて明るくなったようだ。しかし、本当はまえより暗さを増しているのだろう、風に揺れ動くくさむらも、すっかり色や陰影を失って、ただ非現実的な青銅色ひといろに塗りつぶされてしまい、そこに若者がいるということも、いまは殆んど判別がつかなくなった。

土堤の冬

外は雨、私は机に向っていた。机の上には書きかけの原稿があり、私は小さな火鉢にかじりついたまま、不自然な姿勢で、原稿の文字をぼんやりと眺めていた。

寒さのきびしい夜で、火鉢を抱えているのに、膝や足の指先は痛いほどごごえ、不自然な姿勢を動かすこともできず、背中では氷の板のように冷たく硬こわばっていた。——私は浦島物語のパロディをこころみていたのだ。共産主義のドグマに挑んだ主題で、最小限度にでも頭脳と胃袋と生殖器の能力が均一でなければ、公平な分配と所得はあり得ない、ということ、五幕の喜劇に組立はあくたものであった。私はその主題の大きさと真理をすどく把握はあくしていることに昂こうふん奮し、精神の力づよい高揚をたのしんでいた。

だがその反面、ふところが極度にさみしいこと、いそいで少女小説か童話を書いて、どこかの編集所に駆け込まなければならぬ、というさし迫った問題で、気分は苦が苦がしくふさがれていた。

——書きかけの原稿は第四幕のクライマックスで、一人の逞しい美青年が台の上に半裸で立ち、下にいる青年や乙女たちに、いさましく叫びかけているところだった。

青年A (胸を叩き両手を高くあげて絶叫する) おれのこの肉
軀を見ろ、おれはきさまたちより美しく健康だ、おれはきさま
またちの三人まえ喰べ、十人まえ働く、この広大な土地の整
理や灌漑かんがい法の計画をたてたのはおれだし、収穫物の管理や
貯蔵を立案したのもおれだ、いったいこの竜宮国を運営し、

繁栄にみちびくのは誰か、AグループにいるかBグループか、
（中略）おれこそはその者だ、たったいまからおれがこの国
の支配者だ（彼はさらに両手を高くあげて叫ぶ）、よく聞く
がいい、おれはいま乙姫がおれの妻だということを宣言する、
反対する者があつたら出て来ておれとたたかえ、乙姫はおれ
のものだ。

老人（隅のほうで低く独白する）私はなにをしたのだ、あれ
だけの情熱と努力をそそいで築きあげたものがこれか、これ
が待ち望んでいたその果実か（彼は泣く）。

青年A おれはこの国の王だ。

私は火鉢に炭を足そうか、それとも寝てしまおうかと迷う。そ

の戯曲の中では、青年Aが「おれが王である」と叫んでいるけれども、彼を創り出したところの私自身はこごえて、空腹で、蒸気河岸まで一杯の酒を飲みによく金もなく、一片の炭もむだには使えないことを思つて、肩をちぢめたまま、茫然と雨の音を聞いていた。

私は時計を持っていなかったが、およそ十一時をまわつたころであろう、蒸気河岸のほうからこつちへ、土堤の上を近づいて来る人ごえを聞いた。

「十台島の連中だな」と私は呟いた、「ごつたくやで遊んだ帰らだろう」

さして強い降りではなかった。^{ひさし}庇と窓の雨戸をひっそりと打つ

くらいで、近づいて来る人の話し声はかなりよく聞え、まもなくそれが十台島の若者たちではなく、よそから来た人びとだということが、会話の調子でわかった。

「——を持って来たか」としやがれた男の声がどなった、「源、おめえ持つてるか」

「下駄がぬげちやった」と幼い女の子が泣き声で叫んだ、「あたい下駄がぬげちやったよ、かあちゃん」

「おぶってやれ」とべつの男の声がした。

はだしの者もいるらしく、ぴしゃぴしゃと雨水を踏む音がした。かれらはひどくいそいでいるようで、ふっと声が跡切れ、すぐにまた女の声が聞えた。

「どっちへゆくによ、親方」

「黙って歩け」としやがれ声の男が云った、「助十郎はこを濡らしちやいねえか、はこは大丈夫か」

問いかけられた相手がなにか答えた。

「寒いよ」と女の子が泣き声で（かれらはこのときちようど私の家の前にさしかかっていた）云った、「かあちゃん寒いよ、耳へ雨がはいるよ」

「井前橋から新川堀へいったらどうかかな」と云う声をした、「とくぎようは危ねえと思うが」

「黙って歩けねえのか」しやがれ声の男がどなった、「みんな持ち物を落すな、早くしねえと、……」

そのあとは聞きとれなかった。

庇と雨戸を打つ雨の音がはつきりし、かれらの話し声は、川上のほうへと遠ざかっていった。どういう人たちだろう、男女と子供で七八人はいたようだ。宿でもとれなかったのだろうか、私は漠然とそんなふうにしたが、それだけのことで、考えはまた元に戻り、少女小説を書くか童話にするか、それとも東京の洒落しゃらく齋翁さいうのところへねだりにゆくかなどと、怠けた思案に耽ふけるのであった。

明くる日、私は午ひるちかくに起き、高品さんを訪ねて童話原稿の前借をした。高品さんはもちろん新聞社へ出勤したあとで、きん夫人がそれだけのものを貸してくれた。

「ゆうべ浦粕座が焼けたのよ」ときん夫人は茶を淹いれながら云つた、「知らないでしょ」

浦粕座はこの町でただ一軒の芝居小屋であつた。堀南の表通りからちよつとはいったところがあり、古いけれども鼠木戸などを備え、畳敷きの平土間に、片花道があつて、いかにも芝居小屋という感じのする建物であつた。

「粕権十郎座がかかつてたでしょう、かかつてたのよう」と夫人は云つた、「入りが無いんでみんな小屋へ泊つてたんですつて、ところが樂屋が狭いから舞台へも寝たんでしょ、古い引幕かなんかにくるまつて、軀を寄せあつて、お互いの軀の温かみで寝るんだそうね、ちよつと乙なけしきじゃないの」

「乙なようですね」と私は答えた。

「その舞台へ寝た人たちが」と夫人は続けた、「夜なかに蠟燭ろうそくをつけて用を足しにいつて、それを枕元に立てたまま寝ちやつたらしいの、それが引幕に移ったからたまらないわ、ぼうつといつぺんに天床へ燃えあがつちやうでしょう、襖ふすまとか障子ならどうかできたでしょうけれど、幕だからいつぺんに天床まで燃えあがつちまうわ、どうしようもないわよ」

私が訊き返すと、夫人はかぶりを振った。

「いいえ逃げちやつたんですつて」ときん夫人は云った、「もうどうしようもないし、自分たちの責任が怖くなつたんでしょ、荷物ものを纏まとめて逃げちやつたそうよ」

私は茶を啜ってから、質問した。

「そうでもないわ」ときん夫人は云った、「小屋主の森さんはいきり立ってるそうだけれど、保険もたくさんかけてあるし、本家（というのは十台島の高品さんであるが）の話によると、森さんは毀こわして建て直すつもりだって云ってたそうですもの、お菓子があ
るけど出しましょうか」

私は礼を云って立ちあがった。

「可哀そうなのはあの役者たちよ」ときん夫人は炉端から云った、「あの夜更けの雨の中を、どんな気持で逃げていったかしらねえ」

白い人たち

遠くから見ると、その工場はいつも白い霧に包まれている。工場から立ちのぼる湯気のような、湯気よりも濃密な白い煙が、風の吹く日は風の吹く方向へなびき、風のない日は立ちのぼったところから下へ、ゆっくりと舞いおりて来て、工場や付属の建物や、その周囲一帯の地面やくさむらや、道を隔てた根戸川の揚げ場までを、まっ白に塗りつぶすのであった。

そこは東に百万坪の荒地へ続く芦原、西は根戸川に接していて、工場のほかに事務所と、工員たちの小さな住宅があり、貝殻置場

と薪小屋が並んでいた。事務所には工場主と、幾人かの事務員が詰めている。かれらが出勤すると、正面の扉は開かれるが、夏でも窓は閉めたままだし、かれらが帰ると扉はまたぴたりと閉められてしまう。——そうしなければ、いや、そうしていてさえも、焼かれた貝殻の微粒粉は、どこからともなく舞い込んで来て、事務所の中のあらゆる家具や備品や、床板の上にまで白く積り、拭けば拭くあとから積るのであった。——掃除をすることはばかげたことなのだ。室内に溜たまった石灰を掃き出そうとすれば、あけた扉や窓から新たに石灰粉が舞い込んで来る。したがって年に二度か三度、工場の釜場かまばの火を消すとき以外には、決して掃除などはしなかった。工場主も事務員たちも、帳簿とか机の上とか、そ

のとき必要な物や場所を、できるだけ静かにぬぐい、歩きまわるときはもとより、ペンを動かすにさえできるだけ注意ぶかく、静かにすることが習慣になっていたし、用事以外には話したり笑ったりすることもなかった。

事務所はいつも静かだった。貝殻が罐詰工場から運ばれて来ると、二人の事務員があらわれる。一人はその数量を計り、一人は記帳をして、運んで来た者に伝票を渡す。貝殻を運んで来た者も、もう馴れているので、あまり口はきかないし、事務員も殆んど無言のままだ。伝票を貰った罐詰工場の雇人は箱車を曳ひいて帰り、こちらの二人は事務所へはいつて扉を閉める。ほかに石灰を買いつけに、月に一度ずつ仲買人が来るが、これもなが話はしていな

い。オート・バイがやかましい音をふり撒きながらやって来、用談を済ませるとすぐに、またオート・バイのやかましい音と、青白い排気ガスをふり撒きながら去ってゆく。こうして退社時間になると、かれらは次つぎと黙って帰り、最後に工場主が、表の扉の鍵を掛けて去るのであった。

工場は木造のトタン屋根で、建坪は十五メートルに三十メートルくらい。高さは屋根の上の換気窓まで、約十メートルほどであった。内部は二重の板張りで、貝を焼く窯が三基並んでい、おのおの貝殻を投げ入れる口と、焼きあげて出来た石灰を掻き出す口と、それらの下に、薪を燃やす大きな焚口たきぐちが付いていた。

工場の外部もそうであるが、内部はもつと粉塵ふんじんがひどく、柱

も板壁も、踏段も床板も、まっ白に石灰がこびり着いているし、あたりには焼ける貝殻の微粒粉が、濃霧のようにたちこもつていて、二フィートはなれた人影もおぼろげにしか見えなかった。

工員は十五人いた。男が九人、女が六人、五つ組が夫婦で、あの男たちは独身だし、女一人は雑役の老婆だった。

かれらの姿を初めて見た者は、おそらく一種のぶきみさにおそわれるだろう。かれらは男も女も裸で、細い下帯のほかにはなにも身につけていない。また、頭はみなまる坊主そに剃り、眉毛もななし、腋わきやその他の躰毛もすべて剃りおとしているといわれる。それは石灰粉が毛根に付くと、毛が固まるからだそうで、胸とか腰部を見なければ、男女の差は殆んどわからなかった。

男も女も、逞しい軀つきであつた。髪の毛を剃りおとした頭部が小さくみえるためか、その裸の肉軀の逞しさは不均衡であり、眉毛のないとろつとした眼や、いつもむすんだまま動くことのない唇など、見る者に異常な、非人間的な印象を強く与えた。女のほうはその感じが特にひどい。頭蓋ずがいのあらわな不恰好さ、軀を動かすたびに揺れる重たげな乳房、厚く肉付いて、圧倒するような量感のある広い腰、そうして畸形きけいかと思われる曲つた短い足。茶色にやけた肌いちめんに、石灰粉の斑まだらにこびりついたまま、前まえ跣かの姿勢でのろのろと鈍重に歩いてゆくようすは、人間というよりも、なにかえたいの知れないけものというようにさえみえた。

仕事は二十四時間、一年に二度が多くて三度、窯の掃除をするとき以外に、焚口の火を消すことはない。働くのは十人で、五人ずつ交代に寝たり食事をしたりするほか、月に一回、これも交代で休みがある。けれどもかれらは町へは出ないし、町の住民たちとも決してつきあおうとはしない。工場と、狭い小さな棟割り住宅だけがかれらの世界であり、そこへは誰をも寄せつけなかつた。事務所の人たちが無口である以上に、かれらは無口であり無表情であつた。動作はひどく緩慢で鈍く、いつも背中に重い荷物でも負っているように感じられた。しばしば、かれらの幾人かは工場を出て、根戸川の土堤に並んで腰をおろし、弁当を喰べたりタバコをふかしたりする。夫婦ならば夫婦で並んでいるのだろうが、

どの一と組がそれであるかは見分けがつかない。みんな川波をみつめたり、濁った眼を細めて対岸のいかずちにある船大工の小屋を眺めたりしながら、黙って（私のノートには「苔のついた日蔭こけの石仏たちのように」と記してあるが）弁当を喰べ、タバコをふかすのであつた。お互いに顔を見ようともせず、話しあうこともない。同じ場所に軀をよせあつていながら、一人ひとりがお互いにまったく孤立しているようであつた。

「あいつらはな」と町の少年たちは囁きあつた、「みんな懲役人だぞ」

「人殺しもいるだつてよ」

「んだ」と昂奮のあまり一人が息をはずませて囁いた、「こんど

へえつたあの赤^{あかあざ}痣のあるやつは、二人も殺したつていうだ、ほんとだぞ」

その男は三十五から四十五歳のあいだくらいにみえ、左のこめかみから頬にかけて、赤黒い色の大きな痣があつた。

彼はどういう径路で雇われて来たかわからない。他の十五人もたぶんそうだろうが、ここでは過去の履歴や身分関係などは問題ではなかつた。頭髮も眉毛も剃り、まる裸で、石灰粉まみれになれば、それだけでもう誰彼の差別はなくなつてしまふ。貝殻を投げ込み、薪を焚き、石灰が出来あがると、^{かます}吠に詰めて河岸へ運び出す。単純で少しの変化もない仕事。口をきけば石灰粉がはいるため、唾^{あしや}者のように黙っているし、町の住民たちと交わることも

ない。——その男がどんな過去をもっているか、どこの生れで本名はなんというのか、そんなことを気にかける者は誰もなかつた。一人の男がなかまに加わつた、初めのうちは肌の色が違うのと、仕事に馴れないのとで、なかまの誰かがときどき彼を見た。睫毛まつげに白い粉がたまり、まぶた瞼の赤くただれた、とろつとした眼で、訝いぶかしげに彼を眺め、それが新しく来た彼であることを認めると、無感動に眼をそらす、というようなことがあつたが、彼がようやく仕事を覚え、肌も茶色にやけてくると、まったくなかまに溶け込んでしまい、もはや彼に注意するような者は一人もいなくなつた。赤痣がある以外に、彼は他のなかまと特に違つたところはなかつた。ものやわらかで、腰が低く、よく働いた。眼立つようにな

はなく、人の気づかないこと、人のいやがるような仕事をすすんでやった。初めは誰でもそんなふうにするものだ、精勤を見せかけるために、あるいは新しい仕事に対する興味に駆られて、——しかし彼はそのどちらでもなく、もつと素朴な、それが自分の仕事であるという、ごくあたりまえな態度であり、半年経ち、一年ちかく経つても、その仕事ぶりに変りはなかつた。少なくとも、他の十五人のなかまと同様に、その表面だけはそうであつた。

心ない人の眼にどう見えようとも、かれらも人間であり、男であり女であつた。まる坊主で、下帯だけの裸躰が石灰粉にまみれ、口もきかず、仮面のように無表情で、誰が誰ともたやすくは区別しがたいながら、その内部にはやはり怒りがありよろこびがあり、

悲しみや嘆きや、いろいろな欲望があつたにちがいない。むしろ、必要に強いられた沈黙と、石灰粉との殻に閉じこめられているだけ、よけいに、かれらの内部にある人間感情は激しく、あらあらしく、衝動的であつたかもしれない。

その工場に雇われてから約一年ほど経つたとき、彼のようすに変化があらわれた。なかまは誰も気がつかなかつたし、彼も注意ぶかく自制していたが、その自己抑制には、しだいに強い努力を加えなければならなくなつた。彼を悩ますのは女たちであつた。

勤めだしたはじめのころ、彼女たちは醜悪な軟軀動物のようである。ただ嫌悪感しか与えられなかつた。けれども月日が経ち、自分がかれらのなかまに溶け込んでゆくと、彼女たちが「女」であると

いうことを意識するようになり、それが彼の神経の中に深くくい
いて来た。彼の眼や耳は、絶えず彼女たちの動静にひきつけら
れ、彼の嗅^{きゆうかく}覚は彼女たちの軀から発散する匂いにひきつけら
れた。たぶたぶと揺れる乳房、男のように緊縛している下帯のた
めに、却って際立って見える下腹や、広い腰や、肉のもりあがつ
た豊かな臀部など。すべてが原始的にあからさまで、なんのつく
ろいもない強烈な刺戟^{しげき}と誘惑をふり撒いていた。

五人いる女たちの中で、彼をもっともひきつけたのは彼女であ
った。もちろん良人^{おとと}があり、年はいちばん若かったが、肥えてい
て背丈が低く、軀に比べて頭や手足が不自然なほど小さかった。

はじめのうち彼は、五人の中で彼女がいちばん醜く、畸型児の

ようだと思った。にもかかわらず時が経つにしたがつて、その醜さと、畸型児のような軀つきが、彼の眼をひきつけ、神経をたぐりこんだ。その小さく肥えた肉躰は、乳房と腰部だけが発達し、そこだけが生きて動いているようにみえた。脂肪で襞ひだのできたまゝのい腹。骨盤の極端なひろがり。薦せん椎つゐの左右にはつきりと二つ窪くぼみのある臀部は、柔軟で豊満に重たげで、その中に飽くことのない欲望を秘めているようにみえた。

彼女にはかなり強い躰臭があり、ときにそれが弱まったり強く匂かつたりすることに、彼は気がついた。ことに強くなつたときの躰臭を嗅ぐと、彼は全身が燃えるようになり、頭に血が充満して、くらくらとめまいにおそわれることもある。彼は欲求の烈しさを

抑えきれないと知ると、工場の裏へとびだして、芦の茂みの中へ
踏みに行くのであつた。町の悪童どもはしばしばそれを見た。芦
の茂みは浅い沼に続いてい、そこでは鮒ふなややなぎ鮠ばえがよくとれる
からだ。

「おつたねえのよ、なあ」と少年たちはあとで話しあう、「おん
だらが見てえても平気なのよ、な、ちえつ、おつたねえの」

晩秋のその一日は、他の一日と少しも変りがなく、静かにゆつ
くりと時を刻んでいった。午後になつて、石灰を受取りに来た船
が着き、工員たちの大部分が、吠の積込みに当つた。——彼は釜
の係りで残り、焚口を覗いて火を見たり、薪を投げ入れたりして
いた。季節とは関係なしに工場の中は暑く、石灰粉の微粒は渦を

巻いたり、条しまを描いたりしながら、白くて厚い幕のように漂あふい溢あふれていた。

片隅に積んである薪を、焚口の側へ移そうとしたとき、彼は強い女の匂いに気づいた。錆さびびた鉄となにかの動物の乳を混ぜ合せたような、強い刺戟性の匂い、それが彼女の躰臭だということは、その姿を慥たしかめるまでもなく、はつきりと彼にはわかった。

彼は首だけでそろそろと振り返った。頸がねじれると、こびりついたまま乾いた石灰粉が、かすかな音を立てて剥はげ、頸の横に幾筋か、茶色の肌が条のようにあらわれた。彼女はすぐそこにいた。戸口からはいつて来て立寄り、ぐあいが悪そうに下帯を直し、ひどく疲れたような足どりで、薪を置いてある隅のほうへいった。

そのうしろ姿を見まもっていた彼の眼が、急に細くすぼまり、下唇が垂れて歯が覗いた。彼は床板の上を凝視した。石灰粉が積つて、白堊しろつちの板のようになったところに、点々と赤いしみが落ちて、いるのだ。一つだけあいたままになっている焚口の火を映して、建物の中に充満した濃霧は橙色にぼうと染まり、その幻想的な明るさの下で、床の上の染しみは鮮やかに赤く、点々と彼女の足跡を追っていた。

彼は意識が昏くらんだ。彼は抱えている薪の束を投げだして、大股に彼女のほうへ歩いていった。彼女は板壁に背中もたで凭れ、跣はだしになにか布切のような物をたたんでいた。彼はまっすぐに歩み寄ると、いきなり彼女の顔を殴った。三つ、四つ、力まかせに殴り、

そのたびに、彼女の頭は左へ右へとかしいだ。彼女は失神したよ
うな眼で、ぼんやりと彼を見あげた。痛みも感じず、殴られたこ
とも感じないようだ。彼は両手で彼女を掴み、そこへ押し倒すと、
片手でさぐって、彼女の下帯を引き千切った。

そのとき、雑役の老婆の叫び声が聞え、押し伏せられた彼女が
叫びだした。舞いあがる石灰粉の中で、彼は女を全身で押しつぶ
し、片手で口を塞いだ。彼女はその手に噛みつき、小さな手と足
で狂気のように抵抗した。彼は意味のないことを喚きながら、女
の胸へ顔を近づけた。すると、うしろに人の足音がし、彼は背中
を激しく打たれた。背中と、次に頭を。それは刃物のように感じ
られ、背中も頭も断ち割られたように思えた。彼が振り返ると、

彼女の良人がすぐうしろで、石灰の掻き出しに使う大きなシヨベルを振り上げていた。

彼の動作はおどろくほどすばやかだった。打ちおろすシヨベルの下で、彼は敏^{びんしょう}捷に女の上から転げ落ち、相手の片足を抱えて立ちあがった。相手は仰反^{あおの}けに倒れ、シヨベルは彼の手にあつた。このときは他の工員たちもそこへ来ていた。雑役の老婆の知らせを聞き、みんな積み荷を放りだして駆けつけたのだ。しかし、かれらが止めにはいる隙もなく、彼は奪い取ったシヨベルで、仰反けに倒れている相手を殴りつけていた。相手の口からけものようにうな悲鳴があがり、顔を押えた両手が血に染まった。みんながとびかかるまえに、彼は相手を幾たびか殴り、殴られた相手の胸と

腹が切れて、白い石灰粉の上に血がとび散った。彼ははげしい咳せきにおそわれ、シヨベルを持ったまま、工場の裏へ走り出ていった。工員たちは裏の戸口まで追っていったが、振り返った彼の顔と、右手に持ったシヨベルを見て、立停ったまま動けなくなった。

彼は芦の茂みへ分け入り、咳きこみながら、浅い沼を渡った。石灰粉を深く吸いこんだために、咳はいつまでも止らなかつた。彼は草原を横切り、湿地を駆けぬけ、芦の茂みにとびこみ、また腰までもある沼を渡って、百万坪をまっすぐに、海のほうへ走り続けた。しだいにかすれてゆく乾いた咳の音が、かなり遠くなるまで、いかにも苦しそうに聞えて来た。

事務所から駐在所に使いがゆき、町の人たちが集まった。かれ

らはみんなそれぞれ得物を持っていたし、貝の罐詰工場のあるじである「大蝶」の旦那は、獵服に身を固め、獵犬を曳き、獵銃を肩に掛けていた。そして、巡査部長と二人の巡査を先頭に、このものものしい一団は、百万坪に向つていさましくでかけた。

彼女はなにごともしなかつた。その良人は額と胸と腹に負傷し、腹の傷がいちばん深く、応急の手当をしたのち、十キロほど北にある市の病院へ、入院することにきまり、その夕方おそく、彼女が付き添つて、吊^{つりだい}台で運ばれていった。

彼はその翌日、百万坪の端にある篠^{しのだけ}竹の茂みで捕えられた。「大蝶」の旦那の射^うつた獵銃の霰^{さんだん}弾が彼のふくら脛^{はぎ}に当たつただだという。旦那の射撃の腕前は高く評価された。

ごつたくや

夕方、私が散歩から帰って来ると、小料理屋「澄川」の娘のおせいちゃんが肩を振りながら小走りに来て、私を呼び止めた。おせいちゃんきりようは二十歳くらいで、軀も痩せているし、ほそおもての、かなり縹きりよう緻よしであり、私たちは近所づきあいの仲であった。

「先生まだ晩ごはん喰べてないでしょ」とおせいちゃんが云った。私はあいまいな声をだした。

「なんにもしないでよ」とおせいちゃんが云った、「今夜うんとご馳走するからね、ごはんも炊いちやだめよ」

そして彼女は狡^{すず}そうに笑って、あとで面白い話をしてあげるわと云い、くるつと身をひるがえすと、小さな肩を振りながら、蒸気河岸のほうへ去った。私はそのうしろ姿を見送りながら、「かもが捉まったな」と独りごとを呟いた。

それよりまえ、私が初めて浦粕町へスケッチにやって来たとき、——ここでちよつと断わっておきたいのだが、そのころ私は、どこかへでかけるとき、しばしば写生帳とコンテを持って行って、その土地の風景を描いたものであった。これは絵の勉強のためではなく、スケッチをすると、その土地の風景の特徴をとらえるこ

とができるからで、人物のクロツキイなどもかなり残っているが、——そういうわけで、Y新聞の演芸部の記者だった友人をさそつて浦粕へやって来、沖の百万坪や町筋や、舟の並んでいる堀などをスケッチしたあと、ひるめしを喰べるために、一軒の店へはいつた。

看板には「御休息とお中食、天井、トンカツ」などと書いてあったが、座敷へとおされてみて、こいつはいけない、と私は思った。というのが、それより二週間ばかりまえに、画家の池部^{いけべひとし}鈞さんから聞いた話を思いだしたのである。池部さんがまだ美校に在学ちゆうだったころ、写生旅行かなにかの帰りに、宇都宮かどこかで、汽車を待つあいだに食事をした。見かけはありふれた田

舎食堂のような店だったが、すすめられて座敷へあがると、白おしろ粉い臭い女たちがあらわれて、なにも注文しないのに酒だのビールだのを持って来、おのおの景気よく飲んだり喰べたりした。学生である池部さんには、それらが自分と無関係なのか、それとも関係があるのか判断がつかなかった。——なにしろ美校の学生とくると、できるだけ汚ない風態をするのが自慢だったから、どう見そこなつてもふところを覗ねらわれる心配はない、と池部さんは思った。ところが勘定の段になると、白粉臭い彼女たちの飲み食いした物が、残らず池部さんのふところに噛みついたものであり、その取立てには些いさかの容赦もなかった、ということであった。

——田舎はおつかねえからな、とそのとき池部さんは明るく面

白そうに笑つて、私に注意してくれた。君もよく気をつけたほうがいいぜ。

それを思いだしたので私は、顔にも声にも屹きつとした感じをあらわし、ビール一本と二人の食事を注文したうえ、「それだけである」ことを繰返した。あとで考えると、それは蒸気河岸から堀について曲つた左側の「栄家」という店であり、半年ほどのち、私が町へ住みついてからは彼女たちとも親しく口をきくようになった。そうなつてみると、ごつたくやの女と呼ばれる彼女たちが、みな神の如く無知であり単純であり、絶えず誰かに騙だまされて苦労していながら、その苦労からぬけだすとすぐにまた騙だまされるといふ、朴ぼくとつ訥そのもののような女性たちであることがわかった。――

—けれども、そのときは、まだその間の事情が不明だったので、おさおさ警戒を怠らなかつたのである。はたせるかな、と云つてもいいだろうが、私と友人が坐るとまもなく、潮やけのした逞しいたく軀くの女性が三人、手に手にビールを二本ずつ持つてあらわれた。

—ちよつと待つた、と私は片手をあげて云つた。そこでちよつと待つてくれ。

彼女たちは廊下で立停つた。

—よし、と私は云つた。そこでビールを下に置いてくれ、みんなだ、いや、みんな持つているのを下に置くんだ。

彼女たちはげらげら笑い、私がなにか珍しい芸当を演じてみせ

るとでも思ったらしく、左右の手に持っているビール壘びんを、いさみ立ったような身ぶりみぶりで下に置いた。私はむろん芸当ぎとうなどしてみせるつもりはない、右側にいる小柄な女中に向って、君がビールを一本だけ持ってこつちへはいって来い、「君だけ」であり、ビールは「一本だけ」であり、ほかのお嬢さんおぢょうさんもビールも絶対に不要である、と極めて明確に宣言した。

——まあこの人は、と選ばれた小柄な一人が云った。そんな憎つたらしいこと云って承知しねえだぞ。

そうしてこつちへ踏み込んで来ると、私を押し倒して馬乗りになった。両手で私の手を押え、両の腿で私の胴を、そしてその腰部で私の腰部をというぐあいあいに、字義どおりの馬乗りであつて、

若い女性からそんな挑戦を受けたことのない私は、その屈辱的な
姿態の恥ずかしさに狼狽ろうばいし、はね返そうとしてできるだけのこ
とをやってみた。あとで聞いたところ、彼女は十六歳だそうで、
しかも五尺そこそこの短軀であるのに、信じられぬほど逞しい固
太りの腕や、火のように熱い太腿の力は無類なもので、私のあら
ゆる反抗に対してびくともしなかった。

右のように周到な手順と力闘の労によつて、私たちはようやく
一本のビールと食事だけで難のがれることができた。つまり「か
も」にはならなかったのであるが、——話を元へ戻すと、「澄川」
のおせいちゃんのうしろ姿を見送りながら、私はこのときのこと
を思いだしたのであった。

やがて根戸川亭の出前持が、三皿の料理とホワイト・ライスを届けて来た。私は良心に咎められたろうか、どう致しまして、常にさみしいふところを抱えて飢えていた私は、ごつたくや如きのかもなるような男には、拍手こそしなかったが、同情するほどの気持もなかった。——三皿の料理がなんであつたか記憶はないけれども、私は籠屋のおたまにその一と皿を持っていつてやり、あとはきれいに独りでたいらげて、いいこころもちで眠つたように覚えている。

おせいちゃんは「あとで面白い話をしてやる」と云つたが、詳しいことを聞いたのは翌日の夜、十一時ころのことであつた。私が原稿を書きあぐんで、机に凭れたままぼんやりと、この世の生

きがたいことや、将来の不安などについて無益なものおもいに浸っている、土堤のかなたから自動車の音や、女たちの賑やかな声がかすかに聞えて来た。べつに気にもとめなかったが、まもなく戸口でおせいちゃんと呼ぶ声があった。

彼女はよそゆきの支度をし、白足袋をはき、赤い顔に幸福そうな笑いをうかべながら、土産物の包みを私に渡して、机の脇へ坐った。彼女の息は酒臭かったが、そんなことは、初めてであった。「まだ勉強してるの、えらいわね」と彼女はまず子供騙しのようなことを、少しの実感もない調子で云った、「そのお土産あけなさいよ、先生は東京だから知ってるでしょ、ねえ、あけてみなさいよ」

私は云われるとおりにした。包紙の中からは、しやれたレッテルを貼はつた朱色の壇があらわれた。それは五種類に加工した豆とあられの混つた菓子で、レッテルには俳優の紋や、顔の隈取くまどりなどがちらし模様になっていた。

「品物は五色豆よ」と彼女が云つた、「でもほかになんとか云う名があるでしょ」

私が答えると、彼女はまた幸福そうに喉のどで笑つた。

「うまいじゃないの、おのろけ豆だなんて、かつちゃんの土産」と彼女は云つた、「ああくたびれちやつたわ」

こうしておせいちゃんは話し始めた。

昨日のかもは三人伴れで来た。外交員か集金人のようにみえ、

午さがりにあらわれて大いに景気をあげた。三時すぎたころ帰ることになったが、中の一人が残ると云いだした。

その男が三人の中でもはばききらしく、おかっちゃんは初めから派手に「モーション」をかけていた。それが功を奏したのだから、他の二人は帰ったが、そのかもは残った。

「それだけならいいんだけど」とおせいちゃんが云った、「一人になるとすぐにさ、その男ったらがま口から百円さつを出してみせびらかすじゃないの、おかっちゃんの、気をひこうとしたんだろうけれど、ばかばかしい、まるで車くるまつび曳ひきがこんにやく屋へとびこんだようなもんよ」

べつの章でも書いたように、この土地の人たちは好んで俚諺りげんや

譬え話たとを引用する。それもしばしば独り合点や、記憶ちがいや、自分勝手に作り替えられるので、よその者には理解できないことが少なくない。この場合も私にはその意味がわからなかったが、おせいちゃんの説明によると、車曳きは足が達者であつて、それがこんにやく屋へとびこめば、「すぐにその達者な足を使われる」つまりおあしを使われる、というしやれだそうであつた。

「ここんとこずつとしてたでしよ」とおせいちゃんは続けた、
「だから、さあやってやれつてことになつたのよ」

私のところへ晩めしを届けるころから、そのいさましい略奪は始まつた。

現代のキャバレーとか、暴力酒場などの経験者にとっては、た

ぶん、まだなまぬるい話としか思われないうが、とにかく「澄川」からはすぐに指令がとび、他のごつたくやから女たちや器物が動員された。女たちは呼ばれた芸妓げいぎというかたちであり、器物とは爛徳利かんどくりとか盃さかずきとか、椀や皿小鉢の類である。——念のために注を入れると、小料理屋となつていながらもかわらず、これらの店ではそういう器物があまり揃そろつてはいない。客の多くは酒かビールの一本くらいに、あとは井どんぶり物ものでも取ればいいほうだからだ。——で、こうして召集された女たちがかもを取り巻き、夜の明けるまで盛大に騒いだ。もちろん騒いだのは女たちで、それは一年に一度あるかなしというチャンスだったからだ、夜半すぎになると客はくたびれはててしまい、坐まつていゝこともで

きなくなつた。

「それでもいさましいの」とおせいちゃんはまた喉で笑つた、

「まっすぐ坐つてもいられないのに、おかつちゃんを捉まえてあつちへゆこう、あつちへゆこうってせがむのよ」

おかつちゃんは、ふぎけちやいけないよ、と云つたそうである。

ふぎけるとはなんだ、とかもが云つた。しつかりしなよ、このしと、とおかつちゃんはかもの背中を殴打おうだした。もう二度もあつち

へいったじやないか、忘れたのかいこのしと。二度もだつて、と

かもは考えこんだ。軀をぐらぐらさせながら、どうかしてその記憶をたぐりだそうとするようだったが、やがてそれにもくたびれたとみえ、唸うなり声をあげながらぶつ倒れてしまった。女たちは箸はし

が倒れたほどにも思わなかった。うたう者、踊る者、悪口のやりとり、つかみあい、和解のコツプ酒。そしてまた踊る者、うたう者、悪口のむし返しから髪むしの毛のりあい、という底抜けに活潑な騒ぎが続いた。

かもはなにも知らずに熟睡していたが、揺り起こされてみると、夜が明けてい、自分が座蒲団を枕にごろ寝をしていることに気づいた。揺り起こしたのはおかつちゃん、その脇には女主人が、勘定書を持って坐っていた。女主人はいうまでもなくおせいちゃんおせいの母親であるが、年はそれほどでもない筈なのに、あたまはすっきり白髪だったし、痩せていて皺しわだらけで、これに総入れ歯を外してにら睨まれると、どんなにあらくれた蒸気乗りでもちぢみあが

る、といわれていた。

かもは勘定書を見て青くなつた。それからの問答は書くまでもない、やがてかもは駐在所へいつて払おう、と云いだした。女主人は総入れ歯を鳴らして笑つた。

——それは話が早くつていい、と女主人は云つた。そういうつもりなら駐在所までゆく必要はない、呼びにやればすぐに巡査が来てくれるから、あたしの方で使いをやることにしよう。だが念のため断わっておくよ、と女主人は座敷の中をぐるつと指さした。そこには爛徳利が八十幾本、ビール壺が四十幾本、しょうちゆう焼耐しやうちゆうの二リツトル壺が二本、丼や皿小鉢がずらつと並んでいた。

——勘定書と照らし合せてごらん、と女主人は云つた。もうよ

しなさいってのに、おまえさんがむりやり注文したんだ、一本一本みてごらん、酒もビールも残っているし、それはおまえさんのもんだからおまえさん持ってつていいよ、但しお銚ちょうし子や壘はこつちの物だからね、持ってゆくなら中の酒やビールだけ持つといでなさい、呼んだ芸妓が六人、玉ぎよく代だいは時間外の分だけお負けになつてるから、それをよく調べたうえで、巡査を呼ぶなら呼びますよ、どうせ恥をかくのはそつちなんだから。

かもがどんな顔をしたかわからない。けれどもおよその想像はつく。酒、ビール、現物はちゃんとそこにある、ゆうべあらわれたとんでもない女性たちが、芸妓衆であるかどうか非常に疑わしいが、警察署などの監督関係ではそういうことになっているのか

もしれない。^{おびただ}夥しい数の丼や皿小鉢にどんな料理が盛られ、誰の胃袋へおさまったか覚えはないが、勘定書の品数とそこにある器物とは数があっている、——であろう。それはいちいちあたつてみるまでもなく、まるで火事にあつた瀬戸物屋の店先のような、その場のありさまを眺めただけで充分だ。とすれば、なんのために巡査を呼ぶか、恥をかいとうえに勘定を払うためにか。

かもは勘定を払った。すると、そのときを待っていたおかつちやんが出て来て、あたしの分をくれと云った。かもはもういちど青くなつた。

——なんて顔をするのさ、とおかつちやんは攻撃に出た。二度も三度もしとを玩^{おもちゃ}具にしといて只で済ませるつもりかい、しよ

つてるよこのしと、ふぎけるんじやないよ。

かもはおかつちゃんに払った。

「人をばかにして、百円札なんかみせびらかすから悪いのよ」とおせいちゃんは云った、「それでもおかつちゃんには驚いたわ、その客が靴をはいてるまに勝手へいって、お小皿へ波の花を盛って来てさ、朝っぱらからいやなことを云う縁起くその悪いしとだつて、うしろから塩花を撒いたわよ」

てんせい点晴も忘れなかつたわけである。こうして、ゆうべの女たち

に再び召集をかけ、二台のタクシーに分乗して、東京へ芝居見物にゆき、かもから搾りあげたものをきれいに使いはたして来た、ということであつた。

「きれえさつぱり、いい気持よ」とおせいちゃんは云った、「でもこれでまた当分びいびいだわ」

私はなんと答えようもなかった。

対話（砂について）

「砂なんて、おつかしなもんだなあ」と富なあこが云った。

「うう」と倉なあこが云った。

五月十七日の晩で、二人は沖へ魚を「踏み」に来たのであった。

汐しおが大きく退ひく満月の前後には、浦粕の海は磯から一里近い遠くまで干潟ひがたになる。水のあるところでも、足のくるぶしの上三寸か五寸くらいしかない。そこで、馴れた漁師や船頭たちは魚を踏みにゆくのであるが、その方法は、——月の明るい光をあびながら、水の中を歩いていて、「これは」と思うところで立停り、やおら踵かかとをあげて爪先立ちになる。すると足の下に影ができるので、魚がはいって来る。筆者もこころみたことがあるが、魚のはいってくることは慥かで、——はいって来たあと、呼吸を計って、それまで爪先立ちになっていた踵をおろしざまその魚を「踏み」つけ、かねて用意の女串めくしで突き刺す、というぐあいに行るのであった。捕れるのは鰈かれいが多く、あいなめとか、夏になるとわたり蟹かになども

捕れるが、蟹の場合はべつに心得があつた。

「この砂だよ」と、富なあこは、踏んだ魚を女串で刺し、魚といつしよに砂を掴みあげて、魚を魚網へ入れ、砂を掌でもてあそびながら云つた、「——こうやってみると、なんでもねえ、ただの砂だ、ただ砂だつてだけだ、ほれ、これだけのもんだ、なあ」

「うう」と云つて倉なあこはあたりを眺めまわした。

空はきれいに晴れ、十七夜の月が、殆んど頭上にあつた。海面には極めて薄く靄もやがかかっているようで、それが月光を吸い、どちらを見ても青白い、夢幻的な光が遍満していた。こんな晩は同じように、魚を踏みに来ている者が幾組かあるのだろう。どこか遠くで、ときたまかすかに人の声がするが、姿は見えないし、ど

つちから聞えて来るかも、はつきりはわからなかった。

「ところがおめえ」富なあこは水の中を静かに歩きながら、まだ掌にのせている砂を見て云った、「これはこんなふうになん粒だけみてえに見えるけれど、これでそうじゃあねえ、これでちゃんと生きてるんだぜ」

倉なあこは訝いぶかしそうに友達いぶかの顔を見た。男ぶりがよくて、口の重い、いつも頬の赤い彼は、決して人にさからうようなことはないが、富なあこの言葉には少なからず不審をいだいたようであった。

「まさか」と倉なあこが呟いた。

「そう思うだろう、誰でもそう思うんだ」と富なあこが云って立

降り、水の中で踵をあげた、「——砂はただ砂つ粒、これだけのもんだと思つてる、だがそうじゃねえ、これはこれで生きてるし、生きてる証拠にはおめえ、絶えまなしに育つてるんだぜ」

倉なあこはなにか反問しかけたが、ちようど魚を踏んだので、巧みに女串を刺し、六寸ばかりの鰈をあげた。

「砂が」と倉なあこは鰈を魚網へ入れながら訊きいた、「育つつかい」

「おうよ」と富なあこが云つた、「それもただ育つだけじゃねえ、育つて大きくなりながら、だんだん川をのぼるんだ、だんだんにな、おらもこれにはびつくりした」

倉なあこは右手の中指で、頭のうしろを搔いた。

「こんな根戸川なんかじゃよくわからねえが、ほかの川へいつてみればはつきりすらあ」と富なあこは続けた、「——海ちげに近えところじやりはこまっけえ砂さ、それが上へのぼるにつれて、砂利じやりになり石ころになり、その石ころがもつと大きくなつてるもんだ」

「うう」と倉なあこは考えこみ、ややしばら暫くして、呟くように云つた、「その勘定だな」

「誰もそこに気がつかねえのさ」

「その勘定らしいが」と倉なあこが訊いた、「しかしまた、どうやって川をのぼるだろう」

「おら、この眼で見た、この眼でよ」と富なあこは科学者の冷静さと情熱とをこめて云つた、「——川のずっと上かみへゆくとな、こ

のつくれえの岩が川の中にころがつてるんだ、それがおめえ、或るときここいらへんにあるとするだろう」

「うう」と倉なあこは友達の指先を見た。

「するとあるとき、そうさな、——」富なあこは水面を指さした手を、ちよつと考えてから、向うのほうへずらした、「あのへんまでのぼつちやつてるんだ、ここんところから、あのへんまでよ、幾日もたたねえうちに、ときには三間も五間も上へいつちやうんだ」

「どうやってだ」

「わかんめえ」富なあこはすばらしい手札を持った賭博者のようにほくそ笑んだ、「おらもわかんなかった、どうやって上へのぼ

るんだか、手も足もねえし、魚のようにひれ鰭や尾つぽがあるわけでもねえによ、——それでおら、よくしらべてみたっけだ」

倉なあこは踵をあげることも忘れ、期待のこもった眼で友達を見まもった。

「するとようやくわかった、こうだ」と富なあこが云った、「つまりこうだ、——ここに大きな岩があるとすべえ、いいか」

倉なあこは黙ってうなず頷いた。

「川だから水が流れてる、これにふしぎはねえさ、なあ」と富なあこは手まねをした、「こう、ここに岩があらあ、そこへ水が流れて来るだろう、そうするとおめえ、岩の前のところの砂や泥は、流れに洗われて低くならあ、そいつは海ん中でやっても同じこつ

た、波の来るときに立つてると、退くときに踵の下の砂がへずられるだろう」

「うう」と倉なあこが頷いた、「うしろにひつくりけえりそうにならあ」

「そいつがそのまんま当て嵌まるわけよ、な」と富なあこが云つた、「な、水がこう流れる、岩の前の砂がへずられる、へずられるのが大きくなると、その岩はごろつと転がる、上のほうへよ、——水は絶えず流れてるから、岩の下はいつも流れでへずられてら、それが順繰りにずっと繰返されるから、岩はしぜんしぜんとのほうへ、転がり転がりのぼってくわけだ」

倉なあこは唸った。うーんと、声に出して唸り、それから友達

の顔を見て云った。

「知恵のあるもんだな」

「なみたいでいじやあねえさ」

「こんな砂がな」倉なあこは跣んで、水の中から砂を掬いあげ、
掌の上へひろげてみながら云った、「おどろいたもんだな」

「だろうつて」と富なあこが考えぶかそうに云った、「おらも初
めはびっくりしたもんだ、こんな砂つ粒が生きているなんてよ、
な」

「そうは思えねえもんな」

「知らねえ者は極楽よ」と富なあこは溜息をついた、「おらもそ
うとわかるまではなんとも思わなかつたつけだ、けれどもわかっ

てみると粗略にやできねえと思つた、ほんとだぜ、そんなに見えていて」と彼は倉なあこの掌上にある砂へと顎あごをしゃくつた、

「それでおめえ、ちゃんと生きてるんだからな」

「うう」と倉なあこが云つた。

「生きているばかりじゃねえ」と富なあこが云つた、「だんだんと大きくなりながら、川上のほうへのぼつてゆくんだから、だんだんとな、どこからそんな知恵を絞り出したもんか、考げえてみるとびっくりするばかりだぜ」

「うう」と云つて、倉なあこは、掌の上の砂を指で撫でた。

さざ波もたたない静かな海面のどこかで、魚のはねる水の音がし、二人は話しながら、磯のほうへ戻つていった。

もくしよう

元井エンジは葛西^{かさい}汽船の七号船の水夫であつた。十四の年から通船に乗り、二十三の年にエンジナーの免状を取つて、二十八号船のエンジンさんになつた。兵隊の経験はない。背丈が足らなかつたのだ。五尺そこそこのずんぐりした軀つきで、毛深くて、角張つた、しかんだような顔をしていた。滅法しやがれ声だから、話をするのに苦しそうだし、そのためというよりも性分だろうが、

話しべたで、めつたに人と話したがらなかつた。仇名あだなは「もくし
よう」という。もくしよは冬期によく捕れる蟹で、握りめしの
よなむつくりした形をしてい、茶色で、全体が毛だらけであり、
毛蟹とも呼ばれていたが、それは殆んど冒瀆的にまで元井エンジ
に似ていた。

彼にはまだ水夫のころから好きな娘があつた。新川堀の「白田うす
屋だや」という、雑貨と洋食屋を兼業している家の二女で、名をおさ
い、年は彼より二つ下だつた。彼女には兄と妹があり、洋食屋の
ほうは兄がやっていた。必要のないことは省略しよう。おさいは
昼のうち雑貨店のほうで働き、夕方からは洋食屋のほうを手伝つ
た。色が黒く、小柄で、縹緞もかなりいいし、勝ち気ですばしこ

くて、手も口も達者だった。——白田屋は通船の発着所のほぼ前
にあるから、船員たちとはもとより馴染なじみだつたし、洋食部のほう
には、土地の漁師や若者たちもよく集まるので、おさいのほかに
二人の女給がいた。その二人は厚く白粉を塗り、鼻がばかになる
ほど安香水を匂わせ、すぐに客の膝ひざへ腰掛けたり、客の吸ってい
るタバコをひつたくつて吸つたりするのが、現代的サービスだと
信じきっているような女性であつた。

おさいは白粉もつけず、ふだん着のまままで店にあらわれ、てき
ぱきと料理の皿やビールや酒を、運んだりさげたりしながら、客
たちがもつとメートルをあげるようにと、絶えず、巧みに女給を
煽あおるのであつた。しかし、自分は決して客の相手にならず、話し

かけられても簡単に受けながすだけだし、諄^{しつこ}く冗談を云われたり、
軀^{さわ}へ触^{さわ}られでもしたりすると、客のほうで消えてしまいたくなる
ほど辛^{しんらつ}辣^{らつ}な言葉で、てきびしく容赦なくやりこめた。

——おらんとこの五号船のぶつくれエンジンみてえだ。

東湾汽船の三十六号船に乗っている留さんがそう云った。その
五号船はごく古いもので、エンジンを発動させると凄^{すご}いような排
気音を放ち、船ぜんたいをばらばらにするかと思うほど揺りたて
る。五号船に乗っているあいだは、「うっかり口もきけない」と
いわれるくらいであった。

そのおさいが元井エンジンを好きになった。きつかけを作ったの
は、云うまでもないがおさいのほうだ。彼は船で使う草履や、塵^ち

紙りがみ、鉛筆、雑記帳などを買うとか、また、ときたま食事をしに寄る程度だし、そんな場合にもおさいに話しかけるのはおろか、眼をあげて顔を見ることさえなかった。——どんなふうにして二人が将来の約束をするようになったか、知っている者はない。或るとき、洋食部で彼がなかまにからかわれていた。小学校も満足に出ていないもくしようが、エンジンになる勉強をしているというのは、禿はげ頭あたまで鬚まげを結うようなものだ、などというわけである。彼は相手にならなかつた。怒りと恥ずかしさのために、——というのには、そういう勉強をしていることは内緒にしていたからで。しかし彼は、赤黒く充血した顔を伏せ、黙ってライスカレーの匙さじを使っていた。するとおさいが出て来て、からかっている

なかまをやつつけた。五号船のエンジンどころではなかつたらしい、日にやけた彼女の顔が蒼あおざめて細くなり、眼から涙をこぼしていたそうであつた。

二人がいい仲になっている、という噂うわさはそれから弘ひろまつた。いろいろな評うわさが取り交わされ、いつとき「もくしよう」の存在が大きく、蒸気乗りたちを圧迫した。白田屋のおさいをものにしたと
いうこと、しかも相手がもくしようだとあつてみれば、影響の大きさと強さは尋常ではなかつたのである。彼は周囲の眼をそらし、
噂うわさに耳を塞ふさぎ、非凡な精力で勉強を続けた。そうして、どのくらいの期間が経つたかはつきりしないが、ついに機関士の免状を取つた。

ここまでの経過はこまかい部分がわかっていない。婚約期間が仮に二年だったとして、そのあいだ二人だけで逢ったことがあるのか、また、恋人同士らしい交渉があったか、ひそかに逢ったとすればどこでどんなふうだったか、愛の言葉を囁くとか、口喧嘩^{くちげん}などが交わされたか。などという点については、なんの噂もなく、かげぐちも聞くことはできなかつた。

彼は二十八号のエンジンになり、「元井エンジン」と、多少の皮肉をこめて呼ばれるようになった。そこで、彼は故郷へ帰省した。祖先の展墓を兼ねて、自分の出世を報告するために、——故郷は岩手県のどこかで、汽車をおりてからバスで半日ほどゆき、それから歩いて何里とかの山を越す、といったような寒村であつ

た。もちろん結婚することも話したのであろう、ほぼ半月ほど経つてから、彼は土産物を持って帰り、「白田屋」へおさいを訪ねていった。——おさいはいたが、彼を見るととびだして来て、いきなり激しく怒りだした。怒って罵りながら、両手の指を鉤かぎのように曲げ、全身を音のするほどふるわせていた。

——おめえは徳行にふじという女がいる、その女はおめえの子を産んだ、とおさいは叫んだ。この恥知らず、よくもおんだらだまを騙だましたな。

彼にはわけがわからなかった。

——しらばつくれるな、とおさいはかなきり声をあげた。おら自分でその女に会って、その女の口からじかに聞いただ、よくも

あんなすべたあまと見替えやがった、もう騙されやしねえぞ。

彼は抗弁した。自分の並み外れたしやがれ声と訥とつべん弁のろを呪いながら、身に覚えのないことだと証言したが、おさいは聞こうともしなかつた。

——聞かね聞かね聞かね、と彼女は指が鉤のように曲つた手を振りあげた。おめえの嘘つぱちなんか聞くもんか、さつさと帰れ、もう二度とふたたび来るんじゃないよ。

そしておさいは店の奥へ去つた。

これははつきりわかつていることだ。彼は暫く、気のぬけたように立っていた。それから、持って来た土産の包みを、店先へそーっと置いて、そこをたち去つた。

彼にそんな女があつたかどうか、誰も知らなかつた。東湾汽船も、葛西汽船も、徳行町が終点であつた。どちらの通船も、浦粕泊りのときと徳行泊りのときがあり、蒸気乗りたちの多くは、遊ぶ場所の揃っている浦粕泊りを好んだが、中には徳行に馴染の女のある者もないことはなかつた。元井エンジにも徳行泊りの番があつたから、そこに馴染の女がいたということも無根拠ではない。もしも彼にそんな覚えがないとすれば、ふじという女に会つて、その実か否かを慥かめることができる筈だ。——当然、彼はそうすべきであつた。それは極めてたやすいことだつたから、——けれども、彼はそうはしなかつた。犬儒派的けんじゆはにいえば、彼は賢者の知恵を持つていたとも考えられる。おさいの怒りと罵倒ばとうを聞いて

て帰ると、彼は自分の中にとじこもつて、ぴつたりと蓋を閉めたようにみえた。彼は蒸気河岸の裏長屋の一軒を借りて住み、自炊生活を始めた。船に乗つているときも、必要なこと以外には誰も口をきかないし、長屋へ帰つても近所づきあいはしなかつた。人を訪ねることもなく、訪ねて来る者もなく、暇があると、独りで将棋を指してたのしんだ。

彼の内部で、なにかが変りつつあつた。水すい槽そうに小さな穴があいて、そこから水が漏るように、彼の中から、なにかが少しずつ漏れ、漏れただけべつのなにかが加わつてゆく、というようなくあいだった。他人とは口をきかないが、彼はいつかしら、絶えず自分と話をするようになった。

仕事が終わって家へ帰ると、彼は雨戸の前に立寄り、ちよつと雨戸を見まもつていて、それからゆつくりという、——この戸をあけよう。そして雨戸をあけ、格子戸をあけてはいると、そこでまた、——この格子を閉めよう、と云つて格子戸を閉める。上りがまち框の障子のあけたてから、洗面、着替え、晚めしの支度、あと片づけ、風呂のゆき帰り、寝るときも起きるときにも、すべてこの問いかけと確認を忘れることはなかつた。また、独りで将棋を指すときは、盤の向うに相手がいるかのように、一手一手について感心したり、へこたれたり、大いに自慢の鼻をうごめかすかと思うと、相手の立場になつて嘆いたりした。——それはちよつと、似合ひの腕を持った仲の良い友人が二人きりで、邪魔をされる心配

もなく、ゆつくりと将棋をたのしんでいるようにみえた。

このあいだにおさいは嫁にいった。利根川とねがわの河畔にある布佐ふさと

いう町の、かなり大きな料理屋であつたが、一年ちよつとで良人に死なれ、生れてまのない女の子があるため、百日ほど辛抱したあと、しゅうとめ姑とうまくゆかないので、子供を引取つて実家へ歸つた。

——気性の勝つた彼女にとつて、子持ちの出戻りというなりゆきは辛いことだつたらう。そう考えるのが人情だと思ふが、彼女は少しもそんなようすをみせなかつた。嫁にゆくまえと同じように、雑貨店のほうでも洋食部のほうでも、活澆に動きまわつたし、まえよりもあいそよく、客あしらいもやわらかになつた。冗談を云われたり、軀に触られたりしても怒らないばかりでなく、すすめ

られると酒でもビールでもかなり飲み、少し酔うといい声で唄もうたつた。

或る日、葛西汽船の二十八号が発着所へ着いたとき、おさいは岸へいつて機関室を覗きこみ、元井エンジを認めて声をかけた。

「エンジさん、暫くだね」とおさいは云つた、「たまにはうちへも遊びに来せえま」

彼は微笑し、ちよつと片手をあげてみせたが、口はきかなかつた。

次するとき、彼女は自分の子を抱いていて、洗い場の石段を二十八号船の側までおりてゆき、元井エンジを呼んで、これが布佐で生んだ子である、と揺りあげてみせた。

「名前をはるみって付けたの」と彼女は云った、「可愛いでしょ」
彼は微笑しながら頷いた。なんの意味も含まない微笑で、やはり口はきかなかつた。

こういうことが幾たびかあつた。おさいはそのたびに「遊びに
来い」ときそつた。彼は微笑をうかべて、頷いたり、手をあげて
みせたりしたが、それは機械的で、少しも感情のこもらないもの
であつた。そして或る夜、——元井エンジが晩めしを済ませ、燭し
よっこう光の弱い電燈の下へ将棋盤を据えて、例のとおり自分に話し
かけながら駒を並べた。盤は古道具屋から買ったものだが、ちや
んと脚がついているし、駒もいちおう黄楊材つげざいで、肉が薄く、盤へ
置くときには冷たそうない音がした。

「ゆんべはいしが先手だったつけ」と彼は安息のためいきをつきながら云った、「じゃあひとつ、今夜はおらが先手といくか」

そして、二手か三手指したとき、戸口に人のおとずれる声があった。人が訪ねて来ることなどはごく稀まれなので、初めは隣りの秋葉エンジの家かと思っていたが、自分の名を呼ばれたので、彼は返辞をし、いま指した七八銀の手をよく確認してから、立ちあがった。格子をあけて、狭い土間に立っていたのは、白田屋のおさいであった。彼女はよそゆきの着物に、厚化粧をしてい、洋食部の女給たちのように、安香水を強く匂わせていた。

「あたしあやまりに来たのよ」おさいは媚こびた笑いをみせながら云った、「ちよつとあがってもよくって」

彼は微笑したまま立っていた。あがれとも云わないし、あがってもいいような顔つきではなかった。おさいは片手で髪を撫でた。「でもあたし、いそぐから」と彼女はすぐに云い直した、「今夜はここでお詫^わびだけ云つとくことにするわ、いいでしょ」

彼の表情は変らなかつた。

「ごめんなさい、あたし悪かつたわ」おさいは眼を伏せた、「徳行のおふじさんのこと、嘘だつたのね、あたし人から聞いて、かつとのぼせちやつたの、あときはじかに会つて、当人の口から聞いたように云つたけれど、ほんとうはゆきもしないし会いもしなかつたの、もしか嘘なら、あんたが嘘だつていう証拠をみせてくれると思つたのよ」

元井エンジの眼が、ねむたそうに細められた。あるとき彼はそのことを云った、そんな覚えはない、みんな嘘だと云ったが、おさいは聞こうともしなかったのだ。そのことを思いだしたかどうか、彼は細めた眼でおさいを眺めたまま、黙って立っていた。

「あんたはなんにも云ってくれなかったわ」とおさいは続けた、
「だからあたし、——あたし、どうにでもなれって思っちゃったのよ、ほんとうはあんたが悪いのよ、あんたがいけなかったのよ」とおさいは声を激しくした、「嘘なら嘘だつて、はつきり云ってくればいいじゃないの、どうして黙ってたの、どうして」

彼はまた微笑した。

「でもいいわ、みんな過ぎちやったことだもの、それに、——」

おさいは熱っぽい眼に媚をあらわして云った、「あんたはじつをみせてくれたわ、あたしが布佐へお嫁にいつちやつてからも、ずっと独りで、ほかの人をお嫁に貰わずにいてくれたわね、うれしいわ、あたしこっちへ帰って来てからそのことを聞いて、うれしくって、泣いちやつたのよ」

おさいはすばやく眼をぬぐった。彼はなお表情を変えなかつた。彼は謙虚な自尊心をもっていた。それは決して他人に氣づかれることのないところで、ひそかに、しかし誇り高く保たれて来たのだ。——おさいが彼にあいそづかしを宣告してから、周囲の者のあてつけやかげぐち、ちようしよう 嘲 笑やおひやかしの集中攻撃を受けた。見たこともないおふじという女についても、あくどいほのめ

かしや皮肉をずいぶん云われたものである。——けれども、それらのすべてを謙虚な自尊心で受けながしたように、いまおさいの訴えに対しても、彼は漠然と微笑するだけで、おさいを責めたり、自分の立場のつらかったことを並べたりしようとはしなかった。

「あたし、いつでもいいのよ」とおさいは低い声で云った、「あとは云わなくつてもわかるわね、あたしたちうまくいくと思うわ」
彼はやはり黙っていた。

「きつとうまくいくわ」おさいの声には確信がこもっていた、
「あんたの都合でいつでもいいのよ、あたしの気持、わかるでしょ、わかつてくれるわね」

彼は一割がた微笑をひろげ、片手をゆっくりとあげて、その指

先をひらひらさせた。どういう意味を表明したのかわからないし、なんの意味もないようにも受取れた。

「べつにいそがなくてもいいのよ」とおさいは探りを入れるように云った、「あたしがいそいでるなんて思わないでね、あたしいそぐ気持なんかちつともないんだから、わかつてるわね」

彼はなにも云わなかった。

「うちへ来てちようだい」と別れを告げてからおさいが云った、
「あたしうまいライスが出来るのよ、玉葱たまねぎとヘットこしらだけで拵こしらえるんだけど、とても玉葱とヘットだけだなんて思えないほどうまいのよ、これからはちよいちよい来てよ、いいでしょ、待ってるわね」

彼はこんどは二割がた大きく微笑したが、なんの動作もしなかつた。

「へっ、うみどんぼ野郎」とおさいは外へ出てから、口の中で罵つた、「うすつ汚ねえもくしようめ、覚えてやがれ」

彼は将棋盤の前にあぐらをかいて坐り、深い溜息ためいきをついてから、頭をさげて盤面をみつめた。

「七八銀上りか」と彼は云つた、「——つまり、棒銀をやらさねえつてわけだな、すると、中飛なかびといく手か、へっへっ、おあいにくだが、その手はくわねえ、といこう」

彼は駒を取つて打つた。安物の盤の上で、その駒は冷たそうな、いい音をたてた。

經濟原理

私が沖の百万坪を歩いていると、三ついりの水路で少年たちが魚をしやくつていた。近よつて覗いてみたところ、バケツの中にふな鮒ふなが十二三尾もいた。ひらたという川かわえび蝦えびや、やなぎぼえ鮠ぼえもいたが、鮒のほうが多く、それも三寸くらいの手ごろな、——というのは私が喰たべるのに、という意味であるが、——形のものであつた。私はちよつとふところを考えてから、おもむろに少年の一人に話

しかけた。するとかれらは号令でもかけられたように、水の中でしやくつていた者も、バケツの番をしていた者も、魚を追い出すために杭や藻もの蔭を突ついていた者も、いちどきに私のほうへ振り返った。

「蒸気河岸がしの先生だ」と一人が他の者に囁き、それから涙はなを横撫よこなでにして私を見あげた、「——なんてつただえ」

その鮎あなを売ってもらえないか、という意味のことを私は繰返した。かれらの顔になにか共通のものがはしり、さつと緊張にとらえられるのが認められた。そのとき私は「しまった」と思った。なにがどう「しまった」のか不明のまま、ひじょうな失策をした、ということを直感したのであった。

少年たちは顔を見交わした。

「売んか」と一人が他の者に云った、「蒸気河岸の先生だぞ、な、売んか」

少年たちは唾をのみ、水漬を啜り、バケツの側にいた一人は片足の拇指おやゆびで片足のふくら脛を搔いた。「いやじゃねえけどよ」と一人はバケツへ手を入れて一尾の鮎をつかみあげ、金色に鱗うろこの光るその獲物をさも惜しそうに、また自慢そうに、そして私の購買欲そそを唆るように、惚ほれ惚ほれと眺めながら云った、「こんなえっけえ金鮎はめつたに捕れねえからな」

「ンだんだ、みせえま」次の一人も一尾つかまえ、私のほうへ差出しながら云った、「鯉っこくれえあんべえがえ」

さらに一人、さらにまた一人と、六人いる少年たちが全部、暗黙のうちに共同戦線を張って、私を懐柔し、征服しようとした。かれらの眼は狡猾な光を放ち、その表情には鬪争的な貪欲さがあらわれた。

私は決して誇張しているのではない、これは浦泊という土地の気風なのだ。いつだったか、——むろんそのときより以前のことであるが、私は蒸気河岸の脇のところ、これと似たような経験をした。もう夕方のことだったろう、河岸の道傍で漁師たちが四五人、蓆や桶を並べて、鯉や雑魚や貝類などを売っていた。それは「日銭」を稼ぐためのものであった。規定としては、漁獲物はすべて組合へ納め、組合で一括してそれぞれの問屋へ卸す仕組

になつていたが、ちよつと「日銭」が欲しいような場合には、納入する責任量を超過した分だけ、立売りすることが黙認されていた。そして、他の土地から魚釣りに来て、不漁をかこちながら帰る客や、単純な遊覧帰りの客たちがあると、それはかなりうまい儲けになるのであつた。——私は通りかかつて、蛤はまぐりを売っているのをみつけた。大きな、粒の揃つたみごとな蛤で、バターいためにしたらさぞ美味うまかろうと思ひ、近よつていつて、それを〇《まゝ五だけ売つてもらいたいと云つた。私はもう一年ちかくも住んでおり、かれらともおよそ顔見知り程度になつていたので、心の片隅ではひとかどの土地者であるような誇りを持つていた。そのうえ私のまえに、どこかのかみさんがやはり〇五だけ買ったと

ころ、いっとます一斗榼くわいくらいの桶一杯分を渡したのを見ていたから、もし私にもそんなに呉れるようなら、三分の一程度だけ受取ること
にしよう、などと、おうようなことさえ考えていたのであるが、
それらの予想や期待はあっさりとくつがえされてしまった。

「蒸気河岸の先生だね」とその中年の漁師は私を見あげた眼をす
ぼめた、「——この蛤を欲しいだかえ」

彼は自分の眼にあらわれる狡猾さと、顔つきが貪欲になるのを
ごまかすために、自分がいかにも無力な、悲しい男であるかのよ
うな表情を作った。

「そうさな」彼は蛤の一つを取って、それをじつと凝視した、

「——売ってもいいだよ、売るためにこうやって並べてるだから

な、売つてもいいだが」

私は辛抱づよく待った。彼はその一つの蛤を丹念にしらべてから、やおら、すぼめた眼で私を見あげた。

「幾ら欲しいだね」と彼は云った。

私は必要な額を答えた。

彼は梅干を舐めた^なような顔つきで、蛤を六個だけ選び分けた。

数は正確にいつて六個、しかもその一つ一つを、まるで真珠でもはいつていはしないかと疑うように、精密に、入念にしらべたうえ、選び分けたのであった。

「蒸気河岸の先生だからな」と彼は自分の情の脆^{もろ}さに自分ではらを立てたように云った、「——しよあんめえ、まけとくだよ」

私は少年たちの顔つきの変化を見て、そのときのことを思いだしたのであった。

「売んか、な」と少年の一人がなかまに云った、「売んべや、な、かんぷり」

かんぷりと呼ばれた少年は涙を噉り、上を眼づかいに私を見、またバケツの中の鮎たちを見た。その少年は船宿「千本」の長同級生で、背丈が小さく、軀も痩せているが、頭だけが大きく、しかも鉢がひらいていた。かんぷりとはその木槌さいづちあたまなまに付けられた仇名で、つまり「かぶり」というのが訛なまつたのだと思う。これは私の想像にすぎない、本当の意味はべつにあるのかもしれないが、とにかく、かんぷりはなかまの輿望よぼうをになつて戦線の右

翼にたつた、というふうにみえた。

「鮎は十五いんだ」とかんぷりは云つた、「幾らで買つてくれつかえ、先生」

私はふところを考へてから答へた。

「えつ」とかんぷりは眼をみはり、きおいこんでバケツの中から鮎をつかみあげ、——それはもつとも大きな一尾であつた、——私のほうへと突き出しながら云つた、「しよつからへいつてみせえま、このくれえの鮎は一つで五ひやくもすんだぞ、先生」

このちび助のユダヤ人め、と私は心の中で罵つた。「しよつから」とは堀南にある佃煮屋つくだにやで、彼はその店で売つている鮎の甘露煮を引合いに出したのだ。慥たしかに、そのくらい大きな鮎の甘露

煮なら五ひやく程度は取られるかもしれない。私は頭が熱くなるのを感じた。古ふるざる策さくでしやくつたばかりの鮎あなごと、いろいろ手数をかけ、調味料や燃料を使い、売り物としてきれいに注意ぶかく仕上げられた鮎あなごとを、同一に比べるという法はないだろう。しかしまた、甘露煮にすれば一尾それだけの値になる物を、十五尾まとめて〇三十で買うという根性も、相手を子供とみくびっているようでさもしいとも云える。前者の怒りと後者の恥とで、私は頭がほてってくるのを感じ、その複合したやりきれない感じに耐えられなくなつて、値段を〇五十とつりあげた。少年たちはいっぱし商売人のようにねばつた。六人いるから〇五十では分配がしにくい、もう一かん出してくれ。たった一かんくれえ惜しんでも倉が

建つわけではあんめえし、と云った。——それはこの土地の通言で、なにかというときよく使われた。ビールをもう一本飲もうとか、浦粕亭（寄席）へなにわぶしを聞きにゆこうとか、煎餅せんべいでも買わないかなどという場合、相手が渋った顔でもみせるとすぐに、その言葉を投げつけるのであった。だが私は閉口しなかつた。それで不足ならやめにしよう、と云った。みずからおのれをけがすような、やりきれない自己嫌悪とたたかいながら。少年たちは相談をし、私の決心が変らないことを認めて、ようやくその取引は成立した。

私はその鮎を味噌煮にした。骨まで柔らかかにするためには、二日か三日くらい煮なければならぬ。もちろんガスなどはないの

で、火鉢に粉炭を入れ、味噌煮の鍋なべを掛けたりおろしたり、また煮つまると水を加えたりしながら、煮あがるのをたのしみに待つのであった。

中二日おいて、三日めの午ごろ、私は寝ているところを呼び起こされた。窓の雨戸を叩きながら、先生起きせえま、と少年たちが呼んでいるのである。私は起きあがって窓をあけた。外には五人の少年たちが、洗面器やバケツや空あき罐かんなどを持って立っている私を見ると一列縦隊に並んだ。先頭にいるのは「千本」の長で、かんぷりの顔も見え、みんな泥まみれのはだしであった。

「鮒とつてきただよ」と長が云った、「買ってくれせえな、先生」
私はかれらの期待に満ちた注目をあびて、自分に拒絶する勇氣

のないことを悟り、かれらを勝手口へ廻らせた。そこでもかれら
は一列に並び、ひとりひとりが私に向つて自分の鮎に値を付けさ
せた。そのときになつて初めて、寝起きのぼんやりした私の頭が、
かれらの奸かんあく悪な計略を理解した。つまり、まとめて売れば安く
なるが、一尾ずつなら安い値踏みはできない、という狙いなのだ。

「ほれ、みせえま」とかれらはそれぞれの鮎を私に誇示した、
「こんなにえつけえだ、五寸くれえあるだえ、先生」

そして「しよつから」へゆけばこれ一尾で一かんは取られる、
と云つて互いに頷き、肯定しあうのであつた。私はそこでもまた
自分が罫わなに落ち、縛りあげられたことを知つた。私はかれらの誘
導にしたがつて、値段を付け、それらを買取つた。

「いいさ」と私はかれらの去ったあとで自分に云い聞かせた、
「味噌煮にしておけば保もつからな、当分おかずに困らないで済む
わけだ」

私はまえの味噌煮を井へ移して、それらの鮎を新しく味噌煮に
しかけた。

人は信用しないかもしれない。私自身もこれを書きながら、た
ぶん人は事実だとは信じないのだろうと思うのであるが、少年た
ちはその儲け仕事があまりにたやすく、かつ確實であることに昂こ
奮うふんと情熱を感じたらしい。二三日するとまたやって来て、さも
うれしそうにはしやぎながら、窓の戸を叩いた。

「並べつてばな」と長の云うのが聞えた、「おんだらが先だぞ、

押すな」

拒絶されようなどとは寸毫すんごうも疑わず、確信そのもののような少年たちの顔を見て、それだけで私は自分の敗北を認めた。——ここまで読まれた方は、もはや小悪魔どもが私を放さないだろう、と想像されるにちがいない。私にしても、仮にふところがもつとあたたかであつたら、容易にかれらの手からのがれがたかつたらうと思う。人は黄白こうはくの前には、しばしば恥を忍んで屈しなければならぬものだ。少年たちが四度めに襲撃をかけて来たとき、ふところの窮乏という現実に助けられて、私はきつぱりと鮎の買取りを拒絶した。するとそこに、まったく予想しない事が起こつて、私をおどろかせた。

私に拒絶されて、少年たちは明らかに失望し、途方にくれた。かれらは顔を見交わし、先生が駆引しているのではないかと疑い、そうでないことを認めるともつと失望し、どうしたものかというふうに、それぞれの手にした器物の中の鮎を見まもつた。

「みんな」と長が急に云つた、「それじゃあこれ先生にくんか」
くんかとは、贈呈しようか、というほどの意味である。途方にくれ、落胆していた少年たちの顔に突然、生気がよみがえつた。それは囚とらわれの縄を解かれたような、妄もうしゆう執ゆうがおちたような、その他もろもろの羈絆きはんを脱したような、すがすがしく濁りのない顔に返つた。

「うん、くんべ」と少年の一人が云つた、「なせ、これ先生にく

んべや」

「くんべ、くんべ」

「先生、これ先生にくんよ」とかんぷりが云った、「みんな、勝手へいつてあけんべや」

私は自分の大きな過誤を恥じた。

少年たちに狡猾と貪欲な気持を起こさせたのは私の責任である。初めに私は「その鮒をくれ」と云えばよかったのだ。売ってくれと云ったために、かれらは狡猾と貪欲にとりつかれた。私のさみしいふところを搾取しながら、かれらも幸福ではなかった。その期間、かれらは貪婪どんらんな漁夫でありわる賢い商人だったからだ。私は深く自分を恥じた。

「先生にくんよ、か」と私は口まねをしてみた、「これ先生にくんよ」

そう云ったときの、すがすがしく、よみがえったような顔つきや動作を思いうかべながら、私は深く自分を恥じた。

朝日屋騒動

朝日屋は堀一橋の近くで、河岸通りに面している。間口六尺、奥行十二尺。五色揚を揚げて売る店みせだい台と狭い三尺の土間、部屋

は六帖じようが一と間だけしかない。もともと古材木を叩きつけて造った建物で、そのうえ年代が経っているから、「ぶつくれ小屋」とさえ云えないような、危なっかしい家であつた。——但し一つ、五色揚を揚げたり売ったりする店台だけは、まだかなり新しかった。それは障子一枚くらいの大きさで、揚げ鍋や金網つきの油切りや、幾つかの壺や皿、または経きようぎ木の束などを置くだけの余地しかなく、しかもその小建造物は、古い家の外部へ、ごく簡単に釘くぎで打ち付けられたものようであつた。

朝日屋の夫婦は五日に一度くらいの割合で大喧嘩をした。亭主の名は勘六、細君はあさ子、どちらも寅とらだか午うまだかの三十二歳であつた。寅どしか午どしか判然としないのは、かれらが喧嘩をす

るときに、相手を痛めつける表現がときによつて違ふからであつた。

「寅の八白だなんてぬかしやあがつて」と勘六が云う、「てめえなんぞ本当はひのえんまの元締じゃあねえか」

「干支えとしらべならてめえのを先にしろ」とあさ子はやり返す、

「笑わしやあがつて、てめえなんぞ午どしなら竹んま、寅どしなら張子はりこの虎がいいところだ、すつこんでやがれ」

勘六は博奕ぼくちうち打だといつていた。東京深川のなにがし組で、かつてはあにい分だったという。酒を飲むときまつて、そのころの派手なでいり話を口演するが、それもときと場合でいろいろと趣向を変えるだけの努力を払うのだが、身をいれて聞く者は誰もな

かった。それについて、若い船頭の倉なあこが、いつも赤い頬ぺたに穏やかな微笑をうかべながら、次のように語ったことがあった。

何年かまえ、堀東の理髪店に杉さんという渡り職人がいた。五十年配の独り者で、半年ほどしかいなかったが、勘六のでいり話を幾たびか聞いたのち、そういう語り物はしようばい人に任せとくがいい、と云った。しようばい人たあなんのこった、と勘六はひらき直つて左の腕を捲まくつた。左の二の腕にはんにやの面の刺いれず青みがあつて、勘六がどすをきかせようとする場合の薬味になつた。杉さんはそんなものには眼もくれずに答えた。なにやぶしさ。なにがなにやぶしだ。おめえのでいり話のことさ、あれはみんな

なにやぶしから取ったもんじゃねえか。それがどうした、と勘六が云い返した。なにやぶしつてもものは博奕打のでいりを元にして語るもんだらう、してみればおれのでいり話をなにやぶしが取ったとも云えるじゃあねえか、ええ。そして彼は自分のあたまのよさに酔い、例の浦粕的アフォリズムでしめ括くりをつけた。

——大石ゆらの助は芝居を見てつから忠臣蔵をやらかしたんじやねえだらう。

杉さんはあいそ笑いをし、お見それ申しましたと云つて降参したが、あとで勘六の細君をさそい出し、三日のあいだ伴つれ歩いてから、船橋という町で細君を放りだしたまま、姿をくらましたということであつた。

——勘六は口で勝つて手で負けた。

そういう評が立うわさつたが、夫婦喧嘩のときにもときたまそのことが引合いに出た。

勘六もあさ子も博奕が好きであつた。浦泊は小さな漁師町だから、博奕場などという大掛りなものは立たないが、慰み半分の寄合はよくあつたらしい。そういうときには朝日屋へ知らせがある。相手は夫婦をかもにするつもりだが、夫婦はいつぱししようばい人のつもりで、——なぜなら、亭主はもとながし組のあにい分だつたから、——義理を欠かすわけにはいかない、などと気取つてでかけてゆく。亭主が元あにい分だとすれば、伴れ添うあさ子もずぶの素人ではない。尤も彼女はもつとごつたくやで稼いでいたのだ

から、ずぶの素人でないことは慥かであるが、ここではもう一つの意味。つまり博奕打の女房という鉄火てつかな自意識をさすのであり、そのためには、亭主の負けがこんでくると、片膝立ちになって赤いものをちらちらさせるといふ、特技を演ずることも辞さなかつた。

この特技は人によるそうである。若くて、小股こまたの切れあがつた美人で、それが片膝立ちに構えると、下の肌着と肉躰の一部がちらちらし、そのため博奕を打つ手許てもとが狂うというのであるが、あさ子の場合は成功しなかつたばかりか、「気分を害しちゃう」という非難さえ起こつた。それは彼女が若くもなく、小股の切れあがつた美人でもないからではなく、なすびがさがっているから、

という理由であつた。筆者はそれがどういう意味であるか、いまでもとんと理解できないのであるが、片膝立ちになつて赤いものがちらちらするとき、同時に、さがっているなすびが見え隠れしたので、——なすびがいかなる物であるか不明にしても、なんとなく「気分を害する」という気持がわかるように思えるではないか。

夫婦は博奕で勝つときもあつた。勝つたときは家へ歸つて、二人で酔っぱらつて、適当に口喧嘩をして寝てしまふ。しかしいては負けるのがきまりで、するとあさ子がことば巧みに何人かを客として家へ伴れ歸り、しようばい物の五色揚さかなを肴さかなに酒を飲ませ、博奕場で負けた分の幾割かを取り戻す、ということになるの

であつた。

或るとき、駐在の巡査が来て、これを営業法違反であると指摘した。あさ子はべらんめえ調で猛然とはむかつた。問答の細部はわかつていないが、あさ子は知っている限りの毒舌をふるい、若い巡査は昂奮のあまり口がきけなくなつた。

「わかりましたよ、ええ」とあさ子は云つた、「そんなら五色揚を店で売ればいいんでしょ、そうでしょう」

それから朝日屋ではそれを実行した。客を伴れて来て酒の支度をする、勘六が外へ出て店台の前に立ち、おい、てんぷらを呉れ、とどなる。

するとあさ子が出ていって、おやいらつしやい、幾らあげます

かと云う。幾ら幾ら呉れ。はい幾ら幾らです。あさ子は五色揚を経木に幾つか包んで亭主に渡す、お待ち遠さま、一つお負けですよ。おいよ。亭主は銭を渡し、経木包みを持って家へはいり、公明正大なような気分で飲みだす、というぐあいであつた。

或る日また若い巡査がやって来て、あさ子と激しくやりあつた。五色揚屋は五色揚を店で売ることだけ許可されている、と若い巡査は云う。おまえのところでは、客に酒食を提供して勘定を取る、それは許可された営業とはべつの営業許可を取らなければ違反行為になる。ねえ、若い旦那、とあさ子が遮る。さいえぎおまえさんもわけのわからない人だね、このまえおまえさんがそう云つたから、あたしはちゃんと五色揚を売ってますよ、そりゃ買うのは亭主かも

しれないが、誰であろうと店台の前へ立つて五色揚を呉れと云えば客だよ、亭主だから売らないなんて云えた義理じゃないし、また、そんなことをすればそれこそ営業違反でしょう。待ちなさい、まあ待ちなさい、と若い巡査が遮った。待ちなさいってなにを待つのか、とあさ子が云った。おまえさん取調べに来たんでしょ、取調べに来たんならこつちの申立てを聞くほうが先じゃないか、喧嘩の仲裁をするんだって喧嘩になったわけを聞かなくや仲裁はできない道理でしょ。いやまあ、と若い巡査が云った。これは喧嘩の仲裁ではないし。喧嘩っていうのはものたとの譬えですよ。まあ譬えはどつちでもいい、この件は取調べと云つても事実の証拠はあがっているんだから。なにが証拠ですよ、あたしは営業だから

亭主にだつて五色揚を売りました、営業上売つたんだからあのことまでは知らないよ、あたしはその店台で売つた、あとは買った人がどこで喰べようとあたしの責任じゃないでしょ、買ったのがうちの亭主で、それだからこのうちへはいつて来て喰べたにしろ、それは買ったもんの自由じゃないか。それはわかつた、五色揚の営業はそれでいい、と若い巡査は云つた。肝かんじん心なのは五色揚を誰に売るとかどこで喰べるとかいうことじゃなく、このうちで客を集めて酒食を提供し、その勘定を取るといふことだ、このうちで客を集めて、酒や肴を提供したことはないか。ありますよ、あたしが酒を買つて来て、五色揚を肴に飲んだり食つたりしますよ。それが営業法違反になるんだ。どうしてですか。どうし

てつて、つまりそれは五色揚屋の営業とは営業種目が違うからだ、つまり客を集めて酒食を提供し、それによつて利益を得るを目的とするのは飲食業の。ちよいとちよいと、サーベルをぶらさげてるからつてえらそうな口をきくんじやないよ、あさ子は片膝立ちになつて啖呵たんかを切つた。若い巡査は眼を剥むいて、それから慌ててそつぽを向き、あさ子はまくし立てた。若い旦那に訊くがね、おまえさん自分のうちで友達を集めて飲んだり食つたりするようなことはないかい、あるだろう、あるのが当りまえさ、そのときだね、失礼だけれど旦那方の給料はそんなにあるもんじやない、番たび友達を呼んで飲み食いをして、それをいつもおまえさん一人で奢おごるかい。それはいつもそんなに集まつて飲んだり食つたりし

やしないよ。いいえさ、仮にするとすればいつも一人で奢るかっていうんだよ、おまえさんどこを見てるのさ、人を取り調べるんならちゃんどこつちを見て饒舌しゃべつたらいいじゃないか、そつぽを向いたまんまでどうしようってんだい。いや、そつぽを向いてるわけじゃない、若い巡査はあさ子のほうを見たが、片膝立ちの部分が眼にはいらぬように、視線を相手の胸から上へ固定させるためひきつけでも起こしたような眼つきになった。

「それは」と若い巡査は答えた、「そういうときには僕たちは会費を出しあうことにしているよ」

「それが巡査の営業違反になるかい」

「僕はなにも営業なんかしていないよ」

「うちだつてそうさ」とあさ子が云つた、「うちだつて客と云えば云うものの集まるのはみんなお友達だよ、朝日屋で飲むのがいちばん気がおけなくたっていいって集まつて来るんだ、うちだつて貧乏世帯だから番たび奢つてばかりいられやしない、お友達にしたらつて番たびごちじやあ気がひけらあね。それでお互いの飲み食ひした分を出しあう、いいかい、つまりおまえさん方の云う会費だよ、早く云えば、そうだろう」

「そこが違ふんだが」若い巡査は帽子をぬいで、ハンケチで額と帽子の中を拭いた、「会費というのは頭割りで幾ら幾らと」

「そこは違いますよ、違いますとも」あさ子は立てた片膝を左右に揺すつた。若い巡査はいそいで眼をつりあげ、あさ子は云つた、

「おまえさん方は行儀がいいからそんなことはないだろうが、こちららの客は幾ら幾らなんておきまりどおりで済むような手合じやあないんだ、五色揚を四五十も喰べて一升酒くらってけろつとしているやつもあるし、二合も飲めばへどをついてぶっ倒れるよ
うなろくでなしもいるんだ、それを頭割りで片づけるなんてあこ
ぎなまねは、営業でもしていればべつだろうが、こっちは営業じ
やあないからできやしないさ、それぞれ飲んだり食ったりした分
を出しあつてもらおう、これが当然じやあないか」

「僕は転勤したくなつちやうな」若い巡査は呟いた、「僕はこの土地には性が合わないんだ」

「あたしやあ理の当然を云ってるんだよ」とあさ子は追い打ちを

かけた、「友達を集めて飲み食いをして、お互いに銭を出しあつてそれで営業違反になるんなら、分署の旦那方が会費を出しあつて宿直で飲み食いをするんだつて営業違反つて勘定だろう、うちは五色揚をしているから違反で、ほかのうちはほかの営業をしているから違反じゃないなんて、そんな理屈がとおるかい」

「お婆さんの云うように云えばそうなるけどね」と若い巡査はまた帽子をぬいで汗を拭いた、「いいよ、僕にはこの浦粕つて土地は向かないんだ、僕は転勤させてもらうことにするよ」

この結末をあさ子が自慢にしたことは云うまでもない。実際にはあとから分署の部長が来て、始末書を取られたか、なにがしかの科料処分になったようだが、「大学出の若いちやきちやきの巡

査を理詰めで降参させた」というので、あさ子はすっかり女をあげたものであつた。その巡査が大学出であつたかどうか、転勤の請願がとおつたかどうか不明ではあるが、――

夏のさかりの或る午後、朝日屋の夫婦が本式の大喧嘩をした。夫婦でひるねをしていたところ、あさ子が足で勘六の頭を蹴けつた、というのが事の起こりであつた。

「大げさなこと云うんじゃないよ」とあさ子が云つた、「眼がさめたら汗ぐつしよりで喉が渴いてたから、氷でも取ろうじゃないのつて、ちよつと突いてみただけじゃないか」

「ちよいと突くにしても場所があらあ」と勘六はどなつた、「女のくせえして寝そべつたまんま、仮にも亭主の頭を足で小突くつ

て法があるか、仮に戸口の敷居を踏んづけただって足が曲るってえくれえのもんだぞ」

「敷居を踏んづけなければどうして足が曲るんだい」

「べらぼうめ、敷居は親の頭も同様だっていうんだ」

「へええ、おまえあたしの親かい」

「親なら半殺しのめにあわせるところだ、仮にも女房だからがまんしてりやあいい気になりやあがって、やい起きろ」と勘六は絶叫した、「亭主が起きて文句を云ってるのに、ぞべりけえつたまんま聞いてるやつがあるか、こら、起きろつたら起きねえか」

「うるさいね子供じやあるまいし、起きて聞こうと寝て聞こうとあたしの勝手だよ」とあさ子は云い返した、「それとも起きて聞

くほどごたいそんな文句でもあるってえのかい」

「このあま、もうがまんがならねえ」

「なにをすんだいこのもくぞう」

平手打ちの音と共に、取っ組みあいが始まり、器物が倒れたり毀れたりする音が、例によつて賑やかに聞えた。

それから「出ていけ」になるのだが、そのときそれを云いだしたのは、あさ子のほうであつた。

「仮にも亭主に向つて出ていけたあなんだ」と勘六は息を切らしてどなつた、「おらあな、三十円という大金を出して、てめえをゴつたくやから身受けしてやつたんだぞ」

「身受けをしたのはてめえの勝手だ、こつちで頼んだわけじゃあ

ねえや」とあさ子は喚き返した、「三十円三十円って、てめえは三十円出しただけじゃねえか、この家はいつたい誰のおかげだよ、おれが日の出屋のじいさまに頼んで金のくめんをして、家賃をかけあつたり造作を入れたりして、そのおかげで寝起きができるようになったんじゃねえか、そうじゃねえのかい唐変木」

「おらあ血の涙も出ねえ」勘六は呻うめいた、「てめえはな、そいつだきやあ云つちやあなんなかつた、てめえが朝日屋って屋号にきめたときおらあ勘づいてたんだ、てめえの名と日の出屋の名をくつつけたんだなってよ、だが仮にもおらあ男だ、じつと肚はらあ押えてがまんして来たが、もうこうなつたら男としてがまんできねえ、てめえとはたつたいま縁切りだ、出てうせろ」

「縁切りだなんて恰好つけたこと云うんじゃないよ」あさ子は平然と云い返した、「別れたけりやあ別れてやるからさつさと出ていきな、ここはあたしの家なんだから、断わっておくが出てゆくのはおまえさんのほうだよ」

「出てつてやらあ、なんでえこんなぶつくれの乞食小屋あ」と勘六が云つた、「その代りな、表の店台はおれの銭で拵こしれえたもんだから、おれが持つてくからそう思え」

勘六ははだしで外へとびだした。顔には幾筋もみみず腫ぼれができていたし、髪の毛の薄い頭には瘤こぶがふくれていた。彼は船宿「吉井」へいつて道具を借りて来ると、店台をべりべり引き剥はがしにかかった。

「なにをするんだよこの山犬あ」あさ子がとび出して来て、ななきり声をあげた、「なんのまねだい、それをどうしよつてんだよこのひよつとこは」

「おれの物をおれが持つてくんだ」と勘六は喚いた、「ざまあみやがれ」

「誰か来て下さいよう」とあさ子は泣き声で叫びたてた、「どなたか来て下さいよう、この泥棒があたしの家を毀しますよう、どなたか駐在さんへ知らせにいつて下さいよう」

あさ子は腰巻一枚で、いかんせん往来で亭主につかみかかるわけにはいかなかった。もちろん、彼女のために、助力しようというような、お節介な人間はその近辺にはいない。勘六はたちまち

店台を剥ぎ取ると、それを担いで「吉井」のほうへ走りだし、吉井のべか舟を借りてその財産を乗せると、根戸川のほうへ漕こぎ去つてしまった。

「骨つ腐り——」と根戸川べりまで追つていったあさ子は、べか舟が見えなくなるまで叫んでいた、「かつてえぼうのうみどんぼ野郎、くたばつちめえ——」

貝ぬすつと盗人

私は私の青べかで海へ出た。茶の入った大きな湯沸しと、魚煎餅とあんこだまと、二三冊の本を持って。夏でなくとも、晴れて風のない日に海へ出ると、水面からの輻射熱ふくしゃねつで暑い。私はパンツにポロシヤツを着ただけで、大きな麦藁帽むぎわらぼうをかぶっていた。海へ出ると權かゝいをあげ、舟を流し放しにして本を読む。汐時しおどしきさえ計っておけば、舟は殆んど同じところを動くことはない。読み飽きれば帽子を顔にかぶせ、舟底へ横になつて眠つてもいい。或るとき眠り忘れて退き汐しほになり、そうなるとう權で漕ぎ戻るのは困難だから、少なからず狼狽ろうばいしたけれども、沖の漁から帰つて来る知りあいの機械船をみつけて、浦粕まで曳ひき戻つてもらふことも覚えた。

春から初夏にかけて、浦粕の浜では「活いけ場」の看視人がいそがしくなる。

大汐のときには水際から四五キロも沖まで水が退き、ところどころ汐の溜たまりを残すほかは、見渡す限りの干潟ひがたになるため、汐干狩の客の多いことは云うまでもない。これらの中には狡ずい者があって、看視を怠ると貝の代金を払わずに帰ってしまう。ついうっかりして忘れる客もあるが、計画的に貝を盗みに来る者もあるので、客の混むもの日など、番に当った看視人は精根を使い果たすのが常であつた。

このほか、嚴重に禁じられている「ころがし」も見張らなければならぬ。それは三みつ又またになつた棒の先に、釘を曲げたのを植

えつけた輪があり、それをさりげないようすで転がして歩く。すると、水の底にいる小魚が、みんなその輪に植えた曲げ釘にひっかかって来るので、底の小魚はきれいに掠さらわれてしまう。それでは魚が育たないので、保護するためにころがしは禁じてあるのだが、看視人の眼がゆるむと、かれらはどこからともなくあらわれて、すばやく魚を掠さらってゆくのであった。

のんき 暢気なほうでは、月夜の「踏み」と、「すずきひろ 鱸拾い」がある。

魚を踏む話はすでに紹介したが、鱸拾いもほかでは聞いたことのないものである。これはその日の稼いぎにあぶれた人たちが、東京あたりからはるばるやって来るのだというが、——土地の漁師の説によると、鱸すずきという魚は相当ぬけたところがあるそうで、汐の

退くときに汐が退くことをど忘れして、気がついてみると干潟の中
の汐溜りに残されてしまい、そこから^{のが}れ出ようとしていたずら
らにあげけるのだという。それをみつけて捕るのだから、字義ど
おり「拾う」のであって、私もしばしば、^{さけ}鮭くらいの大きさの鱸
を、肩にひっかけて帰る労務者を見かけたことがあった。

そのころでも、鮭くらい大きい鱸は、東京の料亭などへ持って
ゆくと、六か七、うまいときには一〇くらいになるとのこと、
いつもふところの寒い私も、そういう幸運にめぐりあいたいもの
と思ひ、何回となく干潟を歩きまわったものであるが、ついに一
度もまぬけな鱸に出会うことはなかった。

さてその日、——私は私の青べかを流し放しにして、汐の中で

横になり、「青巻」という本を読んでいたが、読み飽きて、ふと気がついてみると、いつか汐が干てしまい、青べかは砂上に坐っていた。私は本を置いて起き直り、あんこだまと魚煎餅を喰べ、なまぬるくなつた茶を飲み、暫くぼんやりしてしてから、ひとつ貝でも採つてやろうか、と独り言を呟いた。——断わつておくが、そのとき私は浜の制度についてなにも知らなかつた。その沖が貝の活け場であることも、「ころがし」のことなども知らなかつた。そうして青べかからおりて、なんの目算もなく干潟の砂を掘つてみると、なんと、拳こぶしくらいこぶしの大きな赤貝が幾らでも出て来た。

「すげえや」私は胸をおどらせながら叫び声をあげた、「こりやあすげえや」

私は昂奮し、^{からだ} 軀じゆうに幸福感が満ち溢れるのを感じた。赤貝はそれほど大きく、また、信じがたいほど数多く、掘れば掘るだけ出て来た。私はそれらをいちど青べかの中へ運び入れ、戻つて来てまた掘った。するとこんどは蛤にぶつつかった。蛤もそれまでに見たことのないみごとなやつで、しかも粒が揃つて^{そろ}いたし、掘る手を待ちかねていたかのように、ぞくぞくと転げ出て来た。

そのとき私は、満ち溢れる幸福感の中に一種の不安、不安というほどはつきりしたものではなく、人間が幸福すぎるときに感じる「これは現実のものだろうか」といったような、おちつかない気分が小指を動かすのを感じた。そうして、その気分を立証するかのように、一人の男が近よつて来た。——それは逞しい男であ

った。ぼつたと呼ばれる腰つきりの冲着の下から、古びた下帯を覗かせ、裸の太腿ふとももから脛すねへかけてびつしより毛が生えているうえに、筋肉がこりこりと瘤こぶをなしていた。陽にやけた顔もぶしよひげう髭が伸び、濃い眉毛の下の大きな眼は、いまにも私を覗ねらつて弾た丸まを発射する二つの銃口のようにみえた。

「なにをしてるだね」と男は云った。

私は答えて、砂上に掘り出してある蛤を指さした。男は蛤を見、私の顔を吟味するように見、それから蛤を見て、また吟味するように私を見た。

「どこから来ただね」と男が云った。

私が答えると、男は振り返って私の青べかを眺め、齒をむきだ

して冷笑した。

「青べかを買ったのはおめえか」と男は云った、「すると蒸気河岸の先生だね」

私は肯定した。

「じゃあ信用すべえが」と男は権力の代行者のように云った、

「ここは貝の活け場だ、こんなところで貝を採ったりするとただじゃ済まねえだよ」

彼は私の掘った蛤を取ると、水のあるほうへばらばらと放り投げた。やっぱりそういうことか、と私は思った。こんなことがあるわけではない、こんなに大きな赤貝や蛤がぞくぞく出て来るなんて、それだけで訝いぶかしいと気がつくべきじゃないか。私はそう思い

ながら、青べかのほうへ歩いて行って、さっきの赤貝どもを男のするように、取っては投げ取っては投げした。蛤の解放を終った男は、たぶん私の正直さを認め、いくらか気の毒にもなったのだろう、砂の中から大きな灰色の二枚貝を掘り出すと、それを持って私のほうへ歩みよって来た。

「こいつはおーの貝つてえだ」と男はその貝を私の手に渡して云った、「これならいくら採つても構わねえだよ、そううめえつてわけにやあいかねえが、まずくつて食えねえつてこともねえだ、そうさ、するめに似てんべえかな、おおあじ大味だがするめつくれえには食えるだよ」

その貝は私の拳を横に二つ合わせたほどの大ききで、べらぼう

に重たかった。私は生れつきするめが嫌いであり、いまなお嫌いで、酒を飲みについている店でするめを焼き始めでもすれば、待ったなしに退散するくらいである。したがって、そんな味のする貝などを採る気はなかったが、ゆきがかり上そんな顔もできず、大いに乗り気になったふうをよそおって、そのいまましい貝を五つばかり掘った。

そのとき男は、沖のほうへ歩いてゆきながら、よく響くしおから声で「そのしとー」とどなった。

私が見てみると、二百メートルほど沖を一人の男が西に向って歩いていて、しるしばんてん印半纏のんに足は裸で、頬かぶりをし、両手をうしろ腰に組んだまま、ひどく暢のんびりと歩いているのである。そこは

脛の半ばぐらいまで水があり、男はその水の中で立停つて振り返つた。

「おめえそこでなにしてるだ」とこちらの看視人がどなった。

「なんか用かね」と男はどなり返した。

「そこでなにしてるかって訊いてるだよ」

「このとおり」男はうしろ腰で組んでいた手を解き、なにも持つていないことを証明するように振つてみせた、「——おらなんにもしてねえだよ」

「なんにもしてねえつて」と看視人が云つた、「そんならこんなとけへなにしに来ただ」

「ええびだよ」と男は答えた。

ええびとは「歩み」というほどの意味で、つまりここでは散歩と解釈してもいいだろう。男はそう答えながら、ぶらぶらと、老百姓が田を見廻つてでもいるかのように、暢気そうに歩きだした。

「ええびだつて」と看視人はそつちへ近よりながら問い返した、

「なんのええびだね」

「なんでもねえさ、ただええびに来ただけだよ」

「こんなとけへかね」

「こんなとけへさ」

「ちよつと」看視人は足を早めた、「おめえどこのしとだえ」

「おらがどこのもんかつて」と男もまた足を早めた、「どうして

だね」

看視人はさらに足を早めた、「どうしてもいい、どこのしと
 かって訊いてるだ」

「おらついそこのもんよ」

「ついそこたあどこだ」

「葛西のちつと先よ」

「ちよつと待て」看視人はもつと足を早めた、「葛西のちつと先
 とはどこだ」

「ちつと先とはちつと先のことよ」男も同じように足を早めた、
 「なんでそんなこと訊くだえ」

「訊く用があるから訊くだ、待て」と看視人は駆けだした、「待
 て、いしやあどこのなんてえもんだ」

「おらか」と男が答えた、「おらなんちゆうもんでもねえだよ」
「待てこら、待てつちゆうに待たねえか」

看視人の足が水しぶきをあげ、男はひよいと跼かがんで水の中へ手を伸ばした。これはたまらぬ、とでもいったような動作で、すばやくなにかを手繰ると、大きな包みを水の中から引揚げ、それを肩に担いで駆けだした。包みの中は貝であろう、包みの口をしめた紐ひもの先を足首に結びつけて、さりげなく水の中をひきずつていたものとみえる。看視人は喚きながら追いかけて、男は包みを担いで逃げた。看視人も早い逃げ、二人の蹴立てる水しぶきは、しだいに遠くなり、やがて根戸川の川口のほうへと、見えなくなつていった。

私は青べかの中へらくに坐り、あんこだまと魚煎餅を喰べ、ぬるい茶を飲んで、また「青巻」を披ひらいた。

「ただのええびか」私は独りで笑った、「うまく逃げてくれよ」

狐火

梅雨のあけかかった或る夜、——高品さんの家の炉端に、常連の蒸気乗りや船頭たちが集まって、茶と菓子をつまみながら話していた。雨はあがったが気温が高く、障子をあげ放した縁側のほ

うから、ときどきひんやりした微風が吹きこんで来た。

私は末吉エンジンと五目並べをしていた。末吉エンジンは四十九がらみで、蒸気乗りだから色は黒いが、細おもてのなかなかかな美男であり、さぞ女にももてるだろうし、道楽もするだろうと思われるが、実際には酒もタバコも口にしないし、子供のない夫婦っきりの生活は、極度に儉約だといわれていた。——一例をあげると、月給はそのまま郵便貯金にしてしまい、生活費は高品さんの奥さんから借りるのである。むろん計面性に立つ儉約生活だから、借りる金額もさして多くはないし、次の月給日にはきちんと返済する。そして残りはまたそっくり郵便局へ持ってゆき、金が必要になると高品さんの奥さんから借りるのであった。

——たいしたお金じゃないから貸し惜しみをするわけじゃないわよ、と高品夫人はいつか私に語った。だけれど郵便局へ預けた分には利子が付くでしょ、自分のお金には利子が付くようにしておいて、生活費のほうは人から借りるなんてこすいじゃないの。貧しさから生れる知恵はつつましく、そしてたいていはかなしいものだ。末吉夫妻の知恵は貧しさから生れたものではない。夫妻の生活は貧しいものだろうが、その知恵は貪欲に通じるように思える。

——いまに高利貸しでもやるつもりだろうさ。

蒸気乗りたちは蔭でそう云っていた。

私は末吉エンジと五目並べをしながら、相手の置く石の一つ一

つが、みな三四、または四四になるような、極めてゆだんのならない気分を味わっていた。そのうちに高品夫人が、あら狐火だわと云い、縁側の外のほうを指さした。——十坪ばかりの庭のはずれに、垣根のようになった樹立があり、そこから先はずっと田圃たんぼつづきで、あいだにバスの通る道があるほかは、殆んど家もなかった。そのときは夜であつたし、梅雨空のことでまっ暗だから、田植の済んだ田の面もさえ弁別できなかつたが、かなり遠いところに、赤い小さな火が七つか八つ、横に並んでいるのが見えた。

「どじよう捕つてるだよ」と三十六号船の留さんが云つた、「田植のあとでは銚田ほしたのほうでもよくやるだ、ありやあどじようを寄せるカンテラだよ」

だが留さんは急に黙った。

その赤い火の群れが、左と右へひろがり、同時に数も三倍くらいになった。少なくとも二十くらいになり、その位置も一段ほど上へあがったのである。これは人の話ではなく、私が現実に分の眼で見たことだ。その赤い火は初め七つか八つであり、それが突然、左右へ数を増してひろがり、一段ほど高くあがったのだ。

「狐火だ」と留さんが云った、「おつかねえ」

「留さん初めてじゃないでしょ」と高品夫人が云った。

「おら見ねえことにしてるだ」と留さんは答えた、「あれを見ると化かされるっていうだからな」

「どう化かされるだ」と漁師の吉さんが訊いた、「おめえもう見

ちまつたじゃねえか」

「おらを見てくれ」と留さんは振り向き、自分が固く眼をつむっていることを示した、「狐火だなど思ったからおらすぐに眼をつむつただ、みんなも見ねえほうがいいだよ」

「どう化かされるだつてば」

「よくは知らねえが」と留さんはあたりを憚はばるように云つた、

「あの火はまやかしだつてえだ、向うに火を見せておいて、狐はすぐ側にいるだ、そして人間が火に見とれているうちに、たましいを抜いちまうつて云うだよ」

「たましいを抜いてどうするだ」

「化かすのよ」と留さんが云つた、「人間にたましいがあるうち

は化かせやしねえ、だからまず先にたましいを抜くだつてえだ」

「へえ」と吉さんが云つた、「へええ、おら初めて聞いた」

吉さんはなお留さんに構い続けた。

私は狐火のほうを見ていた。その火はまた変化して、元の位置にさがり、数も七つか八つになつた。そうかと思うと等間隔のまま左へ大きく移動し、安ガラスをとおして見るように歪ゆがみ、こちらの瞳孔どうこうが震しん顫せんするようになり、不安定に揺れながら、また左右へひろがって、二十以上にも数が殖えた。

——気流のいたずらだな。

私はそう思つた。密度の異なる気流の層が交わると、一種の蜃しん気楼きろうに似た現象を起こす、といったようなことを讀んだ覚えが

ある。その夜は気温が高く、梅雨どきらしく蒸^むしていたが、ときどきひんやりした微風が吹いて来た。おそらくそんな気象状況がそういう現象を見せるのであろう。事実は留さんの云ったとおり、どじょうを捕るカンテラ火で、数も七つか八つにちがいない。眼に変化して見えるのは虚像なのだ、私はそう思ったが、誰にも話すつもりはなかった。

「いいかげんにしろよ、吉」と末吉エンジが云った、「留さんこれからかったって一文にもなるわけじゃないかなんべえに」

彼は狐火にさえ関心がないらしい。ずっと碁盤の上をみつめていたらしい眼を、ゆつくりとあげて私に云った。

「先生の番だよ」

芦あしの中の一い夜

たぶん九月だったと思う、私は「青べか」を漕いで、堀を東の浜へ出た。その浜にはまえに書いた海水浴場があるし、海へ出るまでの浅い水路はごかいを捕る場所になっていた。ごかいほもちろん魚を釣るのに使う餌えで、浅瀬の砂の中に棲すんでい、月に五回、「砂を抜けて海へ出る」という。そのためごかいというそうであるが、学問的に正しいかどうかは知らない。それは夜半に始まる

ので、漁師や釣舟屋の船頭たちは、口のひろい長さ一メートル半くらいの木綿の袋を持っていて、穴からぬけて海へ出ようとするごかいをその中へ流れ込むように仕掛けるのであった。

私が初めて東の浜へ出たのは、ごかい捕りとは関係がない。その浜には芦の畑があり、魚がよく釣れると聞いたからである。芦の畑などというと不審に思われるかもしれないが、実際に水際の広い地域に、幹の太さや葉の色などで個性をあらわした芦が、——たぶんそれぞれの用途によって区別されるのであろう。——稲や麦を作るように、規則正しく分類して育てられ、晩秋から冬にかけて順に刈り取られるのであった。その芦畑のあたりは、冬になると水鳥類のよい猟場になり、芦の茂っているうちは、縦横に

通じている水路が魚の寄り場になる、といわれていた。

私は「青べか」を水路の一つへ漕ぎ入れ、例のとおり漠然とした勘によつて釣糸をおろした。どれだけ収獲があつたか、それとも一尾も釣れなかつたか、私のノートにはなにも書いてない。それよりも水路を釣り廻っているうちに、私は十七号の廃船と、幸山船長にめぐり会つたのである。いつそんなところにいつたかわからないが、人の呼びかけ声に振り返つて見ると、十メートルほどしろの芦の中に、白く塗つた一艘そうの蒸気船がもやってあり、そのともものところに、一人の瘦やせた老人の立っているのが見えた。「そんなとこじゃ釣れねえだよ」と老人は特徴のあるしやがれ声で云つた、「こつちへ来せえま、この船の上から釣ればいいだ」

私はへどもどとなにか答えながら、その老人のようすを観察した。

そこは水路のゆき止りで、向うに松並木のある岸が見え、船はそちらを舳先へさきにしてもやってあり、底が浅いたため、岸に繋つないだほうが高く、ぜんたいが艫とものほうへかしいでいた。老人の年はわからない、痩せたひよろ長い軀こゝろに、両前ボタンの古ぼけた制服を着かぶっている帽子には錆さびて黒ずんだモールと、徽章きしょうが付いていた。通船の船長の正装であるが、上着から下は裸で、皺しわくちやになった渋色のパンツが見えていた。顔は汐やけがして黒く、頬も眼もくぼんでいるが、顎あごは逞しく張っており、眩まぶしそうに寄せた眉毛は灰色であった。

老人は私と話したいようすを示したが、私はなんとなくおちつかず、——というのは、そんな芦畑の中に古い通船があることも、その船にそんな老人がいることも、少なからず非現実なような感じがしたからであるが、——またこの次に来よう、という意味の返事をして、まもなく「青べか」を漕ぎ戻した。

それから二三日経った或る夜、高品さんの家の炉端でその老人の話をした。

「ああ幸山船長ですよ」と高品さんが穏やかに笑いながら云った、「息子もちやんとしているし、嫁にいった娘もいるんですがね、ああやつて独りぐらしをしているんです、人嫌いでね、おかしなじいさんですよ」

幸山船長は東湾汽船に四十年の余も勤めた。十三か四で見習いになり、それから水夫、エンジニア、船長になったが、四十余年のあいだ一度も事故を起こさなかつたし、その勤めぶりも模範的だつたので、会社から幾たびか表彰された。停年になつたが、幸山さんは船からおりることを拒絶し、そのまま五年も舵輪だりんを放さなかつた。

ここでちよつとブル船長のことを記しておこう。ブルさんと仇あ名だなされる波木井船長は、東湾汽船の三十六号船の船長だが、停年が過ぎたのに頑として船をおりない。彼は脂肉をぞんざいに寄せ集めたように肥えていて、歩くと軀じゆうの肉がだぶだぶ波打つて揺れる。それもいちようではなく、胸のところはこちらへ、

腹や腿ももの肉はこちらへというぐあい、見ているのが恥ずかしくなるほど歩きにくそうであり、また必要のない限り殆んど歩くことはなかった。顔もたつぷりと肥えてい、まぶた瞼が垂れさがっているため、眼は糸のように細く、視力も極度に衰えていた。顎あごのところには厚い肉が褻ひだをなしてたたまり、首を曲げるとその肉褻がぐりぐりと動いた。——ブルさんとはその風貌ぜんたいをさした仇名であるが、あまり似すぎているため、却かえつて興かえざめなくらいであつた。そのブル船長の視力は、二十メートル先もよく見えないというくらいだから、自分の眼では舵輪を操ることができない。そこで水夫の留さんが舳先に構えていて、「おも舵かじ」とか「ゴ—へ—」とか「とり舵」とか「ゴースタン」などと、大きく手を振

りながら叫び、それによつて船長は舵輪を廻し、エンジンへの合図の鐘を鳴らすのであつた。多少頭が温かいといわれている留さんには、それがなによりも誇りがましい任務だつたらう、彼は酒に酔つたりすると、しばしば得意げにこう云つたものである。

——おらあがいねえば三十六号はやみだ。

それでもなお船をおりないブルさんのように、幸山船長も頑強にねばつた。そうして、幾たびかめの辞職勧告に、多額の退職金が示されると、幸山船長は「金は要らないが十七号を呉れるなら退職する」と答えた。

十七号はすでに廃船となつて、徳行の岸に繋がれていた。いくらで払いさげるといふことにさえ、関心を持つ者がなかつたくら

いなので、幸山船長の交換条件はこころよく受入れられたのであった。——そこで彼は、十七号を東の浜まで曳ひいていつてもらい、現在の位置に繫けいりゆう留ゆうしたうえ、そこで自分ひとりの隠退生活を始めたのである。幸山船長には息子と娘があり、息子はT物産に勤めていい月給を取っているし、娘の嫁入った先もかなり裕福な商家で、どちらも父親を引取りたいと望んだ。幸山船長の妻はずっとまえに病死したから、世間に対しても、父親をそんなふうにほつたらかして置くわけにはいかなかったのだろう。けれども、幸山船長は十七号船から動かなかつた。浦粕の人たちに云わせるど、——ふじつぼが岩にひつ付いたみてえ、だそうで、息子と娘とはやむなく、毎月の仕送りをすることで、各自の良心を慰めて

いる、という話であった。

船乗りの船に対する執着と愛情については、外国の小説などによく描かれているが、私はブルさんがいまなお見えない眼を剥いて舵輪を放さないことや、この幸山船長の話に深い感動をおぼえた。

「あの十七号は」と私は訊いた、「老人がずっと乗っていた船なんですわね」

「いや」と高品さんは柔和に答えた、「まだ水夫だったところに四年乗っただけでしょう、あれはもと外輪船だったのを改装したもので、廃船になるまえは荷物専門に使われていたそうですからね」

私はちよつと失望した。高品さんの云うことが事実とすれば、その話のロマンティックな味わいはずつと減少するからである。

「それにしても」と私はまた訊いた、「どうしてあんな人けのない芦畑の中でなんぞくらしているんですかね」

「さあね」高品さんは炬べりでキセルをはたき（高品さん夫妻はどちらもキセルで刻みタバコを吸われた）新しく詰めたタバコに火をつけてから云った、「いろいろな話があるけれど、本当のところはわかりませんね、なにしろ変ってるじいさんだから」

秋の末ごろになって、私は一夜その十七号で幸山船長と語りあかした。

それまでは四五回ばかり、「青べか」を漕いでそこへゆき、船

長と話したり、一度は船の上へあがってみたりした。幸山船長の一日の大部分は、十七号の清掃と機関を磨くことに費やされるようであった。船体の白いペンキはいつも塗ったばかりのようにみえたし、だえんけい楢円形の船尾板にある（東・二号）という文字は、一念に描かれた青いペンキの唐草模様で囲まれていた。——蒸気の機械もつねに磨かれ、油を塗られるため、まるで新造船の機械のように光り輝いていた。甲板にある船長の席はきれいに整頓せいとんされ、木工部や舵輪はあめいろ飴色に拭きこまれており、機関部へ命令を伝える鐘や、それに付いている打金紐うちがねひもまでが、新品同様に保持されている、というぐあいであった。——これらの事實は、高品さんの話と矛盾するように思われたので、念のため私はその点を

訊いてみた。幸山船長は徽章とモールの付いた帽子を持った手でぼんのくぼを搔かいた。

「そうさな」と幸山船長は考えぶかそうに、特徴のあるしやがれ声で云った、「そうさ、——おらが乗ったのは十九の年の二月で、それからまる四年くらいだっけかね、まる四年とちよつとだと思うが、詳しい月日は覚えてねえだよ」

それでは高品さんの云うとおりなので、十七号船そのものに特別の執心があるわけではないのだな、と私は思った。

たぶん十月の中旬だったと思う。月のいい晩で、風はないが気温は低かった。釣舟宿「千本」の倉なあこが、ごかいを捕るところを見せるというので、私は「青べか」を漕いでいっしょに東の

浜へいった。——夜の十時ころだろうか、堀が海へ出るところは浅瀬で、左右の岸が、退き始めた汐の中で二条の砂嘴さしをなしている。いってみると、そこにはもう集まって来たべか舟の灯が十五六も見え、すでに仕掛を始めている者もあつた。——私は倉なあこのするのを見たが、まえに記した袋の口の四方所を、二本の女串ぐしに結び付け、その女串を水の中の砂に立てる。すると袋の口はほぼ四角形にあいて、下辺が砂地にぴったり着き、穴をぬけたごかいが流れて来れば、しぜんとその袋の中へはいる、というわけであつた。——倉なあこは仕掛をしながら、例のゆつくりした訥とで、つべん弁で、以上のことを説明してくれたのだが、その説明が終るのを待っていたように、誰かが私に呼びかけた。

振り返ってみると、反対側の砂嘴に、幸山船長がカンテラを持つて立っていた。

「ごかい捕りかね」と船長が云った。

私が答えると、船長は片手に持つている袋を、胸の高さまであげてみせた。

「今夜はぬけるのが早かっただ」と幸山船長はしやがれ声で云った、「おらもう捕ったからけえるところだよ」

それから人恋しげな口ぶりで、問いかけるように云った、「いっしょに船へ来ねえかね」

私は倉なあこを見たが、彼は黙って次の仕掛をやっていた。ちよつと迷ったが、人恋しげな船長の口ぶりは私をとらえてしまい、

それを振り切ることはできなかつた。私は倉なあこに声をかけておいて、船長のべか舟のあとから「青べか」を漕いでいった。伸びるだけ伸び、茂るだけ茂った芦のあいだの水路は、月の光の蔭になつて昏く、どこを曲るのか順路がわからなかつた。しかし幸山船長にとつてはそうさもないことだつたのだろう、私のまだ知らないような、幾曲りかの細い水路をぬけて、驚くほど短時間に、十七号船へゆき着いた。

三十分ほど経つてから、私たちは長四帖ほどの狭い船室で、窮屈に坐つて茶を飲んでいた。それはどの船にもある設備で、腰掛ける客のほか、坐る客のために設けられているのだが、その十七号はもと外輪船だつたからであろう、他の通船のそれより幾らか

広いように感じられた。——左右は硝子ガラスを嵌めた窓、うしろは機関部と仕切られた板壁、前方は腰掛のある広い船室であるが、そこには障子を取り付けられているし、床には畳が四帖敷いてあった。板壁には棚が作りつけられ、小さい仏壇と、六七冊の本が並んでい、本の片方を硝子張りの人形箱がブックエンドのように押えていた。——炊事は腰掛のある船室のほうでするらしいが、こちらにも小さな火鉢があり、その脇に茶筴ちやだんすや、たたんだ卓ちやぶ袱台だいや、炭取、柳行李やなぎこり、駒箱をのせた将棋盤、そのほかこまごました道具類が、いかにもきれいな老人の独りぐらしらしく、きちんと整理されてあった。

「あの人形が可笑おかしいかね」と船長は私の視線を追って問いかけ

た、「可笑しかんべえさ、こんなとしよりの持つもんじやねえだからな、いつだかも^{せがれ}孫がつれて来たとき、——孫は女の子で五つだっけだが、その孫が欲しがって泣き喚いただ、^{せがれ}孫も呉れろつてせがんだだよ、だがおらあ断わつただ、なげえあいだ側に置きつけたでね、いまでも手放す気にやあならねえだよ」

私は船を大切にする船長の、船乗り^{かたぎ}気質についてなにか云つたように覚えてゐる。

「さつき倉なあこが先生つて呼んでたっけだな」と幸山船長は笑つた、「なんの先生かおら知らねえし、そう思つてくれるのは有^あ難^{りがて}えだがね、これはそんなむずかしい理屈でやっているわけじやねえだよ、ただ悪いがきどもが来ちや船をよごすだ、黒いペン

キをなすくつたり泥を塗りつけたりよ、ちかごろのがきどもときたら手に負えねえ、わけもなんもねえに、きれいな物さえ見るとめのかたきにして、ぶつ毀したりよごしたりしてよろこんでるだ、——しようがねえ、叱りようもねえだからね、そのたんびにおら塗り直しているだよ、おらのほかにこいつをきれいにしといてやる者はねえだからね」

それから暫くしばらのあいだ、いまは記憶していない話が続き、どんなふうにしてか、やがて幸山船長はむかしの恋物語をはじめ、私ができるだけ無関心をよそおって聞いた。——そういう話をうまく聞くには、相手によつて二種類の聞きかたがあるようだ。或る者はこつちが乗り気になつて、強い関心を示さなければならぬ

し、他の者は反対に、聞くような聞かないような、平静な態度を保つほうがよい。この選択を誤ると、しばしばいい話を聞きそこなうようである。——私は幸山船長が後者に属するように感じたのだが、その直感の外れなかつたとみえ、船長はなんの警戒心も起こさず、静かにゆつくりと語り続けた。

話は単純なものであつた。

船長は十八歳のとき初恋をした。相手は新堀川の小さな雑貨屋の娘で、名はお秋、年は彼より一つ下であつた。その恋はあどけないほど幼く、けれどもあたたかい、きれいなものであつたが、きれいなままで、三年あまり続いて終りになつた。二人の気持が変つたのではなく、娘の親がかれらの仲を裂いたのである。——

その父親というのはなかなか切れる男で、芦畑を作ることを思いつき、県からその許可を取ると、根戸川の下流から浦粕の東の浜へかけて、広大な地域の権利を手に入れた。葛飾かつしかから浦粕一帯は海苔のりの産地として知られている、したがって、海苔を漉すくのに使う海苔簾すだれ（約二十センチ四方ほどの大きさで、細い芦の軸で編んだ物）だけでも、その需要は信じがたいほど多量であり、その他の分も加えると、どんなに広大な芦畑を作っても、作り過ぎることはなかった。——こうして新堀川の小さな雑貨屋は、見ていられるうちに産をなした。新たに家を建てたり、刈った芦の倉や、海苔簾を編む工場を作ったりし、「大叶屋」という看板を掲げて、ひとかど旦那と呼ばれるようになった。

「大叶屋、——」と云つて、幸山船長は喉のどで笑つた、「子供たちはおつかねーや、つてはやしたてたもんだ、おつかねーや」

娘は二十一歳で嫁にいった。

根戸川に沿つた永島というところの、かなりな資産家だつたそうで、その結婚が迫つた或る日、娘は幸山船長としめし合せ、東の浜の松並木でひそかに逢つた。娘は持つて来た人形箱を渡し、軀は嫁にゆくが自分の心はこの人形にこめてある、どうかこれを私だと思つて持つていてくれ。そう云つて泣いた。——こういう話は文字に書くと、あまりにありふれていておかしくもないが、幸山船長からじかに聞いていた私は、その「ありふれ」ている單純さのため、却つて深く感動したことを覚えている。——娘はな

お、どうせ嫁にいくのだから、このからだをあなたの好きなようにしてくれと云って、やけのような態度で幾たびも迫った。船長もいつそのことそうしようかと思つたが、まだ女に触れたことがないため、どういう手順が必要なのかはつきりわからず、娘が積極的になればなるほどおじけづいて、ついになにごともなく別れてしまった。

娘の婚家は根戸川に近いので、幸山船長の乗った船が通ると、彼女は土堤^{どて}まで出て来て姿を見せた。通船の排気音やエンジンの音は、それぞれに特徴があつて、馴れた耳で聞くと何号船かということが判別できるといふ。娘は十七号船の音が遠くからわかるのだろう。ときにはあねさまかぶりに襷^{たすき}をかけ、裾^{はしよ}を端折つたま

まで、——たぶん洗濯かなんかしていたのだらうが、——あたふたと土堤へ駆けだして来たりする。出て来ても手を振るとか声をかけるなどということはない、船のほうを見るようすもなく、ただ船の通り過ぎるあいだ、自分がそこにいることを彼に見せ、また、さあらぬ態^{てい}で彼のほうをひそかに見るのであつた。船がそこを通過するのに約五百メートル、二人がお互いの姿を見ることのできる区間は約三百メートル。川を遡航^{そこう}する時間は長くて五分くらいだし、くだりのときは三分たらずであるが、その水上と土堤との短くはかない、けれども誰にも気づかれることのない愛の交換は、若い彼にとってこの世のものとは思えないほどのよろこびであつた。

やがて十七号船は荷物専用になり、彼は十九号船に移った。そのあいだに一度、五十日あまり彼女が姿を見せなかつたことがあつた。もうこれで終りだろうか、娘の気持はさめてしまったのだろうか。彼は二人の仲を裂かれたときよりも激しい不安と、絶望感におそわれた。だがそれは思いすごしで、彼女はそのあいだ産さ褥じよくについていたのだ、ということがわかつた。再び土堤へ姿を見せたとき、彼女はおくるみで包んだ赤子を抱いていた。

「おかしなことだが」と幸山船長は云つた、「まったく根もねえ話だが、そのときおらあ、あのこが抱いているのはおらの子だつていう気がしたつけど、あの子がおらの子を生んだ、いま抱いているのはおらたち二人の子だつてよ、先生なんぞにやあばかけて

聞えるかもしれねえだがね」

彼女の生んだのは女の子であった。

あとでわかったのだが、彼女の産は重く、そのため軀が弱つたということ、土堤へ姿を見せないことが多くなつた。しかし、こんどは彼は疑いも不安も感じなかつた。相当な資産家の主婦であり、また子も生んだとなれば、ときには都合の悪いこともある。番たび土堤に出て来られないのは当然だ、というふうに考えるようになった。

彼は二十七歳でエンジニアになり、結婚した。相手は郷里の水戸在に育つた娘で、気が強く、言葉も動作も荒つぽく、彼は始めから好きになれなかつた。妻は息子と娘を生み、三十二歳で死ん

だが、死なれるまで彼は愛情というものを感じたことがなかった。妻のほうも同様であったか、硝子箱の京人形を見てもべつに気にしなかったし、彼に愛情があるかないかを知ろうともしなかった。

「芦が風を呼んでるだな」幸山船長はふと頭を傾けて云った、
「——ちよつと外へ出て風に吹かれようかね」

私たちは甲板へ出た。

火鉢のある狭い船室から出ると、晩秋の冷たい夜気がこころよく肌にしみとおった。だらけたような肌の細胞の一つ一つが、新しい酸素を吸っていきいきとよみがえるのを感じた。

「そうさ、芦は風を呼ぶだよ」私の問いに答えて船長は云った、
「見せえま、東のほうで呼んでるだ、東のほうから風が吹きだす

だよ」

慥たしかに、船長の指さしたほうから、静かに微風が吹きわたつて来るようであつた。私はタバコとマッチを出して吸いつけ、船長にもすすめたが、船長は欲しくないと云つて手を出さなかつた。

——月はかなり西に移つてい、空には雲の動きも見えた。岸の草むらでは虫の鳴く音がしきりに聞え、微風が芦をそよがせると、葉末から露がこぼれ、空気がさわやかな匂いに満たされた。雲が月のおもてにかかると、そのときだけはあたりがほの暗くなるが、雲が去ると、これらの風景ぜんたいが、明るくて青い、水底の中にあるように眺められた。

幸山船長は船長の席にあがつて腰を掛け、両手で舵輪を握つて、

ちよつと左右へ廻してみた。それから、すぐ右にある打金の紐を引いて、ちん、と鳴らし、ちんちん、と鳴らし、一つ鳴らして次にすぐ二つ鳴らしてみた。

「ゴースタン、これが合図だっただよ」と船長は云つた、「永島へ船が近くなると、こう鳴らしてゴースタンとどなる、それからスローアヘーとどなつてこう鳴らすだ、——おらが二十九号の船長になつてからだがね」

彼は三十五で船長になつた。水上と土堤との三百メートルの逢あ曳いびきは続いていたので。むろんずっとではない、どちらかの都合で相当な期間、お互いに姿を見ないこともあつた。そのあいだに彼女は三児の母となり、彼のほうでは妻に死なれた。けれども、

実生活の煩瑣はんさな用事に邪魔をされながら、そうすることができない限りは姿を見せあつた。——二人はそれ以上に出ようとはしなかつた。彼は永島へは近よつたこともない、彼女が長く姿を見せないとき、病気ではないかと心を痛める。本当に病気だつたこともあり、誰からともなく噂うわさが耳にはいると、ようすをみにゆきたい、という抑おさえがたい衝動に駆られたものだ。しかし彼は、自分の中にある自分以上に強いなにかの力によつて、そういう激しい衝動をきりぬけることができた。

「それでもたつた一度だけ、側へよつて口をきいたことがあるだよ」幸山船長は舵輪もたに凭れかかり、そつと頬笑んでいるような調子で続けた、「あれはそうさな、うちのおつかあが死ぬちよつと

めえだっけかな、あのこが子供を伴つれて、徳行からおらの船へ乗っただ、伴つれているのは四つくれえの女の子で、おらあその子を抱ついて渡り板を船まで渡してやっただ、あのこはあとから渡つつて、子供を抱つき取りながら、すみませんねえつて云つた、おらも云つただ、いまでも覚えてるだが、今日はいいお日なみですねつてよ」

幸山船長は口をつぐみ、岸の松林のほうをじつと見まもつていた。

「すみませんねえ」と船長はつぶや眩やき声で繰返した、「——今日はいいお日なみですね」

彼が四十二の年に、彼女は死んだ。

それを知ったのは、六十日の余もあとのことであつた。そのく

らい姿を見せないことは幾たびもあつたので、彼はかくべつ心配もしなかつた。そして、彼女が六十日以上もまえに病死したと聞いたとき、ちよつと云いようのない感動に包まれた。悲しいことは紛れもなく悲しかった。この世では二度と逢えないと思うと、舵輪を握る気力もなくなり、五日だか七日だか休んで家にこもつていた。けれども、悲しさや絶望感の中に、一種ほつとしたような、うれしいような気分がうまれていた。

「どう云つたらいいか」と幸山船長は凭れている舵輪を指で撫なで、暫く口ごもつていてから云つた、「——そうさな、あのこは死んでおらのとけへ戻つて来た、つていうふうな気持だな、長えことに人に貸しといたものが返つて来た、そんな気持だっけだ、おらそ

れから、人形箱の埃ほこりを払っただよ」

彼女は嫁にゆくが、心はその人形にこめてあると云った。彼はいまこそそれが現実になった、というように感じられたのだ。

彼は妻に死なれてから、ずっと独身でおしたが、もはや独りではなく、彼女が彼といっしよであった。子供たちの眼があるの
で、口や動作には決してあらわさないが、心の中ではいつも互いに話しあっていた。

——今日はたてかわ 豎川でてんま 伝馬が詰つちまつてな、たかばし 高橋まで五時間もかかつちまつただよ。

——そりやあたいへんでしたね、疲れ休めに酒でもつけましようか。

——いやよしにすべえ、おらあ酒を飲むと却つてあとが疲れるだから。

——それだけがあんたの損な性分ねえ。

こういうふうな会話が、現実そのもののようにとり交わされるのである。自問自答とか、空想めいた感じは少しもない。彼がこんなふうに云つてもらいたい、と期待するときに、彼女はしばしば彼の意志にさからつたり、子供のように拗すねたりすることさえあつた。

「あのこはときどきうちへ帰りたがつただ」と船長は云つた、

「子供のようすをみて来てえだからつてね、むりはねえさ、おら船が永島へはいると、ゴースタンをかけ、スローアヘーにするだ、

そうするとあのこはうちへ帰るだよ」

これは誰も知らなかったし、誰に気づかれることもなかった。ただ、永島へかかるときに限って、船を「後退」にし、「微速前進」にするのがわからず、頭がどうかしたんだろう、と云われたことがあった。

「いまでもみんなは、おらの頭がどうかしてると思ってるだよ」
そう云って、船長は可笑しそうに喉で笑った、「——ぶつくれの十七号船を貰って、こんなところで独りぐらしをしているのも頭がおかしいせえだつてよ」

「独りぐらしだつて」と船長はまた狡そうに笑った、「みんななんにも知つちやいねえだ、おらもこんな話は誰にもしやしねえだ

がねえよ」

幸山船長は黙った。

私は彼のうっとりとした眼が、岸の上の黒い影絵のような松並木のあたりを見まもっているのに気づいた。やがて幸山船長は欠^あ伸^{くび}をし、まわりの芦畑を眺めまわした。

「もうじき芦刈りが始まるだ」と船長は云った、「するとやがて鉄砲撃ちがやって来るだ、あれだきやあうるさくつてかなあねえだよ」

私は空が白みだしてから、私の「青べか」を漕いで帰った。そして、二度と幸山船長を訪ねてはゆかなかった。

浦粕うらかすの宗五郎

根戸川の下流、沖の百万坪の地はずれに、某企業家が汚物処理の大規模な工場を建てようとし、県へ許可を申請したとか、すでに許可を取ったとかいう噂が広がった。

汚物といっても例の清掃関係のもので、その処理したあとの廃棄物は根戸川から海へ放流するといわれ、それは小魚や貝類を死滅させるから、周辺の漁民ぜんたいの死活問題であると、かなり大きな騒ぎになった。——その声はしだいに広がり、強く激しい

輿論よろんをもりあげ、人の集まるところでは、必ずこの大問題が論じられた。釣舟宿「千本」の下座敷で、或る夜この件について、大勢の者がやりあつた。船宿では釣客のために、ごろ寝の準備もあるし、簡単な飲み食いもできる。専属の船頭の中には住込みの者もいるので、二階も下も広く部屋がとつてあり、下座敷では船頭や漁師や、ときには蒸気乗りなどが集まつて、よく賑やかに飲んだり騒いだりした。——その夜も同じような顔ぶれだったろう、「千本」には長男の鉄なあと、嫁にいったおかず、十七歳で美貌の二女おすみ、小学六年の二男の久、小学三年の長太郎。三女のしづ、あるじは和助といつて、船宿経営の手腕は浦粕随一といわれたし、客筋のいいこと、常に繁昌していることも事実であつ

た。

「こりやあなんだ、その、あれだ」と漁師の一人が云った、「まるで業病かかさ持ちの女を嫁に取るみてえなもんだ、こつちはちつともいいおもしろいをしねえで、血の腐った子や孫ができる、そんなものはおめえまっぴらだ」

「かさ持ちってなんだ」と脇で聞いていた長ちようが云った。

「寝ちまいな」と和助が投網とあみを繕つくろいながら云った、「鉄もおしづも寝ちまっただぞ」

「とけえ（都会？）のやつらがてめえでひり出した物あてめえで始末をするがいいだ」と中年の船頭が云った、「やつらのひり出した物をおんだらが押つつけられる義理はねえ、おらたちだつて

自分の始末は自分でつけてるだ、なせ」

「そのけえしや（会社？）のやつらあせんであぎ（千代萩？）のさけえごぜんみてえなもんだ」五十年配の船頭が、「なあ」と倉なあここに云った、「県の許可あ取つたなんてえらそうな威しおどをかけて、おらたちにどくまんじゆう毒饅頭を食わせようつてえだ、おんだらをせんまつ千松にしようとしてけつかるだよ」

「ちゃん」と長がまた訊いた、「せんまつつてなんだ」

「寝ちまえつてえにな」と和助が云った、「そんなこたあ子供の聞くもんじゃあねえだ」

「そりやあげでえ（外題？）ちげえだ」とやはり五十がらみの漁師が云った、「毒饅頭をくわされたなあ加藤清正だべえ、ありや

あおめえ徳川方の計略だあ」

「じゃあ」と先の船頭が訊き返した、「せんであぎで千松のくわされたなあなんだ」

「ありやあ執権の計略だべえ、執権ともなればなんか上等な干菓
子なんかだべえさ」

いやそうでない、このまえ歌左衛門の芝居で見たときには三さん
方うの上へ饅頭が盛ってあつた。そりやあ田舎芝居だからだ。田

舎芝居とはいつても市村歌左衛門は「田舎団十郎」といわれるく
らいの名優だ、いつかみちとせをやつたときにはちやんと屋台で
蕎麦そばを食つてみせたではないか、饅頭でないのに饅頭でまにあわ
せるような客をなめた芝居をするわけはない。そうだな、とべつ

の誰かが云った。このまえ国定忠治をやったときにも、——こうして、問題は「田舎団十郎」の良心的な名演技のほうへそれてゆき、みんながその話に熱中した。これは一例にすぎないが、かんづ詰工場でも、役場の待合所でも、根戸川亭でも、堀南の洋食屋「四丁目」でも、漁師や船頭だけではなく、住民がちよつと四五人も集まれば集まったところで、すぐに浦粕の死活問題が論議された。

こうした気運がしだいにふくれあがって、やがて、町民大会を開催せよ、という声になり、第一回が「梅の湯」でひらかれた。午後六時からというので、私は五時半ころにでかけていった。浴場の広い流し場へうすべりを敷いたのが聴衆席であり、よくそう浴槽に

蓋をし、その上へさらに板を並べ、古テーブルを置いたのが演壇であつた。下足番などはない、各自が自分の履物を持ってあがるのであり、用意のいい人は座蒲団も持って来ていた。——演壇のうしろの羽目板には、「汚物処理場設置反対大演説大会」というビラに続いて、演説者の名を書いたビラがずらつと並んでいた。その中には応援弁士として、県や市の議員の名もみえたように思うが、慥かではないし、またここではその必要もない。というのが、演説は実際には誰一人としてやれなかつたからだ。

定刻まえに、会場は殆んど満員になつた。ぎつしり詰つた聴衆のあいだを、いつも寄席の「浦粕亭」に出ている中売りの女が、巧みに「えーおせんにラムネ、ナンキンまめ南京豆にキャラメル」と売り歩

き、それが大いに繁昌していた。子供たちは人の肩を踏んづけてとびまわり、殴られて泣きだし、人びとは煎餅せんべいを喰たべ、ラムネ玉の音をさせながら饒舌しゃべりあい、はなれて坐つた者同士が、なかり声で呼びあつたりしていた。気がついてみると、演壇の脇、つまり湯屋の番頭の出入りするところに、巡査が三人来て立っていた。三人とも帽子の顎紐をかけ、手には白い手袋をはめていた。それは東京などで政府反対の演説会があるとき、臨検の警官がみせる身拵みごしらえで、私はなにかあるなど直感した。けれども町の人たちはそのものものしさに気づかないようすで、ラムネ玉の音をさせ、煎餅をかじる音をさせ、高ごえで饒舌りあつていた。

六時二十分になって、司会者が演壇へあがった。足場が不安定

なので、テーブルの前まで、いかにも危なそうなきぐり足で歩いた。

「へっぴり腰だぞ……」と誰かが呼びかけた、「おつかあを……んじやあるめえし、しつかり腰を伸ばしてええべや」

高くて広い浴場の空間が、ばかげた哄こうしよう笑でわれ返るような反響を起こした。

その司会者が誰であつたか記憶がない、彼は馴なれない役目のためにあがつてしまい、顔は蒼あおく、テーブルにつかまつてふるえているのが、私のところからもよく認められた。それで聴衆はすっかりうれしくなり、次から次と嘲ちやうしよう笑やおひやらかしの声がかかった。子供たちまでが面白がつて、「……ちゃんこよ、そんな

におっかながるなえ」とか、「おっかあはいねえからしんぺえすんな」などと喚きだした。

全聴衆がそんなふうだったわけではない。もちろんこれが町の死活問題に関する大演説大会だということを、しんけんに考えている者も少なくなかったので、制止の声や、司会者を励ます声も聞えだした。すると突然、聴衆の中から一人の若者が出て、すばやく演壇へとびあがった。年は二十六七だったろう、古びた印しるし半纏ばんてんの下にパンツをはいているだけで、壇上へあがるなり颯さっと両手を高くあげた。

会場は静かになり、聴衆の眼はその若者に集まった。

「演説会もくそもねえ」と若者は怒った酔漢のような口ぶりで喚

いた、「饒舌るだけで止められるもんじゃねえだ、会社のやつら
をぶつ殺せ、おらが佐倉宗五郎になるだ」

とたんに巡査がサーベルを鳴らした。

「弁士中止」と巡査は白い手袋をはめた片手をあげて叫んだ、
「演説会は解散」

それがどういうことであるかを、聴衆が理解するにはちよつと
暇がかかった。

私はすぐに会場を出たが、そのあと、高品さんの家を訪ねると、
やがて集まって来た常連が、大演説大会の話を始め、演壇へとび
あがった若者の、勇氣と決意を褒めあつた。

「おらが佐倉宗五郎になるだって」と秋葉エンジが感動をこめて

云った、「あんな大勢のめえでなかなかああは云えねえもんだ、
いってえどこのもんだ」

「知んねえな」と三十六号船の留さんが首を振った、「誰も知ん
ねえ顔だつてよ、それにしちやあえれえもんだ」

「おらが佐倉宗五郎になるか」と漁師の源さんが云った、「命を
張るつてえだからな、ああいう人間がもう五六人もいれば、会社
なんぞひねり潰^{つぶ}しちまうだがな」

「まったくのところ」と源さんは続けて云った、「こんどの問題
じゃ、あの男が頼みの綱だぞ」

第二回は浦粕座で、もつと盛大に開催された。聴衆は第一回の
ときの倍ちかく集まったし、第一回のときよりまじめで、緊張し

ていた。しかし、いよいよ開会が宣せられると、また例の若者が壇上にとびあがった。聴衆は凱旋がいせんした英雄を迎えるように、歓声と拍手を送り畳を叩いた。若者は第一回のときと同じく、会社の連中をぶち殺せと叫び、おらが佐倉宗五郎になると叫び、すると臨検の巡查が、——そのときは巡查部長が来ていて、——弁士の中止と、演説会の解散を命じ、若者を連行して去った。

大演説大会は五回まで開催されたが、議題について演説した者は一人もなかった。それは番たび例の若者がとびだして来て、ぶっそうなアジテーションをとばし、そのまま解散になるからであった。私は第二回のあとは聞きにゆかなかつた。というのはその台本の筋はほぼ推察できたし、何度やっても結果は同じだと思っ

たからである。——その若者は巡査に連れ去られるが、次の大会にはまたあらわれた。そうして、第五回の大会のあとで、主催者側は駐在所から非公式に「こういう過激な演説は時節がら好ましくない」という意味の通告を受け、それを機会にその催しをやめることになった。

若者もそれつきり姿を見せなくなつたし、どこの誰ともついに判明しなかつた。「おらが佐倉宗五郎だつてよ」と住民たちは思ひだすたびに感嘆しあつていた、「ああいう命知らずの骨つぽい人間が、もう五六人いてくれたらなあよ、ふんとに、あんなええやつはそうざらにはいねえもんだぞ」

汚物処理場がどうなつたか、私は覚えていない。

おらあ抵抗しなかつた

秋の夜の九時ころ、船宿「千本」の店先に縁台が三つ出してあり、船頭や漁師たちが、涼みながら話したり、酒を飲んだり、将棋をさしたりしていた。——月のいい晩で、空にはほんの僅かな千切れ雲しかなく、根戸川の水面も明るかつたし、対岸のいかずちの家並みも、一軒ずつはつきり見わけられるほど明るかつた。現に二人の若い船頭が将棋をさしているが、そこは店の外で、電

燈の光などは届かないのに、駒を動かすのに少しも不自由はなかつた。——三つの縁台に十二三人いたであろうか、一時間ほどま
えまでは子供たちも混つていたし、人数も多かつたが、しだいに
人が減つてゆき、道の往来も殆んどなくなつていた。

河岸には通船が三艘そうと、釣舟やべか舟が並べてもやつてあり、
それらには人けがなく、月光を浴びたまま、ひっそりと身を寄せ
あつてゐるようになみた。そのうちに、葛西汽船の三十二号から、
一人の少年があらわれ、渡り板を踏んで岸へあがると、そこで草
履をはいて「千本」の店のほうへ来た。少年は痩せたすばしっこ
うな軀つきだし、色こそ汐しおやけで黒いが、おもながの顔は眼鼻
だちが際立つていて、美少年といつてもいいだろう。ことにはつ

きりとした眉毛と、澄んでいるが少しばかり狡そうな眼つきが、その相貌をひきたてていた。

「酒をもう一升」と少年は「千本」の店へはいつてどなった、

「野口エンジンに付けといてな」

店の奥から二女のおすみが出て来た。

「あら銀ちゃん」とおすみが云った、「おめえまだ船にいたのか」

「野口エンジンに一升」と少年は云った、「佃つくだに煮かなんかくんな

つてよ」

店先の縁台から、よういろ男、と少年に呼びかける者があつた。

「銀公か」と将棋を見ていた船頭の一人が云った、「三角のお吉はどうした、もうものにしちやったか」

「昨日だっけ」と端の縁台で酒を飲んでいた中年の蒸気乗りが云った、「安田屋のおつゆがまた草履を呉れたってえじゃねえか、年もいかねえくせにてえした腕だな」

少年は振り向きもせず、口もきかなかつた。その顔には誇らしい自尊心と、おとなたちに対する軽侮と優越感とが、少年らしいなまなましきであらわれていた。——店は電燈を一つ残して、あとは消してあつたから、広い鉤かぎなりの土間は、月光の遍満している戸外の明るさで、実際よりもうす暗くみえた。——おすみは酒の壇びんと、蓋物を持って土間の奥から出て来た。草履をつっかけているので、足音は聞えなかつた。彼女は手招きをし、少年が近づいてゆくと、持っている酒の壇と蓋物を脇へ置き、すばやく少年

を抱いて接吻をした。少年はじつとしていた。軀も頭もまっすぐにしたままで、両手は軀に添って垂れていた。おすみはものたりなげに、けれどもすぐに少年からはなれた。

「はいお酒」とおすみは云った、「この中にすずめ焼としぐれ煮がはいってるよ」

少年はその二つを受取つて店を出た。

「よういろ男」と初めに呼びかけた男が云った、「今夜は三十二号で逢曳きか」

だが少年は黙つて道を横切つてゆき、草履をぬいで小腋こわきにはさみ、渡り板を渡つて三十二号船の中へ姿を消した。

彼は三十二号船の見習い水夫であつた。年は十七歳、みんなは

彼を「銀公」と呼んでいる。銀次というのか銀太というのか、あるいは銀造とでもいうのか、苗字も正しい名もわからない。この土地では一般にそういうことに興味をもつ者はいないようだ。もちろん、所属の船会社の名簿には記載してあるだろうし、ことによれば町役場の戸籍簿にも記録されているかもしれない、だが、日常生活ではそんなことはどつちでもよかつた。——三十二号船の「銀」といえば、徳行でも浦粕でも誰より娘たちにもてる若者として知らない者はなかつた。徳行や浦粕だけではない、通船の航路にあるすべての発着所と、その界限かいわいにまで知られていたといふべきだろう。——その発着所の多くに、三十二号船を待ちかねている娘たちがいて、それぞれなにかしら彼に贈り物をした。

ここでは一例だけあげるが、水夫は甲板勤務のときに麻裏草履をはくので、贈り物ではそれがもつとも多く、彼の手許にはいつも、新しいのが十五六足もあつた。中には手作りで、ひどくしやれたのや、凝つた品があり、そうでなくとも、鼻緒の色だけは贈りぬしによつて違つていた。念を押すまでもなく、それは娘たちの自己主張であり、他の娘たちへの対抗意識のあらわれであろうが、銀公はその鼻緒の色によつて、贈りぬしを判然と区別することができた。

たとえばこうだ。——三十二号船がAの発着所へ近づくとき、彼はそこに待っている娘の贈つた草履をはいていて、極めてさりげなく、その草履をはいていることを相手に認めさせる。そして

船がBの発着所へ着くときには、ちゃんとBで待っている娘に贈られた草履をはいて、その事実を相手の印象にしつかりと焼き付ける。これがCからD、DからE、Eから——と順を追って、正確に、決してAとCやEとFとを誤ることなしに繰返されるのであった。——これは一種の天才だと云つてもいいだろう、十五六足もある草履の、鼻緒の色によつて贈りぬしを弁別するばかりでなく、いそがしい見習い水夫の甲板勤務に追われながら、間違ひなく草履の「はき替え」をやつてのける、などということは、天才なしにはとうていできがたいことなのだ。なぜなら、こういう類いの問題について後年、筆者みずから銀公の才能がいかに非凡であつたか、ということを身にしみて感じた経験があるからであ

る。

浦粕でも、彼に熱をあげている女性が幾人かいた。高品さんの女中のとみちゃんもその一人であつた。繰返すようだが、高品家は東湾汽船の大株主であり、高品さんの蒸気河岸の住居では、発着所を経営していた。これは夫妻のあいだに子供がなく、高品さんは東京の新聞社へ通勤しているため、きん夫人はとかく暇をもてあますので、その暇つぶしにやっていたものだと思ふが、——切符売場は住居とべつで、発着所の棧橋と道を隔てたところに建て、ほんの二坪足らずの小屋であるが、奥に畳が二帖敷いてあつた。——とみちゃんは二十二か三だつたと思ふ、骨太で、がつちり肥えていて、おとな温和しいがしつかりした、よく働く娘であつ

た。女中だから住居のほうの雑用をおもにするが、夫婦っきりの生活ではさして用も多くはない。一日の半分以上は発着所にいて、きん夫人の手伝いをするのであつたが、そのうちに夫人のほうに飽きてしまい、発着所のほうはとみちゃんに任せることが多くなつた。

そのうちにとみちゃんは、住居の用事が終つてから、切符売場へ泊るようになった。朝の一番は五時に出るので、売場に泊つていれば客をのがさずに済む。一番船は葛西汽船からも出るし、切符売場が時間どおりにあかなければ、客は葛西汽船のほうへいつてしまうからであつた。——いいだろう、とみちゃんの主張は、彼女の主家おもいを証明するものと受取られた。彼女は小屋へ夜

具を運び込み、たいてい夜の十時には、住居のほうの用を片づけ
て、そちらへでかけていった。こうして日が経ち、やがて、高品
夫人はおどろくべき場面を目撃するはめにたち到った。というの
は、或る夜半、なにかのことで、どうしてもみちやんに訊かな
ければわからないことができた。夜半といつても十二時ころで、
高品さんの家はいつも夜更しをするから、さしておそすぎるとも
思わず、夫人は気軽に小屋へ訪ねていった。——すると、小屋の
戸口へいったとき、その中から異様な呻うめき声が聞えて来るので、
われ知らずぞつとして立竦たちすくんだ。きん夫人は浅草のすし屋の一
人娘で、下町そだちらしくさつぱりとした気性であり、もう三十
二三にもなるというのに、子供を生まないせいでもあるか、まだ

娘っぽい、世間ずれのしていないところがあつた。それで、その呻き声の異様さとぶきみさに、初めはとみちやんが誰かに刺されでもして、死にかかっているのではないかと思ひ、立竦んだ足がすぐには動かなかつた。——だが呻き声はますます切迫し、いまにも息が絶えるかと思うように、激しい呼吸と喘鳴ぜんめいをともないだした。夫人は恐怖のために戸口へ進み、半ば夢中で引戸をあけた。すると、畳の敷いてある二帖の、小さな棚に蠟燭ろうそくが燃えていて、その光の下で、とみちやんが身もだえをしていた。俯向きうつむに四つん這ばいになつて、身もだえをしながら呻いているのである。とみちやん、と夫人はふるえながら呼んだ、とみちやんどうしたの。だがとみちやんには聞えないらしい、夫人はそつちへあがつ

てゆこうとした。そのとき、両手を突いているとみちちゃんの肩のところ、銀公の顔が見えた。銀公は仰向きになって、しらじらとした顔で、——高品夫人の言葉によると「かみどこ屋で頭でも刈らせているような」顔だったそうであるが、そういう表情のまま、高品さんのおかみさんだぞ、ととみちちゃんに呼びかけた。とみちちゃんの呻き声は止ったが、律動的な身もだえは止らなかつた。それはちようど悪夢にうなされていて、これは夢だと気づきながら、なお悪夢からぬけだせないといったような、つまり神経活動の切替えがうまくいかない、というふうな状態であつた。銀公はそこで、やはりしらじらと平気な顔のまま、下からとみちちゃんの肩を小突き、おい、高品さんのおかみさんだつてばな、と云つた。

——そうしたら、おどろくじやないの。

この話をしていた夫人は、しんじつ驚いたというように、眼をみはってみせたものだ。銀公に二度めに注意されると、とみちやんの軀の律動はようやくにしてしずまった。そうして、とみちやんはその恰好のまま、首だけ夫人のほうへゆつくりと振り向き、^{いぶか}訝しげに訊いたそうである。

——なんですか、おかみさん。

明くる日、高品夫人はとみちやんを呼んで話を聞いた。とみちやんは銀公と夫婦約束をしたと答え、だからなにをしようと誰に文句を云われる筋もない、とい直るような態度をみせた。夫人は銀公とどう約束ができたにしろ、相手が十七の少年であり、ほか

にも娘たちが付けまわしていること。また、結婚するにしても、いま妊娠したりしては困るだろうことなど、いろいろと忠告したが、とみちゃんははつきり、自分のことは自分でよく考えているからと答えたそうであつた。——ここで読者のために記しておくが、のちにとみちゃんはやはり妊娠してしまい、銀公もよりつかなくなつたので、早いところ実家へ帰つてしまつた。実家がどこであつたか私のノートには書いてない、たぶん茨城県のどこかだつたと思うが。帰るとすぐに、同じ土地で嫁にいつた、というハガキが、高品夫人に届いた。

——あたしなんかがよけえなこと云う必要はなかつたのね、と高品夫人はそのハガキを私に見せながら云つた。あのこはちちゃん

と自分のことは自分で考えていたんだわ。

さて、——船宿「千本」の店先では、三つの縁台の人たちが、飲んだり饒舌ったり、将棋をさしたりしていた。銀公が酒と佃煮を取りに来たことも、彼がそれらを持って三十二号船へ戻っていたことも、もう誰の頭にも残ってはいなかった。しかしそのとき、こちらの人たちの気づかないところで、一つの事件が進行していたのである。縁台の人たちはぜんぜんにも気づかなかつた、将棋に負けた若い船頭の一人が、駒を投げだして大きな欠伸をし、「おらも一杯やんべえかな」と云つた。そのすぐあとに、つまり若い船頭が一杯やるかなと云つて立ちあがつたとき、突然その騒ぎが起こつたのである。

「逃げるな」という叫びで、その騒ぎは始まった、「逃げてもだめだぞ、顔はわかつてるぞ」

縁台の人たちは総立ちになった。

その叫び声は三十二号船から聞えて来た。いってみると、船のへんぎ舳先やとも艫や、船室の周囲のあゆみで、人が右に左に走りまわっている、船板を踏み鳴らす音に続いて、高い水音が聞えた。

「手入れだ」と漁師の一人が云った、「博奕ばくちを嗅かぎつけられただな」

月光の下で、黒い人影はすばやく走りまわっていた。さっきの水音は誰かが川へとびこんだのであろう、一人はもやってあるべか舟へとび移り、かい櫂を取って漕ぎだそうとした。両手で持った櫂

に全身の力をこめて突つ張るのだが、べか舟は横揺れをするばかりであつた。

「こら戻れ」と三十二号船の舳先のところで、一人の男（それは私服の警官だつた）が叫んでいた、「逃げてもだめだ、戻つて来い」

べか舟の男は振り返つて相手を見、べか舟が少しも動いていないこと、そして、それがまだもやつたままであることに気づくと、おそまきながら、權を持ったまま川の中へとびこんでしまった。

船室のまわりのあゆみでは、三四人の人影が入り乱れてい、一人が船室の屋根の上へとびあがり、そのあとから私服の一人がとびあがつた。あゆみを逃げまわっていた二人の内の一人は、艦の

ほうから川へとびこみ、一人は並べてもやつてあるべか舟へとび移り、それから次つぎと、舟から舟へとび移つて、見えなくなつた。これらのことは、時間にしてほぼ六七分、多くても十分はかからなかつたであろう。捕えようとする者も、逃げようとする者も、極度に緊張しているため動作がぎごちなく、見ているほうで齒の根がうずくほどまがぬけて、鈍重にみえた。たとえば追つている私服が、相手のシャツの背中を掴つかもうとする、指先は殆んどシャツに触れていて、掴んだかなと見るとき、追われている男がひよいと背中を反らす。それでもう私服の手は届かなくなつてしまふ。また、船室の屋根へ逃げたのは、あとで聞くと野口エンジンナードであつたが、彼がとびあがつたとたんに、追つて来た私服が

彼の片方の足首を掴んだ。しかしその私服は、相手の足首を掴まえたことに自分で吃驚びっくりしたか、あるいは足首を掴まえたことが信じかねたように、戸惑いをし、野口エンジニアはすばやく足首を引き抜いて逃げた、といったようなありさまであった。

「しだらもねえ」と岸で見っていた人たちの中から誰かが云った、「みんな逃がしちまつたじゃねえかえつ、まぬけな手入れがあつたもんだ」

そのとき船室の中で「きー」というするどい悲鳴が起こり、続いて、あらゆる物音が墜落的にしずまった。やかましく鳴っていたラジオのスイッチを急に切りでもしたように、物音や人声がぴたつと止り、船の上も岸の人たちもしんとなった。

「痛えよう」という泣き声が船室の中から聞えた、「おつかあ、痛えよう」

「銀公だ」と岸にいる人たちの中で船頭の一人が囁いた、ささや「いまのは銀公の声だぞ」

みんな息をこらし、期待の眼をそばめて船のほうを注視した。まもなく、三人の私服が銀公の腕を取って船室からあらわれた。

銀公は両手で頭を押え、前後を私服に挟まれて、はさ渡り板を渡り

ながら、痛えよう、死んじまうよう、とかなきり声で叫び続けた。私服は三人いたのだ。その内の一人が先に岸へあがって、そこに集まっている人たちをどなりつけた。邪魔だ、どけどけ、見世物じゃあないぞ。そう云って、右手に持った一尺ばかりの棒のよう

な物を、左右へ振った。

「十手だ」と誰かが囁いた、「見せえま、芝居で使う十手だぞ」
「おつかあー」と銀公は叫んでいた、「おら死んじまうよう、痛えよう」

二人の私服に挟まれて、彼が渡り板を渡るとき、川の上へ水でもこぼすような音がぼしよぼしよと聞えた。それがなんの音だか、岸にいる者にはわからなかったが、岸へあがつて来た銀公を見るなり、一人が度胆どぢもを抜かれたような声で「血だえっ」と叫んだ。なるほど、少年のシャツはどす黒く濡れているし、頭を押えている手の下から流れおちる血が、少年の顔半分を染めていた。

「こりやあひでえ」と他の一人が云った、「ひでえことをするな

あ、見せえま、あの血」

集まっていた人たちのあいだに、憤激の火が燃えあがった。それはそこにいる者ぜんぶの感情を一つに固め、一団の火となつて「官権」に挑いどみかかった。

「銀、おめえなにをしただ」と船頭の一人が呼びかけた、「いつてえなにをしてこんなひでえめにあつただ、えっ」

「おらなんにもしねえ」と銀公はかなきり声で叫んだ、「おらただ番をしてただけだ、おらなんにもしねえ、おら抵抗もしなかつただ」

「そうだ」と誰かが喚いた、「おんだらもここで見ていた、銀公は抵抗しなかつた、ここにゐるみんなが証人だぞ」

「おら抵抗しなかつただ」と少年は自分に対する声援に力を得て、声と身ぶりにたつぷりと効果を加えながら叫んだ、「——おらなんにも抵抗しなかつた、おら死んじまうよう、おつかあ、痛えよ痛えよう」

「歩け」と私服の一人が少年を小突いた、「おとなしくしろ」

「おら死んじまうよーっ」

「旦那方」と千本のあるじの和助が前へ出て来た、「おめえさん方あその子供をそのまま連行するつもりかえ」

私服たちは振り返った。

「その血をみせえま」と和助は続けた、「そのまま連行すれば、出血多量で途中で死んじまあだぜ」

「そうだ、死んじまあだ」とみんなが口ぐちに喚いた、「一町と
いかねえうちにおつ死ちんじまうだ、銀がそれほどの罪を犯したか
え、死げえにするほど悪いことをしたかえ」

私服たちは立停つた。三人ともすつかりあがっていて、むしろ
怯おびえていたというべきだろう、硬こわばつた顔で、眼のやりばもなく、
三人ともふるえていた。

「おらの店へ伴れて来せえま」と和助が云つた、「ちよつと手当
をして、血だけでも止めてつからいくがいいだ、さあ銀、来な」

和助は銀公の腕を取つて、店のほうへ伴れていった。そこにい
る人たちもいっしょについてゆき、三人の私服はなにか囁きあつ
ていたが、一人を残して、他の二人は誰にも気づかれないように、

小さくなつて、堀のほうへ去つていった。

銀公は縁台に腰を掛け、傷の手当をしてもらいながら、なお派手な声で叫び、泣き、訴え続けていた。

「しつかりしろ銀」と若い船頭の一人が、銀公の演技に調子を合わせて云つた、「しようばいにんが賭場とばを開帳したわけじゃねえ、友達同士が慰みにやった一文ばなだ、本署へ持つてゆかれたつて始末書を取られるか、悪くいつたつて罰金くれえで済むだろう」

「おら博奕なんかしやしなかつた」

「そうだ、いしや博奕はしなかつた」

「おら抵抗もしなかつた」

「そうだ、みんなが証人だ」とその船頭は続けた、「いしや博奕

もしねえし抵抗もしなかった、だからいばつて出るとけへ出る、こんな小さな子供にこんなけがをさせて、どつちに罪があるかはつきり裁判をしてもらえ」

「みんなに逃げられたいしばらしだろ」と誰かが云つた、「こなひでえ話はおら聞いたこともねえ」

私服は蒼あおくなつてふるえていた。彼は法律を行使したのであるが、いまやその法律が彼を指弾しけんせき譴責するよう思えたらしい。職権濫用とか、過剰処置とか、罷免とか、その他さまざま法律用語が頭にうかんでくる、といったような、絶望的な顔つきになつていた。

「さあよし」と和助が云つた、「あとは医者にやつてもらうんだ、

しつかりしろよ銀」

「おらもうだめだ」と銀公は呻き、且つ泣いた、「死ぬめえにおつかあに会いてえよう」

「よしおつかあに知らしてやるぞ」と漁師の一人が云った、「おらがすぐに突つ走つてつて、おつかあを駐在所へ連れてくからな、おつかあの顔を見るまでは死ぬんじやねえぞ」

そしてその漁師は「突つ走つて」いった。

銀公の演技を中心としたこの一幕の芝居は、少なからずあくどいものであった。それは若いその私服警官にもわかつたに違いない。けれども自分のゆきすぎた行動のために、芝居とわかつていながら、彼もまたそれに同調することを拒むわけにはいかない

ようであつた。

「いいか」と私服は銀公の顔を覗きこんで訊いた、のぞ「歩けるか」

眼がちらくらして立てねえ、と銀公が答え、すると若い船頭の

一人が、おらがおぶつてやらあ、と背中を向けてかが跣んだ。ふだん

評判のかんばしくない銀公が、いまは英雄のように、あるいは庶民を代表する犠牲者のように、人々の愛と同情を集め、尊敬心さえもかき立てていた。若い船頭の背に負われた銀公は、私服警官に付き添われて「千本」の店先から出ていった。そのあとから十五六人の人たちが、この場面の幕がどんなふうにおろされるかという好奇心のため、多少はお祭り気分のように浮き浮きと、勝手なことを高ごえに話しあいながらついてゆき、やがて堀のほうへ

と曲つて、見えなくなつた。——蒸氣河岸はまた静かになり、月の光が明るく、根戸川の水面や、対岸の家並みや、もやつてある舟などの上にふりそそいでいた。

「あのおまわりは成績をあげたかつただよ」と和助が薬箱や包帯やガーゼなどを片づけながら云つた、「根戸川亭（洋食屋ではなく堀東にある寄席）のおはまあねに惚ほれて、うまくすれば婿におさまるつもりさね」

「その縁談はきまつたんじやねえか」と倉のんなあこが暢のんびりと云つた、「おらもうきまつたように聞いただがね」

「そうかもしれないが、今夜のしくじりで危なくなつただな」と和助が云つた、「——あんまり稼かせごうと思つてあせつただ、成績

をあげようと思つてよ、可哀そうに、ああいうのを昔のことわざでぼうせき（望蜀？）の欲つていうだ」

「銀の野郎もまた」と云つて倉なあこはくすつと笑つた、「いい気になりやがつてき」

倉なあこは縁台から立ちあがつて、大きな欠伸をし、和助といつしよに店の中へはいつていつた。

長と猛獣映画

或る日、——私は船宿「千本」の長を伴れて、浅草へ映画を見にいった。たぶん大勝館だったろう、やっていたのは猛獣狩り映画で、たしか「ザンバ」という題だったと思う。思い違いかもしれないのはつきりは云いきれないが、アメリカだかイギリスだかの夫婦の探検家が、アフリカの奥地で猛獣狩りをする、という筋だったことは覚えている。

この小学三年生の、こまっちゃくれの長は、映画が始まると同時に120%まで昂奮こうふんしてしまった。彼はシートシートから身を乗り出し、両手を拳こぶしにして、頭を押え、口を押え、膝ひざを叩き、また胸へぎゅつと押しつけたりした。小さな顔は赤くなって、眼は殆んど殺気を帯び、呼吸はときに深く、また喘あえぐように激しく、もつと

もエキサイトすると拳を口に当てて息を止めた。

あらゆる画面で、彼は猛獣どもに呼びかけ、探検家夫妻に注意を与えた。

「ライオンだライオンだ」と長は喚く、「見せえま、先生、生きてるライオンだぞ」

周囲の観客はびつくりして彼を見る。ライオンは仕掛けた罠わなのほうへ歩いてゆく。

「やい危ねえぞ」と長はライオンに呼びかける、「そっちいくとつか捉まっちゃうぞ、いっちゃだめだ、ええ、だめだつてえにな、捉まっちゃうつたらな、ええライオンのばかやつら、こつちい来いってば」

ライオンは檻の罫にはいり、仕掛けの戸がばたつと落ちる。彼は拳を口へ入れ、ふるえながら眼を裂けるほど大きくみひらく。そして拳を口から出して、「ばかやつら」と、泣きそうな声で呟く、「ライオンのばかやつら」

画面の前景にしき蛇が写る。ジャングルのなにかの樹に絡みからついていて、おとなの腕ほどもある鎌首をあげ、葉の茂み越しに、向うから近づいて来る探検家夫妻を狙っている。長は息を詰め、身を乗り出して、前のシートの背を両手でつかむ。

「こつちへ来るな、危ねえぞ」と長は探検家夫妻に向つて警告の叫びをあげる、「ここにでえじや（大蛇）がいるぞ、あつちいけ」

だが探検家夫妻はおろかにも、長の警告には耳も貸さず、そのそこつちへやって来る。

「ええばかやつら」長は両の拳で力いっぱい自分の頭を挟み、がたがたふるえながら絶叫する、「でえじやがいるのも知らねえだ、ええばかやつら、吞まれちゃうだ、二人とも吞まれちゃうだ、ええばかやつら、いいきびだ、二人とも吞まれちゃうだ」

にしき蛇はさつとアタックをかけ、先頭にいた探検家の良人の腕に噛みついた。長は片方の拳を口へ突込み、肺いっぱい吸いこんだ息を止めた。私はそのとき、彼の小さな心臓がドラム罐のようにふくれあがり、大太鼓の乱打のような搏動はくどうをするのが感じられた。——周囲の観客はこの小さな正義の騎士にすっかり興

を唆そそられ、彼が画面に向つてなにか叫ぶたびに、指さしたり笑つたり、互いに小突きあつたりしたが、長はぜんぜん気づかず、肉にく躰くたい的にも精神的にも、余すところなく映画の中へ溶け込んでいた。

「みんなばかやつらだ」長は猛烈に憤慨して云つた、「虎も犀さいもばかやつらだし、あの毛唐けとうもばかやつらだ、こんなに肝煎きもいつたことありやしねえ、ええつまんねえ、出べえや、なあ、出ちまうべえよ先生」

映画館を出てから、私は彼を洋食屋へ伴れていった。彼の憤慨は少しもしずまらず、そのトンカツにもカレーライスにもけちをつけ、「蒲粕ぼくの四丁目（洋食屋）のほうがずつとうめえや」と

云った。私は一本のビールを啜りながら、「ザンバ」がいかに演出されたものであるか、ということを一概説した。

「あのにしき蛇のところを考えてみるよ」と私は云った、「あの蛇が樹の枝にからまつていたろう、いいか、その向うから探検家が来るだろう、このフォークが探検家とする、な、蛇がこのナイフだ、とするとカメラはこつちにあるこのマツチさ」

「カメラってなんだ」

「活動写真を撮影する機械さ、うう」と私は考えて云った、ここでムービー・カメラの説明をすると話がこんがらかるからである。

「機械があつて、そのまわりには撮影技師だの助手だの、たぶん猛獣使いだのもいるんだ、あ、あ」と私は長の質問を止めた、

「だから、蛇が樹にからまつてるところは、こっちの連中、つまりカメラのまわりにいる連中にはちゃんとわかっているんだ」

「どうしてわかっているだ」

「だってこのフォークとナイフのこっちにマッチがあるだろ、そしてマッチのところから撮影した画面に、手前のナイフ、いや、にしき蛇とその向うのフォーク、つまり探検家が写ってた、そうだろう、とすればマッチのところから蛇は眼の前になっていることになるじゃないか、つまり撮影技師や助手やたぶん猛獣使いなんかには、ちゃんとそこに蛇のいることがわかっているんだ」

「うん」長は少し考えてから訊き返した、「じゃあ、どうしてそいつらはあの毛唐に教えてやらねえんかい」

「教える必要はないさ、探検家のほうでもそこに蛇のいることは知ってるんだ」

「知っててどうして除けねえだ、毛唐はでえじやに食いつかれちまったべがえ」

「それはだな」と私はうまく説明しようと思った、「つまり、面白く見せるために、初めからそうするようにちゃんと相談ができているんだ」

「誰が面白がるんだえ」

「見物さ」と私は云った、「長だつて面白かつたろう」

「誰が、おんだらがかい、ちえつ」と長は鼻柱へ皺しわをよせ、軽侮に耐えないというふうに口をへし曲げた、「おもしれえもんか、

あんな肝煎ったことありやしねえ、それによ」と彼は唇を舐めた、
「あのきけえの側に誰かいて、でえじやのこと知ってるのに知ら
ねえふりしてるなんて気が知れねえや、ライオンも虎もばかやつ
らだし、毛唐もきけえの側にいたやつもみんなばかやつらだ、あ
んなよ、ばかやつらばかり出て来るかつどうがどこがおもしろえ
のかい、へっ、つまんねえ」

私は浦粕へ帰るあいだ、なんの理由もないのだが、小説の表現
技術について、あれこれと考えめぐらしたことを覚えている。――
――町へ帰ってから、長はみんなに「ザンバ」の話をして聞かせた
が、それはその映画の製作者や提供会社の人たちが、厭世観えんせいかんに
とられるだろうと思われるほど、辛辣しんらつであり無遠慮なもので

あつた。——私は二度と長を映画見物には伴れていかなかつた。

SASE BAKA

おすずは船宿「野口」の娘で、年は十七歳だつた。両親と姉が二人、弟三人の家族であるが、きょうだいそれぞれ父か母か、または祖父か祖母に似ているのに、おすずだけは誰にも似ていなかった。ここに桃を八つ並べたとすると、その中の一つが林檎りんごであるように、軀つきも顔だちも、気性までがみんなと違つていた。

——彼女のぜんたいから受ける印象は、清純、可憐かれん、初心うぶ、という平俗な成語に、ほのかないろけを加味した感じであつた。背丈は五尺一寸くらい、痩せがたできりつとしていて、肩がいたいたいほど小さく、手も足も小さかつたが、指はすんなりと先が細くなつてい、爪はいつも桃色に染まつていた。——顔はうりぎねがたであつた。その土地には珍しく、北国そだちのように色が白く、きめがこまかで、両の頬には活き活きとした血の色を浮かせ、冬のさなかでも、汗をかいているようにしつとりと湿りけを帯びていた。眉毛は細いけれども濃く、描き眉のようにはつきりといかたちをしていた。少し尻さがりの眼も細かつたが、絶えず羞はにかんでゐるような潤いがあり、人に目礼をしたり話しかけたりする

ときには、まるで恋でも語りかけるのかと思うほど、その眼の潤いが情熱的にみえた。——私もときどき道で挨拶をされたのであるが、初めのうちは自分が恋されているのではないかと思ひ、われ知らず胸がときめいたものであつた。唇は、——小さくて厚ぼつただけであつた。むしろそれだけ見ればみにくいと云つてもいいだろう、もつとも特徴があり忘れがたいのはその声で、ちよつと鼻にかかる、あまつたれたような話しぶりとその澄んだきれいな声とは、どんなに悪意をいだいた人間の心をもとろかすだろう、というほかに云いあらわす言葉がない。——こういう娘には、よほど運がよくつても一年に一度くらいしかゆきあわないものだ。美貌というだけではなく、彼女のぜんたいから受ける清純、初心、

可憐、という印象に似たものは、私自身もそれ以来まだみかけたことがないのである。

「ふん、野口のすずあまが」

貝を掘るための竹籠を作る「籠屋」のおたまが、或るとき私に向つて云つた。おたまも小学三年生であり、「千本」の長とは違つた立場で、私にいろいろな情報を提供してくれていた。

——綿屋のおつゆちゃんは十二でちよぼちよぼと生えた。

——仁作んとこのおつかあは二十三号船の平井エンジンとできちやつて、毎晩どつかへ二人でつるみにゆくだ。

——だいき（人名）のじいさまは毎晩ばあさまに手を合わせてあやまるだつてよ、とても続かねえからつてよ、ふん。

主としてそんな類いの情報であつた。

「ふん、野口のすずあまが」とおたまは軽蔑けいべつしたように云つた、

「あんなのぺつとした顔をしてえてすけべえなことつたら、夜になつてな、十二時過ぎてつから裏の戸を叩くとよ、すぐに出て来て誰にだつてさせるだ、誰にだつてよ、相手に選えり好みはねえだつてよ」

「嘘じゃねえつてば先生」とおたまは念を押すように云つた、

「だからみんなはすずあまのこと*****(注・小題参照)つて云つてるだよ」

家鴨（あひる）

私が増さんと初めて会ったのは、堀南にあるてんぷら屋「天鉄」の店であった。私は僅かな稿料がはいると、よく天鉄へいってめしを喰べた。てんぷら一人前で酒を一本ゆつくりと飲み、そのあと、その日の特にいいたねを二つか三つくらい揚げてもらってめしを喰べる。そのころ私はまだ酒に弱かったので、よほどのことがなければ二合飲むようなことはなかつたし、一合を飲むのにも一時間くらいかかったろう。必ず本を持って行って、冬ならば小さな瀬戸火鉢を抱え、夏なら団扇うちわを使いながら、本を読み読みて

んぷらを喰べ、思いだしては酒を啜る、というぐあいであつた。いま考えるとずいぶんとしより臭いまねをしたものだと思うが、天鉄の人たちとはすっかり親しくなり、ときによるとお花という娘が、「今日はいいたねがはいったから」と、てんぷらを揚げて届けに来たりした。

店は昔ふうで、土間に卓テーブル子が二脚ほどあり、鉤かぎの手に畳を敷いた座敷があつた。もちろん土間に面したほうは障子もなにもなく、客があれば薄い座蒲団を敷くだけ。膳は四角で、足のない平ひ膳らぜんであつた。

増さんは年のころ五十くらいで、背丈が低く、ひどいがに股またで、頬あごや顎あごのまわりに、いつも太い銀色の無精髭ぶしようひげを、ブラツシのよ

うに伸ばしていた。てっぺんの禿げた頭のまわりも、短くて太い、ブラツシのような疎毛で蔽おおわれていて、太陽の下ではその一本ずつがきらきらと光った。——増さんは酒持参で天鉄へ来た。じつは酒ではなく、焼酎しょうちゆうなので、一合のそれを天鉄で二合に割った。うえ爛かんをしてもらうのだが、誂あつらえるてんぷらも変っていた。くるま蝦えびにしてもあなごにしても、鯊はぜ、きす、めぐちにしても、自分は頭とか中骨とか尻尾しっぽなどを、べつに揚げさせて、それを肴さかなに焼酎を啜る。身のところを揚げたのは包んでもらって、家へ持って帰る、というのがいつもの例であった。

ここでちよつと記しておくが、数年まえ、或る出版記念会のあとで、林房雄がこの「くるま蝦の頭だけ」のてんぷらを食わせて

くれたことがあった。彼が自分で思いつき、銀座裏の某てんぷら屋に命じて作らせたのだそうで、それは豊富なカルシウムを含む極めて美味な食品であると、自分の着眼の独創的な点を大いに誇っていた。

——これを世間では捨てているんだ、と林房雄は繰返し強調した。こういうすばらしい物をさ、と林房雄は自分では箸はしを出さずに云い張った。みんな捨てているんだ、世間ではみんな捨ててしまふんだぞ、さあ喰べてくれ。

私は一つだけやってみたが、どれほどそれがカルシウムに富んでいるにせよ、とうていのみこめる代物ではないと知り、すばやくナフキンに吐き出して卓子の下へ捨て、「世間の人たちがみん

な捨ててしまおう」のは当然の理であり、林房雄は逆説を弄ろうしているのに相違ないと思った。

右のように、林房雄は自分の独創性を誇っていたが、それより二十数年以前、すでに増さんという先覚者のあつたことを私は知っているのである。私は吐き出したが、増さんはうまそうに、頭だの骨だの尻尾だの、一つ一つ丹念に噛み味わいながら、私以上にゆっくりと時間をかけて、爛をした水割り焼酎を啜るのであった。

その次には路上で会った。堀東のところで私がスケッチをしていると、一人の男が背中に初老の女をおぶって歩いて来、背中の女と、なにやらなごやかに話しながら、中堀橋を渡って去つてい

った。この土地でそんなところをみつけると、人は決して黙っていない。おとなはまあともかくとして、悪童どものからかいの好餌になることは疑う余地がなかった。だが、そこには往いき来きする人がいたし、悪童どもも遊んでい、かれらはみなその二人を認めたのであるが、爪の先ほどの関心を示す者もなく、むしろそのこののほうに私はおどろいた。その次に、同じような二人と路上で出会ったとき、女を背負っている彼のうしろ姿を見て、彼の足がとくしん流とくしん神的にまでがに股であることと、「天鉄」で魚の頭や尻尾のめかには、私は堀南にある「梅の湯」という銭湯をスケッチしていたとき、その女を背負った彼が、「梅の湯」の暖簾のれんをあげ、女湯

のほうへはいつてゆくのを見て、ちよつと眼をみはつた。

「ああ、そりやあ増さんてえだ」

蒸気河岸の「根戸川亭」で、平二郎という老人の漁師が私に云つた。平二郎は息子の嫁と寝るといわれ、そのはらいせに息子と平二郎の妻（後添いで息子には義母に当ると聞いた）が寝るといふ噂のある老人で、べらぼうに酒が強く、口もまた達者であつた。「背負つてるのはおつかあでね」と平二郎は云つた、「ああやつて背負つていつて、着物をぬがして、軀をすっかり洗つてやつて、きれいに拭いて、それから着物を着せて、うちまで背負つてけえるだよ」

私が質問すると、平二郎は大きな眼をそろそろとすぼめ、ふし

ぎなことを訊く人間がいるものだ、とでも云いたげな顔つきで私を見た。

「なんでだね」と平二郎は訊き返した、「——若えもんならともかく、あんなどしよりが女湯へへえつたつて別条なかんべえがえ、おらだつて用があればいつだつてへえるだ、女どもだつてそんなこと屁へとも思やしねえだよ」

そして、増さんはおつかあのことを決して他人に任せない。おつかあのだんな親しい者がいて、たまにはあたしが洗つてやろうと云つても、増さんはきつぱりと断わり、おつかあの軀の隅隅まで入念に自分の手で洗つてやるのだ、と平二郎は云つた。

私は高品さんの炉端でも、増さんの話をもちだしてみた。高品

さんのところではあまり収穫はなく、「昔は村一番の鼻つまみだった」とか、「あだな綽名を家鴨つて云うだ」とか、いま漁業組合で働いているが、それは大蝶の旦那が口をきいたからで、その大蝶の旦那でさえ増さんの顔は「見たくもねえ」と云っている、などという程度のことしか聞くことはできなかつた。綽名の「家鴨」というのは、彼がひどいかに股で、軀を左右にゆさぶりながら歩く恰好が証明していた。そういうわけで、増さんのことは平二郎の問わず語りでしか聞けなかつたのであるが、それはおよそ次のようなものであつた。

増さんはごく若いときから乱暴者で、信じられないほど力が強かつた。十七歳のとき米俵を左右の手に一俵ずつ持ったままで、

中堀から蒸気河岸まで、息もつかずに走りとおしたそうである。性分は短気で飽きつぽく、酒を飲むと喧嘩けんかせずにはいられないし、喧嘩をすればきまつて幾人かにけがをさせた。小学校も三年きりしかいかなかったが、それは勉強ができなかったただけではなく、先生になにか云われるとすぐ逆上したようになって、先生を殴りついたり、教室にある物を打ち壊したりするからで、先生たちは協議を重ねた結果、葛飾のほうの小学校へ転校させた。往復の船賃は学校で負担する、という条件さえ付いたそうであるが、これは「義務教育」という国家制度の形式をととのえたまでのことで、葛飾の小学校へ責任を転嫁したわけである。増さんが葛飾まで通学する筈はないし、そのまま学校へゆかないことが視学関係に嗅

ぎ出された場合でも、浦粕校の責任は問われないだろう、という深い思慮によるものであった。——増さんはそれつきり学校をやめたが、通学の船賃だけは貰った。その関係はよくわからないが、とにかく六年の卒業期まで、船賃だけはきちんと取り立てたものだ、と平二郎は自分のことのように証言した。

短気で飽きっぽい彼は、次つぎと仕事を変えながら、どんな仕事も一年とは続かず、一年か二年おきくらいに、家をとびだすようになった。どこでなにをしていたのかわからないが、徴兵検査のときも所在不明で、憲兵隊とのあいだにいろいろ面倒なことがあった。一年おくられて検査を受けたとき、背丈が規定の寸法に足りないため兵役をまぬかれたが、徴兵官はくち惜しさのあまり膏^あ

ぶらあせ

汗をながし、「こういう人間をとらないでどんな人間をとるんだ」と云ったそうである。

増さんは二十三の年に結婚した。相手は貝の罐詰工場で働いていた娘で、名はきみの、年は十八歳であつた。東北の生れであるが、両親に死なれたので、浦泊にいる遠い親類が引取つたのだという。その親類は漁師をしていて、子供が八人もいたため、きみのも十二の年から働かなければならなかつたし、また家族の人たちにもあまり好遇されず、増さんとの結婚も本人は知らなかつた。増さんが一円紙幣を五枚見せたら、これからすぐにでも伴れていってくれ、と云ったそうである。

「あのおつかあはそれを聞くと肝うつぶしてとびだしちまつただ」

と平二郎は云った、「なにしろおめえさん、村一番の乱暴者で鼻つつまみだつたからねえ、——みんなはきつと死ぬ気だべえつて、えれえ騒ぎをしたもんだよ」

きみのはどこかの警察に捉まつて保護され、増さんがいつて引取つて来た。

二人の結婚生活はごく平凡に過ぎていった。結婚してからもきみのは大蝶の工場へかよつていたし、増さんもなんとなく大蝶へ出入りをして、雑役のようなことをしたり、旦那が猫にいくときは供もした。平凡な結婚生活は三年ほど続いた。むろんそのあいだにも、増さんの行状は変らなかつた。酒を飲むと暴れるし、誰かと口論をしたり、殴りあいをしたりしない日はなかつた。或る

とき大蝶の工場のほうの支配人が、おまえのようなやつはもうくびだ、と怒った。増さんは鼻の先で笑った。

「冗談を云いなさんなつて、増さんはえへら笑いをしたつてえだ」
と平二郎は云った、「おらあ好きで大蝶の仕事に来ていゝるんで、雇われてるわけじゃあねえ、雇われてもいねえ者をくびにできるかつてよ」

そこで支配人は旦那にそのことを告げた、すると旦那は、あいつはおれの命の恩人だから好きなようにさせておけ、と云った。命の恩人とはどういうわけなのか、旦那はその理由を云わなかつたが、支配人はひきさがるよりしかたがなかつた。そんなことのあるあつた前後から、増さんの女房いじめが始まつた。結婚の話が出

たとき、どうして逃げたのか、というのが手をあげるきつかけであつた。ほかに男がいたのだろう、正直に云つてしまえ。そう喚きながら殴つたり蹴^けつたりする。きみのはただあやまるだけであつた。逃げたのはわけもなく怖かつたからで、もちろん男などはいなかつた。それは誰でも知っているし、おまえさんもよく承知している筈だ。逃げたのは悪かつたからあやまる、「どうか勘弁しておくれ」とあやまるだけであつた。どんなにひどいめにあわされても、決して大きな声をだしたり、身を護るとか、逃げるなどということはしない。両手で頭を抱え、足をちぢめて、増さんのするままになつていた。

「おら隣りにいただよ」と平二郎は云つた、「いまでも隣りだが、

そのじぶんも隣りにいたからよく知ってるだ、幾たびか止めにつたこともあつた、なにしろ殴つたり蹴つたりする音が筒抜けに聞えるだからね」

だが平二郎は止めにゆくことをよした。止めにゆくと却つて増さんは逆上し、おれに赤恥をかかせたと云つて、もつとひどくきみに暴力をふるうからである。——きみのは軀にいつも痣あざの絶えまがないため、銭湯にゆくことができず、冬でも狭い勝手で行水を使つていた、ということであつた。

そのころからまた、増さんの出奔癖もぶり返した。なにも云わずにひよいといなくなつたまま、ときには半年、ときには二年くらいも帰つても来ず、手紙もよこさないのである。帰つて来るの

もまったく突然であつた。まるで朝でかけた者が夕方に帰つて来た、といったようすで、家へはいるなり、（きみのがいれば）

「めし」とか、「酒」とか云う。きみのが工場に出ているときだと、山崎屋という酒屋で立ち飲みをしていて、きみのに、「錢を
持つて来い」と使いを出すというぐあいであつた。

夫婦には子供がなかつた。増さんが道楽のあげく悪い病氣にかかつて、そのため子が生れないのだといわれたが、きみの自身はそれだけがせめてもの儲けもうものだと、平二郎のかみさんに云つていたそうである。

こういう生活が二十年以上も続いた。そうして増さんが四十五歳の年、——というのは平二郎と同年代からはつきり覚えている

のだそうだが、——一年ばかり出奔していた増さんが、帰って来るといきなり、きみのを殴ったり蹴ったりした。帰って来て、家へはいるといきなり始めたのであった。——留守のあいだに男を作った、ちゃんと聞いて来たと言うのが理由で、いちど途中で焼酎を買いにやり、それを飲んでからまた始めた。

「あんまりひでえんでよ、おら聞いていられなかつた」と平二郎は云つた、「もう夜の十時くれえだつたが、おつかあやがきを伴れて外へ出ちまつただ、うちのおつかあは駐在へ届けべえつて云つただよ、そんなことをしてみろ、あとが恐ろしいだぞつて云つて、おらたちは蒸気河岸までいつて一時間くれえもぶらぶらしてえただ」

かれらが家へ帰つてみると、隣りの騒ぎはもうしずまっていた。平二郎は、増さんがきみのを殺してしまったのかもしれない、と思つてがたがたと軀がふるえた。ところが、ふしぎなことにその夜かぎり、増さんが別人のように温和しくなつた。——きみのは殺されはしなかつた。明くる朝そつと、平二郎の家の勝手口へ来て、濟まないがお米を少し貸してくれ、と云つた。眼のまわりに青痣ができてい、顔ぜんたいが腫はれあがり、片方の足を痛そうにひきずつていた。あとでわかつたのだが、きみのはそのとき左の足の骨を折つていたので、隣りとはいえよく歩いて来られたものだ、と、医者が云つたそうである。——足の骨折で、きみのは工場へ勤めにゆけなくなつた。医者が呼ばれて来たときは、折れた骨

のあいだに肉がくい込んでいて、手術をしてもどうにもならないと診断された。医学的にどういう症状なのか、詳しいことはわからないが、それ以来きみのは家でやれる内職を始めた。土地が土地だから内職といってもそう多くはない、漁師の仕事着であるぼったとか、赤ん坊の着物など、簡単な縫い物を安く引受けるぐらいがせいぜいであつた。ぼったとは端切を縫い合せるもので、ぼろ布と端切さえあれば誰にでも出来る物であり、しかしどこの家でも主婦はそれぞれ稼ぎ口があるので、縫い賃が安ければ他人に頼むほうが、経済的には有利だったのである。

増さんはまた大蝶へかよい出した。もう若旦那の代になつていて、若旦那といつても年は四十がらみだったが、亡くなつた大旦那

那から聞いていたのだろう、若旦那も鉄砲射ちが好きで、その季節になつて獵にでかけるとき、増さんにお供を命じたが、増さんはそのたびに断わり、どうしてもいっしょにはゆかなかつた。それについて増さんは一度だけ「大旦那のときに大きなしくじりをやらかしたから」ともらしたそうである。かつて大旦那は増さんのことを「命の恩人」と云つた。増さんが「大きなしくじり」と云つたのはそのときのことをさすらしい。二つの言葉はまるで反対だし、実際になにがあつたかはわからずじまいだったが、若旦那もしいて供をさせようとはしなかつた。

相変らず酒は飲むけれども、増さんは決して酒乱にはならなかつたし、喧嘩などもしなかつた。大蝶の工場で雑役のようなこと

をやっているうちに、大蝶の若旦那の口ききで、漁業組合へ勤めるようになった。——もちろん妻に乱暴するなどということはない。きみのは完全な跛びっこになったため、水汲みずくみや薪作り、買物などは増さんが引受けた。そればかりか、まえに記したように、銭湯へ背負つてゆくようにさえなつた。

「人間があんなに変わるものかどうか、おらもう自分がばかにでもなつたようにたまげけえつたもんだ」と平二郎は云つた、「——それでな、或るときおら増さんに訊いてみただよ、おめえもずいぶん變つたもんだ、まるで増さんじゃねえみてえだぜつてよ」「すると増さんはえへら笑いをして、こう云つただよ」平二郎は続けた、「——東の養魚場の旦那とここで鶏を五十羽も飼つたこ

とがあつた、そのとき旦那が牝鶏めんどりに家鴨の卵を抱かしてみた、その卵がけえつて、ほかのひよこといつしよに育つたが、家鴨の子は家鴨だべえさ、ちよつと育つと養魚場の池の中へへえつて泳ぎだしただ、——牝鶏だのほかのひよっこはびつくらしたんべがね、家鴨の子はいつかきつと家鴨になるだよ、いまのおらが本当のおらだよになあよ」

平二郎老人の話は以上のようなものであつた。

私は「天鉄」で増さんを見かけるたびに、だんだんと親しい気分になり、ちよつとふところおこに余裕があると、ビール一本とか、酒一本ぐらいを奢おごつたりした。増さんはわるく遠慮をせず、すなおによるこんで受け、自分の皿にあるてんぷらを「摘つまんでくれ」

と云つてすすめたりした。例の鯨やきすやめごちやくるま蝦などの、頭と尻尾と骨だけのてんぷらである。そのとき私が喰べていたら、林房雄の逆説などには乗らなかつたろうと思うが、私はどうしても箸を出す気にはならなかつた。——こういうふうにして、親しく口をきくようになってから、私は彼に向つて「おかみさんを背負つて銭湯へゆくのはたいへんだろうが、見ている者にとつてはまことに心あたたまるものだ」というような讃辞を述べた。すると増さんはいつとき眼を伏せ、銀色の短くて太い疎毛の生えた頭を、かすかに左右へ振りながら長い太息といきをした。

「つまらねえ、あんなことつくれえなんでもねえだよ」と増さんは云つた、「このおらがおつかあにしたことに比べれば、あんな

ことつくれえ蠅はえの頭みてえなもんだ」

「先生は知るめえがね」と増さんは続けて云った、「おつかあを
跛にしたなこのおらだ、おらがこの手でやったこつた、——この
手でおつかああの髪の毛をつかんで、うちの中じゅう引摺ひきずりまわし、
殴つたり蹴つたりした、まるつきりきちげえになつていただな、
足をあげて踏んづけたら、おつかあすねの脛の骨が折れちまつただよ」
私は黙つて聞いていながら、それはたぶん平二郎が妻子を伴れ
て、蒸気河岸へ逃げだしたというあの晩のことだなと思つた。

「おら骨を折つたとは知らなかつただ」と増さんは続けていた、
「ただ、おつかああのやつが妙な声をだしたんで、ひよいと手を引
いた、するとおつかあが倒れたまま、おらのことをじつと見あげ

ながら云つただ、——どうか殺さねえでくれ、つてよ」

増さんは恥ずかしそうに眼をしばしばさせ、右手で、銀色の無精髭の伸びた顎を擦さすった。

「どうか殺さないでおくれつて」と増さんは少しまをおいて云つた、「おらを見た眼つきと、そう云うのを聞いたとき、おらそれまでに自分のしてきたことを、洗いざらい一遍に見せられたような気がしただ、なんもかんも一遍によ、——まさか嘘かと思うかもしれねえが、おらそんなとき男泣きに泣いちまっただよ、がきみてえになあよ」

私は嘘だなどとは思わなかった。嘘どころではない、私には増さんを見あげた妻女の眼つきや、その哀訴の音が、現実に聞える

ように思えたくらいであつた。私のふところにそう余裕はなかつたが、増さんにもう一本酒を奢らずにはいられなかつた。

あいびき

私は青べかを三つ^{いり}へ漕ぎ入れ、川やなぎの茂っている、土堤^{どて}の蔭のところ^{ふな}で停めて、鮒を釣りにかかつた。——そこは沖の百万坪の端に近く、土堤の上を通る人も殆んどない。晩秋の午後の陽があたたかく、そよ風も吹かず、水路の水は眠つたように静か

で、澄みあがった空と雲とをはつきり映していた。——例によつて釣りの腕前は知れているから、小さなきんこと称する鮒を三尾に、やなぎつ鮠ぼやを五尾ほどあげると、それでくいが止つてしまつた。場所を移して釣るほどの気持もなかつたし、陽のあたたかさ、周囲の静かさが氣にいったので、私は青べかの中で横になり、軀を楽にして、持つて来た本を読み始めた。

本を読み始めはしたが、いくらも読み進まないうちに眠くなり、陽の光を除けるために、ちよつと顔へ本を伏せたと思つたが、そのまま眠つてしまつたらしい。どのくらい経つてからだろう、眼をさますと、すぐ近くで人の話す声が聞えた。私は起き直つて本を閉じ、釣竿つりざおをあげて帰り支度にかかったが、ふと、その話し

声にひきつけられて手を止めた。

「よう、いいじゃねえかよ、なあ」と若わかしい男の声がなにかをせがんでいた、「なあつてば、なんでもありやしねえだからよう」

「よしな、まあ」と女の拒む声があった、「おらそんなこと知らねえもの、ええ、よせつてばあ、悪いことすんならおらけえるだ」
「とくあねが病気になつただつて」と男の声が云つた、「きんのかえつて来たつてほんとかよ」

「おら知んね、ああ知つてる」女の声は少しやわらいだ、「流産してつからあんべえが悪いだつて、暫く家しばらで養生するよな話だつけど、いやんなつちやう」

「なにがよ」

「女がよ、お産だの流産だのつて、苦しいめにあうのはいつも女だ、ひん」慥たしかにそのとき女は「ひん」という声をだした、「ああ、いやだ」と女の声は続けた、「世の中に男つてもものがいつから女が苦しむだ、男なんかみんないなくなればいいだ」

「女だつて苦しむだけじゃねえだよ」と男が云つた、「そうじゃねえだよ」どうやら彼には反論がみつからないとみえ、また話を變えた、「中堀のみよつこが足を挫くじいたつてことを知つてつか」

「知つてなくつてさ、みよつこは、——よしな、まあ、いけ好かねえ」

「痛えな、そんなことしなくつてもいいじゃねえか」

「よわ虫、なにさこんくれえなこと」

「痛えつてば」

そこでちよつと声かとだえ、口笛のような妙な声が聞えた。なんの音かはすぐにわかった。芒すすきの葉を横にして唇に当て、中ぐらの息で吹くのである。草笛とは違うが、単純な田舎めいたせんし顫せんし震音んおんが出るのだ。恋をさそいかけている若者にしては、子供っぽいことをするな、と私は思った。女がそんなことをよろこぶ筈はない、まもなく「あああ」と女が退屈の声をあげ、男は芒笛をやめた。

「おめえさつき女ばっかり苦しいめにあうつて云つたつけが」と男が云つた、「それがわかつていてどうして嫁にゆく女が絶えね

えだえ、嫁にゆくめえにだつて、男をこしらえる女は数えきれねえくれえいんじやねえか」

「そりやあみんな男が悪いからさ、男がうめえこと云つて騙だますから、つい本気んなつて苦しいめにあつちまうだ、昔つからいつも男が悪いために」

「りようは新しいべか舟を買つただな」と男が云つた、「元のべか舟はじいさまの代からのもんで、浦粕一のぶつくれ舟だつけどが」

男は次に散髪屋で湯沸し器を買つたことや、消防組の組員の変つたことや、どこそこの誰かがどこそこへいったとか、その場の空気とはまつたく無縁な話を、続けさまにきりもなく並べた。そ

うして、女が聞きくたびれたと思われころ、また急に恋のくどきに戻った。

「女が騙されるって云うけれど、そりやあ男が騙すんじゃねえ、女が騙されるようにできてんからだべえ」

「女がどうできてるって」

「女の軀にやあ男と違ったきけえがあんだ」と男が云った、「どんなきけえだっていつも使ってるか、油あさして掃除をしなけりやあ錆びさつちまう、女のきけえだって放つとけば錆びついて使ひものにならなくなるだ、だから」

「だから錆びねえように騙されるっていうのけえ、ひん」と女が云い返した、こんども間違ひなく「ひん」と聞え、女はさらに続

けた、「錆びねえようにまちように掃除のできるきけえを持つて
る男がいたらおめにかかりてえよ」

恋の囁きにしてはあまりに率直すぎると読者の中には疑惑をい
だく向きもあろうかと思うが、彼女が率直すぎることよりも、む
しろ浦粕ではこんな根気よく、恋のさそいかけをすることのほ
うが稀まれなのである。そのとき私は、男の正攻法に対して敬意を感
じた。

「ためしてみつか」と男が云った、「まちように掃除ができねえ
かできつか、ためしてみねえじゃわかりやしねえや」

「よせつてばな、まあ」

「痛え、おお痛え、ひどえことすんな、ま」

「いやなことすつからよ」

「いしや爪が生えてんな」と男が云つた、「よしこは小指の爪をいつも伸ばしてんだな、こんなにも長くよ、どういうつもりだかさ」

それから伝なあこが蛇を食つたとか、東の養魚場で池の上いちめに網を掛け、それは鴉からすとびや鳶とびをふせぐためだが、養魚池は三千坪もあるから、網だと云つても安い金ではあるまい、などという話をした。

「ああ聞きたくもねえ」と女がやがて欠伸あくびをして遮ささえぎった、「そんな話するために、わざわざこんなとけへおらを呼んだだけかい」

「そんだっていしがおらの云うこときいてくんねえじゃねえかい」

「それでそうやって饒舌しやべってるだか」と女が云った、「そうやって饒舌るだけ饒舌ってれば、いまにおらのほうから手でも出すと思ってるだかえ、ひん、つまんねえ」

「おら、この気持を知ってもらいたかっただよ、おらの本当の気持をよ」

「散髪屋の湯沸しだの養魚池の網だのでけえ、あああ」と女が云った、「おらけえるべえ」

男が慌てて女を呼び止めたが、女は返辞もしずに土堤へあがって来、そのままさっさと根戸川のほうへ歩み去った。——私が川やなぎの蔭から見ると、それはまだへこ帯をしめている、十五か十六くらいの少女であった。男はもそもそと、少女のあとを不決

断に追つていったが、その男は二十五か六で、罐詰工場の工員のように感じられた。——彼はおそらくよその生れであつて、この土地での恋のやりかたを知らなかつたのであろう。それとも気が弱いだけだつたのか。いずれにせよ、少女が怒つて歸つたのは、男があいびきの目的に対して勇敢でなかつたからに相違ない。私はそんなことを考えながら、歸り支度にかかつた。

毒をのむと苦しい

私が晚めしのあと、独りで酒を啜っていると、窓の障子を外からあけて「喜世川」の栄子が覗いた。

「障子に先生の影が映ってたのよ」と栄子が云った、「あら景気がいいじゃない、あがらしてもらおうよ」

私は隠しそこねた一升壇に向つて顔をしかめてみせた。それは高品さんから貰つたものであつた。まったく酒の飲めない高品さんが、どこかからなにかの祝いで、一升壇を三本おくられ、二本は炉端の客用にしたが、一本を私に呉れたのであつた。私もそのころはまだ初心級で、一度に二合とは飲めなくせに、飲みたくなつたときには一合買いをする、という経済状態だったから、一升壇が手許にあるということは、その豊かさや幸福感の心理的効

果だけでも計り知れないものがあつた。そこへ栄子があらわれたのである。「喜世川」というのは小料理屋で、これは幾たびも記したようにごつたくやと呼ばれ、料理や酒よりも、女中たちによる特殊サービスを本業としてゐる店であり、栄子もその一人であつたが、典型的な一人というほうがよりわかりやすいと思う。――彼女は表からあがつて来ると、小さな安物の茶筩ちやだんすをあけてり、そのあいだ休みなしに饒舌り続けながら、たちまちのうちに膳ぜん拵ごしらえをしてしまった。私は机に向つて、自分で釣つた鯊さの煮浸しの小皿を脇に、本を読みながら飲んでいたのであるが、こうなつては栄子にさからつてもむだと思ひ、その折りたたみの古ぼけた膳の前へ坐り直した。栄子は「冷ひやのほうがあとまできいて

いい」と云い、一升壺からじかに湯呑へ酒を注いだ。私はそれを見て、自分の爛徳利だけは確保しなければならぬと決意し、それを自分の前へしつかりと据えた。

栄子は景気の悪い日が半月も続くことを嘆き、これは世間の男どもに甲斐性かいしやうがないためであるのしと罵り、こうみえてもあたしは江戸っ子であると、山形か福島あたりの訛なまりで云った。私がここで福島か山形あたりの訛りだというのは、「喜世川」にいる他の二人の女性から聞いたので、私自身にはどこの訛りかまったく不明であつたが、栄子の云うように「東京のまん中の神田っ子」の言葉でないことだけは慥かであつた。

「あたし心中したことがあるのよ、先生」と栄子は云った、「飲

ましてね」

もう何杯も飲んでいるのである。私が質問すると、栄子は湯呑のふちを舐めた。厚いうえに信じがたいほど長い舌であった。

「嘘じゃないよ、松の家のかあさんに訊きいてみなさい、あたしが松の家に行ったときのことだからよく知ってるよ」と栄子は云った、
「その話をすつからさ、根戸川亭からなにか取ろうよ、ねえ、景気つけちやおうよ先生」

私が答えると栄子は舌打ちをし、下唇を突き出しながら湯呑へ酒を注いだ。

「どっこも不景気なんだね、やんなつちやう、こんなだといつそまた心中したくなつちやうわ」と栄子は云った、「岸がんと心中

したのもちようどこんなてえな不景気の続いたときだよ、話しちやおうか、え、先生」

こういう場合には私は無関心をよそおうことにしている。この種の女性たちはいちように嘘言癖きよげんへきをもっていて、その身の上話の九分九厘までは作りごとであり、読んだ小説か母もの映画のバリエイションときまっていた。ところが、こちらで興味を示さず、聞きたくないふうをよそおっていると、約三〇パーセントぐらいの割合で、本当の身の上を語りだすことがあった。

私は気乗りのしない口ぶりで質問し、栄子は肩をゆさぶった。

「先生もわかりきったこと訊くわね、このとおりあたいは生きてるよ」と栄子は云った、「飲ましてね」

私は黙つて自分の酒を啜つた。

「あたいはあつとしたことが好きなのよ」と栄子は云つた、「めしだつて鬼の牙きばみたいにはりつと炊たいたのをさ、沢庵たくあんかなんかでざくざく茶漬にして搔かつこむのが好きさ、やわつこいめしだのおじやなんぞ大つ嫌いさ、だからばあつと心中しちやう氣になつたのよ」

私はまた冷やかに訊いた。

「ああそのことか、ふふう」と栄子は鼻へぬける妙な笑いかたをした、「わかつてるじゃないの、あたひこうしてここに生きてるんだもの、死ぬつくらい心中しちやつたら生きてられやしないでしよ、しつかりしてよ先生」

私はしつかりして、口をつぐんだ。

栄子は話しだした。——その出来事は五年まえの十月だったという。相手の男は岸がんと呼ばれ、華やかな病氣専門の売薬で名高い「峰岸屋なにがし」という店の外交員であった。岸がんの「岸」は本舗の峰岸の一字であり、がんちゃんというのが男の名であるが、がんとはどういう字を書くのか、また「がん太郎」であるか「がん造」であるのか、栄子はまったく知らなかった。——あとで私がその点を糺ただすと、栄子はうるさそうに云った。

「心中するんだからって、名前を知ってなくつちやならないってもんじやないでしょ、寄留届をするんじやなしさ、つまんないとこへ水を差さないでよ」

岸がんとは半年ほどの馴染なじみだったという。年は二十八だと云っているが、栄子の見たところでは三十二歳より下ではなかった。逞たくましく陽焼けのした、にがみばしかったいい男であり、栄子の馴染なじみときまつたときには、浦粕じゅうのごったくやの女たちみんなが嫉妬しつとのあまりやけくそみたようになったそうである。——岸がんは赤いオートバイでやって来た。店名を派手に白抜きで書いた車で、「ガスをひるときの音がすてきだった」と栄子は云った。排気音のことをさすらしい、私はあぶなく笑いそうになり、酒にむせたようなふりをしてごまかした。

岸がんは金使いが上手だった。来るとまずしようばいを片づけ、堀東のおでん屋で酒を飲み、そこから栄子を呼ぶ。「松の家」は

堀南だが、歩いて五分とはかからない。ごつたくやの習慣として、よその店から女を呼ぶと一時間ながしかの玉ぎよくだい代を取られるが、女にとっては一種の誇りになる。つまり、玉代を払っても早く逢いたいほど深い仲だ、と思われるのだそう、岸がんはそういう女の気持をよく知っていた、ということであった。

半年あまり経った或る夜、岸がんはじかに「松の家」へあらわれた。あのガスをひるすてきな音も聞えなかつたし、着物姿で、素足に古びた雪駄せったをはいていた。訊いてみるとオートバイではなくバスで来たのだそう、五日もはらくだしをしたあとのようにげっそりとしていた。そして二人つきりになり、一本の酒も飲み終らないうちに、「おれといっしょに死んでくれ」と云いだした。

「初めに岸がんの顔を見たとき、あたいははあんて思ったわ、そして死んでくれて云われてまたははあんって思ったのよ」と栄子はそろそろ酔いだした口ぶりで云った、「飲ましてね」

岸がんは店の金を五〇〇も使い込んだのであった。彼には妻もあり子供が三人もいたが、栄子のことが頭にきて、つい知らず店の金に手をつけた。はじめは五か一〇くらいで、それは集金の操作でうまくまじくなったが、一〇が一五となり一八となるうち、ますます栄子に熱が上がり、ここが男のみせどころだと、すっかり太っ腹になってしまった。——そうしてついに、その金額が五〇〇という高額に達し、支配人に発見されて返済を迫られた。

——金を返さなければ訴える。

支配人は七十幾歳にもなるのに、まだ頭の毛がまっ黒で青年のようによさよさしていたし、眉毛も黒く、幅が三ミリもあるかと思われるほど太かったが、その太くて濃い眉毛をぴくぴくさせながら、やさしい声でそう云い渡した。岸がんは駆けずり廻ったが、借りられる額はせいぜい二〇〇で、あとの三〇〇はどうにもひねり出しようがない。支配人は全額を要求するし、できなければ手がうしろへまわる。それでは妻子にも世間にも顔むけがならないうえに、かたときも栄子とはなれては生きられないから、いつそ二人で死ぬ決心をした、と云ったそうである。

「あたいはあんと思つたよ、きたなつて思つちやつたよ、ははあんきたなつてき、わかるでしょ先生」と栄子が云つた。

私が答えると、栄子は鼻で笑った。

「わかんないかな、あたいの軀だよ」と栄子は動物的に張りきつた胸を叩いてみせた、「そんなこと云えばあたいがくしやつとまいつてさ、くらがえしてでも三〇〇ぐらいのお金は拵こぎえるだろう、つて見当つけて来たんさ、子供騙だましだよまつたく」

そのときは栄子自身も不景気で、にっちもさっちもいかない状態だった。雑貨屋や銭湯にまで借りが溜たまっていたから、そのわけを話していっしょに死にましようと言った。彼女たちのあいだでは「心中」という言葉は愛情の極致を示すものであり、誰でも一生にいちどはやってみたいとあこがれるものだ、と栄子は云った。——岸がんは思い詰めたような顔をしたそうで、それなら催

眠薬の強いのを持って来るから、それをのんで死ぬことにしよう、あさつての晩に来るが心変りをしないように、と云った。栄子は催眠薬なら自分がドイツ製の持っている、あんたはあんたの分だけ持つてくればいい、と答えた。そんな物をどうして持つているんだ。まえに自分の友達が自殺したとき、残りを隠して置いたのだ。ドイツ製のなんとという薬だ。忘れたけれども白い粉薬で衣服のむと死ぬるのだ。そんな問答をして、その夜は別れた。

「たぶん来やしまいと思つたわ、でも念のためだと思つて薬だけ拵えておいたのよ」と栄子は云った、「かあさんが頭痛薬のノーポンをのんでたでしょ、それを一服しつけえしちやつて、それにメリケン粉を少し混ぜたの、ノーポンで薬は白くつて、ガラスを

粉にしたみたいにきらきら光るのよ、それがメリケン粉と混ぜたものだから、とつても強い催眠薬みたいに見えたわよ」

私が質問すると、栄子は片方の肩をぴくんと突きあげた。

「そんなことわかりきってるじゃないの、あたいは借りがほうぼうに溜まつてるでしょ、だから心中したってことになれば、みんな同情して、そんなようなわけなら貸しは待ってやろう、つてことになるわよ」と栄子は云った、「そうでしょ」

要するに偽装心中をたくらんだのである。栄子は岸がなが来ないかもしれないと思つたが、岸がんは約束どおりやってきた。彼は晒し木綿の肌襦袢はだじゅばんと白いさるまたを見せ、死に装束だ、という意味のことを云つたそうである。襦袢もさるまたも既製品で、

一と五〇くらい出せばどこでも売っている品物だそうであった。

「来たのは九時ごろかしら、ずっと不景気が続いたときで、うちには一合の酒もないのよ」と栄子は云った、「岸がんにそ云つたら、今夜は心中する晩だから少し都合して来たつて、一円さつを三枚も出したじゃないの、あたいやつぱり大川に水絶えずだなつて思つちやつたわ」

彼女は自分が酒と肴を買いにいった。一と二〇で酒を一升買い、〇・三〇で干物とうぐいす豆と佃煮つくだにを買い、残りはかあさんに渡した。するとかあさんは悦えつにいつて、岸がんのことを福の神だねえと云つたそうである。

「それから二人で飲みだしたんだけど、これから心中しようつ

ていうばやいでしょ、いくら飲んだって酔やしないわ」栄子はおくびをして続けた、「いろいろ思い出ばなしをしたり、親きようだいのことや、お互いに運の悪い生れつきのことなんか話しあつたでしょ、二人ともすつかり身につまされちゃってさ、しまいは抱きあつて泣いちやつたわ」

十一時に店を閉めた。ほかには客が一人もなく、かあさん夫婦も女たちも寝ついた。そこで岸が「やろう」と云いだした。十二時過ぎたところで、栄子はもう少しその気分浸っていたかった。これで心中するのかと思うと、酒の酔いとはまったく違つた、なんと云つていいかわからない酔いごちと、止めようとしても止らない甘い涙とが、そのまま終るにはいかにも残り惜しかった

のである。岸がんはさすが男のことで、こんな話をすればするほどみれんな気持が起こる、このへんできまりをつけようと主張し、持って来た催眠薬を出した。そこで栄子も諦め、あきら拵えておいた薬をハンド・バッグの中から取り出した。そのときになってふと、見せろと云われはしないかと心配した。なにしろ男は薬品の外交をやっていたのだから、見られたらばれるに違いないからである。しかし岸がんはなにも云わず、湯呑に水を注いで自分から先にあるんだ。栄子も「負けてはいられない」と、同じ湯呑に水を注いで薬をのんだ。

「それから寢床へ横になつて抱きあつて、またさんざん泣いたわ」と栄子は云つた、「あとは話さなくつてもわかるでしょ、心中す

る人間は死ぬまえに一生分もたのしむって、あれはほんとよ、あたいこむら返りを起こしちやったわ、先生つたら、飲ましてよ」

いつか眠ってしまつたらしい、変な声で眼をさますと、岸がんが苦しんでいた。大の字なりにのびたまま、しきりにげっぷうをしていた。栄子のはつきり眼がさめ、すると恐ろしさと苦しさとではね起きた。

「あたし心中したんだと気がついたら、胸の奥のところが焼けるように苦しいの、岸がんはのびたままげっぷうをしているでしょ、大変だと思つたらあとは夢中で、はだしのまま駐在所へ駆け込んじやったわ」

私が問いかけると、栄子は憐れあわむような眼で私を眺めた。

「毒をのめば苦しいにきまつてるじゃないの、わからずやだな先生は」と栄子は云った、「それは本当はノーポンとメリケン粉を混ぜただけだけどさ、人間は気持のもんでしょ、人間つてもものは気持のもんなの、わかつて」

私は自分の酒を啜った。

若い巡査は狼狽ろうばいした。同僚を起こし、分署に電話をかけ、医者のところへ走った。医者が来たとき、栄子は苦しきのあまり胸を搔むしき、つたり、叫び声をあげながらのた打ったりしていた。すぐに白い泥水のようなものを飲まされて、むりやり口へゴム管を入れられ、ポンプみたような機械で、胃の中の物を吸い出された。それを三回ほど繰返されたが、死ぬかと思うほど苦しくって、医

者の手首へ噛みついたそうである。——このあいだに巡査の一人は「松の家」へ臨検にいった。うちではなにも知らず、みんな暢のんき気に寝ていたが、巡査に叩き起こされ、わけを聞いて仰天し、巡査といっしよに岸がんのようすを見にいった。ところが寢床はからっぽで岸がんの姿は見えない、彼の草履もなくなっているので、苦しきのあまり外へ出ていったのだらう、ということになった。そこで消防組員が起こされ、提ちようちん灯ちんがつけられ、手分けをして捜しにかかると、蒸気河岸の棧橋の端のところに、揃そろえてぬぎ捨ててある草履が発見された。——栄子は病院へ移されていて、詳しいことは知らなかったが、岸がんは身投げをしたに相違ないという結論に達し、十幾はいかのべか舟が根戸川へ漕ぎ出された。

岸がんはみつからなかった。死躰は海へ流されたのだろう、数日にわたって海も搜索された。このあいだに、警察電話で連絡し、彼の勤めている薬品商店へ事故を知らせたが、店ではもう解雇したというし、住所をしらべると移転したあとで、移転先は不明だということであった。

栄子は警察で訊問じんもんされたとき、「むり心中をされた」と答えた。そこが彼女の知恵のあるところだと自慢したが、知らずに毒をのまされたと云えば、岸がんが死んでも自分は罪にならないのだそうで、二週間ばかり留置場へ入れられただけで釈放された。田舎のことではあるし、時代も暢びりしていたので、栄子の胃から吸い出した「毒薬」はべつにしらべられもせず、岸がんの死躰

は発見されないままに、「松の家の心中」という評判だけが残り、そのためひところの栄子は浦粕じゅうのにんきを一人占めにしたそうであつた。——彼女は紙に岸がん様と書いて、それを位牌いはいとみたて、世間でにんきのわいているあいだは、欠かさず線香をあげていた。だが、にんきなどというものはかないもので、五六十日も経つともう誰もその話をしなくなり、みんな「そんなことがあつたかしら」といったような顔をするようになった。

「ここまではいいんだけどさ、——聞^きいてるの先生」と栄子が云つた。

私は答えて、自分の酒を啜つた。

「そんな気のない顔をしないでよ、これからくやしい話になるん

だから」と栄子は酒を呷あおって咽むせ、咳せきこみながら二つも三つもくしゃみをし、涙と水みずばな湧なをたらし、それを浅草紙で乱暴に拭いてから、「こんちくしよう」とどなった。二つ以上くしゃみをしたときには、そう云わないと風邪をひくのだそうである。栄子はお咳をして、喉の調子をととのえてから云った、「——くやし
いじゃないの、岸がんのやつ生きてたのよ」

話のようすで、私もそんなことではないかと想像していたが、むろん口には出さなかつた。

それからまる一年経つた或る日、堀東のおでん屋へ一人の男が飲みにはいつた。くたびれた背広を着、鞆かばんを持ち、烏打帽をかぶっていた。夕方のことで、漁師や船頭が四五人飲んでいたけれど

も、誰もその男に注意する者はなかった。見慣れないよそ者が来るのは常のことだし、自分たちに利害関係のない限り、そんな者に気をとられるような習慣はなかったからだ。——男は烏打帽のひさし庇をひきさげ、顔を隠すようにして飲んでいたが、やがて隣りにいた船頭の一人に話しかけた。去年この土地で心中事件があつたそうだが、と訊いたのである。訊かれた船頭は首を振つた。知らないのではなく、すっかり忘れてしまつたらしい。すると男は躍起になつた。

「松の家の女ですよ」と男は云つた、「ごつたくやの松の家の女で、名前は慥かお栄とか栄子とか聞きましたかね、ええ慥か薬の外交員と心中したとかつて」

その話を漁師の一人が聞き咎とがめた。そしてその男の顔をひそかに覗いて見ると、びつくりして駐在所へ走っていった。去年とは巡査が變つていたけれども、心中事件は知っていたらしく、すぐにとんで来て男を捕えた。

「おまえは岸がんじゃないか」と巡査が訊いた、「ここに証人がいる、嘘を云つてもだめだぞ、どうだ」

「へえ」と岸がんはうなだれた、「私はその岸がんでございます」岸がんは駐在所へ連行され、栄子も呼び出された。そのとき栄子は「喜世川」へ移っていたが、駐在所へ行って、そこに岸がんのいるのを見たときは、肝がつぶれてすぐには口がきけなかつた。「あんた生きてたの」と栄子が云つた。

「おまえ生きてたのか」と岸がんに云った。

それから取調べが始まり、岸がんにすぐにかぶとをぬいだ。栄子は岸がんの告白を聞くと、かつと頭へ血がのぼって、岸がんにむしやぶりつき、平手打ちをくれたり蹴ったり、引つ搔いたり噛みついたりした。止めにはいった巡査にも噛みついたし、駐在所の窓ガラスも一枚砕いたそうであった。

「その巡査までが同類みたいに思えたのよ」と栄子が云った、
「先生の前で云っちゃあなんだけどさ、男なんてみんなけだものろくでなしのぺてん師だよ」

私が訊き返すと、栄子は顔をしかめながら首を振り、大きなおくびを三つもした。

「なにを怒ったかって、訊くまでもないでしょ、岸がんのやつ強い催眠薬だなんて云つて、ほんとは重曹をのんだんですつてよ、あんまり人をばかにしてるじゃない」栄子はそのときの怒りがまだおさまらないとでもいいたげに呼吸を荒くした、「こつちはおかげでいい笑いものにされちやつたわ、ばかばかしい、はらう肚が立つたらありやあしない」

私は笑いをかみころしてまた訊いた。

「そんなこと云えるもんですかよ」と栄子はふきげんに答えた、「こつちは本当に毒をのんだことになってたし、医者の手当まで受けてるんですもの、嘘だったなんて云えば詐欺罪にされるかもしれないじゃないの、現に岸がんのやつは駐在所から分署へ、そ

して本署までまわされて、何十日かぶたばこへ入れられたうえ、
幾らとか罰金を払わされたっていう話よ、人を騙したばちね、い
いきみだわ」

酒がすっかりなくなると、栄子はさばさばしたようすで、鼻唄
をうたいながら帰っていった。

残酷な挿話^{そうわ}

堀の南の洋食屋「四丁目」で、東浦バス会社の会計主任が、三

人の運転手にビールを奢りながら話していた。彼は三十二歳くらいで、名は杉田春といい、周囲の人たちに「春さん」と呼ばれ、誠実さと頭のよさとでたいそう敬愛されていた。細おもてで色が（土地の者にしては）白く、濃い眉毛にもいやみはないし、まっ白で丈夫そうな歯を見せて、笑いながら話す口ぶりは静かで考え深く、自分で納得のいかないことでもすぐには反対しない。よく検討し慥かめてみたあとで「どうも月にや兎は棲すんでねえようだな」と答えるということであった。

「おらは看護兵だっただ」と春さんはバスの運転手たちに話していた、「おんだらのめえの兵は看護卒と云つてたようだっけだが」「やっぱりな」と運転手の一人が云つた、「頭がよくなかつちや

看護兵にやなれねえってえだが、春さんはそのじぶんから違つてただ、なせ」

「そんなこともねえさ」他の二人が同意を表するまえに春さんが云つた、「看護兵なんてのは、ふつうの兵として役に立たねえ者になると云つてもいいくれえだ」

運転手たちは反対した。病気の兵が多くて手のまわらないときなどには、「軍医の代診もする」と云うから、或る程度以上の切れる頭を持つていなければならぬ筈である、と運転手たちは云つた。春さんが会社の会計主任であり、自分たちがビールを奢つてもらつてゐるから、お世辞を云つてゐるのだ、と疑えるような気配はどこにもなかつた。かれらは心から春さんを敬愛し、春さ

んの頭の明敏なことを、むしろ自分たちの誇りにしているよう
でさえあつた。

「こんなことがあつたつけど」春さんはかれらの讃辞から身を
除けるように云つた、「二年兵になつた秋ぐち、三連隊でひどく
ちの悪い風邪が流行はやつた、なんとかインフルエンザつていつた
け、世間でもずいぶん流行つたが、肺炎を起こして死ぬ者がた
くさん出た、なにしろこれが効くつていう薬がねえだから、病人の
軀にもちこたえる力があるかどうかで勝負がきまる、つていう
あんなべえのもんだつただ」

「注射してもだめだかい」

「せえせえ強心剤を打つくれえだつけど」と春さんは答えた、

「それはまあとにかく」と彼は話を脇へそらせまいとして続けた、
「おらがいまでも覚えてることを話すべえ、まあ飲みながら聞いてくれ」

「飲むこたあ忘れねえだよ」と運転手の一人が云った、
「尤もおもつとらあビールよりもちゆうのほうがいいけどな」

「その病気の兵隊の中に」と春さんは構わずに云った、「島田つていう初年兵がいただ、うちは慥か能登のとのほうだった、佐渡かもしれねえ、もう忘れちまっただが、相撲のように頑丈な軀をした男で」

「その」といちばん若い運転手が訊いた、「うちが能登か佐渡だとすると、連隊区が違やあしねえかね」

「寄留すればいいだよ、東京で寄留届けをしてあれば寄留地の連隊にへえることもできるだ」と春さんが説明した、「麻布あさぶの三連隊ってえばおめえ、全国から入隊志願がわんさと集まったもんさ」「そうだ」と他の運転手の一人が云った、「三連隊ってえば名誉連隊だからな」

「その島田ってえ初年兵は」と春さんはいそいでその話題からぬけ出した、「衛えいじゆ成病院へへえるとまもなく重態になった、軍医はもうだめだからって、隊では親元へ電報を打つと、島田のおふくろと妹が駆けつけて来た」

「まにあつただかい」

「軍医はまにあうまいと云った、おらあ当番だったが、おらもこ

のようすじやあまにあうめえと思つただ」と春さんが云つた、

「それがなんのおめえ、おふくろと妹が着くまつでちゃんと持ちこてえたし、それから持ちこてえ続けただ」

「すると、治つただな」

「重態のまんまさ」と春さんは云つた、「もうだめか、いま死ぬかつていう危篤状態でいて、それがいつかな死なねえだ」

「きもい肝煎つちやうな」

「それどころの沙汰じゃねえさ、軍医は投げちまつて寄りつきもしねえ、ほかにも患者は大勢あるつてえのに、おらあ島田初年兵からはなれることができねえ」春さんは白い歯を見せ、肩をすくめて当惑の気持を示した、「——なぜかつてえば、島田はいまに

も死にそんな重態が続いているから、ときどき強心剤の注射をしなけりやあなんねえし、息を引取るときに隊の者が付いていなかつたとなれば、軍の責任問題になる勘定だべえさ、なせ」

「そうだな」三人の中では年としかさ嵩らしい、二十八九になる運転手が、考えこんだような口ぶりで云つた、「軍縮からこつち、赤の野郎がいばりけえつてのさばつてるし、軍としても、国民感情にやあ気を病まねえばなんねえだからな、おらあ軍縮にやあてんから反対なんだ、仮にもおめえ国家てえものがあるのによ」

「それでもおらあまだいいほうだった」と春さんは話を引戻した、「おらにやあ交代つてもものがある、交代になれば休むこともできるが、気の毒なのはそのおふくろさんと妹だった、小さな瘦やせた

おふくろと、はたちくれえの、兄貴によく似た軀つきの固太りに肥えた妹とは、病人の枕まくらもと許もとに付きつきりで、弁当もそこで喰べるし、手洗いにゆくときのほかはいつときも側をはなれねえし、一睡もしなかつたつけど

「情愛だな」

「情愛だ」と春さんが云つた、「おらなんぞ軍務の看護兵だが、とてもあの二人のまねはできなかつた、とにかく付きつきりで一睡もしねえし、代る代る病人に話しかけては泣いてるだ、おふくろも妹も眼をすっかり泣き腫らして、いよいよ死ぬらしいと聞きたんびに、二人で島田に抱きすがつて泣きひいるだ」

「それでも死なねえか」

「それでも死なねえ」と春さんが云つた、「よつぽど心臓が丈夫だつたんだべえさ、軍医もこんな依怙地えこじな心臓にやあこれまでおめにかかったことがねえつて、心臓がこんなに丈夫でもよし悪しだつて云つてたつけど」

「専門家にやあ専門家の意見があるだな」

「そんな状態がまる三日続いただ」春さんはまた巧みに話題のそれるのを防いだ、「口で云うと三日だが、実際その場で当事者ともなれば、三日は五日にも十日にも半月にもつくだべさ、そのあいだちつとの隙もねえだ、ひよいとすると死にそうになる、二人が泣いて抱きすがると、いやまだだ、ほつとして助かるかもしれねえと思つて、それはそれで嬉し泣きをするてえと、すぐにまた

そら危ねえとなるってえあんべえさ」

三人の運転手は黙ってビールを啜った。かれらの顔には、その「依怙地」な心臓に対する反感が、隠しようもなくあらわれていた。

「だが助からねえものは助からねえ、寿命が尽きれば天皇さまのお子さまだつて死ぬだ」と春さんは三人の眼をさまさせるようなことを云った、「——まあ三日めの夜の十時ごろだっけか、ちようどおらが交代になつてまもなく、島田初年兵は死んだだ」

三人は春さんを見た。寿命が尽きれば天皇の子さえ死ぬ、というショッキングな指摘と、さすがの心臓がついに兜かぶとをぬいだ、という表現とで、眠りかけていた好奇心がにわかになんかを取り戻し

たようであつた。

「そうだかい」と運転手の一人がテーブルを撫でながら、いまにも笑いだしそうな、しかし悲しみの味をきかせた調子で、首を振りながら云つた、「——やっぱりな」

「おらあ当直の軍医を呼んだだ」春さんは淡々とした口ぶりで続けた、「やつて来た若い軍医は脈をみ、心臓へ聴診器を当て、瞳^ど孔^{こう}を見ただ、それから椅子に腰を掛けて、患者がまちげえなく死ぬのを待つてたっけだ」

「しようべえしようべえだな」

「これはしようべえじゃねえだよ」春さんはちよつと気を悪くしたようであつた。しかしそれを表にあらわすようなことはせず、

オクターブを半音さげたくらいの声で続けた、「——そのうちに島田初年兵の心臓が止つただ、軍医は用心ぶけえ人だったからうつかり信用はしねえ、聴診器を当てたまま辛抱づよくようすをみてただよ、だが心臓の止つたにやあ嘘も隠しもなかった、そこで若い軍医は聴診器を耳から外し、ゴム管をぐるぐる巻きながら、おふくろと妹に御臨終ですつて云つただ」

「軍隊でもやつぱりそんなふうに云うだかい」

「するとな」春さんは質問を無視して続けた、「その島田初年兵のおふくろが、しよぼしよぼした眼を拭きながら、大きな欠伸あくびをしただよ」

「なにをしただつて」

「おふくろの欠伸がうつったものか、妹も同じように大欠伸をしたっけだ」春さんはそのときの情景を噛み味わうかのように、眼を伏せて十秒ばかり黙り、それからゆつくりと頭を左右に振つて、云つた、「——三日三晩、一睡もせずにつき添つてただし、泣くだきやあ泣いたあとだからふしぎはねえだろうが、息を引取つたと聞いたとたんに、その母親と妹が枕許でおめえ、……」

そこで春さんは口をつぐみ、年嵩の運転手が大きな欠伸をした。

けけち

私は青べかを大三角に繋いで、釣りをしていた。秋の中ごろだったと思う、——大三角とは、根戸川の下流にある三角洲で、デルタというものがいかにして形成されるかということをも、絵解きにして見せているような存在であった。概略だけ描いてみると、干潮時には洲そのものが三段に重なっているのが見える。一段はほぼ五十センチほどの厚さがあり、段と段のあいだは隙間になって、枯れた古い芦の幹が支柱のように竝立している。——つまり、芦の茂みに砂や土が溜まり、流れて来た小枝や枯葉が溜まり、そこへまた砂塵や土が混って、洲の一段が出来あがる。これが繰返されると、やがて芦はその段から生えるようになり、その芦の

茂みを中心に、また同じことが始まるのである。どのくらいの年月かは不明であるが、上の段がそれ自身の重みで、下のそれへとさがって重なり、さらに沈下して洲の基礎となる。——私にはそういうふうを考えられたし、現にその洲の周辺が三段になっているのは、デルタ形成の途上であるのだと思えた。

大三角は芦で蔽おおわれてい、やかましくよしきりが鳴き騒いでいた。百舌も鳥ずもそうぞうしくて遠慮知らずな鳥である、百舌とはよく名付けたものだと思うが、よしきりもそうぞうしい点では百舌鳥におさおさ劣らない、彼には「ぎようぎようし」という又の名もあり、芦の中を飛び廻まわっては、いきなり人を嘲ちやうろ弄ろうするような鳴き声をたてる。——私が釣りのほうを忘れ、デルタ形成とい

う、幾分か学問的な思考をたのしんでいると、すぐ近くの芦の中へ来て、いきなりよしきりが嘲弄の叫びをあげた。

けけち けけち よしごで***突っ突いて おいてててて。

浦粕ではよしきりを「けけち」と云う。そして、長の説明によると、右にあげたように鳴くのだそうで、おたまに云わせると***は、長が云うのとは反対に男性の部分やさすということだが、そう云われてみると、慥かにそう鳴くように聞えた。

「ふざけるな」と私はどなった、「黙れ、やかましいぞ」

私の思考の邪魔をすることに成功したのがうれしいとでもいうように、けけちはひときわ声を張りあげて叫んだ。——けけち

けけち よしごで***突っ突いて おいててててて。

留さんと女

三十六号船の水夫である留さんは、年が三十四歳でお人好しで、ひどく色が黒かった。「どんな闇夜でも留さんの顔だけは黒く見える」と云われ、自分でもそれを認めていた。——三十六号の船長のブルさんは、すっかり視力が衰えているため、操舵そうだに当っては留さんの声援に頼らなければならず、そのため留さんは「おらがいねえば三十六号はやみだ」と誇っていることは、「芦の中の

一夜」に記したとおりであるが、——自分のそういう意義深い立場を誇っている留さんとしては、色が黒いなどということくらい、てんで気にしないのであった。「おらのうちはおやじの代から船乗りだったでよ」と留さんは云っていた、「色の黒いのは血筋の正しい証拠だべえさ」

彼は霞ヶ浦かすみうらの北端にある銚田町ほしたで生れ、父も霞ヶ浦の通船に乗っていたし、彼もごく小さいときから、父といっしょに通船に乗ったということだ。——或るとき私は彦山光三（現相撲評論家）の家を訪ねて、浦粕町のことをいろいろ話していると、彦山夫人が「その留さんなら知っている」と云いだされた。よく聞くと確かに同一の人物らしい、夫人も銚田町の生れで、留さんが少し頭

のあつたかいことや、色の黒いのと、ばか踊りの上手なことなど、詳しく知っておられた。これには私は相当おどろいたし、夫人も「世間は狭いものねえ」とおどろいておられた。——そのあと、私は浦粕へ帰ってから、世間は狭いものだという通念について、少しばかり検討をこころみたのち、こういうめぐりあいにはむしろ「世間が広いからだ」という定義を組み立てることができた。要約すれば平行線の定理なのである。私は私の人生の座標をもち、彦山夫人には夫人の座標がある。留さんも同じことであつて、おのおのはその人生の座標に即ついて生きている。平行線は相交わらない、というのはユークリッドの定理だったろうか。これに対して「しかし無限大の空間においては相交わる」という非ユークリ

ツド定理がある。つまり、世間が広大であるからこそ、それぞれの座標をもった三人がめぐりあう機会も生れる、というわけである。こんどこの話を書くに当って、平行線の定理を数社の若い記者諸君に訊いてみた。私はもともと数学には興味もなし才能もゼロなので、その定理がユークリッドのものであるかどうかさえ記憶が薄れていたからであるが、若い記者諸君の意見がみなままちであり、中には「ユークリッド自身が、非ユークリッド定理をきめた」と主張する新人記者もいて、やはりものは訊いてみるものだ、という感を新たにしたいのであった。

留さんは篠^{しの}咲^{さき}の船着き場の近くに、漁師の物置を改造したものであるが、一戸建の家を借りていた。私はその家知らない。

篠咲は浦粕の上流にあり、歩いて一時間以上はかかるらしい。根戸川堤に面した小さな部落であるが、土堤に桜並木があり、そのためかなり人に知られているということであった。——留さんの家は、何人めかの女にせがまれて借りたのだというが、私が浦粕へいったころは、殆んど高品さんの炉端にいて、頭のあつたかいところを披露ひろうしながら、炉端に集まる人たちに愛されたり笑われたりしていた。——留さんは女に脆もろかった。彼は給料を取ると高品夫人に預ける、高品夫人は必要経費を差引いて、残りを郵便貯金にし、その貯金帳を預かっている。ふだんの留さんはあまり金を使わない、酒席（というほどのものではないが）ではもつぱら人に酌をしたり、求められれば得意のばか踊りや、銚田地方の唄

をうたったりするので、飲み食いに出すことはなかった。

「だからお金は溜まるのよ」と高品夫人が私に云った、「お金は溜まるんだけど、それが一〇〇くらいになると女ができて、それですつからかんになっちゃうの、もうこんどこそ懲りたつて云うでしょ、こんどこそ眼がさめたつて、——それからタバコも人の吸いがらを拾うようにして溜めるんだけど、ちようど一〇〇くらいになるかなと思うとまた女にひつかかるの、留さんのほうでそうなるのか、女のほうで嗅ぎ^かつけるのかわからないわ、あたしはもちろん、貯金の帳尻のことなんか云やあしないのに、ちようどそのくらいになるときまつて女ができるんだからふしぎよ」

女といつてもみなしようばいにんあがりであった。ごつたくや

から足を抜いたとか、むかし亀戸かめいどで売れっ子だったとか、飲み屋から追い出された、などというような経歴のもちぬしたちで、しかもおちついて世帯を持つということはなく、留さんの貯金を使いはたすと、自分からさっさと出ていってしまう、ということであつた。

幾たびそんなことがあつたか私は知らない。私が浦粕へ移つたときは、しきりに貯金に精をだしている期間らしく、酒は高品さんの炉端か、なかまの奢り、タバコは人の吸いがらという、儉約なところをみせていた。それが一年ほど経つてからだと思うが、高品夫人がまたそろそろ始まるじぶんよと云い出した。

「いいえ、まだそんなようすはないのよ」と夫人は私の問いに答

えた、「でも貯金が一〇〇を越したの、珍しいことに今日しらべたら一二〇近くになつたのよ、そんなに溜まつたのはこれが始めてよ」

そんな話をしてから幾十日か経つて、高品夫人の予言が事実になつた。或る日、高品家の炉端で、夫人がそのことを私に告げた。高品さん夫妻と私の三人だけで、芝栗を剥むき、茶を啜すすりながら話していたとき、夫人がふと思ひだしたような顔つきで云つた。

「とうとうできちやつたわよ、もう一と月以上にもなるんですつて」夫人は、訝いぶかしげな眼をする私のことを打つような手まねをした、「わかるじゃないの、留さんに女ができたのよ、それがまた大変なの」

「八兵衛っていうお女郎あがりだそうですよ」と高品さんがやわらかな調子で云った、「いや、八兵衛っていうのは女の名じゃやらないんです、たしか潮来いたこあたりの遊廓ゆうかくの妓おんなたちの代名詞でしてね、鹿島香取かしまかとりなんかへ参詣さんけいするとき、ゆきにしべえか帰りにしべえかかっていうので、合わせて八兵衛ということになったんだそうですよ」

女は元は洲崎すさきかどこかに出ていて、留さんとはそこで馴染なじんだ。そのあと潮来かどこかへ変つてからも、幾たびか留さんが逢いにいったらしい。今年「ねんがあけ」たので、夫婦約束をしたからと、留さんのところへ押しかけて来た。小さな風呂敷包み一つ持っただけで、もう芝栗が出さかる季節だというのに洗い晒した

浴衣一枚であらわれ、そのまま篠咲の家にいすわってしまった。年は留さんより三つも上だし、八兵衛などをして「ねんがあけた」女ではあるが、留さんはてんで恐悦してしまい、煮焚にたきはもちろん、女の下の方まで洗濯してやっているそうであった。

「こうなったらだめなのよ」高品夫人は私の問いに答えて云った、「夫婦約束をした女だし、こんどこそ世帯を持っておちつくんだからって云われてみれば、貯金帳を渡さないわけにはいかないじゃないの、そうでしょ」

「それに相手がそんな女だからね」と高品さんも云った、「どうせゆき場がなくなつて来たんだらうから、こんどは、本当におちつくかもしれないよ」

そして十日ほどのちに、私は浦粕亭でビールを飲みながら、留さんの女について、秋葉エンジンから第一報を聞いた。

「たいへんな女だよ、先生」秋葉エンジンは朴ぼくとつ訥な顔にうすら笑いをうかべながら云った、「なげえことしようばいをした軀だから、留さん一人じゃあ保もたねえって、通船の者をだれかれなしに引張り込むだよ、代り番こだ、船が篠咲に着くたんびに、誰か一人がおりにゆく、そして船が徳行から戻って来ると、そいつが船へ乗って、代りの者がおりにゆくだ」

私がつめらいながら訊くと、秋葉エンジンは素朴な、そしていくらか虚無的な笑いをうかべた。

「気づかぬえだか、気づいてるだかわからぬえだ、おらあ勘づい

てると思うだがねえよ」と秋葉エンジは云った、「——現に三十
六号船の者が代り番こにおりるだし、銀公（「おらあ抵抗しな
った」の章を参照）が聞いたところでは、それが気に障るならお
めえ一人でまかなつてみる、つて女がどなりけえしたつていうだ
よ」

私が嘆くと秋葉エンジも嘆いた。

「悪い野郎どもだ、まったく悪い野郎どもだ」と彼はコップの中
でビールの泡の消えてゆくのを見まもりながら云った、「いくら
向うでさそつたからつて、他人の女を只でなにして、留さんの前
で笑い話にするつて法はねえだ、始末におえねえ野郎どもだよ」

その話はすぐに、高品家の炉端でも出るようになった。しかし、

これまで幾たびも記したように、そのことについて非難するような声は、——秋葉エンジを除いて、——ただの一度も聞かれなかった。尋常な家庭に起こるこの種の出来事でさえ、浦粕ではさして問題にしないのが一般的風習であり、留さんの場合は特に、その女が八兵衛あがりだったから、笑い話としてもさしたる価値はないようであった。——そうしてやがて、私は第二報を聞いた。女にはほかにしんじつ夫婦約束をした男がいる、というのである。新川堀の畳屋の職人で、あと半年ほど経つと自分で店を持つことになっており、女の荷物やなにかはその男のところへ持ち込んであるが、店を持つときが来るまで、留さんのところで食いつないでいるのだ、ということであった。

この第二報は通船の若い水夫たちがもたらしたものだ。水夫たちが彼女を訪問したのは、そう長い期間ではなかった。なぜかという、女が不^ぶ纏^{きり}緻^{よう}で荒つばいばかりでなく、まるで「吸出し^{こうやく}膏^{こうやく}薬」のようだから、というのである。

「三十二号船の仁公は十六貫もあつたによ」と水夫の一人は云つた、「五たびか六たびかよつたらおめえ三貫目も痩せたつていうだ」

あれではあとで滋養を摂^とらなければならぬから、却^{かえ}つて高いものにつくのだ、というのがかれらの説であつた。こうして一人また一人と落伍してゆき、ついには誰も寄りつかなくなつたのであるが、或るとき一人の若い水夫が、勤務ちゆうにとつぜん血が

騒ぎだし、船が篠咲に着くなりとびおりて、抑制することのできない衝動を抱えながら留さんの家へ駆けつけた。ところがそこに先客があり、まっぴるまだというのに戸閉りをした家の中で、壮烈なだいかぐら太神楽を演じていた。若い水夫は怒った、——まるつきりてめえのかかあ嬬をぬすまれてるようなこころもち、だったそうである。彼は雨戸の隙間へ耳を当てて、太神楽のもようをつぶさに聞いた。船が徳行から戻って来るまでは一時間かかるし、それまでは時間のつぶしようもなかったからだ。

その先客が新川堀の畳屋の職人であり、女とどんな深い関係であるか、というしさい仔細のことがそのとき初めてわかったのである。若い水夫の報告によって、そのことはすぐ蒸気乗りなかまにひろ

まり、事実であることが確認され、にわかには留さんに同情が集まった。それまで誰よりも多く篠咲で下船した二十九号の平助などは、「世の中にはふてえ野郎がいるもんだ」と憤激したそうである。——もちろん、これらの情報は留さんの耳にも伝わったであろう。伝わらないという理屈は絶対に成立しないと思うが、当人はぜんぜん知らない顔をしていた。いちど高品家の炉端で、誰かがそのことを当人に向つてあてこすつた。高品夫人はその男を睨みつけ「およしなさい」ときびしくたしなめたが、留さんは少しも気にするようすはなかつた。

「人は好きなこと云うだよ」留さんはまっ黒な顔をくしやくしやにし、てれくさそうに笑いながら、まるでお世辞でも云われたよ

うに羞はにかんだ、「——あいつも口の軽いのが悪い癖だから、ばかなことばかり云つて人に誤解されるだ、なにしろ世間知らずだよねえよ」

軽いのは口だけか、と誰かが云い、また高品夫人に叱られた。

私はそのときそこにいたのだが、留さんの「世間知らずだから」という言葉に少し感動した。留さんとしては自分の女を庇かばつたつもりだろうが、慥かに、そういうすさんだ生活をして来た者の中には案外「世間知らず」な人間がいるものである。食う心配ばかりして育つて来たのに、少しも貧乏というものを知らない人間——というのは、貧しい人たちに対して同情のない、独善家という意味である——が、かなり多いのと同じように、おそらく留さん

の云うことは正しいだろう、少しあつたかいといわれる留さんの勘は、なまじつかな観察眼を持った者よりしんじつを見ぬく能力があるのかもしれない、と私は思ったものだ。

春になつてから、私は根戸川亭で留さんを見かけた。私はビールを一本と、カツライスを取り、本を読みながら、それらをゆつくり片づけていた。留さんは隅のほうのテーブルで、二人の蒸気乗りなかまと、酒を飲みながら話していた。空いた爛徳利かんどくりが三四本、肴さかなの鉢や洋食の皿もかなり並んでいたし、留さんは上機嫌で、陽気に笑つたり話したりしながら、「まあ飲みなせえな」とか、「もつと食いせえ、ま」などとせつついていた。

かなり長いあいだ、留さんのことはみんなの関心の外におかれ、

私も話らしい話は聞かなかつたので、その晩の陽気な姿を見ても格別なものを感じなかつた。しかし、その後また根戸川亭で、やはり蒸気乗りなかまに気前よく奢っているのを見かけ、どうしたことかと訝しく思った。そのうちに高品夫人が、どんなきつかけからだつたか、留さんの「例の女」が、根戸川亭の女給になつていると云つて、私をおどろかせた。

「あら、知らなかつたの」と高品夫人は云つた、「もう一と月くらいになるかしら、遊んでいても勿^{もつたい}体ないからつて、自分で押しかけていつて住み込んだんですつてよ」

私はちよつと考えてから質問した。

「あら、それも知らないの」と夫人は眼をみはるようになして答え

た、「畳屋の職人にはべつに女があつたんですって、お秀さん、——留さんの女の名前よ、お秀さんと夫婦約束はしたけれど、ねんがあけたからって、押しかけて来られたときには肝を潰つぶしたそうよ、それでもいやだとは云えなかつたので、店を出すまで待つてくれてごまかしてたんでしよう、二月だかにお秀さんの預けた荷物やなんか、みんな持ったままどこかへいつちまつた、つていう話だわ」

私は留さんのために祝意を述べた。

「さあどうかしら」と高品夫人はあいまいに微笑した、「畳屋の職人はいなくなつたけれど、根戸川亭へ住み込んでからずいぶん発展するっていうし、もう留さんの貯金も無くなるじぶんなのよ」

ほどなく私は、そのお秀という女を自分の眼で見た。

彼女はあぶらけのない渋色の膚で、額が抜けあがり、ぐるぐる巻にしている髪の毛はごく薄かった。痩せていて軀は小さいのに、骨組はずばぬけて逞しく、そのため、うっかり見ると肥えているように感じられるが、実際には肉も脂肪もそげおちて、逞しい骨に貼り付いたような皮膚は、到るところで皺しわたるみ、そしてかさかさに乾いていた。大きな眼には意地の悪そうな、棘とげとげしい色があり、サンド・ペーパーでも擦こするようなしやがれ声で、なにを云うにも喧嘩腰けんかごしであった。——いったいこの女のどこに、若者たちを惹ひきつけるものがあるのだろうか、私にはそれがまったく理解できなかつた。なお彼女は四十歳より下にはみえないし、四

十六七といつても決してふしぎではなく、根戸川亭の主人や、古くからいた女給——といつていいと思うが——たちからも嫌われていることがあきらかにうかがわれたが、彼女のほうはてんで気にもかけず、なにをこのぬけ作どもが、とでも云いたげに、鼻の先であしらっていた。

幾たびか根戸川亭へゆくあいだに、私は悲しい現実を見なければならなかった。幾たびかといったが、私の経済でそうしばしばゆくことはできない。月に二度か三度くらいだったか、あるいは一度か二度くらいだったかもしれないと思うが、——留さんはもう気前よくなかまを奢るようなことはなく、お秀が客の相手をするあいだ付いていて、ビールや酒を取りにいったり、注文される

肴や、洋食の皿を運んだりするのであった。

「留公、ビールだよ」とお秀はしやがれ声でどなる、「さつさとしねえのかい、のろのろもたついてるんじやねえよ、わかつたかい」

「メンチボールつつたろう、留」とお秀は眼を三角にしてねめつける、「なんだいこりやあ、コロツケじやねえか、まぬけだねえ取っ替えといで」

客がそれでいいと云う。お秀は耳も貸さずにどなりつける、

「コロツケはメンチボールじやねえんだよ、いいえうちやつといて下さいよ、^{しょう}性をつけないと懲りないんだから、早く立たねえのかい」

「そんなにがみがみ云ったって、おめえ」と留さんは中腰のまま悲しげに女を見る、「こうやって出来ちまつたものを、おめえ、いまさら取っ替えられやしねえと思うがなあ」

「そんならその分はおめえが払いな」とお秀は云う、「てめえでまちげえたんだからね、早くいってメンチボールをそいつて来な、お、そのコロッケは置いてつていいよ、片づけるだけはおらが片づけてやつから、払いはおめえだよ、いいかえ」

留さんは「ああ」と云つて立つてゆく。

「ほんとにまぬけでのろまで」とお秀は舌打ちをする、いかにも癩かんに障るといったような舌打ちである、「あれでよく通船が飼つとくもんだ、呆あきれ返つて屁へも出あしねえよ」

私はその女を憎んだ。

——どういうわけだ、留さん。

そんな女にどうしてこき使われているんだ。横つ面をはりとばすか、蹴倒してやるか、唾でも吐きかけてやればいいじゃないか、男じゃないか留さん、と私は心の中で叫んだ。そのとき私は、怒りのために軀がふるえたのをいまでも覚えていゝる。だが、と私は自分を抑えるために反省した。

——あの女は世間からいたためつけられて来たのだ。

どんな事情かはわからないが、若いころから身を売り、色街を転々として、「八兵衛」にまで落ち、ねんがあけるまで身受けをする客もなかった。しかも、ねんがあけて約束した男を頼つて来

れば、その男にはほかに女があり、彼女の預けた荷物もろとも逃げてしまった。これだけ酷い^{ひど}めにあわされれば、人は温和な気分を保つことはできないであろう。自分が払わされただけのものを人にも払わせてやろう、というような気持になるのが当然かもしれない。あの女だけを責めるのは不当だ、と私は自分をなだめた。しかしすぐに、それは論拠が誤っている、という声が私の心の中で起こった。

——はらいせをするなら、する相手がある筈である。

もしも彼女が世間からいたためつけられたとするなら、留さんも同様に世間からいたためつけられている。いつも少年の水夫たちにさえ軽蔑^{けいべつ}され、殆んど面と向って、「留さんは頭があつたけえ

「からな」などと云われるうえに、貯金が一〇〇くらいになると、女にひっかかって元も子も無くしてしまう。つまり二人は同じ戦傷者なので、お互いに^{いたわ}助けあい慰めあうのが本当ではないか。――そんなふうには私が自問自答しているあいだも、留さんはお秀の命ずるままに、ビールや酒を運んだり、どなられて頭を掻いたりしていた。

「この留公はね」とお秀が客に云った、「こんなまぬけのくせえしてばか踊りがうめえんだよ、ばか踊りとはにん相応だけどさ」

「ねえ、留公に一杯飲ましてやってごらんよ」とまたお秀が云った、「ビールなんでもつてえねえ、その爛ぎましでたくさんだから、いいから飲ましてごらんよ、ばか踊りをやらしてみせるから

「さ」

客がなにか云った。その客が誰であつたか、一人だつたか伴れがいたか、私にはまったく記憶がない。私のところから見えなかつたことは慥かであるが、どうも土地の者ではなく、よそから魚釣りに来た客だつたように思う。

「さあ飲みな、留公」とお秀が云つた、「ががつするんじやねえよ、みつともねえ、一杯だけだよ」

留さんがなにか云つて、さかずき盃の酒を大事そうに啜るのが見えた。

「さあ、ばか踊りをやんな」とお秀は留さんの手から盃をひつたくつて云つた、「うまく踊んなよ、そしたらまた飲ましてやつから、さあ踊るんだよ」

留さんは立ちあがり、手拭で頬かぶりをし、いかにもてれくさそうに笑いながら、やおら尻端折しりつぽしよりをした。

——なんとという女だ。

私は齒をくいしぼりながらそう思った。留さんは踊りだした。てけて、どんどん、と自分で囃子はやしを入れながら、——彦山夫人の言葉にもかかわらず、それは決して上手なものではなかった。尤も、私は里神楽で見たのと、新橋の幫間ほうかんだった柳家連中の獅子舞まいで見たくらいの知識しかなかったが、——私は踊っている留さんから眼をそらし、いそいで勘定をして、逃げるように根戸川亭をとびだした。

「巡礼だ、巡礼だ」暗い土堤を家のほうへ歩きながら、私は昂こうぶ

奮^んをしずめるために、声にだして呟いた、「苦しみつつはたらけ」それはそのころ私の絶望や失意を救ってくれた唯一の本、ストリンドベリーの「青巻」に書かれている章句の一であった、「苦しみつつ、なおはたらけ、安住を求めな、この世は巡礼である」

おわりに

私は浦粕から逃げだした。その土地の生活にも飽きたが、それ

以上に、こんな田舎にいてはだめだ、ということをも悟ったからであつた。私は町の隅ずみを歩いた。沖の百万坪、白い煙霧に包まれている石灰工場、芳爺さんの住居に近い三本松、消防小屋、堀南から中堀橋を渡り、堀に沿つた堤の左側に、養魚場の広い池を眺めながら、東の海水浴場へもいつてみた。こうして、土地や風景には別れを告げたけれども、東京へ去ることは誰にも云わなかつた。高品さん夫妻にさえ話さず、売り残つて半ば不用の本の詰つた四つの本箱や、机や、やぶれ蒲団や穴だらけの蚊屋。よごれたまま押入へ突込んである下衣や足袋類^{したぎ}。その他がらくた一切をそのままにして、——というのは、物を片づけるということが私はなにより嫌いで、それも自分でやるのが嫌いなだけではなく、

人が片づけ物をしているのさえ見ていられないたちだったからだが、——書きあげた幾篇かの原稿と、材料ノートと、スケッチブック五冊とペンを持っただけで、蒸気にも乗らず、歩いて町から脱出した。いちどもうしろを見なかった。私にとって、浦粕町はもう過去のものであった。私の眼も心も、前方だけに向つていた。

「東京へ出たら」と私は力んだ気持で呟いた、^{つぶや}「おれはやるぞ」
「東京へ出て」と私は不安を抑えきれずに呟いた、「はたしてやつてゆけるだろうか、生きてゆく、ということだけでもいいのだが」

次には「なにをくそ」と呟いていた。気負い立ったり、自分の

才能のなさや、小説を書いてゆくことの困難さを思つて、息苦しいような感じにおそわれたりしながら、私は埃ほこりだ立たつた陰気な道を歩き続けた。

それから八年ほどのちに、私は浦粕町へいつてみた。いま小西六にいる秋山青磁せいじと、戦後に死んだ森谷文吉もりやぶんきちを同伴して。だが、懐旧の情に唆そそられて、などという風流な気持ではなく、秋山と森谷が写真をやつていたので、撮影案内をするのが目的であつた。

——私たちは高橋たかばしから東湾汽船に乗つたのであるが、乗ろうとしたとたんに「先生よう」と声をかけられ、見ると、そこに留さるんがいたのでどきつとした。

私はそのとき殴られるかと思つた。——というのは、それより

半年ほどまえに、私は「留さんとその女」という題で、二十枚ほどの短篇を発表していた。載せたのはアサヒグラフであつて、そのじぶん編集を担当していた宮田新八郎の好意によるものだが、浦粕のノートから幾つか短篇小説にした中でも、留さんの話がつとも事實に近かつたからである。——私は自分をなだめた。留さんが小説などを読む可能性はない、少なくともアサヒグラフを読むような機会はないだろう、おちつけ、と自分をなだめた。にもかかわらず、留さんは「あれを読んだだ」と云つた。

「おらんこと小説に書いたつて」どんな闇夜でも黒く見えるといふ、石炭のような黒い顔に、てれくさそうな羞はにかみ笑いをうかべながら留さんは云つた、「——高品さんのおかみさんがおらに呉れ

たで、読んだだよ」

「あれは」と私はいそいで云った、「あれは、つまり小説なんですね」

「おら大事に取ってあんよ」と留さんは私に構わず続けた、「一生大事にしておくだ」そしてさらに云った、「おら家宝にすんだよ」

そしてさも恥ずかしそうに、小さくなつて事務所のほうへ去つた。

留さんは少しも變つていなかつた。秋山と森谷にあらましの事情を語り、乗つた通船がたてかわ 堅川をはしりだしてから、私は沿岸の風景を眺めながら思った。留さんは年も取っていないようだし、

人の好きもあのころのままらしい。おそらくはいまでも「頭があったけえ」などと云われ、女たちのいいかもになってるのであろう。そういう人間のことを小説に書いて、生活の資にするとは恥ずべき行為だ。留さんは恥ずかしそうな顔をしたが、自分こそ恥じなければならぬ筈だ、などと思ひ、浦粕へゆくのがにわか
に重荷のように感じられた。

——誰と出会うかわからないぞ。

船宿「千本」の長少年、倉なあこ、芳爺さんはどうだろう。

「SASEBAKA」とはつきり書いてしまったおすずは。ブルさんは。ごったくやの令嬢たち、幸山船長は。その他の多くの人たちと出会った場合、いったいどんなことになるだろうか。

できるだけ会わないようにしよう。

私はそう思った。これらの人たちをみんな小説に書いたわけではないが、留さんを書いたことは（留さんの口ぶりから察すると）相当ひろく伝わっていると考えなければならぬし、ひがみつぽい性質の者は、どれを読んでも自分のことだと妄信もうしんするかもしれない。

「できるだけ人に会わないことだ」と私は船窓から外を眺めながら呟いた、「なるべく危険なところには近よらないようにしよう」船が浦泊へ着くと、私はいそいで蒸気河岸を通りぬけた。

船宿「千本」の店先では、見知らぬ若者が繩船の餌付けえづをしていた、長だろうか、年ごろは似ていたが、私は眼の隅で見たまま、

声をかけようとはしなかった。町のようすは以前のままであった。ごったくやの「澄川」も「栄家」も同じ看板を掲げていたし、三本松も元のように杖を張っていた。しきりにカメラを捻ひねくついている二人をせきたてながら、私は堀の両岸を歩き、沖の百万坪をまわり、東の海水浴場へゆき、それから堀南の「天鉄」へ寄つててんぷらでめしを喰べた。このあいだに知っている者とは誰も会わなかった。いいたねがはいったからと、てんぷらを無料で届けに来てくれた娘のお花さんもいなかった。昔は平屋だったのに、そのときは二階建てになつていたし、ごったくやの女のような女中が、なにを訊いても「知んね」とか「あたし知りませんのよ」とか云うばかりで、そんな古いことより人間はいまをたのしむこと

が肝^{かんじん}心だ、誰かお酌を呼ぼうか、それともあたしのお相手でないか、などとひっきりなしに饒舌^{しやべ}りながら、すすめもしないビールを勝手にがぶがぶ飲んだ。

「変ったね」と秋山が云った、「まるでごつたくやじやないか」

私が蒸気河岸にいたじぶん、秋山は二度ばかり来たことがあり、「天鉄」でめしも喰べたので、変化の差がはつきりわかったのであろう。私も興ざめた気持になり、手早くめしを片づけて外へ出た。そして蒸気河岸へ戻る途中、おたまの親たちに会ったのだ。

道からちよつとはいった、十坪ばかりの空地で、老夫妻が籠を作っていた。それは貝を掘るためのもので、籠は約一メートル四方、一方に砂へ打ち込むための鉄の歯があり、四メートルほどの

杉の若木の棹さおがついていた。夫妻はどちらも白髪しろがみになつていて、着ぶくれた軀の背をまるくし、陽溜りひだまでせつせと割り竹さばを捌さいていた。

——おたまの母親だ。

父親のほうははつきりした印象はないが、母親のほうはすぐにそれとわかった。その人とは親しかったし、いろいろと世話にもなつた。男の独りぐらしは不衛生なことが多いと云つて、三日に一度は掃除に来てくれたし、野菜を喰べなければ軀からだに悪いからと、漬物をかかさず届けてくれたりした。それにおたま、——船宿「千本」の長とともに、そのこまっちやくれのおたまも、土地のニュースをいろいろと報告しに来たものである。

——綿屋のおつゆちゃんは十二でちよぼちよぼと生えた。

——どこそこのおつかあは誰それとくつついた。

女の子だけに情緒的なことがらのほうが多かったが、私の材料ノートはそのために得るところが少なくなかったのである。私は静かに老夫妻のほうへ歩み寄り、帽子をぬいで会釈をした。

「暫くでした」と私は云った、「お達者のようですねによりです」
二人はそろそろと顔をあげて私を見た。なんの反応もない顔つきであった。

「蒸気河岸の先生ですよ」私は笑ってみせながら云った、「おたまちゃんはどうしていますか」

娘の名を聞いた瞬間、二人は軀をぴくつとさせ、にわかに表情

を硬こわばらせた。それは警戒のようでもあり、恐れのようにもあつた。どちらにしろ、おたまに「なにかあつた」ということ、それが老夫妻に強い打撃を与えた、ということは慥たしかであるように思えた。

「旦那は」と父親のほうが、棘とげのあるかすれた声で訊き返した、「どこのどなただけかい」

私は母親を見た。

「おばさん、忘れましたか」と私は云つた、「そら、蒸気河岸の先生ですよ、ぼくの家へよく掃除に来てくれたでしょう」

蒸気河岸のこれこれと、本名まで名のつたが、おたまの母親にはまったくわからなかつた。彼女は私をじつと見あげ、つくづく

と見てから、ゆつくりと白髪のを左右に振った。まえにも肥えていた軀つきに変わりはないし、肉の厚いまる顔も、皺が多くなつた程度で、あのころと少しも變つてはいなかつた。私にはそれがはつきりしている、その人は「男の独りぐらしは」と、よく私に小言を云つたし、掃除をするからと云つて、私を外へ追い出したものだ。その人がそこにい、私にはその人がわかるのに、その人には私がわからない。私を見あげた眼つき、すっかり白髪になつた頭を、力なく、ゆつくりと左右に振つた動作、それは紛れもなく「記憶がない」という意味を表明するものであつた。

「かなしいな」私は道のほうへ歩きだしながら呟いた、「人間なんてかなしいもんだな」

私は自分の胸が空洞になり、そこをこがらしが吹きぬけるような、云いようのないかなしさに浸された。云いようのないかなしさ。いまでもそう云うほかに表現する言葉がみつからないのである。私は二人の同伴者と通船に乗ったとき、もう二度とこの町へ来ることはないだろう、と心の中で呟いた。

三十年後

十月下旬の或る日、私は二人の同伴者とともに浦粕町へ行って

みた。

江東区の高橋たかばしから出ていた通船、葛西かさい、東湾の両汽船とも、ずっと以前に運行をやめ、もっぱらバスの乗り継ぎに切り替えられた、と聞いていたから、タクシーに掛け合ってみると「ゆきましよう」と云うので、安心してでかけた。同伴者の一人は私の若い友人で、某社の編集部員であり、この夏ごろ探訪記事の取材に浦粕へいったことがある。社の車でいったのだそうで、タクシーの運転手がまごついても、彼が道順は知っているだろうと安心していった。

じつを云うと私は少なからずためらったのである。浦粕のノートを連載し始めてから一年、登場する人たちの中にはまだ健在な

者も多いだろう。「おわりに」の章でも留さんと出会ってへどもどしたことを記したが、ことによると「青べか物語」を読んで、他人のことなのに自分のことを書かれたと誤解し、手ぐすね引いて待ち構えている、といったような人物もいるかもしれない。そんなごたごたはごめん蒙こうむりたいし、また、浦粕という土地そのものが、私の記憶にあるなつかしいイメージをめちやめちやにしてみまうかもしれない、という心配もあつた。しかし、ノートを纏まとめて発表したのを機会に、ぜひもういちど青べかの世界を見にゆきたい、という誘惑のほうが強^く、ふと思ひ立つた勢いに乗じてでかけたのであつた。

車が走っている時間を利用して、少しばかり「青べか物語」に

ついで注を加えたいと思う。第一回の末尾に記したが、この一連の物語の中には、すでに幾篇か小説化して発表したものがあるし、これから小説化する予定のものもあり、その旨を編集部、ならびに読者へ断わっておいたのであるが、——というのは、それらを除いてはこの一篇が不完全なものとなるし、小説として発表したものと、ここに集めたものとは根本的に違っているからである。もう一つ、この物語は戦前にいちど三田文学に載せる筈であった。和木清三郎氏（現「新文明」編集長）が編集していたところで、そのとき私はノートを整理し、「青べか物語」という題名をきめて連載の用意をした。結局は或る人事関係のため、私のほうから辞退したが、そういうことがなかったら、このノートはおそらく散

逸してしまつたであらうと思うと、おくればせながらここで和木清三郎氏に礼を申し上げたいのである。

タクシーは東京を走りぬけ、本所ほんじよへはいり、錦糸町へと向つていた。こつちへ来たのは戦後はじめてのことで、荒地や沼や田ばかりだったのが、ぜんぜん工場や家でふさがっているのに驚かされた。道も舗装されたのが縦横に通じてい、運転手君とわが友人で休みなしに論争が取り交わされた。

「そつちへゆくと千葉へいつちまうよ」とわが友人が注意する、
「こつちの道だよ、こつちの道だと思ふな、慥かにこつちだつたと思ふがな」それから自信をなくしたように云う、「ちよつと訊いてみて下さい」

わが若き友人はつねづね土地勘がいいと自任しているが、あまりに土地勘がいたためだろう、いっしょに車でどこかへゆくとき、しばしばとんでもない方向へと走らせ、間違つたことがわかつても「なに平気です、あれをぐるつと廻ればちゃんとうけますよ」などとすましている。それはそうでしょう、道のあるところなら廻り廻つてゆけばたいに目的地へ着くことができる。私はそんなとき心ひそかに、日本の国土の狭いことを感謝するのだが、――その日の運転手君もやがて、論争する煩はんに耐えないことを知り、わが友人の指導するままに左へ曲り、右に曲り、車からおりて人に訊いたうえ、あと戻りをし、というぐあいに温和おとなしく云うことを聞いた。

こうして、タクシーはともかくも浦粕町に着いた。根戸川に架かった大きな鉄橋を渡るとき、私は車を停めてもらって、川の上流と下流を眺めやった。どっちを見てもすっきりようすが変わっていた。川沿いにあつた草原や荒地には、すっかり家が建ち並び、川の中央にある小さな妙見島にも工場の建物が犇ひしめいている。――蒸気河岸にはコンクリートの高い堤防がめぐらされ、地盛りをされたために、船宿や人家は道から一メートル以上も低くなってしまうた。

「ああ、千本の店がある」と私は云つた、「あれが長のいた船宿の千本だよ」

同伴した二人は「青べか物語」を読んでいたので、船宿「千本」

と、こまっちやくれた少年の長を知つてい、私の感動をすなおに受けいれてくれるようであつた。まず「千本」を訪ねてみよう、私は車を蒸気河岸へ廻らせながら、どうか長がいてくれるようにと、それがそらだのみだということを感じながら、心の中で熱心に祈つた。

「待てよ」と私は思い直して云つた、「先にぼくのいた家を見ておこう、車をそっちへやってくれないか」

車を蒸気河岸とは反対のほうへ、ゆっくりと走らせた。ごつたくやの「喜世川」、次に「澄川」などの家がみつかったが、小料理の看板は出ていなかった。貧しげな小さい家がごたごたと並び、子供たちの遊んでいる土堤どてにはあまり草もなかった。そして、私

があしかけ三年余り住んでいた、荒地の中の一軒家がみつかった。「これかな」と私は車を停めさせて、左右を見比べた、「いや、いやこれだな、こつちが空地で向うが田圃たんぼだったが、——そうだ、この家だ」

家はもよう変えがしてあつた。西側にあつた入口が南側になり、私が机を据えていた窓は塞ふさがれ、ぜんたいに黒くタールが塗つてある。「土堤の秋」の章で、若者が泣いていた斜面は低くなり、生い茂っていた草もない。左右にも家がぎつしり建つて、一軒家だった頃の感じはどこにも残つていなかった。

「戻ろう」と私は云つた、「車を廻して下さい」

私たちは蒸気河岸へいった。車を「千本」の前で停めると、店

の前にいた船頭らしい若者たちが、ばらばら元気よくやって来て、いらつしやい、いらつしやいまし、と景気よく呼びかけた。いかにもしようばい上手な「千本」の者らしいが、釣りをするためにタクシーを乗りつけるような客は「かも」であつて、私は車から出るとすぐ、かれらに片手を振つた。

「客じゃない」と私は云つた、「客じゃないんだ、ちよつと訊きたいことがあるんだが、このうちにずっとむかし長つていう子がいたんだがね」

いまどうしているか、と云おうとしたとき、店の中で網を片づけていた男が、ひよいと私のほうを見上げて答えた。

「長はわたしですよ」

「え、——」と私は息を吸った。

「わたしが長ですよ」とその男はいった。

細おもてに無精髭ぶしようひげが少し伸びて、汐しおやけのした顔に賢そうな眼が光っていた。古タオルで鉢巻をし、仕事着に半長靴をはいていた。これが長太郎か、私は自分の印象にある少年のおもかげを、いま目の前にいる中年の男の像に重ね合せようとしながら、「蒸気河岸の先生」だが覚えているかと訊いた。

「高品の先生かね」と長が訊き返した。

「いや、高品さんの世話で来たんだ」と私は云った、「あっちの一軒家を借りるまえには、この千本の二階に下宿していたこともあるんだ、君が小学校の二年から三年生ぐらいのときなんだがね」

「さあね」長はあいまいに笑った、「そんなに古いことだとするとな」

「倉なあこはどうしている」

「倉なあこはいるだよ、うん」と云つて長は頷うなずいた、「まあおはいんなさい、いまおつ母を呼んでみるだから」

「へえ、まだおばさんがいるのか」

「おやじは死んだけれどおつ母はいんだよ」

長は店の奥へいって、大声に母親を呼んだ。すると、穏やかな返辞をしながら、その人が出て来た。年はもう七十に近い筈だが、ずっと若くみえるし、柔和な顔だちには明らかに見覚えがあつた。長が説明をし、私もまた話した。彼女はあいそよく挨拶はしたが、

私のことを思いだしたようすはなかった。

「あがつて茶でも飲んでくんなよ」と長が云った。

「いや、それよりも沖の百万坪へいつてみたいんだ」と私は云った、「ずいぶん変ったようだが、まだ沼や荒地はあるだろうか」

「家がどっさり建つちやったよ」と長が云った、「見にゆくんならおらが案内すべえか」

「しようばいのほうはいいのかい」

「店のほうは番頭がいるからいいだよ」そして長は母親に振り向いて云った、「ちよつと百万坪までいつてくんからな」

私もまた「あとで寄ります」と断わつて、千本の店を出た。

東へ通ずる堀の、以前よりも根戸川へ寄つたところに、高い橋

が架かっていた。その堀の兩岸にも、やはり防波堤があり、橋は高いので両端は石段で登るようになっていた。キテイ台風のときひどくやられてから、そういうふうなみよに波除なみよけを作ったのだという。——その橋を渡り、根戸川の河岸に出て、川かわ下しものほうへくだると、すぐ左側に石灰工場があつた。「白い人たち」の章に出てくる工場で、建物は昔のままらしく、羽目板もずれてい、柱も曲り、ぜんたいがうしろへのめりゆがそうに歪ゆがんで、そうしてすべてが灰白色の粉塵にまみれていた。

「工場主の代が替つただよ」私の問いに対して長が答えた、「いまじやみんな帽子をかぶつてマスクを掛けて働いてるだ、頭の毛やなんぞも生やかしたままだし、もう女で裸になる者なんぞいや

しねえだよ」

「堀からこつちには」私は二人の同伴者に云った、「この工場と、事務所と、工員たちの長屋だけしかなかった、あとはずっと百万坪に続いていたんだがね」

「そうだ、あれがいかずちの船大工の工場だっただ」と長が私の問いに答えて、根戸川の対岸を指さした、「あれが工場の跡だよ、もうつぶれちまっただがねえっ」

語尾の「ねえっ」という尻あがりのアクセントに、私の記憶が呼びさまされた。それは紛れもなく、少年「長」のアクセントであった。少ししやがれた、まつすぐな言葉つき。すぐむきになり、むきになったことをそのままあらわす独特なアクセントであった。

——私はその感動を抑えながら、いかずちの船大工の跡を眺めや
った。「青べか」を修繕してくれた工場であり、修繕した青べか
を早く引取ってくれと催促した工場なのだ。私はその人たちと
は知りあう機会がなかった。職人の一人すら顔を知らずじまいだ
ったが、青べかが浦泊における私の生活の中心であったというだ
けで、なにか云いあらわしがたい親近感を持っていたのである。

——石灰工場主の代が替り、いかずちの船大工はつぶれたか。

私は心の中でそう呟いた。しかし、そのまえに、そうだ、私は
少しいそぎすぎたようだ、「千本」の店を出るとすぐ、私は洋食
屋の「根戸川亭」を見たのだ。根戸川亭もつぶれて、住む者もな
い建物は表を閉めたまま、泥のはねだらけになってい、看板もな

にもなく、よごれた窓硝子まどガラスと、羽目板の色あせ剥はげちよろけた青ペンキだけが、僅かに昔のなごりをとどめているようであった。

——ああ、根戸川亭もつぶれちまつただよ。

長はむぞうさにそう云った。そして籠屋のおたまが、「おつゆちやんは十二で——」うんぬんと報告した娘の家の綿屋も、やはり失敗してどこかへいつてしまい、その家もまた空家になったのだ。

「沖の弁天はまだあるか」

「あんよ、弁天へいつてんべえ」

私たちは土堤をさらに川下のほうへくだった。長は先に立つて、話しながらさっさと歩いてゆく。痩せてはいるが引ひきしま緊しまった小柄

な軀の、小さな尻が、歩きたびにくりつくりつと動く。その歩きぶりが驚くほどまざまざと、少年時代の長を思いださせた。あのころの彼も、そういうぐあいには、小さな尻をくりつくりつと動かしながら、いかにもすばしこそうに歩いたものだ。語尾の「ねえっ」というアクセントとともに、私の前に少しずつ、長少年がその姿をあらわしてきたのである。

「あにきの鉄ちゃんはどうした」と私が訊いた、「鉄ちゃんと倉なあこは、釣りの穴場を知っている点で浦粕一番だったじゃないか」

「うん、二人とも腕っこきだったねえっ」と長が云った、「倉なあこつて船頭は三人いんだよ、ぐず倉にがちや倉、それにぼぼ倉

つてつてねえっ」

「僕の知っているのは温和しくつて、口が重くつて、頬ぺたがいつもほんのり赤い倉なあこだがね」

「ぐず倉つてえだ」長はくすつと笑つた、「温和しくつておつとりしてえんだろが、することがのろくせえからぐずつてえだ、がちや倉はいつもがちやがちやそうぞうしいからだし、夜になるとすぐおつかあに寝べえ寝べえつて云うのが、ぼぼ倉つてえだよ」

「鉄ちゃんはうちを出ただよ」と長は私たちが笑うのに構わず続けた、「堀南でてんぷら屋をやつててねえつ、とても繁昌してえるだよ」

やがて土堤を左へおりた。その辺もすっかり家が建ち、それも

文化住宅ふうのしやれたアパートなどさえ見えた。きたなく濁つた下水に沿つてゆくと、小さな掘割があり、「これが一ついりだよ」と長が云つた。

「え、これが一つ　だつて、これが」

「こんなきたねえ堀になつちまつただ」と長が云つた、「田圃ができて農薬を使うからねえつ、いまじや鮎ふな一尾いやあしねえだよ」

これが広い荒地の中に、澄んだ水を湛たえていたあの一つ　だろ

うか。藻草もくさが静かに揺れている水の中を覗のぞくと、ひらたという軀

の透明な小さい川かわ蝦えびがい、やなぎ鮠ばえだの、金鮎などがついつい

と泳ぎまわっていた。私が青べかを繋いで鮎を釣つた川やなぎの茂みはどの辺に当るだろうか、——いまでは底が浅くなり、灰色

に濁って異臭を放ちそうな水が、流れるでもなくどろつと淀よどんでいる。日本人は自分の手で国土をぶち壊し、汚濁させ廃滅させているのだ、と私は思った。修善寺へいったら、あの清流に農薬が流れ込むため、螢ほたるもいなくなったし川魚も減ったという。そんなに農薬を使って米ばかり作ってどうしようというのか、史上最高の収穫と、米をたらふく食っている一方、水が汚され、自然の景物がうち毀こわされていることを知らない。また、いま私の住んでいる市では、到るところで木を伐きり、丘を崩し、「風致地区」に指定してある海岸を、工場用地として埋め立てている。どこへいっても丘はむざんに切り崩され、皮を剥がれた人間の肌のように、あかつち赭土や岩が裸になっている。東京の三十間けんぼり堀は私にとって第

二の故郷のようなものであつたが、役人諸君はなんのみれんもなく、僅かな税金を取る目的で埋めてしまった。一人の若い汚職役人が摘^{つま}み食いをするだけで消えてしまうくらいの税金のために、——ろくさま下水の設備もなく、汚物の溢^{あふ}れている都市。川は悪臭を放つままに任せ堀は片っ端から埋め、丘を削り、木という木は伐り倒し、狭いでこぼこ道に大型バスやトラックが暴走し犇き、空地にはむやみ無計画にアパートを建て並べ、公明選挙といわれるのに何十億とかの金が撒^まきちらされるといふ、——よそう、私は本当はそんなことに怒りは感じてはいない、日本人とは昔からこういう民族だったのだ。軍事に關してはべつだつたが、その他のすべてが常に殆んど無計画であり、そのときばったりで、木を

伐り、山を崩し、堀を埋め、土地を荒廃させながら今日までやって来たのである。このまえ、全学連の学生が訪ねて来て、——革命論のような話になったとき、「革命が仮に成功しても、君たちの手に渡るプロパーティはありやしない、日本にも僅かに資本家といえる連中にはいるようだが、それらの持つているのは才取り経済による紙幣や証券でしかない、君たちが現実に奪えるのは、与える職にも窮する超過剰人口、処理するのに困難な汚物の山、傷だらけになった国土。その他もろもろの重荷だけだぜ」と私は云った。よしませう、私は本当のところそんなことを気に病んでいないのではない、ただ、——一つ　のみじめなすがたを見たとき、むやみに悲しくなつて、以上のようなつまらない感慨におそわれ

ただけであり、こんなにしてしまった国土を、あとから来る若い年代の人たちに譲ることの恥ずかしさに、深く頭を垂れるおもいだったのである。

一つ　を過ぎてまもなく、沖べんてんやしろの弁天社が見えた。「ひねたような松が五六本ひよろひよると生えた」と本文には書いたが、いまでは数も多く、松そのものもすくすく伸びて、立派な林になっていた。長は近道をするために、蓮田はずだの中の細い畦あぜみち道へはいっていった。さすがに、そのあたりからは家もなく、荒地や刈田がひろびろと展開し、あちらこちらに海苔のりす漉き小屋が建っているだけ、という風景になった。わが若き友人は、まさに百万坪というけしきですな、と嘆声をあげ、これは百万坪どころではない、

「一千万坪よりももつとあるだろう」と目測の才のあるところを誇示した。

「あれは海苔漉き場だな」と私は笑いながら長に訊いた、「あのころはよく逢^{あひび}曳きに使われたようだが、いまはそんなことはないか」

「あるだよ」と長も笑った、「いまでもやつてるだ、場所がこんなところで、人に邪魔されるしんぺえがねえだからね」

前の日にひどく雨が降ったそうで、刈田も蓮田も水がいつぱいだし、畦道は土がゆるんで、足許がひどく不安定だった。そのうちに長がずんずん先へいったと思うと、引返して来て、畦道にちよつと水をかぶったところがあるからおぶって渡ろう、と云った。

そこへいつてみると、なるほど二メートル五〇ほど畦道が水をかぶっていた。

「おぶうって」私はしりごみをした、「それはだめだよ、おれは重いもの、だめだよ」

長は痩せていて十三貫ぐらいしかないようだし、私は春から少し痩せたものの、まだ十六貫くらいはあると思う。そのうえ、人に背負われるなどという経験はまったく記憶にないから、おぶさつてもいいという気分はまったく起こらなかった。

「でえじようぶだつてば」と長は構わずにこつちへ背中を向けた、「こつちは馴れてるだからしんぺえはねえよ、さあ」

私は二人の同伴者を見、来た畦道を見やった。戻るのも遠すぎ

るし、土のゆるんだ畦道の危なさを考えると、これまたうんざりである。長は背中を向けて踏み、^{かが}「さあ、さあ、おぶさんなよ」としきりにせきたてた。

—— そうだ、人を背負うのは馴れているんだ。

釣客を船から陸へ背負ってあげることは、船頭には珍しくない仕事のひとつである。私はそれを思いだしたので、おそろおそろではあるが長の背中へおぶさった。おぶさったとたん、長の軀の重心に加わる私自身の重量感が、極めて過重であることを私は知った。長は第一歩を踏みだし、その軀は左へ大きく傾いた。半長靴の泥に踏み込むぶきみな音が聞えた。次の一步は右へ、大きくぐらっと傾き、私の足が水につきそうになった。

——だめだ、こいつは転ぶぞ。

私は長の肩にしがみついたままそう思い、同時に、長といつしよに水の中へ転倒するならそれもまたよし、と思った。あとで聞いたところによると、うしろで見っていた二人の同伴者も、「てつきり転ぶ」と思ったそうであるが、私はそのとき、あのこまっちやくれの長であり、浦粕における悪童のうち、唯一人だけ私の擁護者であった長に、三十年を経たいままた、こうして背負われるということのふしぎなめぐりあわせに、心の奥深くからの感動とよろこびを味わっていたのであった。

観念していたにもかかわらず、長は無事に私を渡し、二人の同伴者をも渡した。同伴者の一人は女性で、私の原稿整理をしに来

てくれる木村ふみ子君であるが、もう結婚して一年半くらいになるし、夫君のほかの男性におぶさる気持はどうであろうか、などとよけいなことが気にかかったので、私は振り向きもせず、先へ歩いていった。——私たちは弁天社の境内へはいつていった。長は賽銭さいせんをあげ、鈴を鳴らして柏手かしわでを打った。浅草の映画館で猛獣映画に昂奮し、「ライオンも象も毛唐もみんなばかやつらだ」と憤慨し、ついで喰べたトンカツとカレー・ライスまでけなしつけた長がである。——私は彼の心情を傷つけないと思つたので、同じように社殿へ近よってゆき、賽銭を投じ、鈴の紐ひもをちよつと引くと、おがむことは省いてそこを去つた。二人の同伴者がどうしたかは見なかった。

道へ出ると、もう黄昏たそがれの色が濃くなっていた。その道は「芳爺さん」と二度めに会ったところであり、初めて青べかの売込みをされた記念すべき場所であった。

「おばさんは」歩きだしながら、私は長に訊いた、「あのおふくろさんは、長とお静たちの本当のおつ母さんだったな」

長の上に、鉄なあこ、久なあこの男二人と、姉が二人いた。長の下に一つ違いぐらいでお静という妹と、五歳ぐらいの、いつも泣いてばかりいる弟がいて、その三人がのちぞいの妻の子である、と聞いていたのである。ところが、私の問いに対して長はあつさりと首を振った。

「おつ母あはみんなの継母ままははだよ」と彼は云った、「おらたちみ

んなが生れてっから来ただよ、そんだからうちはずっとうまくいつてるだよ」

私はそこで黙った。

長男の鉄なあこは、専属の船頭である倉なあこ（ぐず倉）とともに、浦泊きつての腕っこきといわれた。それがどうして「千本」を出ててんぷら屋などになったのか。また次兄の久なあこは当時、は小学六年生ぐらいだったが、やはり家を出て、いまでは「千本」の隣りに小さな「久千本」という釣舟宿を経営している。つづめていえば、長男も次男も家を出、本家の「千本」を長が継いでいるのであって、私の推測によれば、それこそ現在のおつ母あが長太郎とその下の二人の実母である、ということを証明していると

思うのであるが、「おつ母あはみんなの継母」であり、「そのためにうちがうまくいつている」という、混りつけなしに割切った長の認識に、私はひそかに感嘆の念を禁ずることができなかつた。

それから私たちは堀南へ戻り、鉄なあこの「てんぷら屋」へいった。てんぷら屋といつても仕出し専門であり、店では客は取らないという。鉄なあこも私を覚えていないし、私にも彼は初めて会つたようにしか思えなかつた。——私は長に、タクシーをこつちへ廻すように云つてくれ、と頼み、せいぜい四帖半くらいの狭い、ごたごたした部屋へ同伴者といつしよにあがつた。

私は鉄なあこにビールを頼み、てんぷらを揚げてくれと云つた。そのとき仕出し専門でやっていることがわかつたのだ。鉄なあこ

——いや、もうそう呼んではいけないだろう、一日に六千個のてんぷらとフライを揚げて捌く、という店の主人なのだから、——一日に油を二た^ふ罐^{かん}も使ってしまう、と鉄さんは語った。むろん大口ばかりで、会社の食堂とか宴会などの注文が多く、数の少ない注文はみな断わっているそうであつた。私は蒸気河岸にいた当時のことや、長をはじめ知つていた人たちの話をした。

「大蝶はつぶれただよ」と鉄さんはビールを啜りながら云つた、
「四丁目（洋食屋）は旅館に転業してえらく儲^{もう}けただ、うん、留さんも死んじまつたし秋屋船長も死んだだ」

「大蝶がねえ」私はなにかしら遠いこだまを聞くように思った、
「あんなに盛大にやっていて、浦粕一の罐詰工場だったのにな」

実際は「大蝶」などどつちでもよかった。その工場にかかわりのある幾つかの出来事や、そこで働いていた人たちのことが思いだされるくらいで、それよりも留さんの死のほうが強く私の心を打った。高品家の炉端で、みんなにからかわれながら、怒りもせずへききに笑っていた彼、三十六号船の舳先に立つて、「おも舵かじいっばい」とか「スロー、スロー」などと、ブル船長に叫んでいた彼、また根戸川亭で自分の女に毒づかれ、こき使われ、客たちの前ではか踊りまで踊らされた彼。——あの性質ではおそらく、幸福な生活には恵まれなかったであろう。死ぬときにも妻子がいたかどうか、仮にいたとしてもたぶん彼にとつて慰めや安息とはならず、それまでの女たちがそうであったように、彼を罵のしりこき使い、倒

れるまでがつちりと彼を緊めあげたことだろう。むしろ、妻子などはなかつたと考えるほうが、彼のためには仕合せだったと、私は心の中で呟いた。

「旦那の話を聞いていると昔を思いだすだよ」と鉄さんは云った、
「いまじやあそんな言葉は使う者もいねえし、いろんうちがつぶれたりな、おらのちゃんも死んだし、大勢死んだ者があるしよ、浦粕もすつかり変つちまつただよ」

「長か、長は四十二になるだ」と鉄さんは私の問いに答えた、
「まる年で四十一か、七年も兵隊に取られたでねえ」

私がおおかんけ（大勸化）のことを云うと、鉄さんは思いだし笑いをした。

「そうだ」と鉄さんは云つた、「おーかんけ おーかんけ おいなりさんの おーかんけ おぞーにと おあげ おあげの段からおっこつて あーかい***ーすりむいた」うんぬんと云つたあと、寄進をした家には、「しよーばい はんじよ」と囃し、寄進しない家があると「くれねーと おいなりさんがなくよ ひつくりけつちやめつかつこ もつくりけつちやべつかつこ……つて云つただよ」

私は頷いたが、それは鉄なあこの時代で、長の時代には「くれねーと、——」以下の囃はしなかつた、ということ思い出した。——このあいだに、店の女の子が大皿ヘフライを盛りあげたのを持つて来た。たぶん鱻あじだろうとにらんだが、鱻ならもうしゆんを

過ぎているし、フライにしてからだいぶ時間も経つらしい。私が箸^{はし}を取らないのを見て、二人の同伴者も箸を取らなかつたし、鉄さんもとりたててすすめるようすはなかつた。また、二人の同伴者は、喰べたり、飲んだりするよりも、自分たちの読んだ「青べか」の世界が、そんなになまなましく、眼の前に展開することのほうに、ずっと興味を唆られているようであつた。

やがて長が来た。鉢巻のタオルが新しいのに替り、ズボンも新しいのに替えてあつた。彼は「車をそこへ来さしてあんよ」と云つて坐り、私の注いだビールをぎこちない手つきで啜つた。酒のほうがいいかと訊くと、ビールで結構だと答えた。自分でもちよつと納得がいかないのだが、鉄なあこは「鉄さん」と呼びかけら

れるのに、長にはどうにも敬称が付けられない、つい「長」と呼びかけてしまふし、長のほうでも極めて自然にそれを受け止めてくれる、というあんばいであった。

「かんぷりっていう子はどうしているかね」

「かんぷり」長は首を捻った。

「ほら」と私は云った、「痩せつぽちで頭の鉢がひらいていて、

泣き虫の子がいたじゃないか、慥か長と同級生だったと思うがね」

「かんぷり」と長は兄のほうを見、ちよつと考えてみてから、あいまいな笑いをうかべた、「ああ、吉井エンジの子だな」

「うん、そんな子がいたつけ」と鉄さんは云った、「なにしろ^だ名を付けるのが好きな土地でね、あたまつてうちとしつぽつてう^な縹^あ

ちと、どっこいどっこいっていう」

「あとののは損得とも云うだ」と長が口を添えた、「何年かめえに百万坪で狸たぬきを捕ったやつがいただよ、そいつはそれからたぬきつて綽名で呼ばれてるだ」

私たち三人は笑った。

「その、あたまとしつぽとどっこいどっこいのことだが」と鉄さんは云った、「むかしこの土地に大金持がいて、三人の倅せがれに財産を分けただ、そのとき長男はあたまだからいちばん多く貰い、三男はしつぽで少なかった、二男はまん中で損得なしのどっこいどっこいだって云っただよ、それで」

「いや、それは違うね」と私がつい知らず云った、「ぼくが聞い

た話によると、財産ではなく鯨だったね、いつのことかわからないがこの浜へ一頭の鯨があがった、それを三人の漁師がみつけて三等分したんだな、そのとき頭のほうを取ったのがあたま、尻尾しっぽを取ったのがしっぽ、胴中を取ったのが、これはまん中で損得なし、どっこいどっこいだと云った、それが綽名になつていまでもそう呼ばれている、というふうなことだったよ」

「鯨はときどきあがったらしいよ」と鉄さんは穏やかに云った、
「旦那の話のほうが本当かもしれないねえ」

これが船宿「千本」の流儀なのだ。和助の時代から、客に対してえらぶった口は決してきかない。他の船宿だと、客に対して釣りの講釈をしたり、いいの悪いのと文句を云う。「千本」では腕

つこきの船頭を揃そろえていながら、求められない限り、決して客に教えたり、客の意志に反対するようなことはない。——客は遊びに来るのだ、好きなように遊んでもらうことが第一だ、というのが亡くなった和助の流儀であった。あたま、しっぽの伝説は、あるいは彼のほうが真実だかもしれない。私はよそ者であるし、鉄さんはこの土地の人間なのだから。しかも彼は一言もそんなことは口にしなかったのである。

話はあちらへとびこちらへとびした。きょうだいの死んだ父は和助といい、浦粕の船宿では誰よりもしょうばいがうまく、上客はみな「千本」に集まったし、船頭も腕のいいのが揃っていたこと、朝日紙へ週一回ずつ釣通信を書いていたこと、鯉釣りの名人

で、いつも蒸気河岸の上で鯉を釣り、不漁で帰る客があると、その鯉を持たせてやったこと。長の姉の一人は浦粕小町といわれる美人だったが、若くて死んだし、長の妹も死んだこと。いつもぐずぐず泣いてばかりいた末弟は、京都大学を出て農事試験所の技官になっていること。東の養魚所ではいま専門に金魚を扱って、また、二つの通船に乗っていた人たちはみなよそへ行ってしまい、ほんの二三の人しか残っていないこと。ごつたくやは売禁法でみんなつぶれ、女たちも散り散りになってしまったこと。そうして、こういうとびとびの話のあいだで、「SASEBAKA」も娘のまま、で死んだということを知った。———そしておたまのことも、———籠屋のおたまは若くて遊廓へ身を売り、その後もみもちが悪

く、親類じゆうに迷惑をかけたが、いまは行方知れずだということとであつた。私はいつか秋山青磁たちと浦粕へ来たとき、彼女の両親がおたまのことを訊かれて、びくつとしたことを思いだし、それではあのとすすでになにかあつたのだなど、心の中でそつと嘆息した。

鉄さんにも長にも仕事がある。そうなが話もできまいと思い、やがて私たちは立ちあがつた。鉄さんに別れを告げて出ると、長が車のところまでいっしょに来た。

「こんど釣りに来てくんなよ」と長が云つた、「おれもいい穴場を知ってるからねえっ」

「ああ、ぜひ近いうちに来るよ」私は長の手を握つた、「——ど

う、まだぼくのことを思いだせないか」

「さあねえ」長はたよりなげな微笑をうかべた、「わかんねえなあ」

「釣りに来るよ」と私は云った。

鉄さんの店の若者が二人と長とが、車の脇に立って見送っていた。私たちは車に乗り、車は走りだした。

「よかったわ、ほんとに」と木村ふみ子君が感動のこもった口ぶりで云った、「沖の百万坪も石灰工場も、——あの人たちまでみんな、いま青べか物語から出て来たっていう感じだったわ、ほんとうによかった」

私は初めから終りまで、長の名を呼びすてにしていたし、長も

しごくあたりまえのようにそれを受け入れていた。数えてみると、私が浦粕を去ってからまる三十年になる。長も四十一歳、子供も五人いるということだ。その彼を「長」と呼び、彼が「おう」と答えるとき、私の心には三十年という時間の距離はなかった。にもかかわらず、彼には私の記憶がないのだ。青べかのことを訊いてみたが、それもごくかすかに覚えている程度とみえ、「なにしろ古いことだからねえっ」と云って話をそらしてしまった。したがって、題名の青べかがどうなったかは、ついに不明のまま、この物語を終らなければならぬ。——私は近いうちに、もういちどぜひ浦粕へ、こんどは釣客としていつてみるつもりである。

青空文庫情報

底本：「山本周五郎全集第十四巻 青べか物語・季節のない街」
新潮社

1981（昭和56）年11月25日発行

初出：「文藝春秋」

1960（昭和35）年1月号～1961（昭和36）年1月号

※「秋屋」と「秋葉」、「収穫」と「収獲」の混在は、底本通りです。

※「鮠」に対するルビの「ばえ」と「はや」と「ぱや」の混在は、底本通りです。

※「三十年後」の初出時の表題は「三十年後の青べか」です。

※初出誌では「やなぎ鮎《ばえ》」は「やなぎ鮎」とルビが付いていません。「収獲」「汽筒であって、……」「秋屋エンジ」

「秋屋エンジニア」「千代萩」「千本のあるじ」「自分が酒と肴を買いにいった。」「秋屋船長」は底本通りです。

※「青べか物語」文藝春秋新社、1961（昭和36）年1月20日発行では「収獲」は「収穫」、「汽筒であって、……」「秋屋エンジ」「秋屋エンジニア」「千代萩」「千本のあるじ」「自分が酒と肴を買いにいった。」「秋屋船長」は底本通りです。

※「青べか物語」新潮文庫、新潮社、2002（平成14）年12月20日6刷改版では「汽筒であって、……」は「汽筒であって……」、

「秋屋エンジン」は「秋葉エンジン」、「秋屋エンジンナー」は「秋葉エンジンナー」、「収獲」は「収穫」、「やなぎ鮠《ばえ》」は「やなぎ鮠《ばや》」と校訂されています。「千代萩」「千本のあるじ」「自分が酒と肴を買いにいった。」「秋屋船長」は底本通りです。

※「山本周五郎長篇小説全集 第二十六巻 青べか物語」新潮社、2015（平成27）年2月20日発行では「汽筒であって、……」は

「汽筒であって……」、「秋屋エンジン」は「秋葉エンジン」、「秋屋エンジンナー」は「秋葉エンジンナー」、「収獲」は「収穫」、「千代萩」は「先代萩」、「千本のあるじ」は「千本」のあるじ、「自分が酒と肴を買いにいった。」は「自分で酒と肴を買

いにいった。「やなぎ鮠《ばえ》」は「やなぎ鮠《ばや》」と校訂されています。「秋屋船長」は底本通りです。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：砂場清隆

2018年1月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

青べか物語

山本周五郎

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>